

夢を指す少女達と神
童と謳われた少年

レムりん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃から神童と呼ばれていた少年“菅谷響也”

だがしかしある出来事をきっかけに音楽の道から身を引いてしまう

そんな中現れた個性豊かな少女たち

響也はそんな少女たちと過ごしてどう変わるのか

どうもお初にお目にかかります、筆者のレムりんと申します

この作品は完全に俺得SSとなっております

前半は出会わせるため少しシリアスめいた感じにはなりますが後半になるにつれてハーレム、ヤンデレ、キャラ崩壊などをさせていくつもりですのでご了承ください

さいm () m

あとデレたあとの話が本題ですので出会って高速で仲良くなります

苦手な方はご注意ください！

自分はSSを書くのがこれが初めてなので至らない点があるとは思いますが暖かい目で見えてやってください

リクエストやご意見などどしどし募集しております!!

あとメイン(趣味のことを呟いている)のTwitterアカウントも乗せておきますのでそちらへのDMでのリクエストやご意見、感想もお待ちしております！

レムりん@yp <https://twitter.com/REMyyp> | 74 |

JunkD?s=09

目次

本編

特別編

特別編 生死をかけた鬼ごっこ!? 光を

消した少女達

1

特別編 2

美しき花にはトゲがあ

ると思ってる

前編

18

特別編 2

美しき花にはトゲがあると

思ってる

後編

34

特別編 3

太陽と月が重なる時漆黒の

扉が開く

51

特別編 4

The poster

irl was a schemer

第7話

Scarlet Sign

216

第1話

出会いの風

89

第2話

星の鼓動? 沈む夕焼け

111

第3話

アイドルバンド!? ああ… 儚

い…

第4話

大波乱!? 服選びは甘い罠、

160

第5話

前へススメ!

181

第6話

パステルカラータイム

198

第8話 スニーキングミッション!

響也を追え!?

233

第9話 少しお茶でも如何かしら?

248

第10話 パン屋の娘はご乱心!?

265

第11話 A serious girl

rlis conflicted

284

第12話 孤高の少女は夢を見る

303

第13話 A world where

e various emotions

are swirling | 322

第14話 Smile is the

number one | 335

第15話 I can't say

my dream is real

352

第16話 The truth vi

sited | 369

第17話 そしてまた時は動き出す

385

第18話 新学年と新学期はだいたい

一悶着あるもんだ | 417

第19話 バフのかけ所にご用心

いと	第23話	白黒付けられないちよこれ	509
	第22話	As a smile suit	490
	第21話	Thoughts poor side	474
	第20話	Thought makes your son	460

第28話	Ras, come do	588
第27話	diva, slight road	570
第26話	into trouble again	549
第25話	The boy gets	528
第24話	Memories of the past, a flower of a flower	

w
n

h
e
r
e



特別編

特別編

生死をかけた鬼ごっこ!?光を消した少女達

タツタツタツ：

「はあ…はあ、くそ…どうなってるんだよ」

俺はいま夜の街を走っている、何故かって？

「響也？早くつかまった方が身のためだよー？」

「いや捕まる方が怖いわ！」

後ろから追いかけられてるからだよ

後ろにはとりあえずリサしかいないけど5バンドのメンバー全員がおれを捕まええよ
うと躍起になっている

どうしてこんなことになったかって？

それはだな…

「あちい…喉乾いた」

俺は夏の炎天下の中 Roselia の練習を見に向かっていた

本来ならこんな暑い日に出たくはないもんだが

「あれ？響也先輩じゃないですか？どうしてここに？」

「香澄か、俺は Roselia の練習見に行くんだよ」

「なるほど、私たちもいまから練習なんですよね」

「ほう？まあ頑張れよ？」

俺は歩きだそうとする

「え？先輩見てくれないんですか私たちの練習」

「Roselia の練習見ると言ってるじゃん」

「えー！いいじゃないですかー」

「あれ？香澄ちゃんと響也くん？そんなところで何してるの？」

「あ！彩先輩、聞いてくださいよ〜」

彩が香澄に近寄って何か話している

「…って、ことなんですよ別にいいと思いませんか？」

「そうだねーでもーつあるとすれば」

彩はこっちを見つめてくると

「響也くんは今日は私たちの練習みるからそれは無理かな」

「な!?そんな約束しとらんぞ?」

「だって今言っただもん」

「ちよつと待つてくださいいよ彩先輩!私たちが先に誘っただんですよ?」

「だからー香澄も、今日はRoseliaの練習をだな」

「あれ?香澄に彩さんじゃん?なにしてんの?」「あれ?香澄に彩じゃない!何してるのかしら?」

そこに現れたのは蘭とこのころの二人であった

「蘭とこのころじゃねえか?お前からこそどうしたんだ?」

「あたしは自分らの練習、途中でこのころと会って一緒に来たんだけど」

「あたしのところもそうよ?」

「珍しいなみんなのバンドが全部練習なんて」

「確かにそうね、あ!そうだ響也」

「このころがなにか思いついたように話す」

「いまからあたし達の練習見にこない?」

「ちよつと教えて欲しいことがあって」

「ちよつとこのころ、今あたしが誘おうとしたのに」

「お前らもかよだから俺は Roselia の練習を「響也さん」

その声に振り向くと入口に紗夜が立っていた

「遅いから迎えに来てみればこれはどういうことですか?」

「紗夜聞いてくれよ」

かくかくしかじか

「なるほど、皆さん、今日は私たちの練習を見てもらう約束をしたのでどうかお引取りを」

「えー! Roselia ばかりずるいですよー」

響也先輩全然練習見に来てくれないんですから」

「ずるくはありません!」

「響也!今のうちに行きましょ?時間がもったいないわ」

「おい、こころさすがにそれは「ねえ?」」

「…こころなにしてんの?抜け駆け?」

こころの腕を蘭が掴む

こころの表情を見ると目に光が宿ってないような気がした

「…見てわからないのかしら?蘭の目は節穴なのね」

「っ!?…なに?喧嘩売ってんの?」

「そんなことないわ、ただこんなことしてる時間が馬鹿げてるだけよ」

「…いい加減にしな」「こころーなにしてるの?」

声の方を見るとハロハピの面々が歩いてきてた

「聞いて美咲!響也が練習見に来てくれるわよ!」

おいおいそろそろ蘭がキレルぞ…

「こころ、…あんたいい加減にしないとほ」「らーん」

「なーにしてるのー?」

モカの声

気づけばアフロのメンバーも到着、紗夜達の方を見るとそれぞれメンバーが全員来ているみたいだ

言い争ってるだけで女子だから殴り合いとかの喧嘩にはなっていないからまだいいが結構悪い空気が漂っている

「あれ?お兄ちゃんに皆さんどうしたんですかこんな大人数で」

声に振り向くと我が妹詩歌がそこにいた

「詩歌いい所に、この状況どうにかしてくれ」

「いやまず説明してほしいなお兄ちゃん…」

かくかくしかじか

「ふむふむなるほどねーお兄ちゃんモテますなあ」

「いやそんなんじゃないだろ」

「わかった私に任せて

すう…はあ…

はい皆ちゅーもくうううう!!!」

ビクツ!!

「あれしーかじやんどう「香澄も聞いてね」

「お話は聞きました、その状態で私からーっ皆さんにご提案があるのですが」

「なんですか? 私たちは早く決着をつ「まあまあ紗夜先輩にも悪いはなしではないとは

思いますよ?」

25人全員が詩歌に注目する

なんだろう今のうちに逃げろっていう風に神が言ってるような気がするが前には紗

夜達後ろにはこころ達

どう考えても逃げられないな…

「こころいうのはいかがでしょうか?

いまから皆さんには鬼ごっこをしてもらいます鬼は皆さん、捕まえる対象はお兄ちゃ

ん、

捕まえた人が明日一日お兄ちゃんを好きにしている権利、1人で満喫してもいいしバンドメンバーで楽しんでもいいです

…ね?、悪い話ではないでしょ?」

おい! 詩歌お前なんて言うこと言ってくれたんだよ

皆の目が輝いちゃったよ俺狩られるよ

「ちなみに捕まえたのがこの25人以外の時点で皆さんの権利剥奪されるのでよろしくお願います

こころの黒服さん達とか皆さんのご家族様とかね?」

チツ

こええよ帰りたいよ

「開始時間は10分後のちようど正午から

お兄ちゃんには先に逃げててもらいます

お兄ちゃん建物内は禁止ね…あ! そうだ

ちなみにお兄ちゃん、交通機関使ったら…分かってるよね?」

妹には全ってお見通しであった

「じゃあお兄ちゃん頑張つてねー」

ちくしよおお覚えてろよ詩歌あああ

「はあ…はあ…とりあえずあの位置からだいぶ離れてみたけど」

時刻は12時1分そろそろ鬼（物理）が解き放たれた頃だな

でも全員が女子だからはぐみとかこころくらいしか足の速さ的に怖くは無さそうだな

その時のおれは女子の本気を知らなかった

「響也先輩待てー」

1番最初に俺を見つけたのは沙綾だった

「待てと言われて待つわけがない」

「まあそうだろうと思ってたけどね…有咲！」

「おうよ」

脇道から有咲が飛び出してきた…何となく予想は出来てたけど

「よつと」

「ちよつ、おま、逃げるな」

「もう有咲なにしてんの、」

「う、うるせー」

「じゃあなお二人さん」

おれは少しスピードを上げた

「ま、まてー」「まてー」

次に俺に追いつきしてきたのはつぐみとモカだった

「だから待てつていわれて待つほど俺は人間出来ちゃいないよー」

「響也さんをつまえたら二人で…」「きよーやくんと2人でパン屋巡りするんだあー」

「おいおい二人とも願望出てるぞ…てかバンドのためじゃないんだな」

「響也さん（きよーやくん）をつ取る奴は全員敵!!」

怖い怖い…てか

「二人ともそんなに足早かったっけ?なんかどんどん追いつかれてる気がするんだけど」

「ふふふふ」

さすがに少し力入れて走らないと捕まっちゃうな…

「あ!ずるーい!」

「またな!」

それから2時間近くが経った

途中ではぐみに追いかけて真面目に捕まりそうになった時以外はなんとか逃げている

でもそろそろ体力的にもやばいしどこかに隠れたいな

「ここは…公園か、ちょうどいい自販機もあるし飲み物でも買おう」

ガコン

「ぐく…ぐく…くううう、上手いなスポドリは」

ふええええ

「…なんか聞きなれた声がある見に行くだけ見に行ってみようかな」

少し奥に進むと

「ふえええええ、みんなどこに行ったのお」

「花音じゃないか…また迷子か？」

でも花音も参加していたはずなのに、はぐれちゃったのか」

まあ花音なら多分大丈夫だろ…

「おーい花音、どうし、っ!!」

突如右から飛び込んできた物体を紙一重で躲した

「ちっ、さすが響也さんね」

「あぶねえな千聖、おれを殺すつもりかよ…」

「何してるの千聖ちゃん!ちゃんと捕まえないと」

「ごめんなさい花音、響也さんが思ったより反射神経良くて」

「まあ、この公園に入ってきた時点で袋のネズミだしまあいいかな」

「袋のネズミ?」

「そう、パスパレとハロハピは共同戦線を張ったのよ

花音が引き付けてそれを周りから囲って捕獲

いい作戦でしょ?」

…パスパレはどうにかなるけどハロハピは厳しいな

はぐみとこころ同時に追いかけられるとかたまったもんじゃやない

「今パスパレはどうにかなるとか思ったでしょー響也くんてば」

「…そう言えばお前もいたな…日菜」

「さあ大人しくしてねー手荒な真似はしたくないよー」

いつの間にか出てきてたパスパレとハロハピの10人が輪になるようにジリジリと

近づいてきてる

さてどうやってここを越えようかな

まあ一番穴になりそうなやつのを走り抜けるか

「てなわけで彩！君に決めたあああ」

叫びながら彩に向かって駆けて行く俺

「そんないきなり…響也さんなら嬉しいけどでも…」

くねくねしながらそうつぶやく彩

その横をすり抜けて脱出した

「もう少しマシな方法でかかってこいよー」

俺は公園を後にした

「…彩ちゃん何か言いたいことはあるかしら」

「彩？流石のあたしも笑顔になれないわ」

「いや、ごめんなさい、なんでもするからあ

だからゆるしてー」

何か彩の叫び声が聞こえたような気がしたが気にせず走る俺

まだまだおわらなさそうだな

あれから色んなメンバーの襲撃を躲しながら逃げる俺

気がつけば辺りは暗闇に街灯の光だけの空間になっていた
もう夜か

「やつと会えたわね…響也」

「…友希那か」

目の前に仁王立ちする友希那がそこにいた

「さあ、大人しく捕まってもらおうかしら」

「嫌だつて言ったら?」

「拒否権があると思ってるの?」

「友希那より足は断然早い

躲して逃げればまず追いつかれないだろう」

そう言うのと友希那は微笑みながら

「それは100も承知だわ…ね?みんな」

「なに!?!」

「はぁーい響也!」「まったく、探しましたよ」「りんりん、このラスボス的な感じあこ
ちよー嬉しい」「そうだねあこちゃん」

友希那の後ろからはリサが

後ろを振り向くと紗夜達3人が身を表した

「…この路地に入った時点でこうなることは決まっていたのか」

「そういうことよ、さあもういちど聞いわ、大人しく捕まって？」

「答えはノーだ」

「そう…なら力づくでいかせてもらおうわ」

友希那はおもむろに何かを取り出す…あれは、ロープ？

「これでぐるぐる巻きにしてみんなで持ち帰りましょうか」

「さすが友希那わかってるー」

「そうして外に出さないようにしたらもうほかの女の子達に会うこともないし…響也、それの方がいいに決まってるわ」

皆の目が怖く感じる…

瞳の光が失われて暗闇に吸い込まれるかと錯覚するくらい…漆黒の闇の視線5つが俺を貫いてくる

「俺はそう簡単に捕まらんぞ？」

「わかってるわ…だから私たちは5人であなたを捕まえる」

そのチームワークをもっとほかの所に使ってほしいな…

まあいいか

「…行くわよ」

友希那が地面を蹴って爆走してくる、あれ？なんでそんな速いの？

「うお、ぶねえ」

友希那の突撃を見てほかの4人も動き出す

「響也さん、大人しくしてください」

「ちよつとまで紗夜その手錠どうするつもりだ!？」

「「響也（くん）覚悟!」」

だからお前らもその道具はなんなんだよ…

まあ

「塀を登ればいいんだけどね」

「あー響也それはなくない?」

「逃げるが勝ちさー」

後ろから声が聞こえるが気にせず逃げた

その後色々な場所で追いかけられたけど…

「結局ここに行き着くのか」

俺はC i R C L Eに行き着いていた

「やっぱりここに来てくれましたか」

「…紗夜」

「私だけじゃないですよ、みんないます」

「みんなごめんな、先生なのにもっと皆のために時間を用意すればこんなことにはなつてなかつたよな

次から順番にはなるけどちゃんと見るから」

「響也ならそう言ってくれると思つてたわ」

「友希那…」

「よーしそれじゃあ響也くんみんな突撃い」

「おい日菜何言つて、つてみんなそんな勢いで来たら俺死んじやうつて、やめてうわああああ」

「うわああ、…はあ…はあ、…夢？」

時計を見ると8時半を指していた

「夢か…良かったのか？」

まあ最近ちゃんと練習見てやれてないからみんなの為に時間を作るのは大事だな

俺はそう思った

「あ！響也先輩だおはようございます！」
「え？正夢になるのこれ!?」

特別編 2

美しき花にはトゲがあると思ってる 前

編

目の前に広がる青い海、サンサンと照りつける太陽、光る砂浜、そして…
キヤーつめたいー！おい香澄やめろお！ああ儂い……

…皆さんこんにちはどうも響也です、え？ここはどこつて？海ですよ海
まあ普通の海とはちよつとちがっ

「ねえ？響也？1人で何を話してるのかしら？」

「こころか、いやな今皆さんにちよつとした説明をだな」

「こころは首を傾げながら」

「？、変な響也ね、さあ響也もみんなと遊びましょ」

まあパラソルの下で座つても暇だしな

「ああ、いこうか」

とりあえずどうしてこうなったのか回想を挟むとしよう

「ねえーお兄ちゃん」

詩歌が家のソファでぐでつてる

「どした詩歌よ…てかシャキツとしろよ」

「無理いー暑すぎるもん…ねえ？クーラー付けていい？」

上目遣いで懇願する詩歌…

「はあ…まあいいけどよ少しだけだぞ？」

「やりい」

嬉嬉としてクーラーのリモコンに手を伸ばす…おいおい近くに置いといたってことは俺に認めさす気満々だったんじゃないやねえか

ピロン

ん？誰だろ…

「リサか？何なに…」

『響也ー明日暇だろうから朝8時に迎えに行くねーあ！水着は用意しておいてねー以

上』

「…はい？」

「お兄ちゃんどしたのー?」

「いやリサが明日朝来るから水着用意しとけと」

「あーこないだ言つてたやつか」

納得したように頷く詩歌

「…俺は聞いてないんだけど?」

「そりゃ口止めされてたしねー」

は?

「いやいや誰によ」

「さーや、響也先輩先に伝えたら絶対来ないからって」

ポピパも一枚かんでるのかよてか

「え? 明日誰来んの?」

「そりゃ多分お兄ちゃんの写真通りだと思っただけ」

…まさかの全員参加ですねわかります

「まあさすがに俺は行か『ピロン』…ん?」

燐子からだ

『響也くん、来なかったらわかってますよね?』

…え? 監視カメラでもあるの? 怖すぎるんだけど

「はあ…まあ仕方ないか」

どうせ日帰りだろうし明日は予定無かったからまあいいか

そう思ってた俺をあとの自分が殴りたくなることになるとは知る由もなかった

当日、てか次の日

俺は諸々の用意をしてリサの迎えを待っていた

ピンポン

どうやら来たみたいだな

「はいはい今開ける」

ガチャ

「おはよー響也」

「たくおはようじゃねえよこういうことは事前に伝えとけや」

「ごめんごめん、響也なら絶対断るだろうから黙ってよってみんなで決めてたんだよね」

「たく…運良く予定無かったから良かったものがあったらどうしてたんだよ」

そう言うとりサはキョトンとしながら

「え？詩歌がこの日なら予定ないって言ってたから今日にしたんだけど…」

「…うん何となくわかったとりあえずリサ5分待つてて」

そう言うのと俺は家の中に引き返す

え？お兄ちゃんどしたの？ってなんでそんな怖い目してるの？え、え？ぎやー痛い痛いギブギブブー！！

家からは断末魔が聞こえたとりサは後に語っていた

「んでどこ行くのさ」

詩歌への制裁を加えた俺はリサの隣を歩いている

「こころの家だよ、みんなで1回集まってから行くんだってさ」

なるほどねどおりでこの道を

「しっかしお前らはともかくパスパレの奴らはよく休みだったよな」

「なんか仕事あったみたいだけど急に休みになったみたい」

なーんか深い闇（弦巻家）の力を感じるから追及しないでおくか…

と考えてるとでかい門の前に着く

「あら？響也ようやく来たのね！待ちくたびれたわ」

金髪をたなびかせて立っていたのはこころだった

「ごめんねーこころ、少し遅れちゃった」

「大丈夫よりサ！さあみんな待つてるわ！行きましょ？」

「おっけー」

おい俺を置いていくなよ

こころ家の庭を歩いていると奥に停まっているバスの周りに見知った顔たちがいた

「あー！響也くんこっちこっちこっちー！」

Roseiliaのみんながいた、

あこがびよんぴよん跳ねながら手を振っている

「おーあこおはよ朝から元気だな」

「えへへー」

「響也くんちゃんと来てくれたんですね」

「…燐子よ後で話がある」

「…大丈夫響也くんの思っていることは何もしてないから」

燐子が不敵な笑みを浮かべながらそう言い放つ

うんこれ以上は踏み込めないな

「しかし大半はあれだけど友希那とか紗夜とか蘭とかこんな催しによく参加したよな、断りそうだけでも」

「響也が来るって聞いたから…ダメかしら？」

「っ…いや大丈夫だ」

その上目遣いは俺に効く

「響也さんが風紀を乱しそうなので」

「いや紗夜よ俺はそんなことしねえよ」

紗夜は訝しげな目を向けながら

「…ならいいのですが」

そう言った

ダツダツダツ

「響也くくん!!」

ギュッ

「…おい日菜痛い」

「ええーいいいじゃーん!」

日菜が飛びついてきた

「日菜やめなさい」

紗夜が注意に回る、こういう時だけは頼りになるんだよなあ

「ちえーわかったよ」

しぶしぶだが離れてくれた

「ところで水着持ってこいって言われたんだけどどこに行くんだ？」

「なんかこころが自分のプライベートビーチあるからそこに行くらしいよ」

…一般人には想像がつかないな

準備が出来たわー！みんな乗ってちようだい！

…やべえ超絶行きたくねえ、今から帰ってもなんと「がしい」

「ふっふっふー、そうはいきませんよー！」

「モカ、後生だから見逃してくれ」

「はーい、1名様ごあんなくい」

やめろお俺はまだ死にたくなあーい

ザザーザザー

……はあ

みんなが着替えてる間俺は海岸で1人座っていた

トントン

「ねえ響也も着替えてきたら？」

「リサか…しばらく1人にさせてくれ」

「まあいいけどさ、なんでこっち見ないの？」

「だってお前水着にもう着替えてるんだろ？」

「響也恥ずかしがつてるく、あたし見て慣れといたら？」

「いやいやお前の水着姿もだいぶや「いいから見る」」

両手で顔を向かされた

俺の視界に写ったのは普段の彼女からは想像出来ない薄いピンク色の水着姿と高校生としては思えない成長した体つき、そして何より顔を真っ赤にして目を背けてるリサの表情であつた

「あたしだって恥ずかしいんだからさ…」

「す、すまん…」

バシィッ

「つてえ、」

「まったく、私が見てないからといって何してるんですか」

「紗夜何するん…っ!」

頭の痛みで思わず後ろを振り向いてしまった

視界には長い髪を後ろで束ねてポニテにした紗夜が何故かハリセンを持って立っていた

その体には鮮やかなライトグリーンのシンプルな上に下はパレオを巻いて清楚な彼女にはとても似合っていた

「何ジロジロ見てるんですか? 取りますよ?」

「何をだよ!」

ものによつちや生活に関わるからやめていただきたい

「響也くんおまたせー!」 「響也くん」

俺を呼ぶ声が聞こえるが振り向きたくはない

「…響也? 何故そっぽを向いてるの?」

ゆ、友希那までいるのかよ見たら多分俺の心臓が耐えられない

「響也に見せようと新しい水着を買ってきたのだけれど…」

「喜んで目に焼き付けさせて頂きます」

俺は勢いよく振り向いた

そこには3人の天使がいた

あこは紫を基調とした少し派手目の水着だった、でも健康的な四肢は眩しく光りとても似合っている、あといつものツインテではなくサイドポニーにしたのも新鮮だった

燐子は白と紺色の落ち着いた水着、その上からグレーのパーカーを羽織り少し恥ずかしそうにモジモジしている、長い髪をお下げ風にしてているのも似合っている、そして何より Roseelia のメンバーの中では一番おおき「ふふっ、響也くん？どこ見てるんですか？」おっと見すぎてしまったようだ

そして友希那は黒を基調とした少し大人びた水着だった、彼女の白い肌には似合いますぎていてそれに何故かツインテにしてるしあーもう

俺はいつの間にか友希那の前に片膝をつきその手を取り

「結婚してくれ」

とんでもないことを口走っていた

「き、きききききき響也!?!? そういうのは2人の時に…」

「あ、ち、ちがうこれは言葉のあ」

ガシッ

「『響也(くん)(さん)……?とりあえず1回死のうか(ましようか)?』」

あー、終わった色々と

俺は強烈な殺意に意識を手放した

「んん、…あー俺気絶してたのか」

なんか柔らかい感触を後頭部に感じながら目を覚ました

「そーだよー、まあ10分くらいだけどね!」

「つて日菜!?!なんで目の前に!?!」

「そりゃ膝枕してたら目の前に顔あるでしょふつー」

「そっかー膝枕か、だから柔らかい感触が…つてひざまくらあ!?!」

俺は飛び起きてしまう

ゴチン

「つつう」「いったあい」

日菜に頭突きをかましてしまった

「響也くんなにするのさー!!」

「す、すまん」

「たくもおー気をつけてよねー?」

少し怒ったのも束の間直ぐにニヤニヤした顔でこつちを見て

「しかし響也くんも男の子だよねえ？おねーちゃん達の水着姿に見とれて気絶するとはねー」

「う、うるせえみんな可愛いんだから仕方ないだろ？」

「わー開き直ったー！そういう響也くんもるんつてくるなー

それでさ

…ひとつ聞きたいんだけどそれってあたしも？」

「…察してくれ」

「にししーありがとね響也くん！」

日菜は紗夜と水着をお揃いにしていた

恐ろしく似合っている

「とりあえず響也くんも着替えてきたら？」

「そうするかな、もうみんな着替えたみたいだし」

俺は立ち上がりこころに指示された場所へ歩き出す

「行つてらっしゃーい」

「さてと着替えの場所はここかな？」

…あれ？ドアがふたつある、こころどっちって言つてたつけ？右？左？

「うーん、まあ左でいいか」

俺はドアを開けた

「へ？」

「え？」

目の前には有咲がいた、下着姿で今にも上を外そうとしている瞬間だった

水色か

「き、き「有咲ストップ!!」むぎお」

悲鳴を何とか手で塞ぐ、やべえ社会的に殺されるところだった

「むぎ、もぎむぎおむぎもぎお」

「あ、ごめん」

「はあはあ、…響也先輩何すんだよ！てか覗きか？警察呼ぶぞ」

「ちがうちがう落ち着いて、着替える場所を間違えただけなんだ」

有咲がジト目で睨んでくる

「はあ、まあ今回だけは許しますんでとりあえず離してください」

「ははー有り難き幸せ」

「そして早くここから出てください、そしてこのことは記憶から消してください」

「失礼しました」

俺は超反応で部屋から出る

有咲すまないが下着姿は記憶から消えないだろう…俺も男なんだ

着替えた俺は海岸に戻りパラソル立てに勤しんでいる

あの後有咲は普通通りに接してくれてはいる、顔が赤いが

「はあ、ここうトラブル続きだと頭が痛くなってくる」

「響也さんも大変ツスね」

みんなが海に行ってる中麻弥が手伝ってくれていた

「すまんな手伝ってもらって

麻弥は遊びに行かなくていいのか？」

そう言うのと麻弥は頬をかきながら

「ジブンはこういう裏方の方が好きっすから

…それに響也さんと一緒にいられますんで」

俺の周りの女子達は時々ま声が聞き取れなくなるくらい小さくなるのは何故だろう

「まあそれならいいんだがな」

「おーい麻弥ちゃん！ビーチバレーしようよー！」

「麻弥呼んでるぞー？」

「すみませんが行ってきます」

「おう、楽しんでこい」

タツタツタツ

走っていく麻弥を見送った俺は一人空を見上げる

「あー空が青いな…」

まだ今日は始まったばかりである

特別編 2 美しき花にはトゲがあると思ってる 後編

麻弥がパスペレのみんなの所に駆けて行ったあと俺は1人でぼけーっとしていた

「しっかしい天気だなあ、どうせゴロゴロしてたから家から出してくれたみんなに少しは感謝しないとな」

ザッザッザッ

「そーだよー、モカちゃんに感謝してもらわないとねー」

「…まあ間違つてはないからなんも言えねえけど」

歩いてきたのはモカだった

白のリボンが付いた黒の水着を着ていた彼女は俺の隣に座ってきた、高校生としては中々のスタイルなので出来ればくっつかないでいただきたい

「ふっふっふー、モカちゃんはくっつきたいのだー」

バシン

「…モカなにやってんの?」

「いたーい、らーんなにするのさー」

蘭が後ろから紗夜がさつき持つていたハリセンでモカを叩いていた

よく見るとその後ろにはその他の a f t e r g l o w のメンバーが勢ぞろいしている

「そーだよモカ、1人だけず…響也さんに迷惑でしょ」

別に迷惑ではないが…むしろ

「響也最低…鼻の下伸ばして変態」

蘭のジト目が俺を貫く

「伸ばしてねーよ」

「…それならいいけど」

「ふっふっふー、モカちゃんは別に触られてもいいんだけどねー」

ニヤニヤしながら俺を見るモカ、やめてくれ俺の理性的にも割と辛いから

「モカちゃん、さすがに響也さん可愛そうだよ」

「つぐに言われちゃしょーがない」

しぶしぶといった感じで離れるモカ、ふー…よく頑張った俺の理性

「響也さんはなんかして遊ばないんですか?」

「色々あつて少し疲れたから昼から遊ぼうかと休憩中なのさ」

「えー、せっかくモカちゃんが寂しそうにしてる所を遊んであげようと思ってきたのにー」

モカがすごい残念そうにしていたが

「まあ半分わかかって来てただけどねー」

とニコニコしながらそう言った

「てかさろそろ昼ですけど昼ごはんどうなるんですかね？」

巴がそうつぶやく

ササツ

「皆様、お昼の用意は私達にお任せ下さい

ごゆっくりとおくつろぎを、では失礼します」

ササツ

黒服さんがいきなり現れてすぐ居なくなつた

もう人の動きじやねえな

「…毎回思うけどこころちゃんのとこの黒服さんは神出鬼没だよね」

ひまりが珍しく顔を引き攣らせて言っていた、多分現れたことにビックリしたのかな

「ねえー響也先輩〜！みんなでビーチバレーしませんかー！」

香澄が向こうから叫んでいる

「俺はみんなのやつてるのを見てるよー」

「えー！やらないんですかー？」

いやいや

「多分俺がやつたらゲームにならないぞ？」

「…そうですね」

みんなが目を逸らして肯定した

「とりあえずバンド対抗バレー大会始めよー！」

「「ちよつと待つて（ちようだい）あたし（私は）やるなんて言つてない（わよ）」」

でた、やるなんて言つてない三姉妹

「…ちなみに勝つたバンドには響也先輩を一日自由にする権利がありますがそれでもやらないんですか？」

「いやいや俺何も聞」「やる（わ）」

…そうですねか俺の意見は何もなしですか

黒服さん達がいつの間にか用意していたネットとボールとコートラインを使用しバンド対抗バレー大会が始まった

なお、10点先取の1セットだけの勝負だけだね

総当りらしいので体力的に死にかねないのを考慮した結果である

「まずはポピパ対アフロだな」

なお結果だけ言うとハロハピの圧勝でした（身体能力チートの2人がいたため）

え？描写ちゃんとやれって？、筆者にそんな能力な『おい余計なこと言わんでいい』

…へいへい

さて黒服さんが用意してくれた豪華すぎるお昼を堪能したあと色々海を堪能し夕焼け空が辺りをオレンジ色に照らし幻想的だった

「さてもうそろそろいい時間だしみんなそろそろ帰らないかー？」

そうみんなに呼びかけると何故か不思議そうな顔をして首をかしげていた

「響也何を言ってるのかしら？今日は家に泊まっていくんですよ？」

…はっ？

「いやいやいやいや何も聞いてねえぞ?!」

「あら？そんなの？確かりサに伝えといてって頼んでたはずだけど」

………

俺はりサの方に目を向ける

リサが目を背ける

リサに近づくと

「リサさん、少しお話しましょうか？」

俺はにこやかにそう言う

「き、響也…目が笑ってないよ？」

「これが笑える状況だと思っっているのですか？」

「ご、ゴメンなさいいー」

リサには今度俺の料理を振る舞うという事でお・は・な・しがついた

何名かは羨ましがっていたが事情を知っている半数は顔を青さめさせて合掌していた
た

「んで泊まるって言っても何も用意持ってきてないんだがどうすればいいのさこころ
？」

「それは大丈夫よ詩歌に用意してもらって持ってきてあるから」

…なるほどね制裁対象はもう1人居たと

「まあそれなら話が早いから…はあなんかどっと疲れが出てきたわ」

「とりあえずみんな向かいましょうか？」

はーい!

俺達は別荘に向かうことになった

「ほへー流石でかいなあ」

別荘についた俺達は流石弦巻家と各々驚いていた

「あらそう?うちのの中では小さい方だけど」

「これでか…恐ろしいな」

「皆様ご用意が出来ましたのでどうぞ中へ」

黒服さんがやっぱりいきなり現れてそう話す

「ありがとうございます!んじゃみんないきましょ?」

「おう」

「今日はここにみんなで寝ようと思うの!どうかしら?」

「ここが案内してくれたのは大きな広間だった

「いいねいいね、なんかお泊まりって感じがしてるるるるるんっ!てくるよこころ
ちゃん」

日菜がキラキラしながら興奮している

だからどういう条件で“る”が増えるのさ

「日菜もそう思う？みんなはどうかしら？」

「こころがほかのメンバーにも呼びかける

『賛成！（いいと思うよ！）』

みんな仲いいよなあ

てなわけで

「んじゃこころ、俺の寝床に案内してくれ」

「何を言ってるのかしら？響也、あなたもここで寝るのよ？」

……はい？

「いやいやさすがに一緒に寝る訳にはいかんだろ、何かあったらどうすんだよ」

するとこころはニヤニヤしながら

「なにかってなにかしら？あたし気になるわ」

くっそこいつわかってて言ってるやがる

「何がなんでも俺は一人で寝るからな！」

ヒソヒソヒソ

みんなが急に集まって何か話してる

お？あこが歩いてきた

「ねえねえ響也くん！」

…すげえ嫌な予感がする

「おねがあ〜い！」

上目遣いでそういうあこ

俺は色々諦めることにした

カポーン

「ふう、風呂はやっぱり気持ちがいいな、…でも温泉かよここ」

豪華なディナーを頂いた俺達は順番に風呂に入らしてもらっていた

でかい風呂が何個かとサウナがあるあたり別荘とは思えないな

ガチャ

ん？今扉から音が

「たのもー！」

「うおーびつくりしたあ」

中に入ってきたのはイヴだった、バスタオル姿で

「イヴお前何してんの？俺入っ「キョーヤさん！お背中流しに来ました」

いやいやこの状況とか紗夜とか千聖とかに見られたら俺本格的に処刑じやすまな
いって

「大丈夫ですよ！」

皆さんには内緒で来たんで」

それが怖えんだよ

「とりあえずイヴは出てくれると嬉しい」

「お背中流すまで出ません」

多分何言っても岩みたいに動かんだろうなあ：

「…はあ、んじや頼むわ、その代わり終わったらでてくれ、さすがにイヴのその姿みて耐
えられるほど俺の理性もちゃんとしてないから」

「ありがとうございませす！」

ザバア、…ペタペタ、ストン

「んじやよろしく頼む」

「は、はい！」

イヴは俺の後ろまで歩いてくるとスポンジを手に取り泡立てたあと少しオドオドし
ながら俺の背中を擦り始めた

うん、凄く優しい手つきでまあまあ気持ちいいっちゃ気持ちいいけど…

「んっ、ふう、…ふっ、んんっ」

この声だけやめていただきたい、本人は無意識で洗うことに集中してらっしやる様だけど俺にはダメージがでかい

「い、イヴ？もう大丈夫だ、ありがとう」

「そうですか？まだ背中しか洗ってませんけど…」

「ほんとに大丈夫だからあとは自分で洗うよありがとう」

「はい！」

満足したのかイヴはルンルンで風呂を後にしてつた

俺はしばらくイヴの姿と声で色んな意味で治まりがつかなかった

「イヴちゃん？…抜け駆けは許さないわよ？」ゴゴゴゴゴ

「チサトさんごめんなさいいいいいいい」

風呂から出た俺は何故か正座させられてるイヴを横目に黒服さんが用意してくれた
麦茶を口にする

うんよく冷えてて美味しい

ふと思った疑問を口にする俺

「そいえば俺はどの布団で寝ればいいんだ？」

ピタッ

皆が一斉に動きを止める

…あ！やべ、地雷踏んだか？

「さあ始めましょうか戦争を：イヴちゃん以外で」

千聖が黒い笑顔をしながらそう言い放つ

「千サトさん、そんな殺生なあああー」

イヴが全てをなくした人みたいになっていた

結果はこころが色々な権限を駆使して一人で勝利をかつさらっていきましたとき

「さてと全てが一段落したところでこれだけ人数いるんだつたらみんなでゲームでもしない？」

リサがそう提案する

みんなもやる気みたいだった

「いいけどゲームって何するんだ？」

「それはこれだよー」

リサが割り箸を取り出してきた

…まさかの？

「では2番の人が13番の人に普段思ってることをぶつちやけてくださいっす」

2番はあたしだね、えー日菜ちゃんに何言われるんだろ…

まあご想像通り王様ゲームですよ、帰りたい

まあまだ当てられてないから良いものを

「んじゃ次行くよー、せーの」

王様だーれだ！

「ふっふっふー、モカちゃんキングなりい」

…よりもよつてめんどろなやつに王様が当たってしまった

「…そろそろいいよねー、んじゃあ20番が7番に壁ドンしてキザなセリフをー」

「7番は私だね、20番は誰ですか？」

「…ごめんりみ俺だわ」

「へ？ええええ!!」

みんながすごい顔をしてみてる

すげえ恥ずかしい

「ごめんりみすぐ終わらせるから」

「は、はひ」

「んじや、やるぞ」

ドンッ

「っ!!」

俺は耳元に口を持っていき囁く

「…俺のものになっちまえよ」

「ひう、…きゅ〜」

顔を真っ赤にして目を回しながらしやがみこむりみ

「ふう、モカ王、これでご満足かな？」

「う、うん…」

「すごい破壊力ね…」

「そうですね…やられてない私ですらドキドキしてます」

「き、気を取り直してつぎいきましようか？」

「そ、それがいいッスね」

「んじやいくよー」

王様だーれだ！

「あー私だ」

ひまりが手を上げる

「それじゃあ3番が18番にあすなろ抱きをしてくださいー！」

紗夜が手を挙げ口にする

「18番は私ですが、あすなろ抱きとはなんですか？」

「紗夜、あすなろ抱きはね後ろから腕を回して抱きつくことだよ」

リサがそう答える

「なるほど…まあそれくらいならま」ごめん紗夜3番俺だわ」却下ですそんな破廉恥な」

紗夜が顔を真っ赤にしながら怒る

「えーじやあお姉ちゃんがやらないならあた」誰もやらないとは言ってますん」

「さあ響也さん、さっさとやってくださいー！」

「お、おう」

俺は紗夜の後ろに回り込むと膝立ちになり手を回す

「っー」ピクツ

やっぱり女の子だもんなすごいいい匂いするしもうなんか楽園だよねこういうこと考えてると多方面から殺気がするからひたすら無心でいきたいところだけど

「とりあえずもういいか？」

ビクビクッ

「き、響也さん耳元で話さないでください！」

紗夜は耳が弱いのか？…日頃のお返しを込めて悪い俺が出てしまった

「……紗夜……いつもありがとう、好きだ」

もちろん冗談だが

「…っ！へ？え？ききききき響也さん」

「友達としてな」

ゴゴゴゴゴゴ

あれやべこれあかんやつや

「………響也さん最低です」

バキィッ

力の籠もったいいパンチだった

その後王様ゲームは終わり皆就寝したがこんな美少女に囲まれて寝れる訳もなく俺は黒服さんをお願いして外の空気を吸いに出た

「星が綺麗だな」

街頭の概念がない世界だところまで星が見えるのか

「そうよ？あたしのお気に入りだもの」

「こころか？起こしちまつたか？」

後ろにはこころの姿があつた

「いえ？たまたま響也が出るのを見て付いてきただけよ？」

「そうか、ならいいんだが」

俺はふと思つたことを口にする

「今日はありがとな、俺もそうだけどもみんなの思い出作りが出来た」

「こんなのお安い御用よ！本当は1週間ぐらいしたいところだけど」

こころは満面の笑みで答える

「それはさすがにな、お前ならやりかねんが

…さてとそろそろ戻つて寝るか？」

「ええそうしましよ！」

俺とこころは少しの帰り道を談笑しながら歩いた

後日詩歌とりサには俺からの手料理を振舞つた

涙目で泡を吹いて喜んでくれたよ

特別編3 太陽と月が重なる時漆黒の扉が開く

「よくやったわ日菜」

薄暗い部屋にポツリとその言葉が響く

「へへーん！言ったでしょ？あたしに任せれば楽しよーだつて」

もう1人の言葉がそれに続く

ジタバタ

あ、響也です、助けてください

身動きを抑えられてます、わかりやすく言えば監禁されてます

どうしてこんな状況になったかというと…

キーンコーンカーンコーン

「ふああー、疲れたーだりいー」

4 時間目を終え俗に言う昼休みに突入した

クラス内では静寂などどこを探せば見つかるのかというくらいに騒がしい

「響也、いつも通り屋上行かない?」

隣の席のリサがそう提案してくる

「そうするか、飲み物買ってくるから先行っててくれ」

「はい、あ、あたし緑茶で」

屈託の無い笑顔でそう言ってくる

「自分で買えよな…たくよ」

「そう言いながら響也買ってくれるから優しいよねー」

「うっせえ」

「遅かったわね響也」

「飲み物買ってたんだすまんな友希那」

体育座りをしながら両手でサンドイッチを持ちもきゆもきゆしてた友希那は俺が現れると直ぐに声をかけてきた

「ほい二人とも」

俺は2人に飲み物をわたす

だいぶ前からの恒例行事だから特に気にせず二人分余計に買ってくる
なおそのうちの1本は頼まれ物だけだな

「サンキュー」「いつも悪いわね」

「いいってことよ」

俺はそう言いながら朝買っておいた山吹ベーカリーのパンを頬張る

…たまにはクリームパンもいいなうめえ

「響也ほんとにパン好きだよねそんなんじや栄養偏っちゃうよ?」

「美味いからしようがないだろ?」

「そうだけどさあ、あ、そうだ!明日のお昼あたしが作ってきてあげようか?」

リサがそう呟く

…すごい魅惑的な提案だが

「わるいよそこまでしてもらうのは」

俺はそう答えていた

「それじゃ私が「友希那はもつといいよ」…響也」

友希那はムスツとした顔で俺を睨んでくる

「私も料理出来るのよ?」

…ダウト

まず聞いたことないし見たことも無い

「友希那料理出来ないじゃん」

リサが確信をつく一言を放つ

「リサ余計なことを言わないでちょうだい」

「さすがに言うよそこはー」

少し火花が散りそうな空気になってはいるが俺は気にせずペットボトルに口をつける

…うん、このコーヒー甘いな

ドタドタドタ

「響也くーん!!」

ガシッ

「危ねえな、お前の全力疾走からのタツクルは最悪の場合死人が出るからやめろといつも言ってるのに日菜」

弾丸のように突っ込んできたのは日菜だった

「えへへーだつてー」

タツクルと言うよりもはやボディプレスかと言いたいくらい跳躍して飛び込んでく

「そりやそ「いえ…」…友希那？」

「響也は私のモノよ」

すごい嬉しい言葉なんだけど『もの』の発音なんか違った気がしたんですけど友希那さん気の所為ですかね？

「ゆ、友希那がそう言うならあ、あたしだって響也の所有権を主張するよ」

顔を真っ赤にしながら言うリサ：お前もモノ扱いか

「そうこなくちや」

コンコン

「…響也ここにいたのかい探したよ」

「薫じゃねえかどうしたんだ？」

屋上の入口にいたのは薫だった

「こころからの伝言を伝えようと探していたんだけど…お邪魔だったかい？」

「い、いや全然邪魔じゃねえぞ」

俺は急いで薫に近づく

「なら良かったんだ、それじゃ子猫ちゃん達響也を少し借りてくよ」

俺は後ろから感じるおぞましい感覚を無視するかのように急ぎ足になった

あはは、やっパリだメカナーコノママジャ

午後の授業も乗り切りHRを終えた俺は帰り支度を進めているところだった
「響也くーんこのあとひまー?」

日菜が教室に尋ねて来るなりそう言う

「暇っちゃ暇だけどうしたんだ?」

「おねーちゃんと買い物に行くんだけど響也くんもどうかかと」

「いいけどいいのか? 姉妹水入らずで出かけるんじゃないのか?」

「いいのいいのーさあいこー!」

「お、おい」

おれは引きずられるがままに日菜について行くのであった

待ち合わせの場所だという駅前広場に着くと時計の下に制服姿の紗夜の姿があった
「おねーちゃんーん」

「日菜、遅いわ…響也さん？」

こつちを見て驚いた顔をする紗夜

「よ、よう紗夜」

「はあ…全く日菜がすみません」

「いやどうせ暇だったし大丈夫だ」

「ならいいんですけど」

いつも通りの反応

「とりあえずここで立ち止まってるのもなんだから歩かないか？」

「そうしましょうか」

「ちよつとーあたしのこと忘れないでよー」

俺達は歩き出した

フフフフフ

「おねーちゃんとこの服とか似合うんじゃない？」

「さすがにちよつと派手すぎるわ」

「ねえ響也くんもそう思うでしょ？」

「…それ俺に聞く？」

2人の服選びに付き合っているのだがやっぱり男子としてはこういう場所は居心地が悪い

「そりや紗夜ならなんだって似合うだろうけどさ」

「さすがに言い過ぎよ響也さん」

「ぶーあたしだつて似合うもん」

「ぶーたれるなよ日菜、双子なんだからお前だつて似合うに決まってるんだろ」

「えへへーありがと響也くん！」

全くいい笑顔だな

「響也さん日菜には甘いんだから」

「そんなことないと思うぞみんな平等に接してるつもりだし」

「はあ…まあいいわ試着してきます」

「…はあおねーちゃんは素直じゃないんだから全く」

「まあそこも紗夜のいい所なんじゃないか？」

「まあねーあ、そうだ響也くん！今日おとーさんもおかーさんも家にいなくて姉妹2人寂しく晩御飯食べることになってるんだけど一緒にどう？」

「いやいやまず両親がいない家に男を連れ込もうとしてるんじゃない」コツン
「いったーい、おねーちゃん響也くんがぶったー」

シャーッ

「響也さん後で覚えておいてくださいいね」

とても美しい悪魔が降臨なされた

全く仕方がない子猫ちゃん達だ

ガチャッ

「ただいまー」「ただいま」「お、お邪魔します」

悪魔から色々な折檻を受けたあと（ちやつかり服は買っていた紗夜）俺は氷川家に連
行されていた

「とりあえず響也さんはここへ座っておいてください」

「いや俺も手つ」「それはいいです」：はい」

「あははーさすがに響也くんを台所に立たせる訳にはいかないかなー全部知ってる身と
しては」

日菜にトドメを刺される俺……しくしく、立場ないな

「まあそこまで手間がかからないので適当に時間を潰しておいてください」

「わかったよ」

俺は鞆からノート（5つのバンドのスケジュールなどが詰まってる言わば手帳みたいなもの）を取り出し暇を潰していた

「じゃーんお待たせー」「お待たせしました」

「おぉー美味そうだな」

目の前におかれた皿には俺の好物ハンバーグが鎮座していた

「いただきますー！」

俺は2人が着席したのを見ると箸をとり恒例の言葉の口にする

その蠱惑的な体軀に箸を入れ一思いに割ると中からは吹き出すマグマのような……はおかしいな、滝のように流れる肉汁が……

俺は一口大にさらに割ると口に入れる、その瞬間後を追わせるように白くツヤツヤなご飯を口一杯頬張った

ああ幸せとはこの瞬間のことを指すんだなと

俺は2人の女神が恵んでくれたその供物をかきこんでいった

アハハー食べたネおねーちゃん

ソウね

「ああー美味かったご馳走様でした」

「いえいえ」

「いや前に食べたことあるから日菜は知ってたけど紗夜も料理うまかったんだな」

「私は嗜む程度にしか出来ないんですけどね、この子は天才ですから」

「へへーん」

「さて、そろそろ時間も遅いし俺はそろそろお暇させてもらいますかね」

そう言いながら立とうとする俺

「おねーちゃんそろそろだね」「そうね」

ガクッ

「あ……れ……」

身体から急激に力が抜け膝をつく俺は2人の漆黒で妖艶な笑みを目に焼き付けながら意識を手放したのだった

「…ん」

目が覚めた俺は現状を把握しようと体を起こそうとするが

ジャラ

「…おいおいマジかよ」

手と足がベッドに括りつけられ身動きが取れなくされていた

「お目覚めですか響也さん」

「…紗夜、てめえなんか盛ったな？」

そう言うのと紗夜は笑みを張りつけてこう紡ぐ

「気づかないで犬のようにながつつく響也さんは滑稽でしたよ」

「とりあえず許してやるからこれ外せ」

ガチャツ

「それがそうはいかないんだなー響也くん」

「…日菜もか」

「だって外したらあたし達を置いて他の女の所に行っちゃうじゃん

…そんなの見たらあたしなニスるか分からないよ？」

薄暗いためよく見えないが日菜も紗夜同様怖いくらいの笑みを浮かべているように見える

目には光がまったくないが…

「響也さんの周りにはいつも沢山の女の子がいます、私がドレだけ耐エてるかあなたにはワカリマスカ？」

「デモコウシテキョウヤクンヲトジコメテシマエバワタシタチノモノニナル」
「フフフフ」 「アハハハハ」

「それはどうかかな？」

いきなり声が出た

ガチャツ

「誰!？」

扉を開けて入ってきたのは黒っぽい衣装を着た長身の女性だった

「ふふふ、私の名前は怪盗ハロハツピー、今日は物ではなく人を盗みに参上した!!」

…どこかで聞いたことあると思つたら薫じゃねえか

「誰かと思えば薫くんじゃん」

「瀬田さん？あなた不法侵入だということがわかつているのですか？」

2人は薫を敵だと認識した蛇みたいに威嚇する

「まあまあ細かいことを気にしては可愛い顔が台無しだよ子猫ちゃん達

それを言うなら2人だって拉致監禁の罪に問われることを理解した方がいい」

いつもの芝居じみた口調はほとんどなく真っ直ぐな目をして言葉を放つ薫

…お前普通に話せたんだな

「てゆーか響也くんがここにいてよくわかったね薫くん」

「ああ、それは買い物している時から私は後ろをついてまわってたからね」

「視線を感じると思ったら貴女だったんですね」

「昼休みの日菜の目を見た時にただならぬ気配を感じたからねついて行って正解だったよ

さあ響也を渡してもらおうか」

「いくら薫くんでもそれは許さないよ」

「さすがに多勢に無勢ですよ？」

「……」

黙ってしまふ薫

「…おい薫」…心配しなくても平気さ響也」へ？」

「私がこの部屋に入った瞬間に勝負は決まっていたからさ」

「何を言ってるのですか？」「そうだよそんなのあり」

プスリ

「うっ、」「なっ、」

バサツドサツ

「薫様、無事鎮圧しました」

いきなり現れたのはこころの所の黒服さん達であった

「ありがとう黒服さん達、とりあえずこの2人のアフターケアを頼んでもいいかい？」

「承知しました」

黒服さん達は倒れた2人を連れて下に降りていった

「さてと」

薫は俺に近づき手錠を外し始めた

「遅くなって済まない響也、こころに応援を頼んでて時間がかかってしまった」

「いや、すげえありがたい」

ガチャツガチャツ

「よし外れたね、それであの二人はどうするんだい？」

「それについてなんだけど、薫は何も見えていないあいつらも何もしていないってな感じ

で許してやって欲しい」

そう言ううと目を丸く見開いて驚いた薫は数秒後笑いだした

「あははは、全く響也らしい、でもそこに憎めない私がいる」

「あいつらも悪気があつてした訳では無いだろうしな」

「わかったその点も踏まえて下に降りて黒服さん達に頼もうか？」

俺は薫に連れられるがままに階段を降りていった

黒服さん達のおかげ？で紗夜と日菜はあの日のことをすっかり忘れて過ごしている

…一体何をやったらあんなに強烈な出来事を忘れられるのか

俺はとてつもない闇を感じる弦巻家の黒服さん達のこと深く考えるのはやめた

特別編4 The poster girl was

a s c h e m e r

「あー疲れたー」

あ、どうも響也です

今授業が終わってHRも終わり帰り支度をしてる所なんですけど人って疲れたと
思ったら身体を伸ばすように出来てるのか俺も準備体操バリに伸ばしてます

「響也おじいちゃんみたい」

隣のリサがニヤニヤしながらそう言ってくる

「うっせ、そしたら同い年だからリサはおばあちゃんだな」

シーン

あ、やば

「あー言っではいけない事言ったねー？紗夜に言いつけてやる」

ズザッ

「すみませんでした」

俺は音速を超える（さすがに超えない）スピードで地面に頭を擦り付けていた
「全くあたしだって一応うら若き乙女なんだからね？」

「自分で乙女って言うかね」

「…紗夜（ボソツ）」

「…」

The 土下座の姿勢に戻る俺

俺はリサ（紗夜になんだが）に頭が上がらないことを受け止めるしか無かった

コンコン

「リサ、響也、早く練習に行くわよ？…何してるの？」

ふと入り口付近から聞こえてきた声に俺は冷や汗をかく…

友希那にこんな姿見られたらただの変態だと思われる

「友希那ごめんねー、響也が「リサ！」」

俺はリサの口を封じにかかる

「今度飯奢る」

「…やっぱりなんでもないやごめんね友希那」

買収完了

我ながら策士だな…何人か野口が旅立つだろうけどそんなこと気にしてられない
「気になるわね…響也、リサに何したの？」

ものすごい眼光を向けてくる友希那

思わず言つてしまいそうなのを押さえ込んで無理やり作つた笑顔を貼り付けて友希
那に返す

「な、なんでもない、そんなことより練習行くんじゃないのか？」

「…そうね、早く行くわよ」

疑いの眼差しはまだ向けられているが俺が頑なに言わないことを感じ取つたのか諦
めて友希那はそう言う

「おっけー…響也ファミレス以外だからね？」

「…うい」

リサのしてやつたりの顔に俺は何も言えなかった

「友希那さーん！」「こんにちは」

俺達がCIRCLEに着くとあこと隣子が出迎えてくれた

あこよ他の人の目もあるんだからもう少し落ち着け

「宇田川さん……」

紗夜がドスの効いた声であこをよぶ

「ヒツ……紗夜さんこんには……」

あー、蛇に睨まれたカエルってこんな感じなのかな震えまくってる

いや悪魔に睨まれたの間違いか

「……響也さん、後でお話が」

「え？あ、はい」

ここで皆さんにお知らせです俺の処刑が決まりました

何故バレたのかは分かりませんがとりあえず五体満足で帰ってこれたら奇跡です

「響也くん……さすがに氷川さんもそこまで鬼じゃないよ」

燐子がボソツツと言ってくる

だから何故地の文を読めるんだ

「響也くん顔に出やすいから」

俺はえ！?っと思いきすぐ近くにある立ち見の鏡を覗き込む、……うーむいつもの俺だよな

「響也くんどしたの急に？ナルシスト？」

「いや違うからなあこよ、俺は別に自分をかっこいいとは思ってない」

変なレッテルを貼られるところだった

「みんなこんにちは」

「あ、まりなさんこんにちは」

ふと奥からC i R C L Eのスタッフであるまりなさんが顔を覗かせた

「響也くん両手に花…いや花束なのかな?」

「いやいや何言ってるんですか!?!」

凄いなやなやしながらまりなさんからかわれる

「だってこないだだって日菜ちゃんところちゃんにひつつかれてたでしょ?他にも香澄ちゃんとか」

この人はとんだ爆弾を落としやがった

R o s e l i a みんなの目の色が変わる

「…響也さん覚悟は出来てますね?」「あたしを差し置いて日菜とこころとかとイチヤつくとか響也許さないよ?」「……」「響也くん?あこよく分からないからちゃんと説明して欲しいなー?」「響也くん…天誅です」

俺は5人分の衝撃を受け意識を簡単に手放したのであった

あれから5分後俺は目を覚めますがそこに友希那達の姿はなかった

まりなさんに聞いたところもうスタジオに入り練習してるらしい

：いや俺が確かに悪かったのはあるけどさすがに誰か心配してくれても良くない？
 なんか悲しくなってくるなーしくしく

「まあこんなこと言っても仕方ないし途中だけどみんなのところに向かうか」

ふと気になりスマホを取り出す俺

よく見るとメッセージが来ていた

『先程は怒ってしまつてごめんなさい、皆さんも落ち着いたのでタイミングを見計らつて入つてきてください』

ps

でも日菜の事については詳しく説明して貰いますのでそのつもりで

紗夜

』

良かった、みんなそこまで怒ってないっほいな

：でも日菜のことって言われてもあいつが勝手に飛びついてくるだけだからなあ
 まに紗夜の前でも飛び込んできけると思うんだけど言い訳したらまたあれだから何も
 言わないでおこう

スタスタ

「響也くん響也くん、ちよつといい？」

「?なんですかまりなさん」

まりなさんが話しかけてきた

「いや、あのね? Rose liaの練習が終わってからでいいんだけど少しお手伝いして欲しいことがあって

重たい荷物があるんだけど私一人じゃどうにもならなくて」

「大丈夫ですよ、それじゃ終わったら声かけますね」

「ありがとーそれじゃ後でよろしく!」

俺はまりなさんに背を向けスタジオに歩を進める

視界の隅にふと黒い笑みが見えた気がしたが振り返るとニコニコしたまりなさんが立っているだけだった

「:??どうしたの?」

「い、いえなんでもないです」

…気にしない方がいいかな?

俺は改めて歩き出した

ガチャツ

「みんな、さつきはごめん」

俺は言い訳などせず頭を下げて謝罪する

「やっときた響也、遅いよー」

「響也くん大丈夫…?」

「ああ大丈夫」

「良かった…」

タタタタタ

「響也くーん!」

ギョッ

「あ…痛い」

「心配したんだよ?」

いやいやあこよ、お前も加担してたからな? 記憶あるからな?

まあいいか

「響也…さつきはごめんなさい…」

「友希那…大丈夫大丈夫俺頑丈だから」

さつきまで気失ってたんですけどね

「響也さん、ここの部分なんですけど…」

「とりあえず引いてみて？その後でアドバイスするから」
「分かりました」

紗夜のギターを聞く俺…ふむふむ

「どうですか？」

「なるほどねえ、…紗夜さま多分なんだけど左手の中指怪我とかした？」

「え!?それをどうして…?」

「やっぱりかあ序盤はわからなかったんだけど中盤になってからなんかぎこちないなああって思ってた」

でも紗夜のことだから隠してんのかなあと

多分怪我さえ治れば普通にその部分出来ると思うんだけどね」

「…やっぱり響也さんにはかなわないですね」

「え、ちよつと紗夜手見せて」

「は、はい」

「ほんとだ、浅いけど確かに切れてる…」

「…ほんとに響也つてなんでも分かるわね」

「たまたまだよたまたま、とりあえず紗夜今日は見学しといたら？治ったらまた出来るんだし」

「…そうしておきます」

紗夜にしては珍しくすぐに身を引いた

よっぽど傷を当てられて動揺したのかな?…あれ?もしかして俺ストーカーみたいで気持ち悪い?

でも顔赤いしきつと恥ずかしいんだろ?なまあいいか

「それじゃ紗夜抜きでやるわよ」

「…あ、それなら俺ギターやっていいか?」

「…それはいいけどギター持ってきてるの?」

「紗夜に貸してもらえば出来るだろ?」

「それもそうね」

「いいか?紗夜」

「私は構いません」

「ならお言葉に甘えて」

俺は紗夜がいつも使ってるギターを手に取る

…使い込まれてるな、所々に細かな傷が見える辺り相当練習してきたんだろう
俺はまるで貴重品を扱うかのような手つきで軽く慣らして友希那に声をかける

「いつでもどうぞ」

「ええ、…あこ」

「わかりました!」

なんかこうして一緒に練習するのも久しぶりだな

俺は少し懐かしみを覚えながら弦一本一本をかき鳴らしていた

…はあやっぱり響也さんにはかないませんね

私は見学を言い渡されてからずっと響也さんの弾くギターばかり目で追ってしまっています

そして私と響也さんの技量の差をひしひしと感じながら

日菜と同じ天才だから同じ土俵に立つのもおこがましいことだとはわかっているのですがどうしても技術を盗んで真似しようとしてしまう自分がいる

やっとなんは近づいたかと思っただけです…まだまだの様です

「ヤーヨー」

「つ!!…なんだ今井さんでしたか」

いきなりの今井さんの声にびっくりしてしまふ

「ボーツと何考えてたの?」

「…私ってRoseliaにいていいんでしょうか？」

「何言ってるの！Roseliaはあたし達5人でRoseliaなんだからいるいら
ないの問題じゃないんだよ？」

今井さんのその一言で少し心に余裕が出来る

「ありがとうございませす今井さん」

私は今井さんにそう返す

「いい笑顔出来るじゃんそれでいいんだよ紗夜」

「今日は早いけど終わりましたようか」

湊さんが声を発する

「…やっぱり紗夜の方が歌いやすいか？友希那」

響也さんが聞く

「…さてどうかしら」

「さよさーん！指大丈夫ですか？」

「宇田川さん、大丈夫よ、心配ありがとう」

「よかったー」

「とりあえず帰り支度してスタジオ出ようか？」

「そうしましょうか」

私達は用意をして帰ることにしました

「あ、まりなさん練習終わったんで手伝いますよ！」

俺は約束通りまりなさんに声をかける

「わかったよー、そしたら私に着いてきて」

「わかりました！みんなそしたらまたな」

俺は Roselia の面々に一言言おうとまりなさんに着いて行つた

「…何かおかしくないですか？」

私はふと思いつた疑問をみんなに伝える

「おかしいって何が？」

今井さんが聞いてくる

「月島さんって響也さんに頼み事するほど話してましたっけ？」

「…そう考えると見たことないわね」

湊さんも同調してくれる

「紗夜さんの考えすぎじゃないですか？響也くんああ見えて女性の知り合い多いです」

「…それは否定できませんがなんか気になるんですよね」

とそこで白金さんが口を開く

「…少し覗きに行きませんか？」

「燐子いきなりどうしたの？」

「い、いえあの…私も少し気になりました」

「そうね、気になるなら見に行けばいいのよ」

「友希那まで…わかった、あたしも着いていくよ」

「決まりですね」

私達は月島さんと響也さんが歩いていった奥へ向かった

「響也くんこれなんだよー」

俺は案内された所で物を見せられる

見る限りただのダンボールみたいだが

「わかりました持つてみますね」

…んしょつと、重たいけど持てない程ではなくなつ「えい」もがっ!!」
俺は後ろから口に布を当てられる

まさかハメられた!?!あのまりなさんに!?!

息苦しい中少しずつ薄れゆく景色の中にどす黒い笑みをしたまりなさんの姿があつた…

ガチャンツ

ガチャン

「っ!?!今の音はなんですか?」

「奥の方から聞こえたね、急ごう」

「そうした方がいいわね」

「響也くん大丈夫かなあ」

「…分からないでも嫌な予感がする」

どうか何も起こってませんように

「…ここが一番奥だね」

私達は最奥の扉の前に着く

「多分音はここからしたよね他に扉ないし」

「…入るわよ」

「ちよ、友希那ストップ」

「何よ、リサ」

「心配なのは分かるけど何があるかわからないんだから慎重に行かないと」

「…わかってるわよそれくらい」

「…皆さん静かに、中から声が」

私は皆さんにその声をかけると聞こえてくる声に集中する

防音がしっかりしてるのかくぐもった声が途切れ途切れにしか聞こえないが

「まりなさんの声だね」

「やはりここでしたか」

「…」

ガチャッ

「白金さん!?開けたら」

「響也くん!!大丈夫!?!」

白金さんらしからぬハッキリとした音量で中に声を入れる

「あれ? Roseliaのみんな、帰ったんじゃないの?」

中を見ると月島さんがこちらに振り向きそう答える

「まりなさん…響也を返してちょうだい」

湊さんも口調を荒らげて言う

「…あーあ、コレならバレないと思っただけだなあ、みんな意外と鋭くて感心感心」

月島さんがニヤリとした笑顔を向けてくる

「響也さんは無事なんですよね？」

私も心配からか口調が少し荒くなる

「うん、それはもちろん、ほら」

月島さんが右に移動するとその後ろにいたのは目隠しされて両手足を縛られた響也さんの姿であった

「響也?! まりなさん、さすがにこんなことする人じゃないと思いましたけど幻滅しました」

「…響也くんをかえせー!」

宇田川さんがまりなさんに向かって走り出す

「あゝ危ない!」

「直線的な動きだね、そんなんじや何も得られないわよ?」

月島さんは半歩右足を後ろに下げると爆発的な加速で宇田川さんの後ろに移動し首

元に手刀を入れた

「うつ…」

バタンツ

「あこ!?!」

「まりなさんさすがに許せないわ」

「湊さん、今井さん近づいてはダメよ!!」

私の制止も聞かずに走り出す2人

「あはははははははは、遅い遅い」

2人も宇田川さん同様に気絶させられてしまう

「さてあと2人かな？」

…いや正確には1人だね、

ね？燐子ちゃん」

ガシッ

私は両腕を抑えられる

「白金さん!?まさか…」

「氷川さん…常に気を張ってないとダメですよ、ゲームなら死んでます」

私はそのまま地面に押さえつけられる、凄い…力だわ普段の彼女からは想像出来ないほどの

「燐子ちゃんそのまま抑えておいてね私はその間にやる事やっちゃうから」

「次は私なんで早めでお願ひしますね」

「わかってるよー」

そう言つて月島さんはポケットから棒状のようなものが取り出される…あれは注射器!?

「月島さんそれは一体」

「あーこれ?これはね俗に言う媚薬つてやつ?」

響也くん周りに女の子のいすぎて私の事なんて眼中に無さそうだからもういつその事快樂墮ちさせたら早いかなつて思つてね!」

「っ!?…月島さんだけには絶対に響也さんは渡さないわ」

「渡さないも何ももう手の中だよー」

「そうだね、そしてしたら目の前でやってあげるよ」

好きな男の子が穢される瞬間ってやつをね」

月島さんは注射器を響也さんの腕に刺す

「さてと、そしたら服をぬがしてつと」

私は止めようと必死に振りほどこうとするがあまりの白金さんの力の強さにビクともしない

「それではいったただきまーす！」

「やめてえええええ!!!」

私は届かない思いを声に出

「ちよつと待つてくださいい何の話ですかこれ!？」

「え? こういうの面白くない? 私的には悪役感出ていいと思っただけだなあ」

「まりなさん似合いませんよ、それに軽くみんなをなぎ倒すくらい強いとかいろんな意味で間違ってますよこの話」

「…わかったよー、そしたらもう少しまろやかな感じで書き直してくるね」
渋々と言ったところでまりなさんは俺の手にあった1冊のノートを回収し頬を膨ら
ませて奥に歩いてゆく

頼み事とはまりなさんが書いたSSを読んで感想が欲しいとの事だった
ちゃんちゃん

本編

第1話 出合いの風

「……流石神童、菅谷響也君だおめでどう！」

スポットライトに照らされた壇上で俺、菅谷響也は少し偉そうな恰幅のいい男性の前に立ってる。

まあ言わゆる表彰式というやつだ、それも全日本の音楽コンクールという大舞台の表彰だ。

「ありがとうございます」

俺は賞状を貰うと一礼し、壇上を後にした。正直人が沢山いるのが苦手なのでこういう表彰式などというものも出たくはないんだがお世話になってる先生の顔を立てるためにも仕方なく出ている。

俺は両親が二人とも音楽に関する仕事に就いていたので小さい頃から色々な楽器を習ってきた。

ピアノから始まり弦、管問わず色々なものに関わっていた、生まれつきの才能なのか絶対音感と共に一度触った楽器は直ぐに弾けるようになった。

そして今中学一年でピアノの全日本コンクールの表彰をされていたという話だ。

……いち…、お兄ちゃ…、ねえっ、お兄ちゃんてば

「…んっ?」

なんだ夢か…、あんまり見ても面白くない夢なんだけどな。

「…もうお兄ちゃんつてば早く起きないと転校初日で遅刻するよ?」

「あ、ああごめんごめん」

俺に跨り揺すつていた妹に話しかける

「おはよう詩歌、お前が起こしてくれなかったら遅刻してたな」

「おはようお兄ちゃん!まったくお兄ちゃんつてば私がいないとダメだね」

妹の名前は詩歌(しいか)

一つ下の高校一年生、今年から花咲川女子学園に通っている。

メガネをかけていて見た目からしたら大人しめな印象だが、活発で明るく何よりコ

ミユ力が化け物じみているおかげで歩いてるだけでいろんな人に話しかけられるくらいに顔が広い。

…正直敵に回したくない人第1位である。

「…お兄ちゃんさつきから明後日の方向見てブツブツ何喋ってるの?」

「いや、独り言だから気にしなくていいよ」

「まあいいや、ご飯出来てるから早く着替えて降りてきてね」

ガチャ…:バタン、ドタドタドタ…

まったく朝から元気の塊だな…

「そういえば今日から行く学校の事何一つ知らないんだけど…パンフレットどこにあつたかな?」

…ガサガサ…おつ! あつたあつた…どれどれ? ……つて!?

「うおええええええ!!?!」

ドタドタドタ、!?ガチャ

「お兄ちゃんどうしたの!?!」

「…詩歌、お前羽丘女子学園って知ってるか?」

「そりゃ知ってるけどそれがどうしたの?…つてなんでお兄ちゃん羽丘のパンフレットなんて持つてるの?」

「親父から次お前転校する所のパンフ送っておいたからって言われててその存在を忘れて今思い出したから探し出したらこれがでてきた…」

「いやいやいやいや!!お兄ちゃんそこ女学だからね、女の子しか行けないからね?」
俺はスマホを取り出しとある人に電話をかける、

…プルルル…プル、ガチャ

『おう?どうした響也、なんだ?愛しのお父様の声が聞…』

『おいクソ親父、転校先どうなってるんだよ!女子校じゃねえか!!』

『あ、あはははは…すまんすまん、実はな羽丘女子学園の理事長が俺の親友でさ、この前久しぶりに酒飲みに行った時に、息子の転校先で悩んでる事を話したら、「だったらうちに来たら?実は共学にする案が出てて試しに男子生徒を1人取りたかったんだよ、お前のこの響也君なら喜んで」っていう話になったんだよ』

…頭が痛くなってきた、

「…まあそういうことにしといてやるか、クソ親父今度帰ってきたら覚えてろよ?」
ピッ…

少しドスの聞かせた声で話し、電話を切った

「…お兄ちゃんほんとに羽丘に通うの?」

詩歌が心配そうな顔でこっちを見てくる

「らしい、…まあ決まったものは仕方ないから受け入れるよ」

「お兄ちゃんはその対応力には恐れ入るよ…とりあえずご飯食べちゃおう？せつかく起きたのに遅刻しちゃうよ？」

「そうだね」

時が変わり今は羽丘への通学中

妹とは道が違うため早々に別れて今は一人で歩いている。

しかし…

「流石と言いたいくらいの女子の多さだな、完全に浮いてるってかさつきから色んな視線を感じる…」

チラチラと見られているようだ…そんなに見なくても後でまた見るハメになるぞお前ら

そこから5分後、

…ここが羽丘女子学園か、

歩いて20分くらい道のりを経て辿り着いた学校。

さあ、怖気付いてても仕方ないから学園に入って理事長室でも目指すかな

「…ねえねえあれって転校生？まさかの男子？」

「そうなのかな？でも結構カッコよくない？私好みかも」

女子のひそひそ話を耳に入れながら校舎に入った俺

でも場所が分からない：仕方ないから近くにいる女子生徒にでも聞きますか、お？
2
人組の女子はっけーん

「あのすいません理事長室に向かいたいんですけどどこにあるか教えてもらってもいいですか？」

すると少しギョルっぽい見た目の女子が答える

「あー君が噂の転校生？そりや初めての場所じゃ迷うよね、おっけーあたしが案内してあげるよちよつと待ってね：ねえ友希那先に行つててくれない？」

そうすると

「わかったわ」

大人しそうな女子がそう返答するとトコトコと歩いていった

「よし！じゃあいこっか？」

「お願いします」

「ところで君の名前は？」

「俺の名前は菅谷響也といいます、あなたは？」

「あたしは今井リサ、よろしくねー…は衣着いたよここが理事長室」

「ありがとうございます、助かりました、

なにかお礼を…」

「いいって、あたしが好きでやってるだけだからねー、…んじやまた会うだろうからその時はよろしくねー」フリフリ

今井さんは俺を送るとそのまま階段を登って行った

なんか妹と同じくらいコミユ力け物な気がするな今井さん（笑）

俺は今井さんの進んだ方向に一礼した後理事長室のドアの前に立った

…コンコン

「…はい？」

…ん？女性の声か？親父よ…親友って女性かよ、母さんにバレたらボコられるぞ

「今日からお世話になる菅谷響也です」

「ああ、響也君か、入って入って」

ガチャ、

「失礼します」

ドアを開けて中に入ると1人の女性が座っていた、あれ？若くね？

「ああ響也君お久しぶり、…って覚えてないかな？響也君が小さい頃よく会ってたんだ

けどね

私はこの理事長をしている篠崎亜里朱です、君のお父さんとは中学高校と一緒にね、よく遊んでたんだよ

急に女子高なんて戸惑う事が色々あるけど私の為に協力してね？」

ふふ、と微笑みながら理事長は頭を下げる

「わかりました、俺も腹をくくります」

「ありがとう、何か必要なものがあれば言ってね？できるだけ用意はするから」

コンコン、黒崎です

「ああ、入っていいわよ」

「失礼します、君が菅谷響也くん？私は君の担任を任された黒崎ですよろしくね」

入ってきたのは20代前半くらいに見える若い女性

「菅谷響也です、よろしくお願います」

「では黒崎先生、後はよろしくね」

「わかりました、さて菅谷君行きましようか？」

今は教室の扉の前でスタンバイさせられてる、転校後の紹介を想像してもらえたら状況がよく分かるかと

はいそれでは、菅谷君はいつてきて

お声がかかった。

ガラガラ：

うおつ？すごい好奇の目でみんなが見てくる…まあそうだろうな
「転校してきてここでお世話になることになりました菅谷響也です

みんなよろしく」

……あれ？反応がない、なんか不味ったか？

「き…」

「「「「きやあああああ〜カツコいい〜」」」」

ビクウ、いきなり耳が壊れるかと思った

「皆さんお静かに後でいくらでも話しかけてくださいね

では菅谷君は後ろの空いてる席に座ってください

授業始めますよ」

「はい、わかりました」

後ろに歩いていくと気付くとばかりに手を振ってる今井さんの姿が

「また会ったね〜響也、なんだ隣じゃんよろしくね」

「いきなり名前で呼びますか？普通、まあよろしくお願いします今井さん」

そうすると今井さんはすこしムスツとしながら

「リサ」

「へ？」

「リサって呼んで、なんか今井さんって呼ばれるとむず痒い」

「いやいきなり名前で呼べるわ…」

「名前で呼ばないと無視するから」

…なんかめんどくさいというか照れくさいけどまあ仕方ない

「んじやリサさん」

そう言うのと微笑みながら

「まあ及第点だけど仕方ない許してあげよう」

「はは…ありがたき幸せ」

笑顔に少しドキツとしたのは内緒

時は移り今は休み時間

「ねえねえ、菅谷くんって普段どんなことして過ごしてるの？」

クラスのみんなの質問攻めにあっている、てかクラス以外からも押し寄せてどっかの
テーマパークのアトラクション待ち見たくなってる…人に酔いそう、うつぶ…

「普段は空いてる時間は本を読んでるかな」

「へえーそうなんだあ、あ、私も本大好きだよ、よく読むんだあ」

「…そ、そうなんだね」

みんなの目が怖いまるでライオンの群れの中に閉じ込められたシマウマの気分だ：なつたことないからわからないけど

でも読書っていう答えがあまり気に入らなかつた子が会話に入ってきた

「読書かあ、なんか在り来りであたしとしてはるんっ！てこないなあ」

水色のショートカットの子がそう言った、つてめっちゃ可愛いな

「…るんっ！が何かはよくわからないけどそれ以外に主にしていることないから答えようがないかな？」

そう答えると隣にいたリサさんも入ってきた

「そうだよヒナ、響也困らせたなら可哀そうだよ？」

ひなと呼ばれた少女はリサさんの言葉に引っかけたらしくちよつと目を輝かせながら

「あれれ？リサちゃんってばもう名前呼び？もしかしてそういう関係なの？」

そう言うとりサさんは少し頬を赤く染めて焦りだした

「ち、違うよヒナ…もう変なこと言わないでよ」

「うんあたしも響也くんのこと興味湧いてきた

あたしの名前は氷川日菜、日菜って呼んでね」

「いやいきなり名前で呼ぶのはちよつ…」

「日菜！」

「この女子はみんなこんな感じなのか？…俺は色々諦めた

「んじゃ日菜さん」

「まあそれでいいや、よろしくね！」

「んじやりサチーと響也くんまったねー」

「満足したらしく教室を去っていった日菜さん…まるで台風みたいな子だな

「ヒナはいつもこんな感じだから響也も気にしたらあれだよ？」

「なんとなく予想できたよ…」

キーン
コーン
カーン
コーン

…ふうとりあえずお昼休みになったな、さて弁当を、

「響也、お昼一緒に食べない？」

「リサさんが提案してきた、まあ一人で食うのは何かと寂しいので賛同しておこう

「うん、いいよ」

「おっけー、そしたら屋上にでも行こうか、あ、いつつも一緒に食べてる子がいるんだけど一緒にでもいい？」

「いいよ？」

「ありがとう」

「リサ？この方は一体…？」

今朝リサさんと一緒にいた子だった…まるで人形みたいに美しい子だな

「友希那つてば朝のこと覚えてないの？話しかけてきたじゃん」

「俺の名前は菅谷響也つていいいます、転校してきて今日からここに通うことになったんです、よろしく」

そう言う友希那と呼ばれた少女は物珍しそうな目で見てきた

「そうなのね、私は湊友希那、よろしく」

「よろしく湊さん」

湊さんはご飯を食べる行為に戻ってしまう…なんかクールな子だな

「友希那つて興味無いことはとことん興味ないからねいつつもこんな感じなんだ」

リサさんが耳打ちでそう教えてくれた

「…リサ？」

「なんでもないよー」

さてご飯食べちやおつと、お！今日も美味そうだ

「響也の弁当美味しそうだね？お母さんの手づくり？」

「いや妹が作ってくれたのさ」

「へえ、響也つて妹いたんだね」

「一つ下のね、花咲川に通ってるよ」

リサさんと何気ない会話をしているとふと目線に気づき目を向ける、湊さんがこつちをじーつと見てきてた

「み、湊さん…なにか？」

「菅谷響也、…どこかで聞いたことある気がするのよね

あなた、昔音楽関係で賞貰ってなかった？」

俺はドキリとした、知ってる人がいたとは

「昔ピアノをやつててその時に貰ったことはあるよ」

「やっぱりね…ねえ少し頼みたいことがあるんだけど」

…なんか嫌な予感がする

「何かな湊さん」

そう言うと湊さんは

「あなたに私たちの演奏を聞いて欲しいの」
と言ってきた。

時は移り放課後、俺は湊さんとリサさんに連れられて（強制連行）とある場所にいた
「C i R C L E？」

「そうライブハウスなんだここ、あたし達はいつもここで練習してるの」

中に入ると一人の女性が話しかけてきた

「いらつしやいませ、あ、友希那ちゃんにリサちゃんいつもの練習？…と後ろの子は？」
「初めまして菅谷響也といいます、なんか2人に演奏を見てほしいって言われて着いてきました」

「あ、そうなんだね、私は月島まりな、ここのスタッフなんだよろしくね！」

何かあれば呼んでね」

そう言うのと裏に入っていった

「さあ響也、ついてきて」

湊さん…あなたもいきなり名前前で呼ぶんですか

「わかりました」

ガチャ、

「ごめんなさい、少し遅れたわ」

中に入ると女子が3人待っていた

気の強そうな子がこつちに近づいてきてこう答える

「今井さんとはかく湊さんまで遅れるのは珍しいですねいった…その方は？」

「俺は菅谷響也つていいいます、湊さんに演奏を聞いてほしいつて言われてつてきました」

「なるほどわかりました、私は氷川紗夜といひいます」

ん？氷川？まさかとは思うが

「氷川つてまさか日菜さんの姉妹ですか？」

「日菜を知つてるんですね、妹です」

「そうなんですな」

「日菜がなにか迷惑をかけてな「ふふふつ」」

いきなりツインテの子が割り込んできた

「我が絶対なる領域に足を踏み入れるとは、命知らずなものだ」

シーン……

「あこちゃん…、いきなりだと誰だつて困惑しちゃうよ？」

黒髪の子がフォローに入る

「りんりーん…、なんかあこ変な事言ったかなあ？」

リサさんが耳打ちしてきた

「あこ、普段からこういう言葉遣いだから気にしなくていいよ？なんか中二病とか言うんだっけ？これ」

あーなるほど…そしたら俺も乗ってみようかな

「フフフ…フハハハハ、この俺に侵入されるとは貴様も落ちぶれたものだな…」

我が浄化の光を喰らって朽ち果てるがよい」

シーン……………

あれ？やらかした？

みんな微妙な顔してるし

あこと呼ばれた子もなんか肩震わせてるし

「か…」

か？

「かつこいいー！なんかこう…バーンってしてズドンっ的な感じがすごいかつこいいい!!!」

あ、あこは宇田川あこっていうんだ、あこってよんでね菅谷さん！」

すごい目をキラキラさせながら手を握りブンブンと振ってそういうあこちゃん…お

気に召して何よりだ

「よろしくあこちゃん」

「うん！」

すると黒髪の子も近寄ってきて

「わ、私は白金燐子つていいいます、よろしくお願いします菅谷さん」

すこしオドオドしながら名乗る白金さん

「こちらこそよろしくお願ひします、白金さん」

「…自己紹介は終わったかしら？そろそろ練習したいのだけれど」

湊さんがこういつてきた

「すいませんそれじゃ練習見させてもらいますね」

一言でいうとすごい、素人レベルをはるかに超えている

よっぽど厳しい練習積んできたんだな

「響也、どうかしら？私たちの音楽は」

「はつきり言うてすごい、プロも顔負けレベルだよ」

その言葉にみんな個々に喜びを表現してる

だが氷川さんは少し疑問に思ったのかこう質問する

「しかしなぜ菅谷さんに聞かせようと思ったのですか？ 湊さん」

「彼は日本一のピアノリストだからよ」

…っ!? 何故それを

「えええええ!?!」「えっ!?!」

みんなが驚きを表現してる

「湊さん…なぜそれを知って」

「菅谷響也、幼い頃から神童と呼ばれ中学一年までコンクールの賞を総なめする程の實力を持ちながら中学二年から忽然と姿を消した孤高の天才、…なにか間違いでもあるかしら?」

「…あつてる、でもあんまりいい思い出じゃないから掘り下げないで貰えると助かる」

「わかったわ」

それ以上誰も追求してこなかった

「そしたらさ響也、なにか1曲引いてみてよ演奏聞いてみたい」

リサさんが呟いた

「…まあいいけど、ピアノでいいの?」

「え? 他にできんの?」

「楽器ならなんでも」

「とりあえずピアノが聞きたいかなせつかくだし」

「わかった、…白金さんゴメンだけどキーボード貸してもらってもいいですか？」

「う、うんいいよ…あと同い年みただから敬語じゃなくても大丈夫だよ」

「わかった…んでなに弾けばいいの？」

「響也にまかせるわ」

湊さんにそういわれる…まかせられるのはちとめんどくさいな

「白金さんそのまま楽譜使ってもいい？」

「いいけど…」

「菅谷さん、まさか練習なしで私たちの曲を…？」

「白金さん自信無くさないでね…これは俺の才能だから…んじや弾きますね」

………

「んじや今日はありがとうございました、また呼んでください」

そう言いながら響也はスタジオを後にした

「ひとつ言えることは…ただ練習しても響也には一生追いつけない

多分ピアノだけじゃない、どんな楽器だとしても」

あたしはそう呟いた

「今井さんの言う通りですね…天才との格の違いを見せつけられてしまいました」

「りんりん大丈夫だよ、りんりんも上手だから」

「あこちゃん…ありがとう」

「…ねえ？みんなに相談があるんだけど」

友希那が口を開いた

「やりすぎちまったかな…」

俺は一人で帰りながら反省していた

「はあ…まあやつちまったもんは仕方ないし気持ち切り替えよう」

ピロン、

メールアプリの通知がきた、誰だろ

「リサさん？どうしたんだろ」

相手はリサさん、昼間に連絡先を交換したんだった

『明日放課後もう一度C i R C L Eへ来てほしいんだよね

頼みたいことがあるんだ』

…なんだろう激しく嫌な予感が、

まあ行くつていう選択肢しかないんだろうけども

「まあとりあえず明日になったらわかるか」

俺は夕焼けが綺麗な空を眺めてそう呟いた…

第2話 星の鼓動?沈む夕焼け

リサさんから連絡を受けて次の日、俺はC i R C L Eの入り口前にいた。

「…何が待ってるんだろう、昨日の事でみんなが物申したいとか?」

帰ろうかな…まだ間に合う」

べ、別に怖気付いた訳じゃないぞ?家に忘れ物を取りにか…

「菅谷さん?さつきから何をブツブツと喋ってるんですか?」

「ヒツ!?!…って氷川さんかあゝ脅かさしないで下さいよ」

後ろから話しかけてきたのは氷川さんだった

その後ろにはR o s e l i aの面々が揃っていた

…リサさんのやつ笑ってやがる

「別に脅かしたつもりはありません!ただ入り口で独り言なんて喋ってたら一歩間違えたら不審者ですよ?」

「それはごめんなさい…」

怒られてしまった

「響也ちゃんと来てくれたんだね、来ないかと思ってたよ」

リサさんにそう言われる、いやまだ笑ってんのかよ…そろそろやめろ

「ところで俺を呼んだ理由は？…まさかみんなで寄つてたかつて俺を虐めるとか…？」

「そんなはずないじゃん、何怯えてんのさ響也」

「そ、それならいいんだけど」

「…と、とりあえず中に入りませんか？なんか注目浴びてますよ？」

白金さんの言葉で周りを見てみると結構な人数の通行人が立ち止まってこちらを見ていた

「…そ、そうだね」

俺は白金さんにそう返事をした

スタジオに入った俺たちは、俺を除いて練習を始め、俺はその様子を椅子に座って見
ていた

しかし湊さんの声は聞き惚れるな、氷川さんやりサさんは努力の証がちゃんと出てる
し白金さんはちよつとオドオドしてる以外は完璧

あこちゃんは…元気があっていいな

「…少し休憩にするわ」

湊さんがそう言うのとみんながふうと息を吐いた、体力もあるみたいだしこれなら長丁場のライブでも耐えれそうだね…俺は一体どこから目線なのだろうか（笑）

「みんなおつかれさま、俺もいいもの聞かせてもらっていい気分だよ」

そう言うとは何かみんなは集まってひそひそ話をしていた…俺なんか変な事言ったか？

話が終わったのか湊さんが言葉を発する

「響也、少し頼みたいことがあるんだけど？」

「なんででしょうか？」

「…私たちの、Roseliaの…マネージャーになって欲しいのよ」

…へ？

「マネージャーですか？どうしてまた」

そう言うとは今度は氷川さんが

「菅谷さんが昨日した演奏でみんながひとつの考えに辿り着いたんです…素人が独学でいくらやっても素人から抜け出せないよ」

だったら天才に教われればその先が見えるんじゃないかと

お恥ずかしい話ですが私は努力しかないんです…天才の妹に抜かされまいと必死に頑張るしかないんです

でも妹が私と同じギターをやり始めて正直心が折れそうになりました…

私の今までの努力はなんだったのかと

そんな中昨日の菅谷さんの演奏を聞いて、もしかしたら菅谷さんから教われたら私は少しでも成長できるのではないかと

その話を皆さんにして皆さんもそう思ってることがわかりました

お願いします菅谷さん…マネージャーでなくてもいいんです、私たちに1歩先の光を見せてくれませんか？」

氷川さんは頭を下げる、それを見て Roselia の面々が全員頭を下げた、

「…皆さん頭をあげてください」

俺がそう言うともみんなが頭をあげた

「正直言うともマネージャーはすいませんが出来ません」

そう言うともみんなが暗い顔をする

「…俺は小さい頃からなんでも出来てちやほやされてきました、

賞が取れなかったことなんて1度もありませんでした

そんな俺が一般人の努力の凄さ、辛さをわかるはずありませんでした

その積み重ねられた辛い努力の日々を俺は才能でねじ伏せてしまったんです

みんなの目から輝きが無くなりました

いつしか俺は1人でした

そして俺は音楽から逃げたんです

これ以上誰かの努力を傷つけたくなくて…」

みんなが真剣な眼差しでこつちを見てくる

「でも昨日今日とあなた達、Roseliaの演奏を聞いて俺はやりたいたいことが出来ました」

「俺が教えたらどこまで行くのかと」

みんなが驚いた表情をしている

「…俺は厳しいですよ? ついてこれますか?」

みんなが涙を流し

「「「「これからよろしくお願いします!!」」」」

「「「「ちーらー!」」」」

「とりあえず響也は先生なんだからみんなのことを名前で呼ばないとね」

リサさんが爆弾を投下する

「は!? 何言ってるの? リサさん」

「いやー私とあこはあれだけどほか3人が苗字呼びだとなんかねえ」

「いやいやいや流石に名前呼びは…」

そうすると湊さんが

「響也は私を名前では呼んでくれないの…?」

なんか上目遣いで言ってる来たらっしやる…グハッ!

「俺でよければいくらでも呼ばせて頂きます友希那さん」

「さん、はいらないわ」

「いやさすがにそ」

「いらないわ」

話をきけえ…はあ

「わかりましたよ…友希那」

すると少し頬を赤く染めて

「っ…あと敬語もやめてちょうだい、同い年なんだから」

そっぽを向いた

とんとん、肩を叩かれる

「そしたら私のことも名前で呼んでくれるんですよね?菅谷さん…いや響也さん?」
氷川さんがすこし恥ずかしそうに言ってきた

「もうとうに諦めてますよ」

…紗夜

「つ!!…私はこの話し方しか出来ませんが響也さんは敬語を無くしてください

…その方が近く感じるんです」

最後の方が聞こえなかったが

「わかったよ、紗夜」

さてと

「白金さん…いや隣子

お前もこう呼んでほしいんだろ?」

袖を引っ張っていた隣子にこういうと顔を真っ赤にしながら

「…響也くんはズルいです」

なんか怒られてしまった

「響也わたしは?」「あこもあこも」

俺は2人の手を取り

「リサ、あこ2人もよろしくな」

リサは口をパクパクさせていた

あこは

「えへへー」

可愛いなおい、頭を撫でておいた

その時他の3人の目から光が無くなってるような気がした：気のせいだろうけど

練習も終わりC i R C L Eの入り口付近で少し話していると後ろの方から

「あっ！友希那先輩！Rose l i aの皆さんもこんばんは！」

茶髪で明るい子が走ってきた：猫耳？不思議な髪型だな

「戸山さん、こんばんは」

「香澄じゃん、今帰り？」

戸山さんと呼ばれた子は

「そうなんですよさつきまで練習しました！」

おーいかすみいー1人で走るなあー

後ろから4人走ってくるのが見える

「ぜえ…ぜえ…：おい！香澄急に走り出したらびっくりするだろ！」

ツインテの子がそう怒る

「はあ…はあ…香澄ちゃんは元気だよねえ」

黒髪のショートカットの子がそう言う

「まあ、そういう所が香澄のいい所なんじゃない…?」

ポニテの子が苦笑いしながら言う

「ねえ?メロンパンは?」

黒髪ロングの子が見当違いの言葉を発する…この子絶対天然だよな

「ところで友希那先輩!そちらの方は?」

俺のことだよな?

「俺の名前は菅谷響也、学年は2年で今日付でRoseliaの指導をすることになったよろしく!」

「え?!菅谷響也ってまさかあの菅谷響也?」

ツインテの女の子が驚く

「有咲誰なのか知ってるの?」

ポニテの子が質問する

「そりゃあ超有名人だぞ?日本のピアニストのトップだよその人」

「「「……えええ!」「」」

…まあ訂正しとくか

「元な、元、もう何年経つてると思ってたんだよ」

「私市ヶ谷有咲です、昔ピアノやっててその時に憧れてました、後でサインください」
市ヶ谷さんが目をキラキラさせながら言う

「へえー有咲ってばそんなこと一言も教えてくれなかったのに
あ、私は山吹沙綾つていいです！ドラムやってます」

山吹さんね、ふむふむ

「う、うっせえー、なんでそこまで言わなきゃいけないんだよ」
「まあまあ有咲ちゃんも落ち着いて

私は牛込りみつていいです、ベースやってます」

牛込さんつと

「私は花園たえ、ギターやってます、おたえつて呼んでください」
花ぞ「おたえ」

∴地の文を読んでくるな

はいはいおたえさ「おたえ」∴おたえ

「そして私は戸山香澄です、ギターとボーカルやってます

この5人でPoppin Partyつてバンドやってます」

Poppin Partyね覚ええた

「響也先輩は」

俺の周りに集まる女子はみんな名前呼び躊躇わねえのかよ…

「キラキラドキドキしたことありますか?」

「キラキラドキドキ?」

「そうです星みたいにキラキラとドキドキと」

「…ごめん、よく分からないや」

「そうですか…」

「でも音楽やっているとドキドキはするかな?」

戸山さんはぱあーと笑顔になり

「そうですねーやつぱり音楽はキラキラドキドキしますよね」

この子も少し天然っぽいな、扱い気をつけなきゃ

「響也先輩!私のことは香澄って呼んでください」

…これちゃんとかさんとかつけたらまた怒られるかな

「わかったよ、香澄、よろしく」

「はいっ!」

「私も有咲でいいですよ」「私もりみって呼んでください」「んじや私も沙綾で」

「有咲にりみ、沙綾もよろしく」

「響也先輩私は？」

「お前はおたえだろ？」

「うんそうだよ？」

いやお前が聞いてきたんだろ

…ぶるっ、なんか寒気がするっつか殺気が…

後ろを振り返ってはいけない、本能がそう告げている

「とりあえず今日はもうすぐ暗くなるからまた今度話そうか？」

「[[[[[はい！]]]]」

…ちやぼん、

「ふう…なんか怒涛の1日だったな」

風呂に浸かりながら独り言を言う

「RoseliaにPoppin Partyかあ…みんなそれぞれ違うけど光が宿ってたな」

お兄いちゃんまだ入ってるのー？私も入りたいんだけどー

「はいよ今出る」

まあ退屈はしなさそうだな

…どうしてこうなった

俺はいま4人の少女に囲まれて正座している、そこから離れてるもう1人の少女は顔を真っ赤にして微動だにしない

事の発端は約1時間前に遡る

今日は土曜日、Roseliaの練習もない俺は商店街をぶらついていた

「しっかし暇だなあ、どっかで休憩がてら喉でも潤そうかな」

そう言いながら歩いていると1件のお店を見つける

…羽沢珈琲店?入ってみようかな

カランカラン…

「いらっしやいませ!おひとり様ですか?」

出迎えてくれたのはショートカットの少女だった

「はい」

「かしこまりました、お席にご案内しますね」

ついて行く

「こちらのお席でお願いします、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください!」

そう言つて離れていく

「コーヒー以外にケーキもあるんだちよつと食べてみようかな

「すいません！」

「はいただきます

…お伺いします」

「アイスコーヒーとケーキセットひとつで」

「かしこまりました、少々お待ちください」

……

「お待たせ致しましたこちらケーキセットとアイスコーヒーでございます」

「ありがとうございます！頂きます」

パクツ…：…んんー

「美味しい、ホイップも甘すぎずでもきちんと甘みが出てる」

そう言うと少女は

「えへへーありがとうございます！」

「君が作ったの？」

「そうなんです！お気に召して何よりです」

「とつても美味しいよ、ええと」

「あ、私は羽沢つぐみっていいいます、羽女に通う一年です」

「てことは同じ高校の後輩か」

「…え!?まさか菅谷響也さんですか?」

羽沢さんは驚いた表情をしている

「俺のこと知ってるの?」

「女子高に転校してきた男子がいるって学校内では大騒ぎだったんですよ?」

あ、ああークラスまで来てたあの塊か

「菅谷さんかあ…ちよつと待っててくださいね私もうすぐ休憩なんでお話聞きたいです

…っ!!」

いきなり方向転換したせいかわらなさを崩す羽沢さん

「危ない!!」

咄嗟に席を立ちかばいに行く

「つきや!!」

ゴンツ!

「っ、!痛っ」

「菅谷さん大丈夫ですか!?!」

何とか守れたようだ…っ

なんで上に羽沢さんの顔があるんだろ？

落ち着いて見たら俺が羽沢さんに押し倒されてるようにも見えた

「羽沢さんとりあえず見られたらまずいから起きよう？」

ボンツ

あ、顔が真つ赤になった

カランカラン

「つぐー遊びに来…!!」「おーだいたーん」「つぐおま、何してんだよ?」「っ!!」

なんてタイミングの悪さだ

少女4人組は羽沢さんを引つ張って立たせると近くの席に座らせて俺の方を睨むと

「「そこに座って!」「」」

おー怖い…

そして回想に入る前の状況に戻るわけだ

「あんだ、つぐに酷いことしといてよく独り言喋れるね」

黒髪に赤のメッシュを入れてる子がそう言う

「いや俺はなんにも」

「んじゃどういいう経緯でこうなったかちゃんと説明してもらおうか」

赤い髪のロングの子が質問してくる

「だからさつきから言ってるけど助けようとしただけだって」

「さつきの状況だけ見たら誰もそうは思いませんって」

薄ピンクの髪の子がそう言う

「そーそーおにーさんそろそろはくじょうしちやえばー?」

灰色つぽい髪の子がのんびりした口調で恐ろしい事言ってくる

「だーかー」みんな聞いて!」

羽沢さんが復活したみたいだ

「菅谷さんはわたしが転けそうになった所を助けてくれただけなの!」

羽沢さんがそういうと

「なーんだそれならつぐ最初から言ってくればいいのに」「つぐってばおつちよこちよ

いだね」「つぐりすぎ」「つぐーお腹空いたー」

っつおい

「俺無実だよな? 謝罪のひとつもないのか?」

∴

「「「「い」めんなさー」「」」」

「あたしは美竹蘭、ボーカルとギターやってる、よろしく」

謝罪を受け入れたあととみんなで話してる時にバンドの話になり自己紹介されている
「モカちゃんはー、青葉モカって言いますー、ギターやってますー、よろしくー」
のんびりしてる子だなあ

「私は上原ひまりです、ベースやっています」

「アタシは宇田川巴です、ドラムやっています」

…ん？宇田川？

「もしかしてあこのお姉さんか？」

「あこを知ってるんですか？」

「ああ成り行きでRoselia教えることになってねその時に」

「「あのRoseliaをつっ!」「」」

「もしかして菅谷さんてすごい人？」

「つくはキーボード担当、ね？」

「うん、そうなんですよ」

「なるほどね」

「響也…さん、少しお願いがあるんですけど」

なんか前も見たなこの光景、そしていつもの名前呼びタイム

「敬語無理してつけなくてもいいぞ?ぎこちなくなってる

みんなも好きに呼んでくれて構わないから」

「んじや響也」「きよーやくん」「響也さん」

「私達も好きに呼んでくれて構わないから」

「んじや、蘭、モカ、ひまり、巴、つぐみ

改めてよろしく」

「こちらこそ（よろしくお願いします）（よろしくー）」

「んで頼みって?」

「あたし達の演奏を聞いて欲しい」

…やっぱりね

場所は変わりCIRCLE

入る時に月島さんに

『今度はafterglowの子達?君も隅に置けないねえ』

つてからかわれた、そういうのじゃねえよ!

「響也はそこに座って、ただ聞いてるだけでいいから」

蘭にいわれて座る俺

「とりあえず1曲…」

ふむふむ…あまり比べるのも良くないけどRoseliaみたいに完璧では無いが完成度は高い

「みんないい音楽でるね、蘭も声出てるし、モカとつぐみもいい感じ、巴はみんなをちゃんと引っ張れてるのがいいね、ひまりは…緊張してる？」

「ご、ごめんささい」

しゅんとするひまり

「ひーちゃんは昔からあがり症だからねー」

「緊張するのは悪いことじゃないよ？緊張してるからこそしよーもないミスが減るって場合もあるからね」

「それならいいんですけどね、あははー」

「でもそこまでいえるってきよーやくんもかなり音楽できるってことだよねーなんかひいてみてよ」

モカがそんな提案をしてくる…全く同じ展開に苦笑いしてる

「…モカ、響也がなにか出来ると思ってるの？」

「蘭、お前いま馬鹿にしただろ？」

「いや馬鹿にはしてないけど」

…カチーンとききましたよ

「つぐみちよつとキーボード貸してくれ」

「いいですけど…弾けるんですか?」

「ええええええ!!」

なんかひまりが驚いている

口をパクパクさせてまるで鯉みたいだ

「おい!どうしたひまり」

「巴コレ見てよ、響也さんが…」

…これはきつと昔の動画でも見られたのかな?

「とりあえずその話は後でするから…みんな俺の演奏に飲み込まれるなよ?」

……

「この動画本当だったんですね」

「きよーやくんすごーい」

「まさかとは思ったけどここまでとは」

「響也さんかっこいい…!」

「響也……ごめん……」

みんなが思い思いの言葉を発する

「いや話してなかった俺も悪いしおあいこだ蘭、

その動画の通りおれは元ピアニストだそれも頂点の」

「……どうしてやめちゃったんですか？」

ひまりがそう聞いてくる

「……ごめんそれは言えないかな、」

「そうですか……」

そう言うとき after glowのみんながひそひそ話を始めた

……ん？またどっかで見た光景、このあとの展開が手に取るようにわかるぞ？おかしいなあー

「……響也（さん）（きょーやくん）お願いがあります」

今回は先に言っておくか

「言っておくがマネージャーはしないぞ？」

「……え？（がーん！）」

「勘違いしないで欲しいのは Rosealiaにもマネージャーの件では断ってるんだ

ただ先生っていう形ならいくらでも教えることはできるよ？」

「」「」「よ、よかったー、」「」「」

「それでどうするの?」

みんなは頷きあつてこう答えた

「」「よろしくお願いします響也(さん)(きよーやくん)」「」

次の日Roseliaに説明すると修羅場になろうとはこの時の響也には知るよしもなかったのであつた

時は変わり今は月曜日の昼

俺は友希那とリサの3人で昼飯を食べてるところだつた

「それでその時の友希那がさあ」

「やめてリサ…恥ずかしいわ」

「それは気になりますなあ」

「響也もやめてちょ」「響也くん」

割り込んできたのは日菜さんだつた

「あ、日菜でいいよ、あと敬語もいらない」

だからなんで地の文を読める

「んで日菜急にどうした?」

「そうそう響也くんに頼みたいことがあつて！」

…この嫌な予感何回目だろう

「私のバンドも見えてほしいんだ!!」

…全く、次々に面白そうなことが舞い込んできやがる

俺は心の中でそう呟いた

第3話 アイドルバンド!? ああ… 儂い…

「響也くん、こっちこっち!」

「そんなに急がなくても着いてきてるっつての」

「どうも菅谷響也です、放課後になり、日菜に連れられて（強制連行）ます…

「ここが目的地だよ」

…芸能事務所? なんでもまた日菜が

「それはねーこのアイドルバンド、Pastel*Palettesに所属してるからだよ?」

だから地の文を読むんじゃない… へ?

「お前がアイドル!?!」

「へっへーん、すごいでしょー」

「全く知らなかった…」

「とりあえず中に入る?」

「わかった」

時は移り楽屋前に俺と日菜はいる

さつきパスパレのマネージャーさんにあつたが

『あ、君が日菜ちゃんの言つてた男の子ね

うちの子たちをよろしくね!』

：初対面に信頼を置いてくるあたりこの事務所は大丈夫なのかと少し心配になつてくる

ガチャ

「みんなお待ちせー!連れてきたよー」

入るとそこには少女が4人待つていた

「この人が前に話した響也くんだよ!」

そう言うとかクリーム色?の髪の子がこつちに近寄つてきて

「ふーん?あなたが日菜ちゃんの言つてた菅谷響也さん?

なんか聞いてたよりも普通の人みたいね」

おい日菜パスパレのメンバーに何言つたんだよ

「別に何も言つてないよー普通に紹介しただけ」

…だーかーらー、地の文をよ（ry

「私の名前は白鷺千聖です、以後お見知りおきを」

この人も結構ストイックな性格してそうだなあ

「それじゃ次は私だね！

…ふう」

何が始まるんだ？

あたりに緊張が走る

「まんまるお山に彩を！

パスパレのふわふわピンク担当、丸山彩でーす!!」

…シーン、

空気が固まったのかと思った

「まんまるおーいや聞こえてるから言い直さなくても大丈夫」

さすがにリピートさせるのは可哀想

「さすがは彩ちゃん、ブレないわよね」

「そうツスね、ジブンもそこは凄いなと思いますツス」

「もう二人ともくからかわないで〜」

白鷺さんと茶髪の子がひそひそ話をしてる所に丸山さんが割り込んでゆく…あの子

も結構アレなのかな…?」

「次はジブンスね、ジブンは大和麻弥っていいますツス

ドラム担当であとはそのほかの機材いじりもやってます」

大和さんね、結構真面目そうだな

「最後は私ですわね！」

私は若宮イヴといいます！キーボード担当です！

菅谷さんよろしくお願ひします！」

白髪の子がそう自己紹介してきた

若宮さんね、ふむふむ

「そしてあたしを含めたこの5人がアイドルバンド、Pastel*Palettes
だよ！」

「いかにも芸能人って感じの子達だよねみんな可愛いし」

「か、かわっ！…」

丸山さんが赤くなる

「彩ちゃん…どう考えてもお世辞よ？」

「ええ？そんなんですか？」

「いや普通に可愛いとは思ってるけどね」

「あ、ありがとうございます…」

さてとそろそろ本題に入るか

「おい日菜よ、バンドの演奏聞かせてくれるんじゃないかなかったっけ?」

「あ、そうだったみんな、今日はこの響也くんが演奏を評価してくれるんだよ」

「いやいやいや評価って、そこまでガチガチに見るわけじゃないよ」

「え? そうなの? てつきり Rose lia や a f t e r g l o w の子達みたいに感想言ってくれるのかと思ってた」

「いやそれはするけど」

「ひ、日菜ちゃん? 話についていけないわ」

今日は菅谷さんと会うだけじゃないの?」

「え? 言っただけじゃなかったっけ? このあと響也くんが演奏を披露するって」

「二二聞いてないよ! (わよ) (です) (っス) 二二」

おい日菜どういう事だよ、

「…どうする? またの機会にするか?」

別に今日だけじゃないし」

俺がそう提案すると

「いや、やります!」

菅谷さん今日はよろしくお願いします!」

「あ、彩ちゃん!」

「千聖ちゃんも更なる高みへ登りたいんでしょ？」

そしたら立ち止まってたらダメだよ」

「そうツスね、ジブンもやりたいツス」「私もやりたいです!」

「ね?千聖ちゃんも、」

「…そうね」

菅谷さん申し訳ないんですけど見ていただいてもいいですか?」

「もちろんです、そのために今日きたんで

でも俺の評価はちと厳しいですよ?」

そう言うと5人は

「「「はいっ!!」」」」

いい返事だ

しゅわしゅわこおりのくダイヤに…

今はスタジオで演奏を見せてもらってる

ふむふむ

「…ふう、いかがだったでしょうか？」

丸山さんがそう聞いてくる

さて

「どこら辺まで答えてほしい？」

「どこら辺とは？」

「君たちに優しい言葉をかけることはいくらでもできるって意味だよ」

「……」

みんな黙ってしまふ…しかし

「私は聞きたいです」

「『『『お願ひします』』』」

いい心がけだな

「んじやお言葉に甘えて飴と鞭を発動しますかね」

まずは目線を大和さんに向ける、

「大和さんはドラムを昔からやってきてるみたいですね、音から伝わってきました」

でも緊張からか少しテンポがズレてる部分もあったのでそこだけ直せば大丈夫かと」

「よ、よかったー、ホツとしたツス」

「次に若宮さん

少し荒削りな部分もありましたけど、基本はちゃんと出来ているので、あとは少し自分なりにアレンジを加えてもいいかも」

「はい！ありがとうございます！」

「次は日菜

お前に言いたいことはただ一つ、みんなのペースに合わせろ

天才なら容易いだろ？」

「やっぱり？わかったそれくらいならよーだよー！」

「次に白鷺さん

努力の賜物なのか基礎はしっかり出来てますね

しかしみんなの少しのミスで動揺してベースとしての役割が少し乱れてるところがあります

ベースはバンドの土台なんで崩れないようにそこを注意してください」

「ありがとうございます」

そして残った人物を見る、丸山さんは見てわかるほどに緊張していた

「最後は丸山さん

…努力家なんでしょうね、すごく努力のあとを感じられます

でも極端にありがり症なのか俺が注目してみるだけで音が外れたりリズムが少しズレ

たりしてます

まずは緊張をできるだけしないようにする所から始めないといけないかも」

「…そうですね」

みんなが少しだけ元気をなくす

「まあここまでがムチかな

ミスなんて人間誰にでもある、天才である日菜から凡人の丸山さんまで」

「凡人ってどういうことですかあ！」

っ!!

みんなが笑いを堪えている

「大事なのはミスをしない事じゃない、どれだけ少なく抑えられるかがかかっている

まあ要するにあんまり肩の力を入れんなよ? ってことね

俺からいえるのはそんなところかな?」

「「「「ありがとうございます!」」」」

そこには少し明るくなった5人がいた

「それでそれで? 響也くんは私達には演奏聞かせてくれるんじゃないの?」

「まあそう来るだろうと思ってたよ」

「ねえ？日菜ちゃん、菅谷さんてなんか楽器できるの？」

丸山さんが日菜に聞いている、まあ普通そう思うだろうな

「どの楽器が聞きたいのさ？」

「え？菅谷さん全部できるんツスか!？」

そしたドラムをお願いしたいツス」

「みんなはそれでいいか？」

「ええ」「はい」「うん」

「んじゃ大和さん、ドラム借りるわ」

……

「…ふう、まあこんな感じだ」

「す、」

「「「すごーい（です!）（ツス）」「」」」

「菅谷さんすごすぎるツス!フへへ…」

なんか大和さんがあつちの世界にトリップしてる…ってかアイドルが出しちやいけない笑い方してるよ

「さすが響也くん!るるるん!つてきたよ」

「よく分からんがありがとう」

「それじゃキーボードも引いてほしいです！」

若宮さんがそう提案してくる

「おっけ、んじゃ借りるわ」

……

「菅谷さんはスゴイです！サムライ！ブシドー！」

後半は全く何言ってるかわからなかった

「彩ちゃんこれは」「そうだね、頼むしかないね」

…また先生になっちまうフラグたてちまったかな？

「菅谷さん！私たちのコーチになつては頂けませんか？」

「…やっぱりか」

この際ふたつもみつつも変わらないか

「いよー！」

「ありがとうございます！」

「んじゃおれはこのへ」ガシッ

肩を掴まれていた

「響也くん？何か忘れてない？」

先生になつたからにはみんなのことを名前で呼ばないとね？」

逃走失敗した模様

振り向くとみんなの期待の眼差しが突き刺さる

もうどうにでもなつちまえ

「彩、千聖、イヴ、麻弥、日菜

これからもよろしくな！」

「[[[[「はい！（ツス）」]]]]」

なお Roselia のメンバーにこのことがバレて放課後、一方的な逃走中が行われたのは言うまでもない

理不尽だアアアア

「それは大変でしたねー、あ、これ焼きたてなんでおすすめですよ？」

「ありがとう沙綾、今はこのパンが癒しだよ」

「大袈裟ですね Roselia の人たちも優しいじゃないですか」

「…あの狂気の顔をして追いかけてくる姿を見ても同じことが言えるとは思えないな

…」

「なんかすいません…」

今俺は山吹ベーカーリーで買い物中だ

「しっかしここのパン上手いよなあ」

「お褒めに預かり光栄です」

そんな話をしていると入口が開いた

「ぎーやー！ いる？」

オレンジ髪の活発そうな子が入ってきた

「あれ？ はぐみじゃんどうしたの？」

「お腹すいたからパン買いに来たの！」

後でハロハピのみんなに持ってくやつ」

「そうなんだ、そしたら少しおまけしとくね」

「やったー、ありがとぎーや」

「あ、響也先輩、この子は北沢はぐみっていうんだ

この子もバンドやってるんだよね

はぐみ、この方は菅谷響也先輩、Roseliaとかパスパレ、アフグロに私たちポ

ピパの先生をしてってくれる人なの」

…おい？おれはまだポピパの先生になるとはいつてなくないか？

「そーなんだ！はぐみは北沢はぐみっていいいます」

バンド、ハローハッピーワールドでベースやってるんだ！よろしくね」

「(ちら)そよろしく」

…なんでだろ、一刻も早くこの空間から抜け出さないとまたひとつ掛け持ちが増えそうな気が

「そうだ菅谷先輩！このあと暇ですか？」

北沢さんよ、そのあとの言葉を紡がないでくれ、

「バンドの練習があるんですけど見に来てくれませんか？」

…ああおれの休日があ

「はい！着いたよ、(ここ)が(ここ)ろんの家」

まあ連行されましたよ…って

「いえ…でかくね？」

アニメでよく見る家の門から玄関までが見えないというとんでもない豪邸だった

ピンポン

『はい？どちら様でしょうか？』

「はぐみです！ あともう1人お客さんが来てます」

『はぐみ様ですね、少々お待ちください』

ガチャ：ギイイイ

自動で開く門：ワンダフォー

ブロロロロロ、キイイ

目の前に車が止まった：家の敷地内を車が走つてゐるのを初めて見たかもしれない
「お待たせ致しましたはぐみ様：とそちらの方は？」

中から黒服を着た女性がでてきた

「菅谷響也つていいいます、今日は北沢さんに誘われてハロハピの見学に来ました」

「なるほどはぐみ様のご友人でありましたか」

わたくしはここ弦巻家に使える者でございませう

「ご案内しますのでどうぞお乗り下さい」

あ、これベ○ツや

「へえーあなた菅谷響也つていうのね、はじめましてあたしは弦巻こころ、気軽にこころつてよんでね！」

金髪の子が自己紹介してくる：典型的なお嬢様だな

「あぁなんて夢いんだろう、子猫ちゃん
名乗らせてもらってもいいかい？」

私は薫、瀬田薫っていうんだ、

ハローハッピーワールドでギターを担当しているよ

よろしく頼むよ」

紫の髪の人がそう言う

「あ、あぁよろしく」

こいつと関わったら危険な匂いがプンプンする…

「わ、私は松原花音、ドラムをしています

よ、よろしくお願いします」

水色の髪の子がそう話す

あ、あぁこの子は癒しだ

「すいませんうちの3バカたちがご迷惑をおかけして」

「いえいえ大丈夫…!?!」

ピンクのクママ?え?

「あーこれ着てるから分らないですよね…よいしょっと」

中から黒髪の女の子が出てきた

「私は奥沢美咲っていいいます、ハロハピでDJを遣ってます…これ着て…
…なんというか

「君も苦勞してるんだね」

「わかっただけで嬉しいです」

かのん! ミッシェルがいなくなったわ! どこにいったの? ああ儂い…

「あのー? あれは」

「気にしなくてもいいですよ、ミッシェル||私って気づいてないんで」

…なんか2人を除いてやばいバンドだな

「それで響也があたし達の演奏に感想を言ってくれるのよね?」

もう慣れた早速の名前呼び

「そのつもりなんだけどダメだった?」

「いいえ! 今すぐ準備するわね!」

とんとん

「失礼します響也様、こちらの椅子をお使ください」

気配が全く感じられなかった、忍者かよ

「は、はぁありがとうございます」

「響也用意出来たわよ!」

「おっけーいつでもどうぞ」

「それじゃいくわよ！」

せかいのつびのびトレジャー！」

なんとというか自然と笑顔になる曲調と歌詞だな

「響也！どうだったかしら？」

「いやーいいものを聞かせてもらったよ

ちゃんとバンドの進むべき方向性も掴んでるみたいだし文句のつけ所がないな」

そう言うときみんな笑顔になり

「当然よ、私は弦巻こころよ？」

弦巻さんは得意げにそう言った

さーて今回もやってまいりましたこの空間から抜けだせ

司会はわたく

「…さつきからなにぶつぶつ喋ってるんですか？」

奥沢さんにジト目で見られた

「い。いやなんでもないよ」

「あ！そう言えばさーやからさつき聞いたんだけど響也先輩楽器上手みたいだよ！」

…終わった…きよなら俺の静かな休日

「それはぜひ聞かせて欲しいものだね」

「…でもキーボード担当がいらないからピアノなくね？」

「そうね、ピアノが欲しいわ」

ドタバタ、ガタガタ、……シーン

コンコン、ガチャ

「失礼しますこころ様、ピアノの準備が出来ました」

……は!?

「あら？ありがとうございます」

響也お願いでできるかしら？」

…この家は侮れないな

「かしこまりました、お嬢様」

「すごいわ響也！」

「なんて素敵な音色なのだろうか…ああ夢い」

「響也先輩すごいですね！」

「す、すごい」

「へえー」

まあそうなるよなあ

そしてこの後の結末も手に取るようにわかる

「響也、お願いがあるのだけど」

ほいフラグ回収

「私たちに指導を付けてはくれないかしら」

「いいよ」

「ありがと！響也」

さて今回は誰が名前呼び&タメ語を申請してくるのか

「あのー菅谷先輩に折り入ってご相談が」

まさかの奥沢さんでした

「さすがに先生ともなると敬語とかはおかしいかなあと」

わかつてましたよ

「美咲、これでいいのか？」

「っ！それで大丈夫です」

「ねえねえ響也あたしは苗字のままなの？」

「こころ、これからよろしく」

「ええ！」

「薫に、花音、はぐみもよろしくな」

「ああ、よろしく」「よ、よろしくね」「よろしく！」

はあ…このあとの鬼ごっこが楽しみだなあ（泣）

時が移り次の土曜日

俺は駅前の広場で人を待っている

おおーい響也ー

来たみたいだ

「はあ…はあ…ごめん待ったでしよ？」

「いやさつき来たところだよ」

「…はあ…リサ、置いてかないで欲しいわ」

「リサ姉速すぎ…」

「今井さん…少しはみんなのことも考えて…はあ」

「はあ…はあ…」

「いやあごめんねなんか響也のこと見つけたらいてもたってもいられなくてね」
「まあ嬉しいけどほどほどにな」

「こんな感じに集まったのにはすこしありまして…」

「響也はアタシ達と他のバンド、どつちの時間が大事なの!!」

ハロハピの件の後、壮絶な鬼ごつこの末公園で取り押さえられ皆に囲まれてる中俺は
正座である…理不尽

「そりゃみんな可愛い教え子で…」

「響也さんがそんな人だとは…見損ないました」

紗夜が冷たい目でこつちを見てくる

「響也、私たちじゃダメなの?」

友希那…そんな目で見つめないでくれ、

「響也くん…あこ達のこと嫌いになったの?」

……

「…響也くん…」

多分間違つてるとは思うけどこれしか方法ないな

「今週の土曜何故か朝から予定空いてて暇なんだよなあ…誰か俺と出かけてくれないか

なあ…ちらっつ」

ビクッ

「「「それなら私が（アタシ）（あこ）」「」」」

5人が一斉に声を上げ5人が一斉にお互いを睨み合う

おいおい冗談じゃねえぞ！

「あれ？友希那土曜日用事あるんじゃないやなかったっけ？

ほっっておいて大丈夫？」

「そういう今井さんこそバイトなのではなくて？」

「…氷川さんこそ妹さんと出かけるんじゃないやなかったんですか？」

「りんりんこそ新しいゲーム朝からやるって言ってたじゃん」

「そう言うあここそお姉さんとでかけるんじゃないやなかったの？」

実際にはないはずなのに睨み合いだけで火花が飛び散ってるように見える…恐ろし

い

「ち、ちよつとみんなおちつ」

「「「響也（さん）（くん）はすこし黙ってて」「」」」

こわいこわい

あーだこーだそーだ

……

あーだこーだそーだ

……ブチッ!!

「…しいずうまあれえええ!!」

ピタッ

「き、響也どうか」

「…とりあえずしずまろうか?」

「…は、はい」

「…とりあえずひとつ言いたいのがなんでみんなで行ってはいけないの?」

…なんかみんなの目が一気に冷たくなった気がした

え?なんかだめだった?

「…響也(さん)(くん)の鈍感!」

「…(めん)」

なんか怒られてしまった

「はあ…まあ仕方ないですね、ここはひとつみんなで行くことにしましょうか?」

「そうね、言い争ってても時間の無駄だわ」

「というわけで皆さんいいですね?」

「「はーい」」

「あ、響也、行く場所はアタシ達で考えとくからそう悩まなくていいからね」

「あ、ああ」

「それじゃ解散しよっか？」

ということがあります。今に至っています。

「響也さん何ブツブツと喋ってるんですか？ 気持ち悪いですよ？」

「紗夜、辛辣だな…」

「それより早く行かないと電車出ちやうんじやないでしょうか？」

燐子に言われて時計を見た俺たち… おいおい

「結構ギリギリじゃねえか、みんな走るぞ」

「ええーまだはしるのー!？」

「「「待つてよ」響也(さん)(くん)!!!」」

今日も一日、ドタバタした1日になりそうな気がした

第4話 大波乱!?!服選びは甘い罠、

俺たちは町で一番大きなショッピングモールに来ていた

「うわあー大きいー」

あこが目を輝かせてそう叫ぶ

「あ、あこちゃん…目立っちゃってるよ?」

通行人が好奇の目であこを見ている、

多分だけどきつと小学生低く中学年の子を見るような眼差しだろう

「宇田川さん!…ここは一般の方もいますのであまりはしゃぐと迷惑ですよ!」

紗夜があこを叱る…なんか妹を怒る姉みたいにしが見えない

…ああー日菜があれだから仕方ないのか

「はあーい…ごめんなさい」

「まあまあ、紗夜もそうカッカするなよ?」

せつかくのデートが台無しになっちまう」

俺がそう茶化しながら言うと

「そ、…そうですね、

……デート…」

顔を赤くしながら目を伏せてしまった

思ってた反応と違うから少しハテナが浮かぶ

「と、とりあえずはやく入ろっか？」

注目浴びるのもなんか嫌だしね」

リサの言葉に俺たちは頷いた

「んで、まずはどこに行くの?」

俺の純粹な問いにみんなは悩み始める

「まだお昼には早いですからね、どうしましょうか」

「とりあえず案内板見て決めようか」

近くにあった案内板に歩く

「何々…靴屋に薬局、服屋、食品売り場に映画館まであるのか…すごいな」

「あこ映画みたいな!」

「あこちゃん…それはまた今度の方がいいんじゃないかな…？」
「そっか…残念」

燐子ナイスだ

「あとはペットシヨ」

「そこにしましよう」

はええよ！まだ言い終わってないだろ

そこには目を輝かせた友希那と紗夜がいた

「…リサ達はそれでもいいか？」

「ま、まあいいんじゃない？」

少し苦笑いしながら答えるリサ

「私も大丈夫」「あこも！」

よしならば

「とりあえずペットシヨップに行こうか？」

俺たちは歩き始めた

「あらー可愛い子でちゅねーお腹すいたんでちゅか？」

…触れ合い可のペットシヨップだったため俺たちはそれぞれの動物に触らせても

らっていたのだが

「…何あの変わりよう」

俺の少し引きながらの問いにリサが答える

「友希那って昔から猫見つけるとあなるんだよね

アタシでもまだ慣れない…」

にやーんにやんにやーん

いやあれは友希那じゃない認めんぞ俺は

「湊さんにもああいう面があるとわかっただけでも私は嬉しいですけどね」

…いや紗夜よ、チワワ抱えながらニヤニヤしてるおまえが言っても違うぞ？

「かわいいーねえねえりりーん、ハムスターってどうやって飼うの?」

「あこちゃん…私もわからない」

「おいあこ、とりあえず家族に相談してから飼えよ?」

「…わかつてるもん」

少し拗ねたあこが可愛かった

くうー

ん?お腹の音か、もうそろ昼だもんな

誰が鳴らしたのかと思ってみんなの方を見ると

私は何も知りませんよ風を装っている紗夜がいた

「紗夜、そろそろ飯に行くか？」

「わ、私はそこまでお「くうー」…はい」

「みんなも飯にしようぜ」

「「はい」「わ、私はもうちよつと」

友希那だけが名残惜しそうにしていた

「んじゃ友希那だけ置いてみんなで飯だな」

そう言つてみんなを連れて歩き出す俺

そうすると後ろから

「いや待つてちょうだい、私も行くからあー」

まあそうなるよな

フードコートについた俺たち

…いやー休日の昼ということもあつて人がいっぱいいるなあ
とりあえずなんとか空いてた席を確保することには成功した

「俺座つてるからみんなで何あるか見てこいよ」

「ほんとに？じゃあ響也ゴメンだけど行つてくるね」

5人が歩いていった

ふと携帯が気になり取り出ししてみる…って

「通知が400!?!…誰が一体」

香澄：先輩暇ですか？また練習見に来てほしいんですけど…

蘭：響也、暇でしょ？

彩：響也くん、暇ですか？みんなでお出かけしようと思ってるんですけどどうですか

？

「こころ：響也、あたしの家でバーベキューするんだけどどう？」

E t c e t c ……

俺は無言で電源を落とした

何も見てない見えてない

「響也、何かあったの？」

「うお…もう決まったの？」

5人が帰ってきていた

「ええ、私たちが戻って来ると頭抱えてる響也さんがいたので不思議に思っ

「…何も無い、気にしなくてもいいよ？」

「そうですか、それならいいのですが」

「てか早く響也も決めてきたら？」

「そうだな、ちよつと行つてくるわ」

俺はぱつと目に入つたラーメンにした

昼飯を終えまた歩き始めてる俺たち

え？ 昼飯の描写？

：紗夜の大量のポテトを見てツツコんだくらいだったよ

「次どこに行くの？」

「アタシ服みたい」

リサが提案する

「異論はないわ」「私も」「わたしも」「あこも」

それぞれが肯定する

「そしたら服屋に行くか」

俺たちは歩みを進めた

「へえー最近の服ってこんなのあるんだ？」

服を見て驚く俺

「響也ってあまり服に興味無さそうだしね」

「そういうリサは服にしか興味無さそうだよな」

「流石に他にも興味あるよ！」

すこしムスツとした顔で怒るリサ

「ごめんごめん」

「まあいいけどさ」

あ、そうだ、響也アタシの服選んでよ」

…は？

「いやいやいや俺なんてファッションセンスの一欠片もない男だぞ？」

「大丈夫大丈夫選んでもらう事に意味があるからセンスはどうでもいいよ」

…うーむ

「まあそれならいいんだが」

「ほんとに？やったね」

うーんそしたらえーと

「リサは普段少し派手な印象があるから落ち着いた雰囲気こういうワンピースとかどうだろ？」

「確かにアタシだけだと選ばないけどどうしてこれを？」

「いや単純にこれ着てるリサが見たくなかったから」
「そ、そう？そしたら着てくる」

すごいスピードで試着室に入っていったリサ

そんなにワンピース着たかったのかな

数分後

「…どうかな？」

そこには街を歩けば振り返りそうな美人がいた

「…すげえ似合ってるむしろなんで普段着ないのか意外な程に」

そう言うど頬を染めながら

「あ、ありがとう」

しおらしくなってるリサがいた、なんか新鮮だな

「と、とりあえず着替えるからあっちいっておいて！」

「お、おう」

「いやーいい買い物したなあ」

「いいのか？俺なんかが選んだやつ買って」

「アタシが気に入ったんだからいいの！」

…響也が選んでくれたし」

後半が聞き取れなかった

「リサ遅かったのね、響也も」

早々と店を出ていた4人に合流する

「いやあーごめんごめん」

「リサ姉何買ったの?」

「んーとねワンピース、響也に選んでもらったんだー」

ピシッ…:空気が凍った気がした

恐る恐る紗夜が口を開く

「今井さん、聞き間違えだったらいいのですけど…:今響也さんが服を選んだと言いました?」

「え?そう言ったよ?…:あつーやば!」

慌てて口を抑えるリサ…:もう遅いよ

禍々しいオーラ4人分を背に俺は1人逃走を図ろうとする

ガシッ…:肩を掴まれた…:もうダメだあおしまいだあ

「響也さん?少しお話しいいかしら?」 「響也説明してちょうだい?」 「響也くん?」 「響也くん、あこにもわかるようにね」

目から光が失われた状態でこちらを見る4人の悪魔がそこにはいた…

あれから30分後、全員の服を選ぶことを条件になんとか解放してもらった俺生きてきた中で1番の恐怖体験だった

店員さんにあれ？また来たの？って言う目で見られながらの再入店

「はあ…まずは誰から？」

そう言うときみんが顔を見合わせ

「「「さいしよはぐー、じゃんけんぽん」」」

……

順番が友希那、あこ、紗夜、燐子の順になった

「それじゃ友希那のやつを選ぶとするか」

「え、ええ…頼むわ」

友希那の見てみたい服は

「普段大人びた服しか来てなさそうだから思い切ってこういうのは？」

持って見せたのはパーカーにハーフパンツといったなかなか元氣っ子が来そうな服だった

「私が…これを？」

「そうそうそういう服を着た友希那も見てみたくて」

「…そう、わかったわ」

「あ、そうそう友希那出来れば髪後ろで縛って来てくれると嬉しい」

少し微妙な顔をしながら頷くと試着室に入っていった友希那

さて楽しみだな

数分後

「ど、どうかしら…?」

「…お持ち帰りで」

「…いや、そんな困るわ、

まだ付き合ってもいないのに」

後半がき（ry

4方向から来る殺気には気付かない振りをしてながら俺は感想を言う

「やっぱりこういう服も似合うなあ、ポニテもより一層可愛くしてるし」

「か、かわ!？」

あ、ありがとう」

頬を染めて目を背けてしまった

「ねえねえ響也くん、次はあこの番だよ?まだあ?」

「ごめんごめん、友希那のやつはそれでいいかい？」

「え、ええ、買ってくるわ」

「さて次はあこと」

あこと紗夜の服を無事選び終わって残すは燐子だけになった
燐子にも服を選び着替えてもらってる

「ど、どうかな？」

…っ!!

悲しいのが男の性、俺はとある一部分に目が釘付けになってしまった
燐子って着痩せするタイプだったんだな

ブルっ…寒気がいや違う殺気が

「……響也？どこ見てるの？」

「いやどこも見てないよ？」

「そう？それならいいけど」

何とかごまかせたかな

「りんりんよく似合ってるよ」

「あこちゃんありがとう」

おれも感想言わなくちや

「燐子良く似合ってるぞ、すごく可愛い」

「っ!!…あ、ありがとう嬉しいよ」

燐子に近づくあこ

「ねえねえこの服この部分どうなってるの?」

「あ、あこちゃんそこは触ったら」

「パサツ……へ?何が起こったのか処理が追いついていない

あこが燐子の着ている服を触ってたらその部分が外れて上半身の肌色とそれを隠す
下着の白色が目の前に広がっていた

「ぎ、ぎやあああああ」

しやがみながら服で隠す燐子

しかし頭の中にしつかり焼き付いてしまった

そのまま動けないでいると肩を掴まれた…

「…響也なにじつくり見てるの?」「響也さん、この世に言い残すことはありませんか?」

「響也…わかってるわよね?」「響也くんサイテー」

…拝啓妹よ、俺はもう終わりみたいだ

俺の目には4人の鋭い拳が映っていた

ボコドカバキ…

「…もうお嫁にいけない」

「りんりん、大丈夫？」

「白金さん、もしあれでしたらもうすこし反省させますが？」

「響也もすぐに顔をそむけたらここまではならなかったのにねえ」

「響也の変態」

正座させられて各々に罵られていた

「ごめん燐子…」

「責任とつてくれますか？」

「俺に出来ることならなんでもするよ」

「ん？今なんでもするって？」

あこよスラング言ってるわけじゃないよ

「そうしたら、私をお嫁にして貰えますか？」

「ああそれく…は？」

「「「はあ？」」」」

「ふふ、冗談ですよ」

「だ、だよな」

「そうしたらジュース奢ってくださいそれでいいですよ」

「それならお安い御用だよ」

「ああー楽しかったね」

夕方になりショッピングモールをあとにした俺たち

帰路途中でリサがそう言った

「そうだな…色々あったけど」

「あこまた来たいな」

「また今度な」

「遊びの事ばかりではダメですよ？」

「紗夜さんわかってますよー」

会話を聞きながら歩く

…あれ？

ふと疑問に思った俺は問をぶつける

「あれ？転校して来たからあまり知らないけどテストっていつから？」

リサが答える

「多分だけど再来週じゃないかな？」

「再来週かあ…お前ら勉強大丈夫なのか？」

「私は平気ですよ」「私も大丈夫…かな」

紗夜と燐子が言う…あれ？おかしいなあと3人足りないぞ？

「友希那とリサとあこよ…お前らは？」

「…私は大丈夫だわ」

嘘つけ目が泳いでるぞ

「アタシは出来るよ？ホントだって」

いや目をそらして言っても説得力ねえぞ？

「あこも大丈夫だよ？」

あこ？体震えてるぞ？

「これから放課後は練習お休みにして勉強会かな？赤点とかシヤレにならんし」

「そういう響也さんは勉強できるの？」

「…知りたい？」

「いえやめとききます、ニヤニヤしてるといふことは悪いことはありませんからね」

まあその方がいいよ

「そしたらみんなで響也の家で勉強会にしようか？月曜から」

「「「いいわね（ですね）」」」

…いやいやいや

「俺に断りなく何勝手に決めてんのさ、」

5人は集まって話し合っている、

なにか決めたのか離れたあとあこが近づいてきた

「ねえ響也くん…おねがぁい！」

「ぐはぁ…：…し、しようがないな」

上目遣いで潤ませながら言われたら断れない

決して口

「響也のロリコン」

「リサやめてくれ違うから」

リサに社会的に殺されそうになった

時は移り今は放課後、俺の家での勉強会が行われていた

「ねー響也、ここわかんないんだけど」

「あーそこはこの公式を使わないと解けないぞ？」

「ありがとうやってみるわ」

「響也くんここわかんない」

「ここは誰と誰が戦った戦なのかっていう部分を頭に起きながらもう1回問題文読ん
み?」

「わかったー」

「響也、この部分」

「そこは主人公がなんでそういうことをしだしたのかっていうのを問題文から探して
み?書いてあるから」

「ありがとう」

俺は不安要素の3人の先生をしていた

「響也さん、ほんとに勉強できるのですね」

教え方が的確なので」

「紗夜疑ってたな?まあ出来ても自慢にはならんから言っただけだよ」

「響也くんちなみにどれくらい頭いいの?」

あこが聞いてくる

「うーん自慢したくないから本当は言いたくはないけど」

……全国模試で1番になったことはあるよ」

「……い、いちばんんん?!」

「そんなに頭良かったとは響也、一体何者？」

「天は二物も三物も与えるのですね……」

「大したことじゃねえって、あんまり勉強したこともないし」

「しかもまさかの天才タイプ、：響也がますます遠い人間に感じるよ」

「そんなことないって」

「でも出来ないアタシ達からしたらそうなるよ？」

「あれじゃない？みんなもなんか目標というかご褒美とかあったら勉強出来るようになるんじゃない？」

「例えばどのような？」

「そうだなあ：例えばテストでいい点とったら少し高めのコンビニスイーツ買ってみたい、どっか出かけてもいいだろうし」

そうすると紗夜が唸ったあとこう口にする

「したら響也さんからご褒美を頂くのもありと？」

「ま、まあ俺ができることであればご褒美として扱っても」

「そうだなあそしたら次のテストで点数が全教科上がったやつには俺からご褒美出そうかな」

「……ホント？（ですか）……」

「響也、前言撤回とかナシだからね」

「響也に何してもらおうかしら」

「りんりん頑張ろうね」

「うん、」

「響也さんのご褒美…」

みんなの目に激しい炎が宿った

そんなにみんなご褒美が欲しかったのか

それから毎日テストまでのあいだ濃密な勉強をしたRoseliaだった

「結果はみんなかなり成績上がったか」

みんな点数を爆上げてきた

まああれだけみっちり勉強して上がらない方が不思議だけど

俺？聞かない方がいいよ？

「みんなに何頼まれるのかな」

一人一つ好きなこと頼める様にはしたけどなんか怖いな」

…まあ退屈はしないだろうし俺的には悪くないかもな

俺はそう眩きながら青空を眺めていた

第5話 前へススメ!

びびびび…びびびび…び、

カチツ

「……………ふあああ、

…目覚まし消すの忘れてた、はあ…」

土曜日なのに普通に学校の時間で起きちゃった…なんか損した気分だな、

「まあ、いいか2度寝すればいい話だし」

それでは皆さん、おやす「ピロン」

…誰だ?こんな朝早くに連絡取ろうとしてくるやつ

スマホの画面を見るとそこには香澄からの通知が

「なにになに?…」

『響也先輩!今日は休暇ですか?』

有咲ん家で練習する予定なのですが先輩に見てもらいたくて

お返事待ってます』

…朝から元気だなあ、今日はつと…他のバンドはみんな練習お休みだから大丈夫か、なら行ってやってもいいかな

「えつと…『行けるから何時かだけ教えてくれ』と」

ピロン

早いな流石女子高生

『ありがとうございます！』

一応11時からの予定です、10時半くらいに迎えに行きますね』

…え？あいつ俺ん家知ってるのか？

まあ来なかったら直接的行けばいいか

とりあえず俺はもう少しだけ寝ることにした

…ん…い、響…先…！響也先輩！！

「…ん？長いこと寝ちまつてたか…つて香澄!？」

そこには香澄がいた

「あ！先輩やつと起きた！おはようございます」

「お、おはよう…じゃなくてどうしてここに？」

「あれ? 迎えに来るって言ってませんでしたっけ?」

「いや言ってたけどなんで家知ってるの?」

「あ! それはです 「コンコン」」

お兄ちゃん入るよー

ガチャ

「お兄ちゃん2度寝して寝坊は笑えないね、ね? 香澄」

「ねえーしーか!」

「…お前ら知り合いだったの?」

俺の問いに少しだけ呆れながら詩歌が答える

「知り合いも何も同じクラスだよ?」

そいえば花咲川だったなこいつら

「なるほどだから家知ってたのか香澄は」

「そういうことです!」

それなら納得がいくな

「お兄ちゃん…喋ってるのはいいけど時間大丈夫? 集合11時じゃなかったっけ?」

詩歌の恐ろしい発言で我に返り慌てて時計を見る

「おいおい…もう10時55分じゃねえか…」

「響也先輩!…有咲に怒られる時は一緒だよ?」

…行きたくねえ、俺は心底思ってしまった

「おい!おせえぞ、今何時だと思ってるんだ?香澄い」

仁王立ちした般若がそこにいた

「ごめん有咲、ちよつといろいろあつて」

「響也先輩も響也先輩ですよ!香澄をちゃんとコントロールしてくれないと」

「ちよつと待つて?有咲、私ラジコンかなにかなのかな…?」

香澄が少し落ち込む…ズーンっていう効果音が聞こえるみたいだ

「まあまあ有咲、響也先輩に会いたかったっていうのはわかるけどそろそろ許してあげたら?」

沙綾がいう

「ばっ!?!ちげーよそんなんじゃねえーし」

「ふふ、有咲つてば反応わかりやすすぎ」

「うぜえー」

有咲はツンデレと

「…有咲はツンデレと」

「おい！おたえ今なんて言った？」

同じ考えの奴がいたようだ

ん？一人足りないって？りみならそこで

「チヨココロネおいひくい」

って顔を綻ばせてるよ

「てゆーか練習しなくていいのか？」

「そうですね、

ほらみんなやらないと時間無くなるよ？

有咲も落ち着いて」

「…わかつてるよ」

触らぬ鬼に祟なしつと

「有咲は鬼じゃないよ？」

おい！おたえ一番読んではいけない地の文を読みや

「響也先輩？私と少し向こうでお・は・な・し、しましょうか？」

後ろを振り向くと笑みを貼り付けた有咲がそこにいた

有咲と有意義なお話しをした俺はそのあとの練習を見学していた

「よし、一旦休憩しよっか？」

「だいぶうまくなつたんじゃないかみんな？」

前と比べて良くなつてるよ」

「本当ですか？ やったねありさー」

「おい香澄くつつくなあ！ 暑苦しい、はーなーれーろー」

「ねえみんな」

声の方を見ると沙綾が大きな紙袋をもつてきた

「お昼にみんなまで食べようと思つてうちのパン持つてきたんだけ」

「私メロンパン」

「…おたえ早すぎ（笑）」

「やったー私何にしようかなあ」

「わ、私はチヨココロネがいいなあ」

りみよ…さつきも食つてなかつたか？

「チヨココロネおいひくい!!」

てかもう食べてるよ

「先輩はどれにします？」

「あ、俺はクロワッサンで」

「分かりました!」

あ、クロワツサンやっぱり一番うまい

「ほら沙綾テンポ遅れてきてるよー疲れてきた?

りみも力強さ無くなってきたよー、

…おたえはこつちばかり見なくていいから、

有咲と香澄はいいかんじだね」

「「「はい!」」」

少しばかり厳しめには見てるが本当に実力が着いてきてるな

特に香澄の成長が著しい

そのうち *Rose lia* にも引けを取らないバンドになりそう

「お疲れ様今日はこの辺で終わろうか?」

「「「はあくつかれたあ〜」」」

まあこれだけぶつ通して疲れない方がおかしいからな

「んじや俺は帰ろうかな」

「「「ありがとうございました!」」」

俺は手を振り蔵から出ようとする

ガチャ

ザアー

「うわ、雨降ってるし」

「え？本当ですか？…うわあすごい雨

天気予報では一日中晴れるはずだったのに」

「とりあえずみんな私の部屋で雨宿りしていけば？」

俺たちは有咲の言葉に甘えることにした

「なかなか雨止まないね」

「今日一日降ってるかもね」

「もういつその事泊まっていけば？」

「「そうさせてもらおう」「」」

なんかどんどん話が進んでいる

女子高生ってこんなものなの？

「先輩ももちろん泊まっていきますよね？」

「え？いや、俺はち「泊まりますよね？」はい泊まらせていただきます」

おー怖い怖い

「おーい風呂湧いたぞー」

「やったあ誰から入る?」

「誰からでもいいんじやない?」

「んじやんけんけんで決めよー」

「じゃんけんぽん!!」

はあゝ

「なんか俺が一番風呂とか申し訳ないな」

「しっかし急に泊まることにな『ねえ有咲早く早く』『うつせえーさわんな』

「脱衣所がなにか騒がしい、そしてなぜだろとてつもなく嫌な予感が…」

ガチャ、

「おつ邪魔しまーす」「やっぱり有咲ちゃん家のお風呂大きいねー」「ほら有咲、恥ずかしがってちや始まらないよ?」「わ、わかってるよ」「やっほー響也先輩」

「そこには楽園が広がっていた…って

「お前らなんでも入ってきてんだよ!?!」

「なんでつてお風呂に入るためだよ?」

香澄が首を傾げて言う

「いや普通男女が一緒に風呂なんてもし何かがあつたら」

「何かつてなに？」

沙綾がニヤニヤしながら聞いてくる

こいつわかつてやつてるな

「俺は出るからな」

俺は立ち上がろうとする

「出ようとしたら叫びますよ？」

おたえがニコニコしながら言ってきた

「ほら大人しく浸かつててください私たち入れないですから」

「…お前ら後で覚えておけよ」

…生き地獄だ

え？どこつて？風呂だよ風呂、それも美少女5人に囲まれてのな

下手に考えてはダメだ平常心平常心

ギョッ

「先輩！考え事ですか？」

「おい香澄なんで抱きついて」

ギユッ

「先輩、鼻の下伸びてますよー？」

「先輩のエツチ」

「沙綾とおたえまでなににして」

ギユッ

「か、勘違いすんなよ、みんながやってるからノリでやってるだけだかな」

「りみ、おまえだけが頼りだ」

俺はりみに助けの視線を向ける

ニコッ

「私もー」

ギユッ

あ、…終わった…

俺は意識を手放すのであった

先輩？起きてください

「…んっ？…あれ俺どうなったんだっけ？」

俺は起き上がろうとする…あれ？

「なんで手錠が？」

俺はベッドに手錠で拘束されていた

「あ！先輩起きましたか！」

そこにはポピパのみんがいた

「おい！この手錠はなんだよ？なんで俺拘束されてんの？」

「あーそれはですね」

フツ

「…先輩が逃げ出さないようにするために決まってるじゃないですか」

ゾクッ

「おい、…冗談だよな？」

「…私たち我慢してたんですよ、いつも先輩は女の子と一緒

ある日は友希那先輩達、ある日はこころ達

もううんざりなんですよ

そこで私たちは考えたんです

………先輩を閉じ込めてしまえば私たちだけのものになると

ね? 頭いいですよね?」

何を言ってるんだこいつは

「いいからこれ外してくれよ」

「ダメですよ? 何言ってるんですか? あ、まさか他のバンドの所に行こうとしてますね? 許さないですよ? 先輩は私たちだけのものなんですから、どうして私たちを拒むんですか? こんなにも愛しているのに、あ、そっか私たち以外にも見えちゃう目なんて

ナクシテシマエバイインダ」

「おい香澄なにいつて、…って沙綾とおたえとりみは何してる、はなせつて

有咲それ剪定用のハサミだよな? 人に向けるやつじゃないよな? なにこつちに向けて、つてやめろおい…」

う、うわああああ

「うわあ…はあ…はあ…ここは?」

「あ! 先輩ようやく気がついた」

「ひっ！」

「どうしたんですか怯えて？」

「やめてくれ殺さな…あれ？」

手錠がない？

「あれ？手錠は？ハサミは？」

そう言おうとみんな笑った

「先輩頭打って気を失ってたんですよ、

多分その時に悪い夢でも見たんじゃないですか？」

「んじやお風呂は？」

「お風呂は順番に入ったじゃないですか

先輩ほんとに大丈夫？」

「…いや夢でも見てたらしい

気にしないでいいよ」

「分かりました

ほら有咲も良かったね先輩起きて」

「っ！なんで私に振るんだよ!？」

「だって有咲気を失っている先輩の手「わーわー！なんでもないからな響也！」」

「あれ?有咲ちゃんいま先輩のこと呼び捨てで」

「い、いやああああ」

部屋を出ていつてしまった

でも夢でよかったなああ妙にリアルだったけど

そのあと俺たちは夜まで騒ぎ就寝した

ふふふふ…響也先輩…ツギハニガシマセンヨ?

ちゅんちゅん

「ふあああ、朝か…っ!」

横を見た俺は絶句した、鼻が触れ合うくらいの距離におたえの寝顔があったからだ
驚いた俺は後ろに焦って振り返る

「せんぱい、もう食べられないですよ」

りみの顔があった

「…夢だよな…もう1回寝直そう」

「夢じゃねえよ?」

足元から声がしたので目を向けると

「私たち響也のそばにいたくて潜り込んだから」

「有咲起きてたのか…って今なんて？」

「…んやなんでもない、二度寝するならすれば？どうせ日曜だし」

「…そうさせてもらうよ」

ピロン

「…ん？もう11時かよく寝たつと」

誰からだろ…紗夜？」

『響也さん今日は11時から練習を見てくれる約束でしたけどどうなさいましたか？』

まさか忘れてるとかそういう訳ではありませんよね？

とりあえず見たら連絡ください』

…サア

全身の血が引けたきがした

とりあえずフルスロットルで用意をして向かう準備をする

出る前にポピパのメンバーに一言言わなければ

「どうしたんですか？慌てて」

「ナイスタイミング沙綾、Roseliaの練習のことすっかり忘れてていまから謝り倒しに行くんだよね…」

だからみんなに伝えておいてくれない？」

「それは災難ですね…」

わかりましたではまた」

「ごめんな」

俺は走り出す…歌姫御一行に土下座するため

第6話 パステルカラータイム

「響也くん！お願い事があるんだけどー！」

「お断りします」

学校に着くなり日菜がいきなり頼み事をしてきやがった

こいつに絡むと面倒なことになるし丁重にお断りさせて頂くことにする
「普通何も聞かずに断わる!?!しかもあたし面倒じゃないし

でもそういう所にはるん！てくるなー」

「るんがよくわからない俺にとってはその頼み事が恐怖でしかないんだよね…」

「むー、結構真面目な頼み事なのに」

「はいはい、では内容だけでも聞きましょうか？日菜お嬢様？」

そう言うと日菜はぱあーつと笑顔になり

「さすが響也くん！

あのね一日でいいから私たちのマネージャーをして欲しいんだよね」

「マナージャーって前に断わったじゃねえか？」

そう言うとき日菜は首を振りながら

「違う違う、本当のマナージャー業を一日だけ代行して欲しいんだよねー」

「はあ!?! そういうのって専門職の人がやるんじゃないのか？」

「そうなんだけどさー全員体調不良でばたばた倒れてね、知り合いでいい人探してきてって言われたからみんなて話し合ったら満場一致で響也くんになったのさ」

「いやなんでそこで俺なんだよ…」

「え? だって響也くんだもん」

「いや答えになってないしそれ…はあ

仕方ねえな、一日だけだぞ」

そう言うとき日菜は笑顔になり

「さっすが響也くんわかってるー」

急なんだけど明日の土曜日、お願いね!」

ほんとに急だな

「わかった、何時？」

「8時には事務所に来てほしいって言ってたよ」

「了解」

さて日が変わり次の日の朝7時半、俺は30分早く事務所に着いていた

受け付けの前で待つとけとの事だったので待っているとお奥の方から小走り近づいてくる水色の髪がいた

「おはよー！響也くん、今日はよろしくね！」

「おはよう、日菜は朝から元気だよなあ」

「やっぱり元気がないとるん！てこないじゃん？」

「わからんがまあそうなんだろうな」

「んで？俺はどうすればいいんだ？」

「あ、そうだった、とりあえず楽屋まで来てくれる？」

もう皆集まつてるから」

「了解、いこうぜ」

コンコン、『はいどうぞ』

ガチャ

「失礼します」「ただいまー！響也くん連れてきたよー」

「おかえり日菜ちゃん

それと響也さん、今日はごめんなさい」

「大丈夫、どうせ暇だったし」

すると皆は安心したのか顔を綻ばせていた

「そう言えば俺は今日何すればいいんだ？」

「午前は取材があつて午後はスタジオ練習と収録が1件あるんですよ

そこで響也さんには同伴して頂きたいと思ひまして」

「なるほどね」

「と言つてもそこまで負担になるようなことはないですから安心してください」

と言いなながら千聖はバインダーを渡してきた

「内容はそこに挟まつてる紙の通りです」

「ありがとう、とりあえず暗記する時間をくれ」

「え!? 響也くんそれ全部覚えるつもりなの!？」

彩が驚きながら聞いてくる

「持ち歩くのもめんどいしこれくらいなら5分くれれば覚えれるからさ」

「本当に化け物じみてますっスね…」

麻弥が少し引いていた

「さすが響也さんです! 私にも何かそういう特技があればいいんですけど」

「イヴはモデルとして服を着こなすっていう特技があるだろ？」

「それだけでもすごいと思うぞ?」

「ですが…」

「やれないのに無理してやろうとすれば人間いつか壊れる

やれることをやれるだけ伸ばすのが成長するって言うことだからな

俺はそう思ってる

あ、あとひとつ言っておくと俺にも出来ないことあるぞ?」

「え!?…意外だねー、響也くん何出来ないの?」

「料理、前に1回作って鍋を跡形もなく消したことあってそれ以来妹がキッチンに入れ

てくれないのさ」

「…それってどうしたらそうなるのかしら」

「わからん、レシピのまんま作ったはずなのに気がいたら暗黒物質になってた…」

みんな少し異質な物を見る目で見ていた

…悪かったな料理出来なくて

「でもさー逆に考えると料理でできる人だと響也くん的にポイント高いってこと?」

日菜が首を傾げながら聞いてくる

「まあ料理でできる人はすごいと思うよ

個人的には料理できる人がそばにいないと多分餓死するし」

その答えに皆の目の色が変わった気がした

「響也くん今度お弁当作ってあげるね」「響也さん今度私の家で料理教えてあげるわ」「響也くん、お姉ちゃんと一緒に今度料理作ってあげるね!」「こう見えてジブン料理得意なんですよねー」「響也さん今度私の故郷の郷土料理振舞いますね!」

「「「「……ん?」」」」

…なーんか前に Roselia のみんなと一緒にいた時もこんなことならなかったっけ?

「千聖ちゃん毎日忙しそうにしてて休めてないだろうから休みの日はしっかり休んだ方がいいんじゃない?」

「彩ちゃんに言われなくとも休めてるわよ?」

…それを言うなら日菜ちゃんだってお姉さん練習で忙しいんじゃない?」

「お姉ちゃんなら大丈夫だよ? 私が頼んだらやってくれるし、

あれ? 麻弥ちゃんは休みの日いつも機材いじってるんじゃないの?」

「さすがにやらない時もありますよ…、絶対馬鹿にしますよね

イヴさんは色んな部活とかバイトでそういうことしてる暇ないんじゃないですか?」

「麻弥さんはイジワルです、私にもゆつくりする時間くらいあります!」

彩さん、失敗しそうなのでやめた方がいいですよ！」

「イヴちゃんそれどういうことー！」

Roseliaの時とは違い笑い合いながら言い合う5人

良かった…修羅場にはならなさそうだな

「でもさー全員がやらなくてもよくない？」

ピシッ

日菜の言葉に皆の動きが止まる

…なーんか嫌な予感が

「でもせっかくだし皆で料理対決的なやつはどうかしら？」

千聖の発言にホッとする俺

「それいいねー千聖ちゃん流石！」

「燃えてきたっす」

まあ皆の手料理が食べられるのはとても役得ではあるけど優劣を付けなくちや行けなくなつたのが少し心苦しくはあるな…

「まあ今度の話だから今は置いておこうぜ時間も迫ってきてるし」

「そうしましょうか」

みんなが頷いた

取材が終わり今は昼休憩をとっているところ

みんなに聞いた結果ご飯はいつも行くファミレスになった
「やっぱりここが落ち着くよなあ」

俺の言葉に皆が反応する

「そうだねー、ドリンクバーもあるし

でも誰かに見つかって大騒ぎになったりしないかな？」

「大丈夫よ、彩ちゃんは見つかっても騒がれないから」

「ちよつと千聖ちゃん！それはひどいよー」

みんなが笑う

「とりあえず注文しようよーあたしもうお腹ペコペコだよー」

日菜が机に突っ伏しながらいう

「そうっすねジブンもお腹空きました」

「俺ハンバーグプレートとポテトね」

「なんか響也さん子供みたいで可愛いです！」

「うっせ、好きなものは仕方ないだろ」

「響也さんは子供舌と…」

千聖がなにか眩きながらメモしていた
なんかあつたんかね

昼休憩も終わり今はスタジオオ練習を見学させて貰つてる

流石アイドル、踊りながらも笑顔を忘れていないところに俺は好印象を抱いた
「はい！みんなお疲れ様一旦休憩にするよー」

「[[[[[はい！]]]]」

ダンスの先生の言葉に皆は動きを止める

「あい、皆お疲れさん」

俺はタオルと飲み物を持って近づく

「ありがと響也くん！」「ありがとー」「ありがとー！」「ありがとーございませすっす」「あ
りがとーございませすー！」

「いやー流石だな、素人目から見てもダンスうまかったぞ」

「まだまだだよ、上手い人はもつと上手いからね日菜ちゃんとか」

「え？あたし？普通だと思っただけだなあ」

「いや、お前は特に頭抜けてたぞ日菜、例えばここら辺のステップとか」

俺はさっきの曲の中間辺りのステップを実演してみる

「この足捌きはプロも顔負けだよ……つてお前らどうした？ポカーンと見つめてきて」

「え？ええ!!響也くんダンスも踊れたの？」

「いや？見た通りにやったただけだけ」

俺の一言にみんなが啞然とする

「…いやそれがすごいよ響也さん」

「そうか？」

「そうつすよ、まず見ただけで踊れるようになるのがもうヤバいつす」

「響也さん響也さん、このステップ自信無いんですけどどうすればいいですか？」

「いや先生に聞けよイヴ…まあいいか今いないし」

俺はステップをやってみる

「ここはこう動いて、こうすると楽になると思うぞ」

みんなの目が輝きを放つ、うお、眩し

「すごいすごいよ響也くん！るるるるるるんっ！てきた」

いや分かんしいつもより多い

「ほんとに天才ってなんなんだろうね…」

「彩ちゃん、私も同じこと考えてたところよ」

約2名が目に見えて落ち込んでいた、どうして？

「さすがです響也さん！」「いやーもうなんて言えばいいのかわからないっす、
普通出来ると思うんだけどなあ

ガチャ

「…え？みんなどうしたの？」

戻ってきた先生が驚いていた

なんかカオスな場だよなあ

その後の収録も無事に終え、俺の仕事は終了

結局マネージャーと言ってもほとんど見てるだけだったが

今はみんなで帰ってる所

「響也くん！今日はありがとう」

「いやどうせ暇だったしいいんだけどな」

「そういえば響也さん明日は暇かしら？」

千聖が聞いてくる

「明日は朝から Roselia の練習見るくらいで、昼からは暇だと思っけどどうしてだ？」

「明日はみんなオフなんすけど、朝言つてた料理の話明日集まってやれそうだなと思っまして」

麻弥が続く

「まあいいがどこでやるんだ？」

「場所はまだ決まってるませんがどこがいいですか？」

うーむ、皆の家は親御さんとか兄弟さん達の迷惑になりそうだからなあ

「仕方ないな、俺の家でやるか？」

俺の言葉に皆驚く

代表してなのか分からないが彩が口を開く

「え?! いいの? お邪魔しても」

「まあ大丈夫だろ、妹いるけどそれさえ気にしなければ」

「では遠慮なく響也さんの家に明日の15時頃皆で伺いますね」

「了解、一応食器とか準備はしておくわ」

「……ありがとうございます! (ございます!) (っす)」

みんなの言葉がハモった

「え？私明日香澄とかと遊ぶから夜までいないよ？」

「え!?!まじで？」

ひと騒動起きなければいいけど

時は過ぎ今は次の日

時計が15時を指そうとしている

俺は諸々の準備を終わらせリビングのソファに座っていた

ピンポン

お？来たかな

「はい、いまいきます」

覗き穴を覗くとパスパレの5人が立っていた

ガチャ

「いらっしやい」

「「「「お邪魔します！」「」」」」

皆をとりあえずリビングに案内する

「好きなどころに座つてて、今お茶入れるから」

「はーい」「お願いします」「ねえ？テレビ付けていい？」「はいっす」「ここがキョーヤさんの家……」

…日菜は和みすぎだろ

コト

「はい、麦茶で良かった？」

「うん」「ありがとうございます」「リモコンどこー」「ありがとうございますっす」「ありがとうございますっす！」

…だから日菜は自分の家かよ

「え？何言ってるの？ここは響也くん家じゃん」

最近天然娘の地の文読みには慣れてしまった

「そういうえば今日はどういう感じで料理すんの？」

「昨日私たちで決めた順番で料理して響也くんには食べてもらおうよ

でも量の問題もあるから少なめでみんな作るから安心してね」

「良かった、俺もそこまで量食べれるほうじゃないから」

麻弥が立ち上がる

「よし！まずはジブンっすね」

「まずは麻弥か、そういうえばみんな食材は一緒の使うのか？」

「ちがうよー皆バラバラに買って来た」

「なるほどね、てことは完成まで分からないのか」

「そういうことっす、まあ半分くらい期待しててくださいっす」

それから時間が経ち麻弥が皿をもって来た、出来たみたいだな

「お待たせしました、ジブンは生姜焼きにしてみました」

「おー美味そうだないただきまーす」

パクッ

「うん、美味しい、すげえ俺好みの味」

「良かったっす！安心したあ」

麻弥が胸をなでおろしていた

「次は私ね」

彩がそう言いながら立つ

「大丈夫？」

「響也くんまでそんなこと言うの!?大丈夫だよ流石に」

「ならいいんだが」

「んじや作つてくるねー」

そう言いながらキッチンへと向かっていった

彩が無事に作り終わり（結構美味かった）、イヴと日菜の料理も終わった（どっちもすごく美味しかった）

残すは千聖のみ、と言つても作り終わつて目の前にある

「私は庶民の味の定番、唐揚げを作りました」

「おおーこれはまた美味そうだないただきました！」

俺は口へ運ぶ

「…うんうん、店とかで出てきてもおかしくないくらい美味しいよ」

「うふふ、褒めても何も出ないですよ？」

上機嫌になる千聖、…ん？

「なあ千聖、お前指どうしたんだ？」

「これですか？鶏肉切る時に少し指切っちゃって」

「大丈夫か？」

「ええ、大して深くもなかったですから」

「それならいいんだが」

俺が唐揚げに目線を戻した視界の端で千聖が黒い笑みを浮かべていたように見えたが気の所為だったかな

「みんな今日はありがとな、めっちゃ美味かったわ

でもごめん、先に謝っておくと俺には優劣をつけることは出来ないこの通りごめん」

俺は頭を下げる

「いや、そこまでしなくてもいいよ響也くん」

「私たちが勝手に決めたことなんだから気にしないでください」

その答えにホッとすする俺

「その代わり今度買ひ物の荷物持ちとかするから」

「それで手を打ちましようか、みんなもそれでいい？」

みんな納得してくれたみたいだ

みんなが帰ったあと俺はキッチンを見て驚愕する

「…あいつら食器そのままにして帰りやがったな」
俺は独り言を呟きながらスポンジに洗剤をかけた

第7話

Scarlet Sign

「あちい…溶けそうだ…」

どうも皆さん響也です…暑いですね

俺は今沙綾の所のパンを買いに商店街に向かって歩いていきます

夏真つ盛り、日差しがサンサンと照りつけて今にも溶けてしまいそうです

あ、やつと着いた

ウイーン

「あー響也先輩いらっしやいませ」

「やあ、パン買いに来たよ…いやあ店の中涼しいわー」

「さすがに涼しくしないとパンがダメになりますからね」

沙綾が苦笑混じりにそうつぶやく

「まあだろうね、っとメロンパンはーと…あつたあつた」

「先輩ほんとにメロンパン好きですよね」

「一日一つは言い過ぎだけど結構な頻度で食べてるからね、まあこのメロンパンだからって言うのもあるけど」

「ありがとうございます、」

「……響也先輩が買うようになってから頼み込んで私担当になって良かった」

後半何言ってるのか小さすぎて分からなかったがニヤニヤしてるところを見ると今日何かいいことでもあったのだろう

ウーン

「あゝきよーやくんだ」

「お、モカじゃないか、またこのパンか？」

間延びした声で入ってきたのはモカだった

「そーなの、やつぱりこのパン食べないと元気出ないからねー」

そういうきよーやくんこそ今日もメロンパン？」

「そそ」

「そーなんだ…ふむふむ、”さーや”のメロンパンだから？」

「?、まあこのだからって言うのはあるけど」

「ち、ちよつとモカ!?!」

「まーまー、さーや、このことはモカちゃんの中にとどめておくよ?」

沙綾が顔を真っ赤にしている

「何言ってるのかわからんが買わないのか? モカよ」

「そーだったねー、さーや会計お願い」

ドサ

「…いつ見てもすげえ量だよな」

「えー? 普通だよー?」

「いやいや普通の女子がこんなパン食べないって」

「モカの胃袋は4次元だと私は思ってるよ、はいモカ」

「ありがとー、あ! きょーやくんこの後ひまー?」

モカが後ろに振り返り俺を視界に捉えて言う

「まあ暇っちゃ暇だけどどうかしたのか?」

「この後蘭たちと集まるんだけどきょーやくんもどうかなくて」

どうせパン買って帰って食ってゲームしようかと思っただくらいだし

「いいぞ、」

「わーい、早速れっつごー」

モカが俺の手を掴んで歩きだそうとする

「さてさて、とりあえず会計させてくれ」

「あーそうだったね、外で待ってるよー」

「そうしてくれ」

連れてこられたのは羽沢珈琲店、つぐみの実家だ

カランカラン

「みんなーきよーやくん連れてきたよー」

モカの後に続いて中にはいる

「「「え!? 響也（さん）!?!」」」」

びつくりした顔で4人が見てくる…俺は珍獣か何かかよ

「ふっふっふー、モカちゃんお手柄ー」

「何が手柄かわからんが…いいのかわか?俺が邪魔してせつかく勢ぞろいしてるのに」

「どうぞどうぞ、むしろこっちがお願いしたいくらいですよ」

つぐみがびよんびよん跳ねながら言う

少し可愛いと思ってしまったのは内緒

「ならいいんだけどね」

「ほら響也さんとりあえず座ってください」

ひまりが椅子を引きながら促す

「ありがとうひまり、ところでみんなはなにしてたの？」

「ほらもう夏休みじゃないですか？だから今のうちに宿題終わらせちやおうって話になりまして、こうやって集まってやってたんです」

「夏休みの宿題ね、なんであるのかまったくわからん代物だけだなー」

「…響也は宿題どうなの？」

「え？、そりや終わってるけど」

「「「「…は？」」」」

なんかやばいことでも言ったか？

「いやいやいやいやいやいくらなんでも早すぎますよ!?!まだ夏休み入って2日しか経ってないのに」

「きょーやくんさすがに嘘はダメだよー」

「いや本当なんだが…」

「リサ先輩から鬼のように宿題出たって聞かされたんですけど2年生」

「あれで鬼のようか、リサとは少し話をしなければならぬかな？」

でもお前達は頭は悪くなさそうだからそこまで苦労はしないだろう？」

そう言うのと約2名が目をそらす…おいおい

「蘭とひまりは前回のテストはどうだったの？」

「うっ…」「ええーとですね…」

なるほどね…大体わかった

「巴とつぐみはわかるけどモカは意外だな勉強できるの」

「ああーきよーやくん馬鹿にしたー、しくしく」

モカが顔を手で隠してうずくまる…絶対嘘泣きだろうな

「モカはああ見えて学年トップですからね」

「え!?まじかよ…天才型ってやつか」

「響也…あんただけは言えないセリフだよねそれ」

蘭がジト目でこっちを睨んでくる…おおいこわい

「何気に響也さんが1番化け物じみてますもんね」

「俺は自分ができることをやってるだけだよ」

「そのことができることがまず凡人にとっては真似出来ないからなあ」

「とりあえず宿題終わらそうよー」

ひまりの一言にみんなが頷いた

「あーもうわかんないよー」

「…ひまりうるさい」

あれから1時間みんなで宿題をやっていたがひまりが痺れを切らしたのか叫ぶ

「何がわからないのさ」

「えとですねこれなんですけど…」

ひまりがプリントを見せてくる…ふむふむ

「なるほどね、ここはこうして…」

そんな響也とひまりの姿をみて蘭が呟く

「ほんとに響也って頭いいよね…」

「ほんとに、同じ人間とは思えない」

「でもさー完璧な人間はいないからさー何か弱点とかありそうだよーね」

「うーん、そんなの響也さんにあるのかな？」

「さすがにあるとは思うけど」

「なあ、ちよつと試してみないか？」

「おーおもしろそうだねー」

「…まあいいけど」

「え？大丈夫かな？」

「大丈夫大丈夫」

「最初はなにをする？」

「とりあえず勉強面で色々質問すればいいんじゃない？」

「おつけーあたしがいつてくるー」

「ねーねーきょーやくん！」

「ん？どうしたモカ」

「3154×2852は？」

「あだし達は吹き出す」

「おおおおおいモカさすがにいきなりすぎやしな」

「え？8，995，208でしょ？」

「普通に響也さんが答える」

「ふっふっふー、せいかいー」

「∴次行こう」

「え？え？みんなどうしたの？」

「ひーちゃんは気にしなくていいよー」

「？う、うん」

「響也さん、1333年何が起こった？」

「鎌倉幕府が終わった」

「響也、枕草子」

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細「いやもういい」…そうか？」

「響也さん、C6H4Cl2は？」

「パラジクロロベンゼン」

「きょーやくん、I'm good at painting, but I haven't drawn it recently, so I might be a little clumsy

和訳してー」

「私は絵が得意だ、しかし最近描いてないので少し下手になってるかもしれない」

ひまりを残してあたし達4人は集まる

「結構マニアックなところ攻めたんだけどな」

「…キモッ」

「さすがにモカちゃんもこれは引くかな」

「響也さんさすがだね」

「次はどうする？」

「…スポーツ関連で攻めてみる？」

「たとえばー？」

「もうすぐひと段落着きそうだし最近できたスポーツセンターにでも行ってみる？」

あそこなら色々あるから良さそうかも」

「それで行こう」

さつきから4人が質問してきたりコソコソ会話してたりして少し怖い

なんか企んでるのか？

「響也さん結構進んだし少し休憩したいなあ…う」

ひまりが少し上目遣いでそう言うってくる…心臓に悪いからやめてくれ

「そうだな、休憩にするか」

「きよーやくん、いまからスポーツセンターにみんなで行かない？」

モカが突拍子も無いことを言い始める

「は？最近出来たところか？なんでまた急に」

「…最近体あまり動かしてないから動かしたくなつた

ダメ？」

何か企んでそうだけど乗っておこう

「いやいいけどさ」

「ふっふっふー、何も企んでないよー」

「…そうか」

「それじゃれっつごー」

「「「「……」」」」」

「いや、のってよーー!!」

つぐみの家から歩いて20分、俺たちはスポーツセンターにやってきた、最近できたのか外観はとても綺麗で人が割と来てます

「とりあえず何かからする？」

「色んなスポーツができるみたいだからね」

「まずは……」

ダムダムダム、キュツ

「っふ」

パシユツ

「わーお、きよーやくんかつこいいー」

「はあ、はあ……そうか？」

「……次行こうか」

ウイーン、バシユツ

「んっ、」

ブン、カキーン……ホームラン!!

「……次だな」

そのあとあたし達は響也さんの身体能力を試した

結果は御察しの通りですが…

「…とりあえず控えめに言って化け物」

「天は二物を与えるんだなやつぱり」

「はいきよーやくんスポドリだよー」

「ありがと…でもどうして急にスポーツなんて？」

「実はですね…」

俺はつぐみから事情を聞いた

「…なるほどね、俺の苦手なもんか」

「そーなのさー」

「うーん、結構あるんだけどなあ」

「たとえばたとえば？」

みんなの食い付きがこええよ

「前にパスパレの奴らにも言っただけど俺は料理が出来ない」

「へえー意外だね」

響也ならそつなくこなしそうなのに」

「…ダークマター食いたいなら作るけど？」

「…遠慮しとく」

蘭の顔が引きつっていた

「あとではできる出来ないの問題じゃなくなっちゃまうんだけど犬が苦手だ」

「「「…犬？」」」」

みんながポカーンとする

「昔大きな犬に追いかけられてなそれがトラウマなんだよ

思い出しただけで足がすくむわ」

「犬だけですか？」

「そうだな犬くらいだわ」

「でもそれくらいしか苦手なものないならやつぱり人間離れしてますよね」

「うーん俺はできることだけやってるんだけどな」

「でもさー」

モカが近づきながら口を開く

「…きょーやくんつてこういうことすると目がかなり泳ぐよねーどうしてだろー」

俺の腕に抱きつきながら言う

「ちよつ…モカやめろつて」

「ふっふっふー、やだー」

「おいモカさすがにそれは「何ー？トモちゃんなんか文句でもあるのー？」
周りの温度が急激に低くなった気がした

「みんなはいいよねー言葉を発してもちやんとした意味で捉えてもらえて

あたしはいつも違う、喋ってもいつも裏があるんじゃないかと思われる、距離を置かれる

あたしは人の思考が読み取れるからそんな些細な変化も見逃さない：いや見逃せない
い

そんな中出会えたあたしの本当の気持ちに気づいてくれる人、：まあ恋愛面は凄い疎
そうだけどね

そんな大事な人は誰にも渡したくない、いや渡せない

たとえそれが大事な大事な幼なじみだったとしてもね」

モカの掴む力が強くなる

そうか、不安だったんだな

「ごめんモカ…」

「え？…え？」

俺は知らず知らずのうちにモカを抱きしめてた

「お前の気持ちに気づいてやれなくて」

「え？、そしたら」

「「響也（さん）!?!」」

「……そんなに個人レッスンが受けたいなら言ってくれば良かったのに」

……………。シーン

え？なんか違った？

「モカちゃん激おこプリンプリン丸」「…キモ、死ぬ」「さすがにないわ」「響也さん最低です」「響也さんーから女心学んだらどうですか？」

みんなに負のオーラが纏った…やべえ

「帰ろうぜー」

「「「そうだね」」」

「いやちよつと待って何が悪かったの？ごめんてだから

置いてかないでくれよー！！！

ふっふっふー、きょーやくん今度はちゃんと返事聞かせてね？

家に帰って妹に聞いてみたら

「お兄ちゃん人生やり直したら？」

と厳しい一言を頂きました

次の日モカはパンを奢ったら機嫌が治りました
まあ財布がだいぶ薄くなりましたけどね…

第8話 スニーキングミッション! 響也を追え!?

ドーも響也です

今は休日なんで商店街をブラブラと歩いてるんですがなんか知らないですけどすごい視線を感じてます

でも振り向いても俺を見てる人なんて誰もいないんですけど…

まーいいか考えても無駄だな

「なかなか気づかないもんだねこころ」

美咲ちゃんがそうつぶやく

「そうねーさすががこの変装グッズだわ」

あ、おはようございます、花音です

今私達は響也くんの後をつけています

どうしてこんなことになったかというとまたこころちゃんの思いつきなんですけど

事は朝いつも通りこころちゃんの家に集まった所から始まりました

「ねえ美咲、いいことを考えたわ!」

「何?」

「こころちゃんがいきなり話し出す…いつもの事だからもう驚きはしなくなっただけ」

「いまから響也の所に行きましょう!」

「どうしてまた急に?」

「だっていつも響也が遊びに来てくれるけどあたし達は響也が普段何してるか知らないじゃない?」

だから響也の私生活が知りたくて覗こうかと思ってるの

運良く今日は一人で出かけるみたいだから後ろからついていくわ」

「こころちゃん…それ1歩間違えたらストーカーだよ…」

「こころんいい考えだね!はぐみも響也先輩の事もっと知りたかったんだ」

「はぐみもまた1、こころ?1歩間違えたらそれ犯罪だよ?」

美咲ちゃんが注意を促す

よかった…私間違っってはなかったんだね

「でも響也のことを知りたいのは私も同じかな、

ふふ…知られざる秘密を紐解くこの感覚、ああなんて儂く愛おしいんだ…」
薫さんの言葉はやっぱりよくわからない

「花音はどうかしら?」

「ふええ!?!私?」

いきなり話を振られる

「そうだなあ…私はこころちゃんに任せるよ」

否定したら可哀想だし私は当たり前障りない感じで返答する

「花音先輩まで…わかりましたよ、いけばいいんでしょ? いけば」

美咲ちゃんが肩を竦めながら言う…ふめんね美咲ちゃん

「そうと決まれば直ぐに行きましょう?」

テンションが上がったこころちゃんに半ば引きずられる様に連れてかかれてしまいま
した…

そういう訳で響也さんの家の近くに着いた私達は曲がり角で様子を伺っていました
というかこころちゃん…この格好、

「ねえこころ……この格好何？」

「よく聞いてくれたわ美咲！」

この格好はね、かの有名なシャーロック・ホームズをモチーフとした衣装よ！」

「はいはいただの探偵の衣装ね

でもこれじゃ目立って直ぐに見つからない？」

「そんなことないわ！探偵は見つからないから」

「こころちゃん……さすがに見つかる探偵さんもいるよ？」

「あら花音もそんなこと言うの？現にまだ誰にも見られてないじゃない」

……人が誰も通ってないだけです

「てゆーかこころん！ついさっき響也先輩家を出たよ？」

はぐみちゃんがいつの間にか起こった事実を口にする

「それは急いで追いかけなきゃいけないわ！さあ、いくわよ！」

私達は姿を見つげようと走り出した

「あーいたよこころん！」

はぐみちゃんが響也さんの姿を見つける

「ほんとね! みんなこの辺りで止まってちようだい!」

「こころちゃんの声でみんな立ち止まる

「こころ、これからどうするんだい?」

薫さんがこころちゃんに訪ねる

「これから響也の後ろをこの位の距離を保ちながら着いていくのよ!」

通りすがる人達にすごい見られてるよこころちゃん…

「花音先輩…私達で止めれるだけ止めましょうね…」

「…そうだね美咲ちゃん」

「さあ、ハロハピ探偵団出動よ!」

「こころん、響也先輩さーやの所に入っていったよ!」

時は少し経ちいま私達は商店街にいます

「そうみたいね、パンでも買うのかしら?」

「さすがに冷やかしでは入らないと思うよこころ」

「でもここからじゃ何をしてるか分からないわ」

ササッ

「こころ様、こちらをお使ください」

そう言っつていきなり現れた黒服さんはころちゃんに小さな機械を渡した

「山吹ベーカーリー全面協力のもと音声聞かせて頂いております」

盗聴器…私もう帰りたいよ…

「気が利くわね、ありがとう！」

「では失礼します」

ササッ

「それじゃ聞きましょう！」

ザザザザ…

『…や先輩やつぱりメロンパン好きですよね』

「あ！さーやの声だ」

『パンの中で一番好きかもな、特にここのが』

「響也の声だね」

『ふっふっふー、パンは至高なのだあ』

「モカの声ね」

『しっかしモカはよく食うよなあ、今もってるパンの量も異常だし』

『だってここのパンが美味しいのがいけないんだもーん』

『よく太らねえよな』

『あー! きよーやくん女子に対して言っではいけない言葉言っただー』

『…お前全然そこら辺気にしてないだろ』

『てへっ、まあ食べたカロリーはひーちゃんに送ってるから心配ないのだー』

『ひまりの前で言っでやるなよ可哀想だから』

『わかつてるよー、さーやお会計お願ーい』

『はいはい』

「こんなに砕けた会話出来るなんて羨ましいわ! あたしもパン買ってくる!」

ガシッ

「まあまあこころ、それはまた別の機会に、今日は響也の秘密を見つけないのではなかったのかな?」

走り出そうとしたこころちゃんを薫さんが止める

「そうだったわね、ありがと薫!」

「お安いご用さ」

『ふっふっふー、きよーやくん!』

『ちよっ、モカ離れろっで』

『はーい二人ともー店の中でいちやつかないでねー』

『俺なんもしてねえ、ってか沙綾顔怖っ!』

『わー、さーやがおこったー』

…なんでだろ、会話を聞いてるだけなのにこのモヤモヤした気持ち、響也くんが遠くに行つちやう感覚

トントン

「…花音先輩大丈夫ですか？」

「あ、うん大丈夫だよ、ありがと美咲ちゃん」

思考の渦に流されてた所を美咲ちゃんが起こしてくれた

カランカラン

また来るよー

「響也が出てきたわね！みんないくわよー！」

少しモヤモヤが残っていたけど私はその事を忘れるかのようにこころちゃんの後を追った

次に響也くんが訪れたのは街の図書館でした

中に入ると端の方のテーブルに座って本を読んでいた

「響也先輩かっこいい…」

「はぐみと同じ気持ちになったよ、様になってるね

まるで1枚の絵のようなそんな感じがするよ」

薫さんが珍しく普通の話し方をしていた

それだけ見惚れてたのかな?

私もそうなってたんだけど

「響也……」

「……ろちゃん……」

「あたし決めたわ、今の雰囲気、響也の横に並べるようなお淑やかな淑女になるわ」

「……ろちゃんには無理な気が……」

「あら美咲、あたしに出来ないことがあるとでも?」

「……そうだね」

美咲ちゃん諦めたね……

でも……ろちゃん、言葉にさっきのモヤモヤがまた出てくる……

……ろちゃんが響也くんと……ココロチャンガキヨウヤクント……

「花音、大丈夫かい? なにか思い詰めているみたいだけど」

「ふえ? あ、うん大丈夫、ありがとう薫さん」

「ふふ、お安いご用だよ」

こうやって普通にしてたらしい人なのに

「ねえこころん、響也先輩いなくなってるよ!!」

はぐみちゃんの言葉にみんなが驚く

「それは大変だわ、急いで探さなきゃ!」

私達は外に急いだ

ハアハア…ハア…ハア…

「…ふう、はあふう、響也先輩どこに行っただらう」

「そうね…はあはあ、うちの黒服達も見えてないらしいわ」

「あの一瞬で姿を消すなんて…響也はなんて神秘的なのか、ああ凄い…」

「まったく響也先輩は…」

はあ…ふう…結構走り回ったけど全く見つからない、

響也くんどこいったんだろ?…ってあれ?

「あ、そういえば」

「花音、どうしたのかしら?」

「響也くん、今日はRoseliaの練習見るとか言ってた気が…」

「「「それだ!!」」」

「ふえ!?!」

「さっそく行きましょう!」

「「「そうだね」」」

タツタツタツ

「ふえ…ふえええ、みんな待つてよお〜」

「あれ? ハロハピのみんな、今日は予約無いけどどうかしたの?」

「まりな、ちようどいい所に、響也は来てないかしら?」

「響也くん? それなら今 Rose lia の子達とスタジオ使ってるけど」

「やっぱりね、ありがと!」

「? どういたしまして」

まりなさんは奥に歩いていった

「でもさすがに練習の邪魔になるから近づくと訳にはいかないんじゃない? こころ」

「そうよね、どうするかしら?」

ササッ

「「こころ様こちらを、月島様に許可を得て撮影しております」

「あらありがとう」

ササッ

「こころちゃんに手渡されたのは小さなモニターだった

「さあこれを見て待ちましょう」

『よし、この辺りで少し休憩にしようか?』

『それがいいわね』

「ちようど休憩になったみたいだね!」

『響也くんつかれたあ』

『だああこくつつくな暑い』

『響也さん、ロリコンは犯罪ですよ?』

『っ!おい紗夜』

『響也くん…やっぱり面白い人』

『響也喉乾いたー、ジュース奢ってよー』

『いや自分で買えよ、あこいつまで引っ付いてるんだよ』

『響也…変態』

『友希那…そんなこと言わないでくれ、俺は何もしていない』

「…今度あたしも抱きつこうかしら」

スタスタスタ

ピトツ

「……熱は無いみたいだけど？なんか変なものでも食ったのか？」

「ふえ……？き、きききききき響也くん!?かおちか……きゅー」

……

「んっ……」

「おっ？気がついたか花音」

「……は……？って響也くん!!」

隣には響也くんが座っていた

「いきなりぶっ倒れるから心配したぞ、」

「え？私倒れてたの？」

「お前覚えてないのか？、まあ思い出さない方がいいかもな」

「ふえ？私何かやっちゃってたの？」

「……いや何も？」

「ふえええ響也くん教えてよおおお」

逃げる響也くんを私は顔を真っ赤にしながら追いかけてた

後日こころちゃん達にも聞いたんだけど

「あの時の花音は流石の私でも少し怖かったわ」

って言われちゃった

…ほんとに私何やってたの？

第9話 少しお茶でも如何かしら？

ピピピピツピピ「んんー」

「ふあああ、…眠い」

皆さんおはようございます…、響也です

昨日は最近発売されたゲームを夜通しやってたのでとても眠いです…

もういつその事二度寝してしまおうかね、うんそうしよう

それでは皆さんおやす『ピロン』み…

俺の幸福な時間を潰すかのようなタイミングの通知、誰だおい

「…千聖か、なになに」

『響也さんおはようございます、突然なんですけど今日暇ですか？少し付き合っ
て欲しい場所があつて』

返事待ってます』

…ほんと突然だな、まあ二度寝するよりは楽しそうだが
俺は千聖に返信した

10時に駅で待ち合わせとのことでおれは9時半には着いていた
人を待つのはいいが待たせるのは個人的に嫌なので毎回30分前にはいる人間なん
だよ俺

まあそんなことはどうでもいいか暇だしゲームしとこ

……いやおせえーよ

今現在の時刻10:22、流石の俺もこれにはイライラしてくる

おれは千聖に少しばかり文句を言おうと電話をかけようとした時向こうから声が聞
こえてきた

『響也さーん！』

タツタツタツ…

「はあはあ…ごめんなさい…だいたい遅くなってしまつて」

肩で息をして苦しそうに話す

…まったくよ

「いや大丈夫だ俺も少し前に着いたところだから」

そう言うのと千聖は少し驚いた表情になりこう放つ

「え…？でも響也さんいつも「いいから」」

「まったく…そういうのは気にしなくていいから行くぞ」

「…ふふふふ」

千聖が笑う

「…何がおかしいんだ？」

「いえ、響也さんはそういう人だったなと思つて」

「…うるせえ、ところでどこに向かうんだ？」

「実は隣町に新しくカフェが出来たみたいで最初は花音と行くつもりだったんですがバ

イトが急に入っちゃつて…次に浮かんだのが響也さんだったものだから」

千聖が苦笑いする

「…なるほどな」

「ゴ迷惑でしたか？」

千聖が俺の手を取り上目遣いでそう言ってくる

「っ!?…千聖？演技混じりはやめてくれ」

「ふふ、さすがにわかりますか」

「普段のお前の行動ではないからな」

俺はジト目でそう返すと千聖は苦笑混じりに

「やっぱり響也さんにはかなわないわね」

そう呟いた

とか言いながら上目遣いにドキツとしたのは内緒

時は流れ今は電車に乗って移動中

普段電車になんて乗らないから休日を謳歌しようとしてる人の群れに押しつぶされ
そうになっている…

千聖を扉との間に入れて庇っているため体勢がかなり不安定だ

ドンツ

「うっ！」

急激な揺れで人に押され俺は千聖の方に倒れてしまう…が既のところ扉に手をつ
けたため倒れずにはすんだ

「千聖大丈夫か？」

「え、ええ…大丈夫です…だけどこの体勢」

顔を赤らめて目を逸らす千聖…あ、

現状を説明すると俗に言う壁ドンをしてしまっていた

「…ごめん千聖着くまで我慢して」

「わかりました…」

俺達は着くまでの間暑さと気恥ずかしさを感じていた

「はあー酷い目にあつた」

何とか耐えた俺達は無事に？電車を降りていまは目的地のカフェに向かって商店街を歩いている

休日とあつてか親子連れだったり人でごった返している

「ありがとうございます響也さん」

「いやいやこれくらいはね、…そういえば千聖」

ふと俺は気になったことを聞くことにした

「どうして同い年なのに敬語で俺に話すんだ？」

「ああそれはですね、仕事の癖が治らなくて…」

基本男性の方と話すのは仕事関係者しかいないのでつい敬語で話してしまうんですよね」

千聖が申し訳なさそうに言う

「まあそれなら仕方ないな」

「でも響也さんがいいなら…」

「俺はいいんだけどなあ…なんか敬語つてむず痒くないか？」

「それじゃ今日頑張つて慣れますね」

「ごめんな無理言つて」

「大丈夫、響也さ…響也の為だもの、私は喜んでするわ」

千聖の真剣な眼差しが俺に向けられる

俺は少し目線を外しながら

「と、とりあえず行こうぜ」

と言った

…正直恥ずかしかったんだ美少女に見つめられて

俺達は件のカフェの前に到着した：したんだけど

「…すげえ人だな」

「ええ、そうね」

わかりやすく言うと30人くらいは待つてる感じかな

どつかの遊園地のアトラクションですかコノヤロ―

「千聖時間大丈夫か？かなり待ちそうだけど」

「私は大丈夫で…よ、響也こそ大丈夫？」

「俺も夜まで何も無いから平気」

「なら安心したわ」

お待たせしましたお席へご案内します

店員さんのその声は俺たちにとって長い戦いが終わった報せであった

扉をくぐり店の中に入るとひんやりとした冷房に包まれて俺の火照っ「響也さつきか

「らなにブツブツ言ってるの？」…

「どうやらいつの間にか独り言を言ってたみたいだった

席に案内された俺達はメニューを見ながら何を頼もうか悩み始める

「千聖ここで昼食食べてくか？」

「そうね、ちょうどお腹が空いてきたし」

「その返答を聞きメニューに目を戻す俺：お？」

「俺ナポリタンとアイスコーヒーにしよ」

「そう眩くと千聖が急に笑い始める

「なんだよ千聖？」

「ふふふ…やっぱり響也子供舌よね」

「いいだろ旨いんだから」

「何かをメモっているのが見えたが気にしないようにした

「店員呼ぶぞ？」

「お願いするわ」

ナポリタンに舌鼓を打った俺は千聖が食べてる様子を眺めながらアイスコーヒーに

口をつけていた

ピロン

「ん？」

誰からかと思つたら彩からだつた

『響也くん今大丈夫？』

『大丈夫つちや大丈夫だけどなに？』

『次のレッスンまで時間あるから話し相手になつて欲しくて』

『まあ少しならいいけど』

『本当!? ありがとう! それでね…』

それから数分他愛のない話をしていくとすごい寒気がした…

視線を千聖に戻すところちらを真っ直ぐに見つめていた

……光が全くない漆黒の目がそこにあつた

俺は焦つて千聖に声をかける

「あの一、千聖さん？どうなされましたか…？」

「……………」

「……千聖様？」

「…響也？」

「はい？なんでございましょう？」

俺は恐怖で背筋が勝手に伸びる

「今何してたの？」

「スマホで、トークアプリを用いて人と話しておりました…」

「誰と？」

「丸山彩氏であります」

「ふーん」

気温が俺の周りだけ氷点下になったのかと思うくらいに感じた

他の人の話し声は聞こえるがそんなのが耳に入らないくらい千聖の声しか入ってこない

「貴方は今誰と何をしてるのかしら？」

「千聖様とカフェにて食事をしております」

「そんな中貴方は私を放っておいて他の女に現を抜かし楽しそうにしているのね？」

「大変申し訳ございませんでした……」

俺は深深と頭を下げ謝った

「私だって少しは構って欲しいのよ？」

少し頬を染めながら千聖は言う

「はい、以後気をつけます」

その言葉に満足したのか千聖は笑顔になり

「分かったらよろしい」

はあ、すげえ怖かった……そのまま魂持ってかれるかと思うくらい死神と話してる気分だった

でも許して貰えたよ「でも」う……

「ツギハナイワヨ……………？」

いやー女の子を怒らせると怖いね…

後日彩にこの事を言ったら死ぬほど謝ってきたよ…

店を後にした俺達は近くの商店街に来ていた

「この後どうすんだ？」

千聖に問う

「近くに大きな公園があるんだけどそこで少し散歩でもどうかしら？」

「いいなそれ」

俺達は少し傾いてきた日差しを浴びながら歩を進めた

木々からの木漏れ日が気持ちよく感じる公園内の散歩道を2人で歩き途中でベンチを見つけたから少し休むことにした俺達

「ふあああ…」

「ふふ、響也つたら眠くなってきたのかしら？あ、そうだ…響也ほら」

ポンポン

千聖は自分の太ももを手で示した

「…はい？」

「だーかーらー少し寝たら？ってことよ」

「もしかして膝枕？」

「…恥ずかしいのだからはやくしてくれないかしら？」

「お、おう…し、失礼します」

俺は言葉に甘えることにする

…うわあ何これ女の子の足ってこんなに柔らかいんだな

「ど、どうかしら？」

「もうやばいずつとこのままでもいいわ」

「そ、それは私もさすがに困るわ…響也？」

「スウ…スウ…」

「寝ちゃったのね、…ふふ、可愛い寝顔」

私も少し素直になったほうがいいのかしら…まあこの人は鈍感が度を過ぎてるし、仕方ないよね？多分

それに周りに女の子が多すぎる、

Poppin Party、afterglow、Roselia、ハローハッピー

ワールド…そして私を除くPastel*Paletteの子達

そして多分その全員が少なからず響也に好意を向けているという点

…競争率はかなり高いわね

でも…

「誰にも負けないわ、私は白鷺千聖よ！」

ん？ああいつの間にか寝てたみたいだ

「すまん千聖すつかり寝……つて千聖もか」

上を見ると船を漕いでる千聖の姿があつた

「とりあえず起き上がってつと、うわ、もう16時か

おーい千聖ーそろそろ起きろー」

俺は肩を揺すつて起こそうとする

「んんっ……ふあ、ごめんなさい、寝てたみたいだわ」

目を擦りながらこちらを見て言う千聖

「いや俺の方も寝てて悪かつたわ」

「寝顔を見られたから私は満足よ？」

「見て得があるもんでもねえだろ男の寝顔なんて」

「そう言つてる割には顔が真つ赤ね」

「恥ずかしいんだよ察しろ」

「ふふふ、そういうことにしておくわ」

「とにかくそろそろ帰るぞ」

「待つて置いてかないでちょうだい私が悪かったから」

俺が歩き始めると千聖は少し小走りで着いてきた

「今日はありがとう、楽しかったわ」

千聖を送るために2人で帰りいまは千聖家の前

「いや俺も楽しかったよ、誘ってくれて嬉しかった」

「また誘うわ」

「おう、…んじゃそろそろ帰るわ」

「ええ、それじゃ」

俺は歩き出す

「あ、響也ちよつと待つて」

「ん? どうかし『チュツ』っ!？」

頬に突然柔らかい感触が

数秒の静寂の後、千聖にキスされたと理解した

「ちよおまなにして「響也！」」

「私、絶対手に入れてみせるわ、たとえどんな壁があろうともね！」

少し赤みを帯びた頬をしながら笑顔でそう告げる千聖

そのまま家に入って行ってしまった

「……」

俺はしばらくの間その場で動けないまま佇んでいた

「ふふふ、また響也コレクションが増えたわ」

千聖が手に持つスマホの画面には響也の写真が沢山映っていた

今日の寝顔の写真もその中であつた

ツギハドソナアナタガミラレルカシラ

フフフフフフフフフ

第10話 パン屋の娘はご乱心!?

気温もすっかり下がり寒さ感じる季節になりました、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

どうも響也です

え？回りくどい話は要らないって？分かりましたよ

こんな話もしたくなるもんですよ、まあいつも通りの山吹ベーカリーの道が少し暇に感じただけなんですけどね

そうこうしてる間に着きましたわ

カランカラン

「いらつしやいませー…って響也先輩じゃないですか！いつもありがとうございます」

「いやね、毎日とは言わないけど2日に1度は食べないと気がすまなくてね」

そう言うのと沙綾は苦笑しながら言う

「そんなうちのパンを棄かなんかみたいに…でもそう言うて貰えて嬉しいです」

あ！そう言えばクロワツサン今焼けたばかりなんですよ如何ですか？」
「…頂こう」

そんな魅惑的な誘いを受けたら買うしかなくなってしまう

「はい！今日は奥で食べていきますか？」

「そうさせてもらおうかな」

前に沙綾の家を手伝って以来たまにご馳走になっている

そのせいか沙綾の家族とも仲良くしてもらっている

「あーきよーにーちゃんだー」

「お？沙南ちゃんじゃん、今日も元気だな」

沙南ちゃんは沙綾の妹だ

最初は全く話さなかったが一緒にご飯を食べたり遊んだりするうちに懐かれてし

まった

ギョツ

「えへへー」

あー天使がいるもうお持ち帰りしてもふ…

ジーツ

「響也先輩絶対変なこと考えてるでしょ？」

「そ、そんなことないよ」

女子の感は鋭いつてよく分かるね

「きよーにーちゃん今日ご飯食べてくの？」

「そうそういま買ったところだよ」

「わーい、おねーちゃん沙南も食べるー」

すると沙綾は苦笑しながら言った

「はいはい、奥で待ってて」

「はーい」

ドタドタ

「元気だないつも」

「ほんとですね、響也先輩も奥へどうぞ」

パンを渡しながら沙綾が言う

「ありがとうございます」

俺は奥へ向かった

「ご馳走様でした」

いやーいつも思うけどこれ以上のパンは無いね
特にクロワッサンなんて極上だよ

コトツ

「先輩お茶です」

「ありがとう」

なんか新婚みたいなの？やり取りをして俺はふと時間を見るためスマホを取り出す…
あれ？

「やっべー今日新作の発売日じゃん忘れてた」

「なんのですか？」

「ゲーム、シリーズ物なんだけど結構発売引っ張られてね

すまんけど買いに行くわ」

そうすると沙綾は少し考え事をした後ふと手を挙げた

「あの、先輩私もついて行っていいですか？」

「いいけど特に面白いこともないと思うぞ？」

「大丈夫です…先輩と出かけられるだけで私は…」

やっぱり聞き取れない

「ならいいんだけど」

「私用意してきますね外で待っていてください」

勢いよく飛び出してく沙綾

「まあいいか」

俺は外に向かった

…てか店はいいのかよ？

「先輩お待たせしました」

「お、おう…」

俺ゲーム買いに行くって言ってたよな？

どこに行くんだ？って言うくらいのおめかしをした沙綾が出てきた

「…先輩どうしたんですか？」

「い、いやなんでもない」

沙綾がジト目になった

「先輩の変態」

「いやいやいや」

「あはは、冗談ですよ」

「心臓に悪いことすんな」

「ごめんなさーい」

はあ…まあいいか

「いこうぜ、」

俺は後ろを向いて歩き出す

「あー待っててくださいよー」

正直見とれてたのは内緒

「へえーすごい色んな種類があるんですね」

俺達は街のゲームショップに来ていた

「まあ家庭用機からPC、今ではスマホもゲーム機として機能してるくらいゲーム人口がいるからね」

「そうなんですネ」

「沙綾はゲームとかしたことないのか？」

ふと聞くと沙綾は少し考える

「うーん…小さい頃はやってた記憶があるんですけど最近はどうか中学上がってから

今までは全くやってませんね」

「まあ家の手伝いから学校行ってるし忙しいわな」

「そうなんですよ、自分の時間といえば香澄達と練習とかライブする時しかないですかね」

「あんまり無理して体調崩すなよ？」

…つとあつたあつた」

俺はお目当てのソフトを見つける

「それが言ってたやつなんです」

「そうそうDIVAQuest 《ディーバクエスト》略してディークエ

簡単に言えば歌姫達を仲間にして魔王を倒すっていう王道のRPGなんだよ、

でも戦闘の時のスキル使う時とかに音ゲー成分があるから単調に成りにくくて飽きずに進めていけるのがこのシリーズの特徴なんだよねそれにキャラが皆個性的でしかも有名所の声優さんが声当ててるフルボイスだから耳も幸せだしね

今作では新キャラも増えててスキルやモンスター、それにダンジョンの裏や着せ替え、あ、あと主人公のグラフィックもいじれたりするからほんとに自分が中に入って物語に係わってるみたいなのが俺的に心揺さぶられるんだよねしか「先輩!!」おうっ!?!」

見るとジト目の沙綾が

「…少し落ち着いてくださいみんな見てますから」

周りを見ると少し注目の的になっていた

「…すまん、つい」

「私はあこや燐子先輩みたいにそこまで知らないですから…」

「まああいつらはむしろ知りすぎてる所もあるから…」

趣味のことになると我を忘れるの頑張つて治さないとな

「ところでそのゲームって一人用なんですか？」

「いやある程度進めたらマルチプレイできるけど」

「マルチプレイ？」

沙綾が首を傾げる

「ああごめんごめん、1人でやるのがソロ、2人以上でやるのがマルチって言うんだ」

「なるほど、それじゃ私もやってみようかな？」

「…え？」

「え？ダメなんですか？」

「いやいいけど新しく始めるとしたらハードも買わんといけないから結構金かかるぞ？」

あ、ハードって言うのは本体のこと、P〇4とか〇witchとかのやつ

まあこれはv i t t o だけだ

「ちよつと待つててください」

そう言うと沙綾は外に走っていった

数分後帰ってくる

「んじや先輩1式買いますんでどれか教えてください」

「ふあ!?!いやいやいやいきなりすぎてついていけない」

「さつきお母さんに電話してきたんですよ、そしたらいいよって言うてくれたんで」

千紘さん、そこは止めないといけないだろ(笑)

…まあ本人が良いって言うてるから俺に止める資格はないし

「りよーかい、てかお金は大丈夫なのか?」

「大丈夫ですお金は使う時間が無くて溜まる一方だったので」

そう言いながら耳打ちで金額を伝えてくる

いやー女子高生が持つてる金額ではないね

色々必要なものを教えて買った俺達は家に帰る道のりを歩いている

横を見るとルルンな沙綾がいた

「そんなに嬉しいのか?」

「いやー何年ぶりになるんだろって言うゲームなんでウキウキしてますよ」

「まあお前がそれでいいなら俺は何も言わんけどな」

そうこうしてる間に沙綾の家に着く

「そしたら俺は帰るから」

「え？帰るんですか？」

「そのつもりだけど」

「上がっていつてくださいよ、やり方も教えてもらわないといけませんし」

「えーでも俺ハード持ってきてないし」

「うーん、分かりました少し待っててください」

そう言っただけで家に入る沙綾、しかし数秒後すぐに戻ってくる

「そしたら行きましょうか」

「いやいやどこに？」

「どこって先輩の家ですよ」

「薄々気づいてたけどさ、店番は？」

「お父さんに聞いたら行っただけで言ってくれたんで」

……今度は父親の方がよ!!

はあ…

「まあ仕方ないか、いくぞ」

「はいー」

沙綾から目線を外して前を向く

その刹那沙綾が歪な笑みを浮かべていたような気がしたが気づくことも無く俺は歩みを進めた

ガチャ

「ただいまー」「お邪魔します」

ドタドタ

「お兄ちゃん！私のプリン食べたでしょー…あれ？沙綾？」

「こんにちは詩歌」

「珍しいねどうしたの？」

「先輩にゲーム教わろうかと思って」

それを聞いた詩歌は俺の方をギロリと向き

「お兄ちゃん…沙綾まで悪の道に引きずり込むんだね？」

いやいや失礼すぎやしないかね我が妹よ

「大丈夫、私からやりたいって言ったやつだから」

「ふーん、ならいいけどさー

お兄ちゃん今から出かけてくるから沙綾に変なことしちやダメだよー
いってきまーす」

「いやしねーから、おい！しい」「ガチャ」…はあ」

全く台風かよあいつは

少し呆れながら沙綾の方を向く

「沙綾とりあえずリビングに向かっておいでくれ

部屋に行つて色々持つてくるから」

「わかりました」

「とりあえずこれで大体説明は終わりかな

そしたら今から自分が操作するキャラでも作つてみ」

あの後自分のゲーム機を持つてきて、お菓子や飲み物を用意した俺は少し説明をして
今に至る

「了解ですやってみますね」

そう言つて沙綾は画面に集中し始めた

俺は自分の分を始めることにした

『それではこれから操作するキャラを作ってみましょう』

俺は何も考えずに自分に似たキャラを作る

いつも色んなゲームのアバターを作る時のようにほぼ無心で、

「先輩！キャラ作りましたよ」

「そしたらゲームの案内通りに進めてきやいい」

「わかりましたしばらくやってみます」

その言葉を聞き俺も自分のに集中し始めた

前作よりグラフィックが良くなり、個人的には満足いくキャラデザである

最初は某有名RPGのスライムさん達をボコるだけのお仕事なんで用意したお菓子

や飲み物を胃に入れながら進める

それから2時間ほどお互いにステレオ音声なのかなと思うくらい独り言で話しながら

らゲームを進め、時刻は17時を過ぎた辺りになっていた

「よし！先輩今日は帰りますね」

いきなり立ち上がった沙綾は帰りを告げる一言を放った

「お、おう」

「次にやる時は一緒にやってくださいね？じゃあさよなら！」

ガチャ

「……」

俺は理解することを辞めた

週末俺は P o p p i n 箱 P a r t y の練習を見る約束のために有咲の家に向かった
た

もうコートに手袋とマフラー無しでは外を出歩けないくらいに冷え切った空気を肺
に仕方なく入れながらも蔵の前に着いたのであった

「…って一人語りしてて虚しくなってくるな」

コンコン

「お邪魔しますよーつと」

ドタドタドタドタ

「せんばああああいいいいいい」

ドスッ

「ぐうえ?!」

俺は扉を開けた途端に突っ込んできた香澄のタツクルをモ口にくらい情けない声を上げながら後ろに吹っ飛ばされた

「つつう、何すんだよおい!!」

「先輩先輩大変なんですよ!!」

「俺の身体の方が大変なんだが?」

「沙綾が、沙綾が」

「っ!?!沙綾がどうかしたのか?」

「とりあえず来てください」

俺は引っ張られ下に向かった

「あれ見てくださいいよ」

「ん?」

香澄が指さした先を見ると

「ってなんだ沙綾がゲームしてるだけじゃねえか」

「それはそうなんですけど私達が話しかけても一切受け答えが無くて…」

「それにこんな沙綾じゃねえから、さっさと治してくれよ先輩」
「有咲…」

少し不安そうにしながら有咲が目の前に来てそう言ってきた

「どうせ先輩が進めたんだろ？あのゲーム」

「間違っちゃいけないけどあつてもないんだよなあ」

『沙綾パン食べたい』『沙綾ちゃんチョココロネ食べる？』

沙綾の近くではたえとりみが説得？を試みているようだが沙綾は一切画面から顔を上げようとしない

「まあ俺のせいでもあるからとりあえず何とかはしてみるさ」

俺はそう言いながら沙綾に近づく

「おい沙綾いくらなんでもハマりすぎだわ」

ギロリ

「っ!？」

「…あら先輩じゃないですか？見てくださいよ私大分強くなりましたよ!」

…こちらを光の無い目で見つめてきた沙綾はゲーム画面をこちらに見せそう言う

「先輩の手助けと思つて色々スキルも覚えましたがそれに色々素材も集めたんで後で渡しますね」

こういう時は主人公はあれしてたよなよし

「沙綾」

ギョツ

「ぴいつ!?せ、先輩何してるんですか!?みんな見てますから」

パシ

「おつとつと、元に戻ったな」

「さあやああああ」

「香澄い?急に抱きつかないでよってか有咲やおたえにりみりんまで?つてくすぐった
いよあははははは」

揉みくちやになつてる沙綾を見て俺は一段落着いたのを確認して

「よし、時間が惜しいから練習始めるぞ!」

「「「はーい!」」」」

ゲームは時として人を変える…

ふふ全く面白いもんだ

「先輩きもいです」

「きもい言うな」

沙綾は飛びつきりの笑顔だった

…やっぱり笑顔が一番だよ女の子は

ふふふふ、先輩!!

ツギハイツシヨニシテモライマスヨ?
ワタシタチノ『遊技』ヲネ?

第11話 A serious girl is co n f l i c t e d

「ふあ〜…」

おはようございます響也です

月曜日って憂鬱な気分になりますよね…

別に勉強が嫌いな訳では無いんですけどそれならゲームしてたいな〜とか思っ
てしまおう次第で『あ!!響也さん!』

パタドタ

「お?ひまり達か」

後ろから声を掛けてきたのはafterglowのみんなだった

「おはようございます!一緒に行きませんか?」

「いいよ、1人だったから退屈してたんだ」

「やったー」

すると蘭に耳打ちでこう言われる

「響也：あんまり一人でブツブツ喋ってない方がいいよ？」

「仕方ねえだろ独り言多いのは自分でもわかってるんだけど」

「まあ響也が気にしてないならあたしは構わないけどね」

そう言いながら離れてった

「蘭何話してたんだ？」

「もしかしてデートのお誘いー？モカちゃんも行きたいなー」

「違うし、モカ変なこと言わないで」

「蘭ちゃん顔真つ赤だよ？」

「つぐまで：いい加減にしないと怒るよみんな」

「わー蘭が怒ったー逃げろー」

「モーカー！ただじゃ済まさないからね」

モカを追いかけて蘭が行ってしまった

「蘭も大変だな：てかお前らもあんまりからかってやるなよ？」

「大丈夫ですよ、私達もやっていいラインを弁えているつもりなんで」

「まあお前らがそれでいいならおれは何も言わんけどさ」

唐突につぐみからこう言われる

「あ、そうだ響也さんお昼一緒に食べませんか？」

どうせ今日もリサ達に誘われると思うがたまにはいいか

「今日はまだ先約がないからいいぞ」

「ありがとうございませす蘭ちゃん達にも伝えておきますね」

つぐみの笑顔にはいつも癒されるんだよなあ

…残り2名からの凍てつく様な視線は見ないふりをしながら俺は通学路を進んで
行った

はあ…

あ、皆さんおはようございます！つぐみです

今は3時間目と4時間目の間の休みで、私は放課後に生徒会で使うプリントを取りに
行く為に廊下を歩いています

あ！最初のため息は面倒くさいから出たとかではないんで安心してください

…理由ですか？うーん…まあいいか

実は少し悩みがありました

恋…についてなんですけど

私だって女子校生なんで色恋沙汰の一つや二つ興味がありましてですね、しかも私にはいま気になってる男の子がいるんですけど…誰とはいいませんよ？

でもその男の子は競争率がかなり高くて…あはは…

しかも多分なんですけど幼馴染達全員にさらにバンドで知り合ったほかのバンドさん達もきつと…

私って地味だから目立たないですしきつと蘭ちゃんやモカちゃんとかの影に隠れちゃってますよね

どうすればきよ…その男の子に振り向いてもらえるのかな？

…って

「あれって響也さんだよな？ どうせなら少し話していこーつと」

私は少し早足になって言葉を紡ごうとする

「きよ『響也くん！』っ！」

私は咄嗟に隠れた

見ると先に声を掛ける人がいた…あれは2年生かな？

「響也くん、クッキー作ってきたの、食べて？」

「お？マジで？頂くわ、…うん美味しいな」

「やったね、時間かけて作ったかいあった」

いいなあ、お菓子なら私も作れるのに…

「きつといい嫁さんになるなこんだけなら」

「もう…響也くんだったら、思ってもない事言つて」

…響也さん、いつも一言多いんですね

「あ、時間」

私は少しモヤモヤした気持ちでその場を立ち去つた

「いやー腹減つたなー」

「きよーやくん、早く中庭に行こうよー」

4時間目が終わり、今は響也さんを連れて中庭に移動中

巴ちゃん、ひまりちゃんは飲み物を買に行つてるらしくここにはいない

モ力ちゃんが響也さんに引つ付けて蘭ちゃんと私が後ろから着いていつてる

「モーカ、あんたいい加減離れたら?」

「えー?なんでー?」

「響也歩きにくいでしょ」

「そんなことないよー、きよーやくんもあたしにくつつかれて嬉しいと思うよー」

ギュー

あ、モカちゃん腕に抱きつく力強めたね

「モカ、暑苦しい」

「ひどいよーきよーやくん、この可憐な乙女に暑苦しいなんてー」 シクシク

「それでも抱きつくの止めないモカもどうかと思うけどね」

「らーん、もしかして嫉妬ー?」

「ち、違うし別に羨まし…響也のバカ」

「なんで俺なんだよ!?!」

いいなあ私もそういう風に自然に混ざりたいなあ

と言うより私だけを見てくれると一番いいんだけど

「…つぐー、どーしたのー? 顔怖いよー?」

「へ? あ、ごめんごめん考え事してたの」

「…なんでもないならいいんだけどー」

危ない危ない、昔からモカちゃんは色々鋭かったからね

「もー、みんな遅いよー私お腹ぺこぺこだよー」

「すまんなひまりに巴、モカのせいで遅れたわ」

「なんであたしのせいで!?!」

「いや、モカ、それ見たらいくらあたしでも察するぞ?」
「えー、…てへっ」

やっぱりみんな集まると安心するなあ

私はみんなの影に隠れる月のような存在で満足しちゃってる
ちよつと前まではそう思っていた

でもそんな私に光を照らしてくれる太陽が現れたんだ…

私も表に出ていいのかな?

…ああそっか、最初からそうすれば良かったんだね

「…ふーん、つぐもかー」

「響也さん!放課後って暇ですか?」

俺って放課後暇なのバレてるの?…っていうくらい毎回のように誰かが俺を呼びに来る

今回はつぐみだった

「まあ暇だがどうかしたの?」

「私生徒会の仕事がこの後ありまして響也さんに手伝って欲しいなど

プリント廊下に貼るんですけど量が多くて…」

「そんな事か、了解」

「ありがとうございます！」

近くにいたリサに声をかける

「すまんなりサ、そういう事だから先に帰っててくれないか？」

「おっけ、友希那にも伝えておくね、また明日」

「…よし、んじやさつさと済ましちまおうぜ？」

「あ、はい！」

やったー響也さんとフタリきりにナれる

「……………」

「しっかしこんな量のプリント1人で貼るとかつぐみいじめられてんの？」

そう思いたいくらいの量だった

「そんな、いじめられてる訳では無いですよ？」

単純に振り分けされてる量がこれなだけです

ほかの皆さんも別の作業してるんで」

「だといいんだけどさ…ほい画鋏」

「ありがとうございます…んっしょっと」

手伝いつていつても俺がプリントと画鋏持つてつぐみに渡していく感じか…そこま
で時間かからなさそうだな

「響也さんって…」

つぐみが声を出す

「んっ…」

「…いやなんでもないです、忘れてください」

「お、おう」

「響也さんプリントください」

「あ、はいはい」

つぐみの目が少し怖かった

フフフフ…イヤア、アハハハハ

そんなこんなで小一時間

「これで最後ですね」

「終わったな」

俺は軽く伸びをする

「あ、…」

「どした？」

「もう一個仕事残ってるの忘れてました」

「なんだつぐみらしくないな」

どうせだからそつちも手伝ってやるよ」

「本当ですか!? ありがとうございます!」

「んでその仕事って？」

「用意するものがあるんで着いてきてください」

「わかった」

「つてここつて確か使われてない倉庫だったんじゃねえの？」

俺がつぐみに連れてこられたのは校舎裏の普通の人なら全く気づくことないような場所に建っている開かずの間とまで言われている何が入ってるのか全くわからない倉庫だった

俺は屋上で眺めている時に視認していて場所は知っていた

「そうなんですけど生徒会のみんなや先生ですら中に入ってるものが分からないらしくてこの度調査することになりました……」

運悪く当てられてしまいました」

ガチャガチャ

「いやこれはさすがに生徒会の仕事じやな『ガチャツ』」

「開きました、さあ行きますよ響也さん！」

「忘れてたー、つぐみが責任感強いやつなの忘れてたー」

ギョツ

「で、でも怖いんで響也さん先お願いします」

「俺かよ!?…まったく仕方ないな」

俺は扉に手を掛ける

んっ！なかなか固いな錆び付いてんのか

「うらあああ」

ギイガラララ

「空いたな…つて中は結構暗いしなんか空間が「えいっ！」えっ?」

突然の後ろからの衝撃で俺の体は浮遊し中に飛び込んでしまう

後ろにいたのつてつぐみしか居ないはずなのに

ガラララ、…ガチャ

「やーつと二人きりになれましたね…きよ、う、や、さーん」

パチイッ

電気が着いてつぐみの顔がはつきり見える

…歪んだ笑みを浮かべる様子もハッキリと

「おいおい冗談だろ?」

「冗談?何を言ってるんですか?」

とびきりの笑顔を見せるつぐみ

「つぐみ、怒らねえからこんなの『ビュッ、ザクッ』ンヒイッ」

顔の数ミリ横に着弾したのはハサミだった

「あ、勝手に動かないでくださいね?私何するか分かりませんよ?」

「お、おまおま、ハサミはさすがに死ぬ「死にますか?」」

つぐみは近くにあったカッターをカチカチしながら言う

「大丈夫です私に従ってくれれば何もしませんので」

……こいつ目が本気だな

つて光が無いから分からないけど

「わ、分かったよ」

「それでは質問です、響也さんが一番好きな人は誰ですか？」

……は？

「いきなり何を言い出すのかと思ったたら、そりやみん『ブンツ、ザクツ』へあつ!？」

カッターが飛来する

てかコントロール良くないですかね？

「みん……？誰ですか？と聞いてるんですよ？複数いたらおかしくありませんか？」

……考える俺こういう時ギヤルゲーではどうという返答してた？

……

あ、あれで行こう

「も、もちろんつぐみだよ」

「……」

あれ？……もしかしてミスった？

「ふふふふ、やっぱり私たち両思いだったんですね？良かったです」

ほっ…合ってたみたいだな

てゆーか俺ゲームの知識しか使えないの何とかしねえと

「それでは質問2つ目です、愛し合ってる2人が行う行為とは何ですか？」
考えろ俺、一番当たり障りのない返答を…

よし

「…結婚か？」

「ぶぶー残念違います

響也さん私が好きだからって先に進みすぎですよー」

そう言いながらつぐみは上着に手を掛ける

「正解は、性行為で、す、よ？」

いやいやいやいやさすがにこれ以上は「つぐー少しやりすぎだよー」

この声は

「モカ（ちゃん）!?!」

シユタツ

「モカちゃんさんじょー」

つてちよつと待て

「モカどこから？」

そう聞くとモカはいつも通りののんびり口調でこう答える

「んー？どこからって窓からだよー…そんなことよりー」

俺から視線を外すとモカはつぐみにその目を向ける

「つぐー？いくらなんでもやってはいけないんじゃないー？」

モカの突然の登場に焦ってるつぐみ

「そ、そんなこと言ったって私はこれくらいしないと気づいてもらえないから」

「これ以上やるならあたしにも考えがあるよー？」

いつものおっとり口調の中にもものすごく威圧感があった

「考えて何？」

「ふっふっふー…えいつ」

ギョッ

「…へ？モカちゃん何私に抱きついてるの？」

「大丈夫だよつぐは可愛いから」

「もももモカちゃん何を「あたしはよく分かるよつぐの気持ち」

「あたしもほら、なかなか気持ちに分かってもらえない感じでしょ？」

モカ…普通に話せたんだな

小さい子に言い聞かせるみたいに頭を撫でながらモカの言葉は続く

「でもあたしも素直になつたからきよーやくんに抱きついたりするようになったんだよ
つぐにも出来るよ、あたしより感情表現上手いから

大丈夫大丈夫」

「うん……めんね……うええーん」

「よしよし……きよーやくん少し目を閉じて耳を塞いでてねー」

モカの真面目な声に俺は従わざるを得なかつた

「お、おう」

俺は短い間暗闇に身を任せることにした

トントン

「ん？もういいのかモカ？」

俺は目を開ける

「ううん私だよつぐみ」

目の前にいたのはつぐみだった

少し目の周りを赤くしてこつちを見てくる

「つぐみだったか、あれ？モカは？」

「モカちゃんなら先に帰ったよ、お邪魔虫は退散するーとか言いながら、ふふふ、気、使われちゃってるね」

さつきとはまるで違う優しい笑みを浮かべる

「そっか」

「き、響也さん！」

「ん？なんだ？」

「私負けないよ！たとえ蘭ちゃん達やみんなと響也さんを取り合うことになっても絶対引き寄せてみせるから」

「つぐみ…」

「大丈夫響也さんは優しいからみんなの事全員等しく思ってくれてるのは分かってる

けど少しだけでも私にその目を向けてもらえるだけで幸せだから今はね」

言葉を一旦止め真剣な眼差しでこちらを見てくる

「…だから」

チユッ

「覚悟しててね！響也さん！」

俺はその日多数の子から好意を寄せられていることを思い知らされた

拝啓、妹よ、俺は青春？を上手く過ごせてるか分かりません…

第12話 孤高の少女は夢を見る

こんばんは響也です、今は学校が終わりRoseliaの練習を見て家に帰ってる途中です。

友希那達は寄るところがあるらしく俺一人で帰ってます

べ、別に寂しくなんてないんだからね！

はあ：我ながらキモいな

「とりあえず帰ったら何しようかね」

宿題は配られたらその時間に終わらせるしまず予習などやる必要も無い

楽器なんて弾くこともないから基本は夜は暇になるのだ

中学の頃それを友人に言ったらグーパンされたよびつくりした

まあガチで殴ってきたわけではなかったみたいだから笑い話になってるけどな

きょうやー

「…う？今誰かに呼ばれたような」

きょうやつてばー

なんか後ろから聞こえるような気がした

後ろを振り向くと少し遠くから見たことある金髪をなびかせながらものすごいスピードで突進してくる女子がいた

「響也ー！」

俺は本能的に避ける

その女子はついさつきまで俺がいた場所をものすごいスピードで通り過ぎたと思いきや3 m位先で急停止していた

いやいやいや

「…こころ俺を殺す気なのか？」

「何言ってるのよ響也、あたしがあなたを殺すわけないじゃない」

キョトンとした顔で首をかしげながら言うところ

「さすがに今のスピードで突進されたら俺吹き飛んじまう」

「あらそう？響也なら受け止めてくれるかと思っただけど思い違いだったかしら」

「…いつは本当にそう思ってたから余計にタチ悪い」

「はあ…気をつけろよ」

俺は考えることを諦めることにした

「つてこの時間に外にいるの珍しいなこころ」

「さつきまで美咲達と一緒にいたんだけど響也がこつちにいる気がしたから走つてきちゃったわ」

…こいつにはレーダーかなんか乗ってるのか？

「まあいいか…花音達にはちゃんと謝つとけよ？」

「わかってるわよ？とこころで響也晩御飯の予定はあるかしら？」

「そりや多分詩歌が作ってるだろうけどどうかしたのか？」

その言葉を聞いたこころはおもむろにスマホを取り出し操作し始めた

数分待たされたがスマホをしまつて顔を上げたこころはこう言う

「詩歌に聞いたら大丈夫つて言つてたわ、さあ響也一緒にディナーでもいかが？」

そう言えば同じ学校だったな…まあ美味しいご飯が食べれるのは俺的には有難いのでこう返す

「そういうことならありがたく」

「そここなくつちや」

キキィー！

ガチャ

「こころ様お迎えにあがりました」

「いいタイミングね！さあ響也乗って頂戴」

「あ、ああ…」

いつもタイミングが恐ろしいな黒服さん達は

「あたしは少し用意するものがあるからこの部屋で少し待ってて！」

響也を応接室に無理やり押し込んだあたしはとある目標を成し遂げるためある場所に向かった

「お邪魔するわ！」

トントントン

「…こころ様!?!どうなされましたか？完成までもうしばらくかかりそうなのですか？」

そうあたしが来たのはキッチン、…台所？厨房？まあどうでもいいわ

「北川…少し頼みがあるの」

北川はあたしが小さい時からここで料理を作ってくれてる専属のシェフ

その北川は包丁をまな板においてこつちにやってきた

「こころ様いきなりどうしたんです？、まあ私めに出来ることであればなんでも致しま

すが」

あたしは考えてたものを言葉にする

「今夜の1品にあたしの作る料理を加えて欲しいの」

ガタガタドタバタ

いろんな場所から何かが崩れるような音がしたがあたしは特に気にしなかった

「こ、こころ様どうしていきなり…今まで料理をした事なんて1度も」

「どうしても作りたいのよ」

すると北川は少しニヤつくような顔になった

「…なるほどあの男の子ですか」

その言葉を聞いた途端あたしは顔が熱くなる

「べ、別に響也のためじゃないわよ？ただ料理を作りたくなっただけよ」

「ふふふ、そういうことにおきます」

「もう…お父様に言いつけるわよ？」

「申し訳ございません、それで料理ですね」

にこやかに流されてしまう

うう…北川の馬鹿

「こころ様は何が作りたいのですか？」

あたしは考え込む……でも食材のこともあるし

「そうね、今から作れそうなものって何かあるかしら？」

「そうですね……響也様はどういった料理がお好きなんですか？」

あたしは前に聞いた情報を元にそれを伝える

「響也は確かハンバーグとかカレーとか子供が好きなのが好物みたい」

それを伝えると北川は少し悩んでこう答える

「そうしたらオムライスなどがでしよう？直ぐに作れますし多分ですがお好みだと
思われます」

「素敵な意見ね、早速教えて頂戴！」

「かしこまりました」

あたしにとって初めての料理教室が開かれた

ガチャツ

「お、お待たせ響也」

あたしはオムライスを作り終えて着替えたあと応接室で待っている響也のところに
来た

「おう！遅かったな」

「少し着替えるものに悩んで」

「そうか」

「何してたの？」

響也が何かノートに書いてるのを見て質問する

「これか？これはみんなの練習のスケジュールや個人個人のメニューなどを書いた極秘書類だ」

本当に響也つてみんなのことよく見てるわよね、少し嫉妬しちゃうわ

勘づかれないようにしながら言葉が発する

「そうなのね！さっすがあたし達の先生なだけはあるわ！」

「大袈裟だよ、それにいまは多分お前の方が俺よりも演奏の技術やパフォーマンスが上だろうし」

「そんなことないわよ！最初に響也のピアノ聞いた時本当に感動したんだから」

「それだと良かったわ弾いたかいがあるって事よ」

コンコン

ビク、きつと北川ね！

「いいわよ！」

ガチャ

「失礼致します、お食事のご用意が出来ました」

「ありがとうございます！さあ響也移動しましよ？」

「おう」

移動してきた俺たちを出迎えたのは豪華絢爛な料理の数々であった

やべえ…

「どうぞ響也様こちらのお席へ」

「あ、ありがとうございます」

俺は導かれるがままに席に座る

「はじめまして、弦巻家で専属シェフを務めさせて頂いております北川と申します、本日はありがとうございます」

少し割腹のいい白い厨房服を着た男の人が言う

流石お金持ちは違うな専属シェフとかアニメでしか見たこと無かったのに

「それでは失礼致します、ごゆっくりお楽しみください」

一礼して部屋を出ていく北川さん

「それじゃ響也頂きましょうか？」

「ああ、どれも美味そうで目移りしちまう」

「いただきます」

二人きりの晩餐会が始まった

いやー満足満足

どれもこれも美味しかったなー、でもオムライス食べてる時だけこころがこつちを
ずつと見てきたんだけどなんでなんだろ、美味いって言ったらガッツポーズみたいなの
ともしてたし

まあいいか

「こころ今日はありがとな、時間も時間だしそろそろ帰ることにするわ」

「あ、ちよつと待って響也送ってくから」

ガタツバシヤツ

「あ、」「あ、」

こころが慌てて立ち上がったためコップが倒れておれに中身がかかってしまった
冷たい飲み物でよかった

「どどどどどうしましょう…」

珍しくテンパるころ

「大丈夫だつてこれくらい帰つたら洗濯すればいいんだから」

「そうはいかないわ！佐々木！」「は！」

佐々木と呼ばれた黒服さんがいきなり現れて俺はなすすべもなく連れてかれてしまった

ダレカタスケテ

カポーン

「はあ…飯食わして貰つた挙句風呂までご馳走になるなんて、

しっかしでかい風呂だな」

佐々木さんに身ぐるみ剥がされて風呂に投げ込まれて今に至る

まあ極楽だから俺的には有難いんだけども

「しっかしこつちに来てから色んなことが起こつたもんだ

女子高への転入、個性豊かなガールズバンドと出会い、あまつさえ好意を抱かれているとは人生どう転ぶか全くわからないものだ」

千聖に沙綾につぐみ…男として最低なことしてるよな俺
しかも返事すらしてないし

「ちやんと考えて答え出さないと…」

ガラガラ

「し、失礼するわ!」

「おわつちよ!!」

変な声が出てしまった

こころがタオルを身体にまいていきなり入ってきた

「…おわつちよ?変な言葉ね」

「(こころ)こころ!?!おまなにして」

「な、なにつて…そう背中を流しに来たのよ」

「流石にそれはやばい俺上がるわ」

急いで風呂から立ち上がろうとする

「ま、待つて!出ようとしたらさ、叫ぶわよ!」

「社会的に俺を殺すつもりか!?!」

「あ、あたしだって恥ずかしいんだからわかってよ響也…」

俯きながらボソボソと発せられる声に俺はなんとも言えない気持ちになる

よく見ると顔が真っ赤だ

「わ、わかった、任せる」

俺は色々と考えないことにしてこころをなるべく視界に入れないように立ち上がり鏡の前の椅子に座る

もちろん腰にはタオル巻いてるぞ？

佐々木さん絶対わかってタオル巻けていったよな？だよな？

「それじゃ洗うわね」

こころはスポンジを泡立てておっかなびつくりの状態で俺の背中を擦り始めた
すごく優しい手つきで壊れ物を扱うような感じだった

「んっ…響也、背中おっきいわね」

「そうか？よくわからんが」

ん？擦る手が止まった？スポンジも離れたがどうかし

ギョツ

「え？」

「…あつたかいわ」

こころが抱きついてきた、背中に柔らかな感触が…かなりでかいな…って違う違う

「お、おいこころ」響也「」

「あたし響也が好きみたい」

こころの突然の告白に言葉が出なくなる

「どうせ響也の事だからあたし以外からも告白されてるのはわかってる

しかもわからないなりに他のみんなも多分響也が好きなのも分かる

本当のことを言うところのまま響也を縛ったりして閉じ込めてしまえば独り占めでき

る、でもそれだとあたしは嬉しくても響也はきつと喜ばない

多分あたしは響也に嫌われると生きていけないと思う

でもあたしも子供じゃないから今すぐとは言わないわ

みんなの事もちゃんと見てよく考えて答えてくれればいいから」

「……ろ……」

スツ

俺から離れて立ち上がるこころ

それに釣られて俺は視線をこころに向ける

「あたしは待つてるわ！まあアピールは少し強めにいくわよ！」

ビシッ

こころはポーズをとる

あれ？そんな勢いよくタオル姿でポーズなんてとつたら

パサツ

「あ、」

「へ？……きやああああああ」

ブンツ

俺の目に映ったのはとても美しいこのころの産まれたままの姿とそのすぐあとに鋭く振り抜かれた足の甲であつた

その後気づいた時には家にいた俺はこころに謝罪のメールを送って眠りについた

ピピピピカチツ

んんー、よく寝た

「さて今日も学校に行きますか」

色々用意を済ませた俺は鞆を肩にかけて家を出ようとする

ピンポーン

ん？誰だろ

ガチャッ

「どちら様ですかー？つてこころじゃないか」

「き、響也おはよう、昨日のことを謝りたくて」

「い、いやむしろ俺が謝らないといけない」

「どうしたのー響也ー？とこころじゃん珍しー」

「こころと謝り合つてると聞き慣れた声でした

「お？リサと友希那早かったな」

「あ、リサじゃない！」

「こころも一緒に登校する？途中まで一緒だし」

「ええ、そうするわ！」

「それでね…」「ほんとにー？こころ面白すぎ」

前に2人が歩いてる状態で後ろから俺と友希那がついていつてる

「響也、弦卷さんと何かあったの？」

「ブツ、…何も無いぞ？」

友希那は一瞬ジト目で見てくるが直ぐにいつものポーカーフェイスに戻りこう言う

「まあ何があったかはわからないけど犯罪はダメよ?」

「さすがにそれはねえよ!」

そんな感じで和気あいあい?とした会話をしながら通学路を進む俺たち

ふと何かを感じた俺は目線を前に向ける、

横断歩道を渡り始めた小学生の女の子が目に入った

…その向こうからトラックがスピードを出して走ってくる姿も

「クソがっ!」

俺は足の筋肉に全神経を使って走り始めた

「「響也!」」

3人の声が聞こえるが俺は前だけ集中する

間に合え…間に合え…間に合え…

「間に合えよおおおおお!!」

俺は女の子をすんでで突き飛ばす、怪我はするだろうけど仕方ない

キイイドントツ

ズザアアア

「嘘でしょ……」

「いや、響也、そんな……」

「いやあああああああ」

直ぐに救急車が呼ばれ病院に運ばれ手術を受けた響也は何とか一命を取り留めた
だけどまだ目は醒めない

ガラガラ

「リサチー……響也くんまだ起きてない？」

「日菜、それにみんなも」

あたしが一足先にお見舞いに来ててその他のみんなが到着した

「……本当に人の為に動くんだから」

友希那が寂しそうに言う

本当だよいつもは面倒くさそうにする癖に人のことばかり気にする性格

グスッ

「私、私……」

「彩……」

みんなの目に涙が浮かび始める

あたしも泣きたいけどいまは違うそうじゃない

「みんな響也は死んでないんだからさ

起きた時に笑顔でいてあげないと」

「そうですね、今井さんの言う通りです」「…ん」

「え!?!響也!?!」

「響也さん!?!」「響也くん!?!」「響也先輩!?!」「きよーやくん!?!」

あたし達はベッドに集中する

響也が気がついた!

「ここは…見慣れない天井、んしよつと、いつ」

「き、響也焦って起きたらダメだって」

あたしは急いで身体を支えに行く

「あ、ありがとうございます…」

「…?どういたしましてまだ気がついたばかりなんだから」

なんか違和感がある

「とろで…」

「あなたはどちら様ですか…？」

第13話 A world where various emotions are swirling

「あなた達はどちら様ですか…?」

その言葉を聞いた途端あたしの頭が真っ白になった

「き、響也何を言ってるの…?」

友希那も珍しく狼狽している

「響也…?それは僕の名前ですか?」

「じ、じよーだんはよくないよー?きよーやくんホントはわかって言ってるでしょー?」

モカもこの有様

「…ごめん、よくわからないんだ」

シーン

「記憶喪失ツスよねこれ…」

「多分麻弥ちゃんの考えてる通りだと思う…」

みんなの顔に影が指す…

とりあえずあたしはみんなに声をかけようとする

ガラガラ

「えっ!?!」

みんな揃ってるはずなのに開く扉

不味い多分詩歌だ、この現状を知られる訳には行かない

「お兄ちゃんの着替え持ってきましたよサキさん…あれ？」

お、お兄ちゃん気がついたの!?!」

詩歌が響也が起きてるのを見るなり荷物を足元に落としてこっちへ急ぎ足でやってくる

遅かったか…

ギョッ

「お兄ちゃん心配したんだから…ううグスッ」

「し、詩歌あのね?」

あたしは詩歌に説明しようとする

だが先に口を開く者がいた

「しーか、あのねよく聞いて欲しいの」

「か、香澄待って！」

あたしは香澄を止めようとする、しかし

「どうしたの？香澄」

ダメ…それ以上は…

「響也先輩、…記憶が無いみたいなの」

時間が止まったような気がした

いや正確にはみんなの動きが止まったからではあるが

数秒後、焦った詩歌の声が響く

「へ？…いやいやいやいくら香澄の言葉とはいえそれは信じられな「ごめんね」

響也がおもむろに口を開く

「僕には君たちが誰なのかはわからないんだ、自分の名前が響也…？だということもついさつき知ったし」

「そ、そんな…お兄ちゃん嘘だつて言つてよやだよやめてよ、そうかみんなあたしのこと騙してるんだなーほらはやくドッキリ大成功とか誰か言つて「詩歌！」っ！」

あたしは詩歌を真っ直ぐ見てその後首を横に振る

それをみた詩歌は顔をくしゃくしゃにして泣き出した

香澄が抱きしめて慰めている姿をあたし達全員はただただ見てるだけしか出来なかつた

「皆さん取り乱してすいませんでした」

すっかり目の周りを真っ赤にさせた詩歌は落ち着いたようだった

「いいのいいの一番悲しいのは詩歌だつて分かつてるから」

「むしろ私的にはしーかのそんな姿見て安心したまであるよ

普段そんな姿見せないからね」

「恥ずかしいです…」

「ところで…」

響也が口を開いた

「僕と皆さんの関係をお聞きしたいんですけどいいですか？」

まあ当然だよねこんなに女子に囲まれたら普通怖い

詩歌がまず口を開く

「まずは私から、菅谷詩歌、妹だよ！」

「詩歌ちゃんね、…ふむふむ妹か幸せだなこんなに可愛い妹がいて」

「か、かわ…もうからかわないでよお兄ちゃん」

「そんなつもりはなかったんですけどね」

兄弟の会話を聞きながらあたしはふと悪い考えが頭に浮かぶあれ?…もしかしてこれ有利な位置にたてる?

ニヤリッ

あ、約数名多分同じ考えに至ってるような顔をしてる

「つぎはあたしかなー?」

そう言つて響也に近づいて行つたのはモカであつた

チツ! 出遅れた…

あたしもみんなも苦虫を噛み潰したような顔になつていた

「あたしはー青葉モカついていきますー、気軽にモカちゃんつて呼んでねー?」

んできよーやくんとかんけいはー」

ギユッ

「きよーやくんはあたしの彼氏さんなのだー」

「…え、…ええー!?!」

響也と詩歌が両方ともすごい顔をして驚いていた

もちろん嘘だとわかつてるのであたしを含めみんなはジト目でモカを睨んでいた

「モカ…流石に冗談が過ぎる…」

青筋を浮かべながら蘭が冷ややかな声を上げる

「ふっふっふー、あれー？蘭なんで怒ってるのー？きよーやくんのことはきにならないんでしょー？」

「ツ!?…モカいい加減に「何ー？蘭はー邪魔がしたいのー？やっぱりきよーやくんのこと好きなんじゃーん」そ、そんなことないし…」

「あら、モカが彼女なら、あたしは弦巻こころ、響也はあたしの許婚よ？」

……

「こころー少し黙ろうかー？」

「あら美咲？本当の「いいから口閉じて」モゴモゴ」

「俺そんなに何人も手を出してたのか…人として最悪じゃないか…」

響也が人知れずダメージを受けていた

いやむしろ出さなくてやきもきしてるんですけどみんな

「とりあえず皆さん落ち着いてください!!」

紗夜の一喝によつて静まる病室…てかここの病室なの忘れてた騒ぎすぎたの反省しな

きゃ

「誰が彼女だ誰が許婚だ誰が奥さんなど今は関係ないではありませんか」

「いや紗夜奥さんは誰も言っ「なにか？」…いえ何も」

まさに触らぬ神に祟りなしであった

「今は響也さんの記憶を思い出させるのが先でしょう」

「おねーちゃんの言う通りだよ！流石のあたしもその言い争いはるんって来ないよ」

「「ごめんなさい…」」

「わかればよろしい、では響也さん」

「は、はい」

完全にライオンに狙われたシマウマのように震え出す響也

「…そんなに怯えなくてもいいでしょうに、流石に傷つきますよ」

「ご、ごめんなさい」

「あと皆さんには敬語ではなくタメで話していたので響也さんも意識して話してください」

「」

「は、は…わかった」

「では響也さんにくつか質問しますますは…」

紗夜による質問が続いた

「なるほど…ほとんど、とうか全てにおいての記憶が無いみたいですね…」

約10分の時を経て紗夜は顔を曇らせながら呟いた

「ごめん…」

響也が目を逸らしながら謝罪の言葉を紡いだ

「響也さんのせいではありませんので気にしないでください」

「どうしたものかしら…」

みんな目を伏せて静かになる

「…音楽…歌」

誰かが呟いた

「蘭…？いきなりどうしたんだ？」

蘭の突然のつぶやきに皆が焦る中、巴が問いかける

「あたし達の歌や音楽を聞かせたら何か思い出すかもしれない…」

「おー、らんーめいあんだねえー」

「あたしも賛成」「私も」

「なるほど…一理ありますね、でもしばらくは入院でしようし流石に病室で演奏する訳

にはいけないでしょう」

「かのシェイクスピアはこういった：

急がば回れと…」

「薫さん、それことわざだよ…」

「とりあえずかおちゃんはこのうちへ来なさい」

「ち、千聖、かおちゃん言わないで／＼／＼って顔怖い、

助けてえ」

あ、薫が千聖に連れていかれた

「とりあえず今日はもう遅いですし帰りましょうか皆さん」

「えーおねーちゃんあたしもう少しいたいよー」

「日菜文句言わないの」

「ぶー」

「とりあえず詩歌さん！響也さんのことは任せましたよ」

「は、はいわかりました」

「おねーちゃんはなしてよーーー」

紗夜が日菜を引っ張って病室を出ていった

それに続くようにみんなが病室をあとにする

「さてとあたしも帰るかな」

「…ごめんね、俺が何も覚えてないから」

「そんなこと言わないのー…でも」

ギョツ

あたしは自分の気持ちを抑えられず響也を抱きしめてしまう

「えっ!?」「そのまま聞いて響也」

「あたしすごい心配した…あの車に撥ねられた時、そして胸が締め付けられたよ誰だ？って言われた時は目の前が真っ暗になりそうなる程に…」

あたしには響也がいないとダメなんだよ…そう気がついた

あたし響也の記憶取り戻すためならなんだってするよ

…だからね」

スツ

…グスツ

「だからちやんと思ひ出してね響也！」

バツ

「そしたら詩歌！あたしも帰るから頼んだよー」

詩歌の返事を聞く間もなくあたしは顔の赤さを隠すように病室を急いで出ていった

……はあ

リサも響也のことが気になってるみたいね

私はリサが響也を抱きしめてるのを見て咄嗟に隠れてしまいそのままリサが出ていったあと病室の外で動けずにいた

「歌ね……、美竹さんもなかなかいいこと言うじゃない」

私は今まで自分の音楽のことばかり考えてた

そのためには色々なものを捨ててきた

友情、恋愛、勉強……数え切れないくらいのものを犠牲にしてきた

そんな私に射した一筋の光、それが響也だった

最初はなんで女子校なのに男がいるんだ？と思ってた

でもリサに紹介されて色々関わるうちに私の視界には響也が居るようになった
いや……それは違う、私が自ら目で追ってたんだ

「……全く私らしくないわね」

こんなコソコソと隠れてるのは性にあわないわ

私は病室に入ろうとする

ガシッ

「!?…誰?」

「あら、あたしのこと忘れたのかしら?」

「…その声は弦巻さんね?」

後ろをむくと長い金髪をたなびかせた弦巻さんがいた

「響也は今記憶が無いんだからあんまり刺激するのはやめた方がいいわ!」

「…弦巻さんには関係ないことでしょう?」

私は弦巻さんの言葉に少し腹立たしきを感じて声を荒らげてしまう

「あら?あたしは至極当然のことを言っているのに何故怒ってるのかしら?」

「つ!?あんまりな事を言っている「あたしも」と…」

急に目を伏せて「こころが言葉を紡ぎ始める

「本当はあたしだって響也のそばにいたいよ…でも今、その役目は家族しかできない」

弦巻さんにしては珍しく表情に影がさしている

「…私たち何に捕われてるのかしらね」

「さあ?それは分からないわ!」

「…でも友希那もあたしも恋という足枷がついているのかしらね」

ふふふ、あはは

私達は静かに笑う

「負けないわよ?」「あたしだって!友希那には渡さないわ」

「でも他の人も手強いわよ?リサとかに本気出されると私たちで太刀打ちできるかどうか…」

「大丈夫よ!響也ならきつとみんなを笑顔にしてくれるはずだから」

「ふふ、そうね」

「さあ今日は帰りましょ友希那?」

「ええ」

私は弦巻さんと他愛もない話をしながら帰路に着いた

第14話 Smile is the number one

決して晴れているとは言いがたい灰色の雲に覆われた空、吹き荒ぶ風は身を凍えさせんとばかりに通過してゆく。

「ううー寒い…さすがにマフラー外すのは早かったかなあ…」

あ、どーもリサです

聞いてくださいよ！

今登校中なんですけど少し嬉しいことがあります

響也今日からまた通えることになったんですね！…記憶はそのまま治ってはいませんが、
んですけど

あの後退院まであたし達は色々と治るように試して見たんですが成果がなくてやっぱり音楽しかないのかなあ…？

…でも正直音楽だと友希那達ボーカル組の印象が強くてそれでもし治ったら嬉しい反面少し複雑な気持ちになります

果たしてあたしがやる意味はあるのかと…

まあでも今そんなこと気にしてても意味が無いので響也と一緒にいれる生活を楽しみたいと思います

「あ、ちなみに友希那はやりたいたいことがあるとか言って先に行ってしまったんで一人で登校しています」

…つてこんなこと言う必要ないか

寒いしさっさと学校に行こうつと

「あーリサちー！」

あたしを呼ぶ声に振り向いたら水色のショートカットをたなびかせて見知った顔が走ってきた

…てか呼び方的に1人しか居ないけど

「おはー！日菜にしては珍しく遅いじゃん」

「え？あたしはいつも通りだよ？リサちーが早いじゃん」

そう言われてあたしはスマホで時間を確認する…あれ？

「ほんとだ…」

「…リサちー響也くんに会いたくて無意識に早く出てきたんじやない?」

「すごいニヤニヤしながら日菜はあたしをおちよくつてくる

「べ、別にそういう訳じゃないけど…」

「嘘下手だねえ、顔真つ赤だよ?」

「そこまで間違つてないから反論できない…」

「リサ先輩!」

「お! ひまりじゃん! それに蘭達も」

「おはようございます」

「どおしたんですか? リサさん顔赤いですよ?」

「モカにまでいじられるか…」

「別になんでもないよ」

「そーですか? それならいいんですけど」

「蘭が気になったのか質問をなげかけてくる

「リサさんが響也と登校してないの珍しいですよね、確か今日から復帰じやなかったで
したっけ?」

「そうなんだけど響也先に病院で少し検査してから来るらしいから早くても2時間目と
かになるんじゃない?」

「なるほど」

すると巴があたしに耳打ちしてくる

「…蘭のやつ響也先輩に会えるって昨日からうるさかったんですよねこう見えて」
「へえーなるほどねえ」

「巴とりサさん何話してるの…?」

やばすぐ後ろに蘭がいる

あたしは誤魔化そうとする

「い、いやなんでもないよ?」 「そ、そうだよ」

「…怪しい」

「ら、蘭ちゃん、今日の放課後なんだけどさ」

「ち、ちよつとつぐ!」

つぐみが強制的に蘭を連れてった

あたしはため息にも似たものを出す

「蘭は昔から妙に鋭いところありますから焦りましたね」

「そうだねー」

「とりあえず行きませんか?」

「あ、そうだね。いこっか」

あたし達は学校に向かった

遅い：何かあったのかな：？

3時間目が終わってなお響也が来ない

検査は30分程度で終わるからって言ってたからそこから来たらもう着いてるはず

ガララッ

「リサちー！響也くん来たー？」

日菜が飛び込んできた

「いやまだ来てないよー」

「そうなの？遅いねー」

「何かあったのでなければいいけど」

「さすがに何も無いでしょ、リサちーは心配症だなあ」

ガララッ

不意に教室の扉が開かれる

中に入ってきたのは見慣れた：いやいつもの優しい彼だった

「みんなおはよう、遅くなっちゃった」

「響也くーん！こっちこっちー席こっちだよー」

「日菜落ち着いて、ほら響也！こっちだよ」

日菜がテンション上がって腕をブンブン振りながら響也を呼ぶ中であたしもつい声を出して呼ぶ

「こんなに喜んであたしもなんかな

「リサさんに日菜さんおはよう、ごめんね遅くなつて」

「っ！さん付けされたことに少し距離が離れた感じがして胸が痛くなつたが記憶がないことを思い出しあたしは無理に作った笑顔で答える

「いいのいいの、まあ何かあったんじゃないかって2人で心配してたんだけどね」

「そうだよー響也くん何してたの？」

「いや、筆箱忘れてたことに気づいちちゃって家まで取りに帰ってたのさ」

「よく迷わなかったね」

「そうなんだよねなんか自分でも驚くほどにすいすい歩いてたから下手したら覚えてたのではないかなと」

喋り方に少し違和感を感じつつもしつかり耳に入れようと集中するあたし

「でも不思議だねー、物事ほとんど忘れてるのに街の道覚えてるなんて」

「多分だけど体が勝手に動いてるだけかもね…あ、そういえば響也今日から放課後みんな

などバンドごとくに過ごしてもらおう感じなんだけど大丈夫そう?」

「あ、うん詩歌から聞いているよちやんと空けてる」

「それなら大丈夫そうだね…ってあれ? 日菜、今日誰とだっけ?」

スケジュールを確認したはずだったんだけどなあなんで忘れたんだろ

「んもう、リサちー忘れたの? ころちゃん達でしょ?」

「ああーたしかころが1番にやりたいとか言ってたんだっけ?」

「そうそう、張り切ってたなーころちゃん」

キーンコーンカーンコーン

「やば、教室戻らなきゃ! 響也くんリサちーまた後でねー!」

バタバタバタ

「相変わらず嵐みたいな子だね日菜さん」

「むしろそれが取り柄なのかも」

ガラフラッ

「おらー授業始めるぞー! 席つけよー」

「はーい」

あたしはお昼のために4時間目に集中することにした

キーンコーンコーンコーン

「よし授業終わり、ちゃんと復習しとけよー」

ガララッ

「んー、はあー、よし響也お昼食べに行こうか？」

「え？教室じゃないの？」

「いつもは違う場所で食べてるんだよ、さ！いこ！」

「ち、ちよつと待ってリサさん！」

いざ屋上へ

「へー、屋上入っていいんだね」

「普通はダメなんだけどね理事長に頼んだらなんかおつけーくれたんだ」

「…それは凄いな」

キィー

「なかなか広いものだね」

「いい天気になったからだけどお昼は暖かくてここは居心地いいんだ」

あたしと響也は話しながら奥にいる人に近づいていく

「リサ遅いじゃない?」

「ごめんね友希那ー」

「…まあいいわ」

「友希那さんこんにちは」

すると友希那は表情を少し影らせる

「…響也こんにちは、やっぱりさん付けは違和感あるわね」

「ごめん…」

「いいのよ響也は悪くないから」

タタタタツ

「リサちー!!お待たせー!」

日菜も来たみたいだ

「あたしもうお腹ぺこぺこだよー!早く食べよ!」

「そうだね食べよつか?」

「それじゃせーの!」

「「「いただきます」」」

あたし達はお昼を食べ始めた

「リサちーやっぱり美味しそうなもの毎回持つてくるよねーねえー!玉子焼き頂戴!」

日菜が顔をずいっと近づけてきてそう言った

「あははーありがとー!はいどうぞ」

「やりー!あむっ…むぐむぐ、おいしー!」

「喜んでくれて何よりだよ…響也も食べる?」

ふとこつちを見ていた響也にあたしは提案する

「え?いいの?」

「うん」

「あ、ありがとう貰うねそしたら」

「ちよつと待って!」

響也は箸を伸ばしてきたのであたしはそれを止める

「はいあーん」

「え?」

「え!」

あたしは箸で玉子焼きを掴むと響也に向かって手を伸ばした

それを見た日菜と友希那は驚愕した顔をしていた

「あ、あーん」

戸惑いながらも響也は玉子焼きに口を近づける

パクッ

「んぐんぐ…あ、美味しい」

それを聞いたあたしはほっとする良かった気に入ってくれたみたいだ

「響也くん！あたしの玉子焼きもどうぞ！」

日菜が負けじとあーんをしている

お互い顔真っ赤にしながら響也がそれを食べる

うわー傍から見たらあたしもあんな感じだったのか恥ずかしー

「日菜さんも料理上手だね美味しいよ」

「へへーん！あたしだもん」

「…私も料理出来るようになった方がいいわね」

「友希那今度教えてあげるよ？」

「リサ…ありがとう」

友希那が珍しく音楽以外でやる気を見せたので教師を買って出ることにした

ライバルは増やしたくないけど同じ土俵に立たせて勝たないと嬉しくないからね

「ふむ…これは僕も料理出来た方がいい感じなのかな？」

「「響也（くん）は料理出来なくていいよ!!」」

「…は、はい」

さすがにあの歴史を繰り返してはならない

あたしと詩歌みたいな被害者を増やしてはいけないんだ：

あたしは響也に料理させないことをもう一度深く決意した

放課後になりあたしは響也を連れて校門まで連れていく

「こころが待つてるらしく少し急ぎ足になりながら

「あの車かな？こころー！」

「あらーリサに響也来たわね！今日はあたし達ハローハッピーワールドの演奏を聴いてもらうわよー！」

「こころごめんねーあたしもう少してバイトだから響也任せちゃって」

「いいのよ！さあ響也乗って乗って！」

「こころは車から降りてきて響也の手を掴み車の中に誘導する

「んじやりサさんまた明日ね」

「う、うんまたね！こころも」

「ええー！」

あたしは走り去る車を消えるまで見つめていた

「さてと、響也！もう一度自己紹介しとくわ、あたしの名前は弦巻こころ、あなたからはこころってよばれてたわ！」

僕はリサさんと別れたあとこころさんの車に乗せてもらって移動している

しかし話に聞いた通りお嬢様なんだなー車大きいし付き人？黒服を着た人もいるし

「こころさんね2回目になるとは思うけどよろしくね」

「…こころ」

「え？」

「さんは要らない、呼び捨てして欲しいわ」

「は、はい、…こころ」

有無を言わさない笑顔で言われた僕はただただ従うしかなかった

「はいよく出来ました」

でもそのあとの笑顔はとても綺麗だった

「こころがこころの家か」

僕は車から降りるとところに連れられて家を案内してもらっていた
「そうよ？ さあこつちよ響也」

手を引かれてひとつの部屋まで連れてかれる

ガチャツ

「もう遅いよこころん」

「みんな集まつてるみたいね」

そう言うところころは僕の方に振り返る

「もう一度紹介するわ！ あたし達がくハローハッピーワールドよ！」

「えっと…、確か花音さんに、はぐみさん、薫さん、美咲さんであつてますっけ？」

僕がそういうとみんながパーっと笑顔になる

「響也が覚えていてくれるなんてなんて光栄なんだ…ああ儂い」

「はぐみも嬉しいよ！」

「わ、わたしも嬉しいかな…」

「あ、あたしも」

「響也いつの間に覚えていたのかしら？」

「いやね、僕のせいでみんなを振り回しているからせめて名前だけでもとりあえずは覚えなないと思つて入院中必死に覚えてたんだ、あはは」

「流石だね、その勤勉さは響也らしい」

「こころー、とりあえず演奏聞いて貰ったら?」

「そうね! 響也はその席に座って、みんないくわよ!」

僕は言われたように座る

「すうー、ふうー、よし!」

ハッピー! ラッキー! スマイルイエイ!

えがおのオーケストラ!」

「…響也どうだったかしら?」

演奏を終えてこころが感想を求めてくる

「凄くいいものを聞いたよ、バンドのイメージ通りみんなを笑顔にするような曲だった」

「……………」

「ん? どうしたのみんな」

みんなの表情が曇る

「いやあのーですね、今の感想があまりにも一番最初に聞いてもらった時に酷似してる

と言いますかなんと言いますか…」

「一番最初?…っ!?!」

僕が少し思い出そうとすると急激な頭痛に襲われて頭を抱えて倒れ込んでしまう

「「「響也（先輩）（くん）!?!」」」

みんなが駆け寄ってくる

「…だ、大丈夫」

僕はそう答え、椅子に掴まりながらなんとか立ち上がる

「ごめん…みんなの演奏聞いても何も思い出せなかったよ…」

「いいのよ!響也は何も悪くないわ」

でも今の頭痛はなんだったのだろうか、まるで記憶が帰りたくないと言っているかの

ようにいきなり痛みが走った

「また、聞かせてもらってもいい?」

「もちろん!響也のためならあたし達は笑顔で届けるわ!」

僕は恵まれてる…:そう実感できる1日だった

…やっぱり響也はあたしのものにしなきゃ気が済まない

でもどうやって？

あ！そっかあたしに出来ないことなんてないわ！

歪な笑顔をうかべる少女の姿がそこにはあつた

第15話 I can't say my dream

i s r e a l

弦巻さん達の演奏を聞いてから2日が経ったが、未だに響也さんの記憶に変化はない
私はずっとどうやったらいいかを模索しているがなかなかいい案が見つからなかつ
た

「どうしたらいいのかしら」

私は物思いにふけながら学校への道を歩いている

「あ、氷川さん…、おはようございます…」

交差点で声をかけてきたのは白金さんだった

「白金さん…おはようございます」

「氷川さん、…ちゃんと寝てますか？何だか顔色が悪い気がして…」

そう言われて慌てて私は手鏡で自分の顔を見る

…しかし見た限りではいつもと同じ顔である

「す、すみません…なんだかいつも氷川さんのように凛々しさが無いというか、なんというか…と、とにかくなんか違うんです…」

「…いえ、心配ありがとうございます、やっぱり悩み事してたら見抜かれてしまうのですね」

「…響也くんのことですよね？」

「!?」

見事に的を射抜かれてしまった

白金さんは普段から響也さんや私たちの考えてることが分かっているらしくいつも先回りして色々してくれてるおかげで助かっている

「私も…響也くんに助けられた一人なんで、今度は支えになつてあげたいんです、氷川さんだけが悩むことはないんですよ？一緒に考えましょう？」

その言葉ひとつで白金さんの人の良さが伺える、いい仲間…いや、友達持ったものだからありがとうございます、白金さんにはいつも助けて貰ってますね」

「そんなことないですよ、わ、私も氷川さんにいつも助けられてばかりなので…」

白金さんが顔を少し赤くしながらそう答える

…私はそこまで助けた覚えはないんですが白金さんにとっては助けになってたのでしょうか

「あら？紗夜ちゃんに隣子ちゃんじゃないですか」

「白鷺さんじゃないですか、おはようございます」

声をかけてきたのは白鷺さんだった

「朝から一緒なんて珍しいですね？バンドの打ち合わせですか？」

「…いえ響也さんのことで色々話していたのですが」

「…なるほど」

白鷺さんは一瞬顔を曇らせたあといつもの笑顔に切り替わりこう続ける

「今日は私たちパスパレの演奏を聞かせる番なのでその中で何かあれば報告しますね」

「よろしくお願いします」

やっぱり白鷺さんは何かと頼りになる、パスパレは彼女を除けば少し不思議な人達ばかりですので

…うちの妹が一番不思議ですけど

「…くちゅん、あーおねーちゃん私の話してるなー？」

「日菜ってばそんなことまでわかるの!？」

後日今井さんからそんな事を聞かされるのはまた別のお話

「あー！千聖ちゃんーん！」「チサトさん！」

「あら、彩ちゃんにイヴちゃんおはよう」

遠くからこちらに来たのは丸山さんと若宮さんだった

「あ、紗夜ちゃんと燐子ちゃんもおはようございます」

「おはようございます丸山さん」「お、おはようございます…」

朝から元気ですね丸山さんは

「今日は私たちが担当だから頑張るよ！」

「張り切って失敗しないでね？彩ちゃん」

「…うー千聖ちゃんがいじめるよおー」

あはははは

Rosealiaにはない明るい感じ

でも結成当時に比べたらだいぶみんなも角が取れたというかなんというか…ま、まあとにかくRosealiaも素晴らしいんです！

「紗夜ちゃん大丈夫？」

「え、ええ…大丈夫ですよ」

白鷺さんに心配されてしまった

「とにかく向かいましょうか？」

私はそう皆に告げた



時は移り今は昼休み

最近では中庭に集まってお昼を食べるのが恒例となっている

「美咲ー！新しい曲が浮かんだわ！」

「うえ!?ち、ちよつと待ってこころ、今書くもの用意するからあ!!!」

「かのちゃん先輩！」

「なに？はぐみちゃん」

「有咲、卵焼き頂戴？」

「いやお前いつも食ってんだろ!？」

「有咲も私も欲しいなあ〜？」

「だあ、暑苦しい!!くつつくなあ!!」

.....

「沙綾ちゃんの作ったパンやっぱり美味しいなあ〜」

「ふふ、ありがと！りみりん」

「これは!…和の真髓を感じます!」

「おいしい!?イヴ何勝手に食ってんだあ!」

……………

「千聖ちゃん、今度ここに行かない?」

「いいわよ、来週の日曜なんてどうかしら?」

「うん、大丈夫そうだよ」

…まったく

「皆さんいつも通りで悩み事してるなんて馬鹿らしく思えてきますね」

「でも、こういうの…楽しいですよね?」

「ええ」

「しーかっついていいよねー響也先輩といつも一緒にさー」

「え?いきなりどうしたの香澄…?」

突拍子もなく上げられた戸山さんの声に詩歌さんが驚いた様子で答える

「だつてさ、ずるくない?おはようからおやすみまで一緒になのにその上妹なんて」

「いや香澄妹はなりたくてなったわけじゃないだろ」

「ええーだつてえ有咲も一緒に住みたいとか思わないの?」

「そ、それは確かに考えたことはあ…つて!き、響也はそそそんなじゃねえし!!」

「有咲ごちそうさま」

山吹さんが肩に手を置きながらそう言う

「う、うぜえー!!だ、だったら白鷺さんとかはそうは思わないんですか!」

「わ、私!」

市ヶ谷さんから唐突な牽制球が飛ぶ白鷺さん

「私は別に響也にはそんな感情は抱いて無「え?でもチサトさんこの前キョウヤさんとカフエでお茶してるの見」

ガシィッ

「イヴちゃん…?」

「ヒッ!?!…な、なんででしょう?」

「ふふふふ、少し向こうでお話しましょうか?」

「い、いやですチサトさん目が笑ってないです怖いですう〜」

数分後戻ってきた若宮さんは

「チサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわいチサトさんこわい…」

壊れたカセットテープみたいに同じ言葉しか発しなくなっていた

「花音ならちゃんと答えてくれるんじゃないかしら有咲ちゃん」

「ふ、ふええ千聖ちゃんが私を売ったよお」

みんなの視線が一気に松原さんに集まる

「そ、それは響也くんと一緒に居られたら凄い幸せなんだろう…ふええ〜！も、もう無理い」

「花音先輩顔真つ赤」

「そ、そういうたえちゃんはどうかなの？」

「なんかいつの間にか告白大会みたいなことになってますね風紀委員とし「え？好きですよ？」っ!？」

「「えっ!？」」

みんなの顔に驚きが浮かぶ

「私は響也先輩のこと好きですよ？」

「ふええ〜」

ニコニコしながら答える

「ね？りみりん」

「そ、そうだね」

「そんなこと言うならあたしだって響也のこと好きよ？」

「こころんずつと言ってるもんね」

「あら？はぐみもでしょ？」

「うん！響也先輩カッコイイし優しいからね」

……響也さんってほんとに人気者ですね

少しだけでいいから私に視線が向いてくれたらいいのに

「…お兄ちゃんもうなんかハーレムの主っぽいね」

「きつと響也先輩のことだから一人に絞れなさそうなんだよね」

山吹さんが呟いたのが頭に残る

私を含めて5バンド25人、多分ですが全員が響也さんに好意を抱いている

…はあ私なんて厳しい事言っただけで好感度的にはしたから数えた方が早そう
な気が

で、でもハーレムなんてそんな破廉恥な…

「まあ…記憶が治ってからの話は、話なんですけどね全て…」

「「……………」」

白金さんの一言でみんな俯いてしまう

「大丈夫よ、私は彩ちゃんの歌の力信じてるから」

「千聖ちゃん…うん！私頑張るよ！」

「アヤさん！チサトさん！レッツブシドーです！」

いつの間にか復活してた若宮さんもやる気を出していた

キーンコーンカーンコーン

「あ、昼休み終わっちゃった」

私達はその鐘の音を聞いて自然と解散となった



時は移り学生の仕事が終わわり放課後となりました

「あ、こんにちは！」

まん丸お山に彩りをパスパレのふわふわピンク担当丸山彩です！」

「…彩ちゃん？誰に自己紹介してるの？」

千聖ちゃんに怪訝な目を向けられた

「あはは…」

「はあ…まあいいわ、早くイヴちゃん連れてみんなと合流しましょう」

そう言つて歩き始める千聖ちゃん

「あ、待つてよ〜」

私は後を追いかけるように少し小走りになった



「あー！こつちこつちー！」「ちよつ、日菜さん落ち着いてくださいっス」

「日菜ちゃんは相変わらずね…」

私達は待ち合わせ場所になっていたCIRCLEに着きました

中に入りまりなさんに挨拶したあと教えられたスタジオに向かうとそこには先に着いていた日菜ちゃんと麻弥ちゃんそして

「こんばんは、彩さんに千聖さん、それにイヴちゃん」

私達の想い人、響也くんの姿がそこにあつた

「響也くん今日はわざわざありがと！」

「わざわざなんてとんでもない、みんな僕のためにやってるのに…それに」

「ん？どうしたの？響也くん」

「僕、みんなの歌もつと聞きたいから」

優しくに微笑みながらそう言う響也くん

その笑顔に私を含めたみんながダメージを受ける

「…その笑顔はずるいよ」「まったく響也つたら」「るんつてきたよ」「響也さん…」「響也

さん」

「?どうしたのみんな?」

「な、なんでもないよ!そんなことよりみんな準備しよ!」

「そ、そうね」「うん!」「はい!」「はいっス!」

みんながみんな顔を少し赤くしながら自分の楽器の調整に入る

私も発声練習しなきゃ

数分後私達は準備を終え響也くんの方を向く

「さてと、響也くん!私達の演奏聞いてください」

「うん、お願いします」

「それでは聞いてください『しゅわりんどり〜みんな』」

……

はあはあ

私達は全力でやり切ったみんなの顔を見るとみんなキラキラと輝いた汗が流れ、笑顔とともに私を見つめ返してきた

さてと観客に感想を聞かなきゃ

「ふう…、どうだった？響也くん」

「みんな成長したな、俺は凄い感動してるよ」

「っ！今俺って言ったような」

「え…？響也一人称が…？」

「ゴメンなみんな心配させて、でもまだ元に戻れないんだ」

「…君誰？響也くんじゃないよね？」

日菜ちゃんが凄い怖い顔をして響也くんを睨む

「いや俺は俺だよ、日菜」

今お前達の演奏のおかげで檻から出られてるって言い方したらわかりやすいかな？

また数分もしたら記憶が閉じ込められる」

「そんなことありえないよ！」

「大丈夫、もう少ししたらまた俺に戻れるらしいから」

「何でそんな事分かるっスか？」

「ごめん麻弥…これは感覚だから説明はできない

そろそろ時間だな、ゴメンなみんなもう少しこの面倒見てやってくれ…ぐっ、

がああ」

「」「響也（くん）（さん）！」「」

頭を抑えてうずくまってしまおう響也くん

私達は駆け寄る

「響也くん大丈夫!？」

するとフラフラしながらも響也は立ち上がる

「う、うん大丈夫だよ…なんか夢見てたみたい」

「これって…」

「元に戻ってるわね…」

「?どうかしたの?」

「ううん、なんでもないよ!」

「…これは紗夜ちゃん達に報告ね」

「そうツスね」

千聖ちゃんが代表して紗夜ちゃんにメッセージを送った



メッセージを受け取った私は弦巻さんに頼んで黒服さん達に色々調べ物をしてもらいました

三日後、弦巻さんに呼ばれた私は各バンドのボーカルに集まってもらいその結果を聞くことになった

「集まったわね！紗夜から頼まれたものが調べ終わったからみんなに共有するわ、斎藤！」「はっ！皆様これをご覧下さい」

私達5人の元に資料が配られる

その資料に書かれてた言葉に私は驚愕した

「解離性…同一性障害…？」

「え？これって」

「二重人格のことですよね？」

「こころちやんどういうことなの？」

「あたしも最初は驚いたわ、でも調べてもらった情報と照らし合わせるとどうも記憶喪失が全部じゃないってことが分かったの！」

そしてこないだ彩達が見たものと照らし合わせて出てきたのがこれ」

「で、でも響也は実際記憶が無くなってて」

「そ、そうですねよそれはどう説明するんですか？」

湊さんと私が同じ疑問をぶつけると珍しく怖く感じるくらい真面目な顔をした弦巻

さんはこう答える

「ここからは仮定の話になるんだけど、どうやら響也とは別人？だと思っただけその人の精神が響也に入っちゃってみたい」

「いやいやいやそんな非科学的な」

「でも私達が話してたのは響也くんだったしな」

「そしてここから導き出される答えは、その精神をどうにかして響也から出す

すると響也自身の精神が表に出て元に戻る…とあたしは思うわ」

「そしてそれを実行できるのが私達の歌の可能性があるということそうですか？弦巻さん」

私はそう言う

「さすが紗夜理解が早いわ」

「でもあたし達ハロハピと彩達パスパレの歌ではきっかけにしかならなかった

…香澄、蘭、友希那あなた達に託したわ」

「うん！任せてよこころん」「任せて」「任せてちょうだい」

「ありがと！あ、それとこのことは私たちだけでとどめておいて欲しいの」

「え？どうして？」

「皆にこれ以上心配を重ねたくないの、笑顔じゃなきや響也に失礼でしょ？」

「ふふ、弦巻さんらしいわね」

「わかったよ！」

「それと彩、千聖達にもお口チャックで」

「うん！」

「それじゃ響也ハッピー大作戦スタートよ！」

私達の静かな作戦が始まったのであった

第16話 The truth visited

ザア——

春の陽気をかき消すかのような大雨が降り注ぐ

私はその雨を憂鬱に思いながら傘をさして学校への道を歩いていた

「友希那何考えてんの?」

隣を歩くりサが話しかけてきた

私はりサに勘づかれないように答える

「私達は何を歌うか考えてたのよ」

「ふーん、なるほどね」

何とかなったみたいね

いつもりサに迷惑かけてばかりでさらに負担をかけたくない

「まあ友希那にもいろいろ考えがあるんだと思うけどあたしにも頼つてよね?」

見抜かれてるみたいね…、ほんとりサにはかなわないわ…、あら?、そういえば

私は焦りを押隠すようにリサに思い出した質問をぶつける

「リサ、あなた今日日直つて言つてなかったかしら？」

「え？…あつ、…ヤバ」

リサの顔が青くなる

私ももつと早く気づけば良かったわ

「ご、ごめん友希那先行くね！」

リサが走つていつてしまった

「響也…私はどうすればいいの？」

誰もいない虚空に向かつて眩きが溶けていった



―…して、…であるからして、ここは…になり

「……………」

―そしたらここを、うーん、あ、湊！答えてみる

「……………」

―…あれ？おーい湊ー！聞こえてるかー？

「っ!?は、はい」

「ーまったくちゃんと聞いてくれよー?ここ結構重要なんだから、また後であてるから」

「すみません」

またやつてしまった

昔から考え事をするとう周りの声が聞こえなくなる

この前もリサと響也に注意されたばかりなのに

やつぱり私は歌以外はダメダメね：

でもまた響也に叱られるのもそれはそれで

：いやなんでもないわ気にしないでちょうだい

それより早く授業終わらないかしら

実は今日リサに教えて貰って作ったクッキーを持ってきている

最初クッキーを作りたいと言った時はリサに物凄く驚いた顔をされたわ

失礼な話しよね、私だって少しは料理出来るわよ：

いえ見栄を張るのはやめるわ、半分は何故か食べれないクッキーが出来上がってし

まったから多分料理出来ないだろう

キーンコーンコーンコーン

「よーし今日はここまでにしとこうか、ちゃんと復習しとくんぞぞ？」

「悩んでも仕方ないわね」

私は大事にその袋をもって集合場所へ向かった



今日は雨が降ってるからリサたちの教室で食べることになっていて私は向かっていった

「ほんとに雨って憂鬱になるわね」

屋上でお昼を取るのがもはや日常化されてるため少し…いやかなり違和感がある

「あ、友希那こっちこっち」

私はいつの間にか着いていた様でリサが手招きしていた

「ごめんなさい、遅くなったわ」

「大丈夫大丈夫」

ふと周りを見ると響也の姿が見当たらない

「リサ、響也が居ないようだけど」

そう私が言うのとリサがニヤニヤしながら答えてきた

「響也今日は購買らしくて買いに行ってるもう少しで戻ってくると思うよー

…なになに友希那、響也いなくて焦った？」

「…っ!?!、そんなことないわ変な勘ぐりはしないで」

「ごめんごめん」

からかわれて私は顔が熱くなる

きつと真つ赤になつてゐるだろうますますリサに弄ばれてしまうわ

私は話題を強制的に変えることにした

「そういえば私達はLOU DERに決めたわ」

「やる曲? いいじゃん! あたしも賛成」

「後で紗夜達にも伝えといてくれるかしら?」

「おっけー! 任せといて」

「お待たせ、ごめんね遅くなった」

ふと後ろから聞こえた声に私は振り向く

視界に入ったのは待ち焦がれてた人、響也だった

「いえ、私も今来たところよ」

「響也ー、いいの買えた?」

「うん、クロワッサンがあったから嬉しくて2個も買っちゃったよ」

「ほんとに響也ってクロワツサン好きだよね」

「…そうだったんだ、ただただ美味しそうだから買ったんだけど」

「ええ、毎日のように山吹さんの所へ行つて買つていたわ」

「そうなんだね、やつぱり体に染み付いてるのかなあ」

そんな時ふと弦巻さんが言っていた言葉が頭をよぎる

本当に響也は二重人格なの？…記憶がないから体が覚えているってことがあるんじゃないか

「…友希那大丈夫？」

「っ!?…ええ、大丈夫だわ」

響也が顔を覗き込んできたので私はびっくりして少し身を後ろに引いてしまったが直ぐに返答する

「とりあえず食べよーあたしもうお腹空いちやった」

「そうだね食べよつか」

響也が着席したのを見て私も席に着く

そして持ってきた袋を机の上に出した

「響也…あの、これなんだけど」

「わあ、クツキーだ！友希那が作ったの？」

「ぱあつと笑顔になり響也がそう聞いてくる

「え、ええ、リサに教えて貰って作ったの、どうかしら?」

「食べる食べる、頂きまーす」

「一枚手に取り口に含む響也、その後数回咀嚼して言葉を発する

「…うん、美味しいよ」

「よ、よかつたわ…」

私はその言葉を聞いて胸を撫で下ろす

「ずっとドキドキしてたから緊張が解けたわ

ふとリサの方を見るとニヤニヤした視線でこちらを見ていた

「またからかわれると思う、私は自分の弁当を取り出すと昼食を開始した

「でも響也、パンだけじゃ栄養ないからはいあーん」

「え!? リサさすがに恥ずかしいよ…」

「いいから早く、ほら」

「むぐっ! ……美味しい」

「でしょ! 今日のお焼きは自信作なんだ」

「リサなんて羨ましいことを…でもこれは私が作った弁当じゃないから自信満々にあーんするわけにはいかないわ…」

あ、リサがこつちみてドヤ顔してるわ…

私は悔しい心に動かされて卵焼きを挟んだ箸を持つ手を響也に伸ばした
「ゆ、友希那までどうしたの？」

「早く食べてちょうだい…恥ずかしいのよ」

「う、うん…ぱく…うん美味しいよ」

私は顔が熱くなるのを感じて目を伏せる

こんなことよくリサはできるわよね…

とりあえずご飯を食べることに集中しましょうそうしましょう

あ、卵焼き美味しいわ



時は過ぎ放課後

私は響也とリサと一緒にCiRCLEに向かっていた

「今日は美竹さん達afterglowが演奏してくれるわ」

「うん、昨日蘭たちからメッセージ来てたよ」

「そう、ならいいわ」

「友希那く、顔が怖いよ〜?」

「大丈夫よ、怒ってないわ」

全く、私とは全然メツセージやり取りしないのに響也のバカ：

そうこうしてる間にC i R C L Eに着いていた

「あら、友希那ちゃん達これから練習?」

中にいたまりなさんに声をかけられる

「いえ、今日は美竹さん達に用があつて」

「そうなんだー、蘭ちゃん達なら奥のスタジオにいるよー」

そう言つて奥に入つてくまりなさん

いつも忙しそうにしているがちゃんと休めてるのかしら

「行くわよ」

「うん」「おっけー!」

突き当たりのスタジオまで進む

ガチャツ

「お邪魔するわ」

「お邪魔します」

中を見ると練習中の美竹さん達がいた

私たちはなるべく邪魔しないように入ると備え付けの椅子に座って練習を見学する
上手くなったわね

私が1番に抱いたものは純粋な賛美だった

初めてあった時の荒削りな演奏が今や個性をちゃんと伸ばした素晴らしいものになつている

これは私たちもうかうかしてられないわね

「はあ…はあ…いらっしやい響也、それに湊さんとリサさん」

曲が終わり少し呼吸を整えながら美竹さんはそう声をかけてくる

「上手くなったわね美竹さん」

私らしくもない一言を口からだすと美竹さんは驚愕の表情を見せる

「おー、湊さんが褒めたあ」

「ちよつ、モカさすがに友希那さんも褒めるって」

「…湊さん、あ、ありがとうございます」

「率直な感想を述べただけよ」

「蘭く顔真つ赤だよ」

「…モカ、うっさい」

「わあく蘭が怒ったあ」

「まあまあ蘭ちゃんもモカちゃんも落ち着いて、」

羽沢さんが止めに入る

…ふふ、いつ見ても仲良しね

「それで今日は響也だけじゃなくてお2人も聞いていかれるんですね」

「何か不都合があつたかしら？」

宇田川さんがそう言ってくる

「いえ、ただ緊張してくるといふかなんというか」

「ああ、なるほどね

大丈夫よ、1客として気にしないように演奏してちょうだい」

「…巴大丈夫、いつも通りあたし達の演奏すればいいから」

「そうだな」

「響也」

「な、何？」

「…あたしに任せて」

美竹さんが響也にそう言う

美竹さんらしいわね

「いくよ、みんな！」

「「うん（おう！）（おー！）」」

「Scarlet Sky!!!」

演奏を聞きながら私は響也の方をチラチラとみていた

前回のパスパレの演奏の際に響也の人格が少し戻って来たのを聞いてまたあの優しい声で呼びかけられると思ひ…

はあ…下心丸出しじゃない私、

でもそう思いたいのもわかって欲しいわ

「?…友希那?どうしたの?」

「っ!?…なんでもないわ気にしないでちょうだい」

「わかった」

見てるのがバレたらしく響也に話しかけられた

全くこれじゃまるで私が響也にこ、恋してるみたいじゃない

リサの方をチラ見するとニヤニヤしてたわ

あとでお説教ね

演奏が終わりみんなが息を整える時間の間少しの静寂が訪れる

「響也、どうだった？あたし達の演奏」

7人の視線が1人に集まる

「……………」

「…響也？」

「とても良かったよ、みんならしさが出てるって言うかなんとかというかとにかくよかった」

…？

私は『響也』らしからぬ感想に違和感を覚える

それは皆も同じみたいだ

「響也？…だよね？」

「…？はい、僕は響也ですけど…」

響也自身の人格では無い

記憶がなくなってる響也がいるだけだった



あの事から数日後、戸山さん達、Poppin Partyにも演奏してもらい響也

に聞いてもらったが結果は同じ、人格のじの文字すらないくらいだった

私は丸山さん達にもう一度詳しくあの時のことを聞いたがやはり響也自身が前に出て話してたらしい

そもそも二重人格なのに自分のことを忘れてるのが不自然なのよね

二重人格ではなく、記憶喪失でもなく、他の人：何かオカルト的な話になりそうだけれど霊的ななにかに取り憑かれて響也の人格が出て来れなくなりそれが何かをきつかけで少しばかり響也が出てくるのが出来た

：いや待って、おかしい点がひとつあるわ

なぜ『二重人格』という診断結果になったのだろうか

そもそもそこからおかしかったのではないかしら？

だとしたら弦巻さんが何か知ってそうね

私は携帯を取り出すと彼女に連絡を取り早足で向かった

「来たわね友希那！で、あたしに聞きたいことって何かしら？」

弦巻さんの家に着くと大きな客間に通されて弦巻さんの前に座らされる

「…率直に聞くわ、あなた響也に何したの？」

そう一言発すると弦巻さんの顔から笑みが消える

「…なんの事かしら？あたしにはわからないわ」

「二重人格って本当は嘘なのよね？」

「……………」

「弦巻さ「友希那」っ!？」

弦巻さんの目から光が消えていた

「このまま誰も気づかないかと思っていたのだけれど想定外だったわ

そう、あたしが響也にある薬を飲ませたの」

「…ある薬って何？」

「薄々勘づいているでしょうけど飲ませた人間に全く別のまっさらな人格を上塗りする

薬よ

…そしてこの薬は効果が切れると同時に最初にみた人しか見えなくなるっていう副

作用があるわ」

「そんな薬が存在するわけないわ!!」

「それがあるのよ、なんてったってあたしの家は弦巻グループよ？無いものがないわ」

「それで響也を自分のものにするつもりなのね？人としてやっていいことと悪いことが

あるわ」

「あたしって手に入らなかったものが昔からなかったのよ？」

そして今回も響也を手に入れるわそのためならどんな犠牲を払ってでも…」

「そんなこと私が許すとても？」

「許す許さないも何もあなたはもうニゲラレナイワ？」

プスリ

「え…？」

急激に身体力が抜ける

自分の体を支えられなくなった私は地面に倒れ込んだ

「薬の効果は残り12時間

だからその時間響也を守り抜けばあたしの勝ちよ

…まあ今のところ友希那しか気づいてないみたいね
だからゆつくり眠るといいわ」

私は意識を手放した

…to be continued

第17話 そしてまた時は動き出す

カタカタカタ…カタ…カタカタカタカタカタ

『ねえーりんりん、今日はどのクエスト行くー?』

「どうしよっか?…あ、そういえば巨龍討伐クエストって明日までじゃなかったっけ? 私まだ角取れてないからあこちゃんに手伝って欲しいな」

『いいよー!そしたら少し装備と持ち物変えてくるから少し待っててねー!』
そう言つてあこちゃんは一旦マルチエリアから退出していった

あ、こんばんは…白金燐子です…

今は練習が終わつて家に帰つてきて…色々済ませたあと部屋で少し考え事をしていたら、あこちゃんに誘われたのでNFOをしています

もう1人本当は一緒にいつもやってた人がいたんですけど

「はあ…響也くん…早く治らないかなあ」

結局美竹さん達と戸山さん達の演奏でもダメでみんなが途方に暮れてました

でも何かうつすらと違和感を感じるんです何かは分かりませんがなんだろうこの感じ…

『りんりーんおまたせー!』

「あ、おかえりあこちゃん」

あこちゃんがマルチエリアに戻ってきたらしくポイチャから元気な声が聞こえてきました

『それじゃ始めよ!…あ、でもこの役職久しぶりに使うから負けたらごめんね!』

「大丈夫だよ?あこちゃんそう言いながら負けたことないから!」

『いつもギリギリだよー、それにりんりんがちゃんとサポートしてくれるおかげ!あこー人じゃ多分どれも無理だと思っよ?』

「そんなことないよ、私もいつも助けて貰ってるし!」

『えへへー、とりあえず始めよつか!』

「うん」

『りんりん!とりあえず下がって回復して!』

「う、うん」

あこちゃんからの指示が飛んできて私は即座に中ボスのサラマンダーから距離を摂る

アイテムは仲間にも使えるから温存して自分のMPを消費しHPを回復する
思ったより難易度高いなここでこの強さならボスはどうなってるんだろ

あこちゃんも慣れてない職業で奮闘しているが正直何時まで持つかわからない

「あこちゃんお待たせ、とりあえず効くか分からないけどスタンさせるから少し距離取って」

『わかった！』

あこちゃんのアバターは離れ際に2回ほど切りつけて離れる

私はその間に呪文の詠唱を始めていた

…と言ってもゲーム内のアバターがですけどね

「死への鎖ーデッドチェーナー」

私（アバター）が最後に呪文名を叫ぶとサラマンダーの足元、地面から無数の鎖が出てきて足と腕に絡みつくように伸びる

数秒後完全に手足が固まったのかサラマンダーは顔と体を必死に動かし抜けようと足掻き始めた

あ、ちなみに見た目的には縛ってますけど状態異常的にはスタン（硬直）状態なので「とりあえず少しは足止めできそうだからその間に回復してダメ与えよっか」

『そうだね、職業違うせいか思ったより手こずってるよー』

メインなら直ぐにドカーンなんだけどねー』

「…それはあこちゃんの仕事の攻撃力がおかしいだけだと思うよ？」

ちなみにあこちゃんのメインは死神、…役職と言つていいのか分かりませんがね

防御は紙同然なんですけどそれを霞ませるほどの高い攻撃力そして死神特有の特殊スキル<ソウルイーター（攻撃がヒットする事に回復）>とく忍び寄る者（一定時間姿を消せる）>でトリツキーに戦うことも出来る

まあその分扱いがすごく難しいんですけどね、下手したら序盤の敵ですら倒される可能性があるくらい耐久出来ませんし…つまり当たったら負けです（笑）

え？私ですか？私は魔術師と言つて遠距離主体の攻撃、回復をこなせる役職です

ただ今回のボスが先に額にある宝石を斬属性の武器で壊してからでないと魔法が一切効かないといった特殊仕様になっているのであこちゃんに頼んで剣持つてきてもらいました

…それなら死神でも良かったんじゃないかって？

死神って射程範囲短くて届かないんですよね頭に…

『りんりん、とりあえず多分あともう少しだろうから一気に畳み掛けるよ！』
「う、うんわかった」

そう言つてあこちゃんは剣を構えて突進して行つた

私も魔法の詠唱を始める

しかし耐久が切れたのかサラマンダーの手足が自由になり口を大きく開いて火の玉を形成し始めた

…あれを食らつたら2人とも吹き飛んでしまう

「あ、あこちゃん！避けて」

ただ私は詠唱中のため動けない

それに気づいたのかあこちゃんが私とサラマンダーの間、つまり射線内に入ってきた
私は咄嗟に魔法詠唱を強制中断させあこちゃんの盾になるべく走る

間に合うかわからない

、
、
、
、
、

ーその時後ろからものすごく速さで何か飛び出してきた

それを見た私は操作をやめ目で追ってしまふ

そして追いついた瞬間にポリゴンが散る音、サラマンダーが撃破された事実が目飛び込んできた

私の頭には色んなことが過ぎる

ー特殊な条件下にある時に発生する勝利イベント？いやそんなのこのゲームにはない、そして誰かほかのユーザーさんが入ってきた？いやこのクエストはフレンドにしか公開していないためあこちゃんともう一人しか入れないはず

『あ、あわ、き、きよ、響也くん、なんでこのゲーム、てかなんでここに!?!』

あこちゃんの声が入り、私は飛び込んできた物体…いやアバターの名前の所に視線を移動させる

そこに書かれてたのは<k y o u y a >

いつも響也くんが使っていた名前がそこにあった

そしたら操作しているのは響也くん本人!? いや記憶がないのになぜゲームが出来るのだろうか

私はホイチャを個人からグループに切り替え響也くんにもかけた

そうすると直ぐに繋がり向こうの音が耳に入ってくる

少し焦りながらも声をかける

「き、響也くん…ですよね？」

静かすぎて自分の心臓の音がうるさく感じる

少しばかりの静寂の末耳に入ってきたのは聞き慣れた声だった

『そうですよ?、あ、隣子さんとあこちゃん大丈夫だった? 間に合ってよかった』

声を聞いた瞬間安堵してしまう私はダメですね

…記憶が無くなってるのには変わりなさそうですけど

『で、でも響也くんどうして?』

あこちゃんが響也くんに問う

『何となく何もすることなくて自分のことを知ろうと色々触ってたらパソコンの中にNFOを見つけてそのあとは指が勝手に…』

…記憶がなくてもできるんですね、人間ってホント不思議です

「あ、それじゃ響也くん、この後のボスも手伝ってもらっていい？」

『別にいいけどやり方を理解してる訳じゃないから役に立たないかもしれないよ？』

『大丈夫！あこもサポートするから！』

「うん…私も」

『…わかったよ、よろしくね2人とも』

その後は道中たまに出てくる雑魚達を何故か動いている響也くんが薙ぎ倒すくらいしか見所がないくらいな道のりでありまして

『ここだね』

何回か来たことがあるあこちゃんがそう言うのと目の前には大きな扉があった

「あこちゃん…ボスの特徴は？」

『うーんとね、まず一番厄介なのがりんりんも知ってる通り頭にある宝石を割らないとダメージが通らない点

あとは残りHPが少なくなってくると虚無撃ってくるからバフをあまりかけて戦えないことかな

って言ってもHP結構あるし硬いからそこまで気にしなくてもいいとは思うけどね

！』

なるほど、そうしたら私のいつも使ってる戦術は使えないのか

私の使ってる職業、魔術師は自分にバフをかけて戦うのが一般的でそれが無くなると途端に弱くなってしまいうんです

『まありんりんそういう調整得意だし大丈夫だよ！』

「ありがと…あこちゃん」

『さてと、行きますか？2人とも』

「はい」『うん！』

私たちは大きな扉を開きました

『あこちゃん和燐子さん！少し下がって回復』

『わかった！』「はい」

エリアボスのファフニールは思ってた10倍は強く、ダメージすらまともに与えられてません

でもやっぱり何故か立ち回り完璧な響也くんが早々と頭の宝石を割ってくれたおかげか私も少しは役に立てそうな場面が巡ってきます

…大体はファフニールのプレスを打ち消すのがやっとなんですけどね
あこちゃんよくこのクエスト周回してたね…

『うーん、やっぱりあれ使うしかないかなあ』

『響也くんあれって?』

『あんまり人には見せたくないんだけどあこちゃん、燐子さん少し時間稼いでもらって
いい?』

『…?わかりました』『わかったよ!』

響也くんは一旦後ろに下がった

私たちは響也くんにヘイトが行かないよう少し攻撃の圧力を上げました

10数秒後響也くんがこちらに近づいてきました

『あこちゃん、燐子さん、全速力で壁に逃げて!!』

『え?わ、わかった』『う、うん』

その声に戸惑いながらあこちゃんと2人退避する

…一体何をする気なんだろ

『…スウ…ハア』

…せめて安らかに眠れ』

そう言いながら響也くんのアバターがゆっくりと剣を振り下ろす

切りつけられたファフニールは何事も無かったかのように響也くんに向かって腕を

振り下ろす

「危ない！」

私は咄嗟にかばいに行く

だが目に飛び込んできたのはファフニールの姿が消えポリゴン化してる状況だった

『…へ？』

あこちゃんも驚いた声を出す

『…よし討伐完了』

『い、いやいやいや、響也くんさすがにチートはダメだよ！』

『え？チートじゃないよ？一応これスキルのひとつ』

と言ってもレアスキルなんだけどね』

まさか…このスキル…

「龍殺しの一太刀（ドラゴンスレイヤー）…だよねそれ」

『…知ってたみたいだね』

『りんりんなにそれ』

「このゲームで1人しか使えない対龍スキル

ふつうのキャラには全く使えないんだけど龍カテゴリの敵には一撃必殺レベルのダメージを与える」

『す、すごーい！響也くんそんなに凄いプレイヤーだったんだね!!』

『そんなことは無いよ、たまたま手に入っただけ』

たまたまなどと言っているがこのゲーム内でのイベントスコアランキングの殿堂入りを果たさないと貰えないスキルだったはず…

ゲームですら天才を發揮するんですね…

『とりあえずドロップ拾わないと消えちゃうよ?』

『あ、』「え?」

あこちゃんと私は急いでドロップ品を拾いに向かった



「つていう事がありました」

次の日のお昼休み、私は一緒にご飯を食べている氷川さんに伝えた

「なるほど確かに不思議ですね」

「記憶が無くなってるのかもはや分からなくなりました」

そうすると氷川さんは難しい顔をしてこう呟く

「そもそも響也さんはほんとに記憶が無くなってるのでしょうか？」

「え?…でも記憶が無くなつてないと響也くんの反応はおかしくありませんか?」

「確かにそうなんですけど、何か引つかかるんですよね」

でも確かに色々おかしな点はある

パスパレの皆さんの演奏の時に起こった事もそうですしあと昨日のこと

そして記憶喪失にはおかしな断片的に残る記憶

「隣子ちゃん、大丈夫? だいぶ難しい顔してるけど」

「あ、松原さん、大丈夫? :です、ありがとうございます」

心配してくれたのか松原さんが顔をのぞかせてました

「とりあえず私たちの演奏を聞いてもらってからもう一度この話を考えましょうか?」

「そうですね」

私は考えるのをやめ、3口くらいしか手をつけてなかったお弁当に箸を伸ばした



放課後、友希那さんに用事が出来たらしく練習は自己練習になり今はそれを終え家に
います

急にどうしたんでしょうか

『りんりーん、起きてるー?』

「あ、起きてるよあこちゃん」

部屋でぼーつとしてたらあこちゃんからボーチャが来ました

『今日もやる?』

「あ、そうだねいいよ」

『わーい、あこねー行きたいところあるんだ』

「どこかな?」

『えつとね』

~~~~~♪

ん?電話だ

「あこちゃんごめん、ちよつと電話に出るね」

『うん!』

ディスプレイには今井リサと出ている

今井さん?どうしたんだろ

「…もしもし」

『あ！燐子ーあのき聞きたいことあつて』

「なんででしょうか？」

『友希那今日どこに行くとか聞いてた？実はまだ帰ってきてなくて』

え？今はもう21時を過ぎている

さすがに行き先を家族に伝えず帰ってきていないのはおかしい

「いえ、聞いてないですね」

『そっか…』

そうするとボーイチャからあこちゃんが答えてきました

『友希那さんならここらこのところに行くって言うてたよー！』

「そうなの？、あ、今井さん友希那さんは弦巻さんの所に行つたらしいですよ」

『え？ほんとに？わかったところに聞いてみるよ！ありがとねー』

そう言つて今井さんは電話を切つた

くく♪

またすぐに電話がかかってきた

今井さんかと思つたけどディスプレイには松原さんの文字

珍しいな

「もしもし、松原さんどうしたんですか？」

『燐子ちゃん！今すぐCiRCLEに来れる？』

普段の彼女からは想像できない切羽詰まった様子の声色に私は向かう用意をしながらあこちゃんに聞こえるようにスピーカーにして、返す

「向かえますが何があつたんですか？」

『みんなも呼んでるんだ！とりあえずこつちに来たら話すね』

「分かりましたすぐに向かいます」

そう言つて電話を切るとあこちゃんに話しかける

「あこちゃん聞こえてた？CiRCLEだって」

『うん、今おねーちゃんが来て話聞いてた、あこも向かうよ』

「うん、それじゃまた後で」

急いで向かわなくちゃ



CiRCLEに到着するとみんなが勢ぞろいしてました

「お待たせしました」



「燐子！待ってたよ」

「今井さん」

「皆さん夜遅くにお集まり頂きありがとうございます」

私が着席すると奥沢さんが声を出す

「風紀的にはこんな時間に外に出てるのはダメなのでしょうけど」

「おねーちゃん、花音ちゃんが呼び出してるんだからよっぽどの事なんだよ、今日は抑えて抑えて」

「いいですか？花音さん、あとお願いします」

「ふえ？…ふえええ!?み、美咲ちゃんが説明してくれるんじゃないの!？」

「いや、花音さんが呼んでおいてあたしが話すのはおかしいかなって」

「そ、それはそうだけど…」

「かのちゃん先輩がんばれー！」

「はぐみちゃん…うん」

み、皆さん

「こころちゃんを止めて欲しいんです!!」

シーンとなる会議室

弦巻さんが何かやったのだろうか

「このままでと響也くんが…、響也くんが！」

響也くんの名前が出た瞬間みんなの空気に緊張が走る

困惑した顔でみんなが見合わせる中氷川さんが質問を投げかける

「響也さんが一体どうしたんですか？」

「実は今日ハロハピの練習があつたんですけどその後でこころちゃんに友希那ちゃんが訪ねてきて

そして気になって聞いちゃったんですよ2人の話

そしたら響也くんがこころちゃんに薬を飲まされて今の不安定な記憶になつてらしくて

それ以上そこに居たら黒服さん達に見つかると思つて逃げてきちゃったんですけどよく考えて美咲ちゃんに連絡したんです」

「あたしも最初は花音さん疲れてるのかなつて思つたんですけど聞いてるうちにさすがに信じるしなくなつてきて皆さんを呼ぶように花音さんに言いました」

「…でもあたしたちを呼んでも意味無くない？こつというのは警察とかに「らん」…なに？モカ」

「きつとそうしなかつた理由があるんだよー」

「そうなの？花音」

「うん、千聖ちゃん

やっぱりこころちゃんは不思議なところとか色々あるかもしれないけどそれでも私に勇気を与えてくれた恩人だから

…今度は私が助けないと」

「そういうことなら私も協力するわ」

「花音ちゃん、私にも手伝わせて！」

わたしも！あこも！あたしも、モカちゃんも…

「みんな…ありがとう」

涙を溢れさす松原さんにハンカチを差し出しながら私はこう呟く

「けどどうやって弦巻さんを止めるんですか？」

「あまり得策ではないと思ってるんですけど今からこころの家に突撃しようかと思つてます」

「さすがに危険では…」

「1人2人だとかばいと思えますけどこれだけ大人数で押しかけたらさすがに黒服さん達も手は出せないはずですよ」

「いいね！るんって来たよ」

「いや、日菜ちゃんそれ言いたいだけでしょ…」

「日菜少し落ち着きなさい」

「はーい…」

「それでは月島さん」

氷川さんが月島さんと呼ぶ

予想してなかったのか少し飛び上がった

「え？、私!? 何かな」

「今から弦巻さんの家に向かうのでバスの手配をお願いします」

「いやいやいや、私バス運転出来ないよ!?!」

「あら、そうなのですか? てつきりなんでも出来るので免許も持ってるのかと」

「私をなんだと思ってるのー!」

あははー

「それでは冗談も置いておいて皆さん行きましようか」

「それじゃみんな行くよー! えい、えい、」

「「「おー!」」」

……

「はぐ、香澄、あこちゃんありがと…」

「なんか久々に乗ってる人見た気がするな」

「トモちゃんそれは言わないお約束ー」

「あ、ごめんごめん」



やつぱり弦巻さんの家は大きいな…

今はCIRCLEから移動して門の前にみんなでいます

ていうかこんな夜遅くに人の家の前に20人以上とかいたら色々まずいような気が

…

「それじゃインターホン押しますよー」

ピンポン

数秒間の沈黙の後インターホンから人の声が聞こえてきました

『はい、どちら様ですか?』

「美咲です、ここにすこし聞きたいことがあって」

『美咲様でしたか、申し訳ございませんがお嬢様は少々お取り込み中ですのでお帰りください』

「佐々木さん、こころが犯罪に手を染めようとしてるのは分かってるんですよね？」

奥沢さんが黒服さんの名前？を呼んで語りかける

『つ!?!:はて私めにはなんの事か分かりかねます』

「あくまでシラを切るつもりなんです、分かりました

あんまり使いたくはなかったけど

…タンスの下から二段目の段の引き出し、その右奥の隠し底の下に一体何があるんですかねえ？」

『え、あ、え?え!?!美咲様なぜその存在を…!』

』

「いやー佐々木さんがあんなものを持ってたなんて」

「みーくんあんなものって?」

『わ、分かりました今迎えにあがりますからその事だけにご内密に』

「早めでお願いします」

門が開き遠くから猛スピードの車が走ってきた

キキイ

「皆様、お迎えに上がりましたお乗り下さい」

「美咲ちゃん…一体どんな弱みを握ったの?」

「花音さんは心配しなくても大丈夫ですよ

さあ皆さんあともう少しです

…あと佐々木さんひとつ頼みたいことが」

ボソボソ

「…え?そんなこと私には出来ません、お嬢様を裏切つて「ベッドの下の奥の方にある小さなダン」ヒイツ、か、かしこまりましたっ!」

奥沢さんは敵に回すとやばい

この思考が他のみんなの頭に過つたという

「…お嬢様はここにいらつしやいます」

「ありがとうございます」

案内されたのはひとつの扉の前でした

ハロハピの皆さんは見慣れているのか特に不思議そうな顔はしてませんがそれ以外の人達は（私も含めて）まるでアニメの世界に迷い込んだのか?と言いたいぐらいの部屋の前だった

「…すぐに用意しておきます」

「頼みましたよ、もしものために」

佐々木さんが姿を消す

this is 忍者

「いきますよ」

コンコン

『佐々木？空いてるわよ入ってちょうだい』

ガチャツ

「こころ、あんたを止めに来たよ」

「み、…美咲？それに」

「私達もいるよ、こころちゃん」

「なんで、どうして？佐々木達が見張ってたはずなのに」

「その佐々木さんに通してもらったんだ…そんなことよりあんた、私たちに黙ってることがあるんじゃない？」

「……やっぱりバレちゃったか」

「ねえ、こころ…友希那は無事？」

「…ええ、隣の部屋で寝てもらってるわ」

「こころん、どうしてこんなことを…？」



「香澄…」

「それはね香澄、こうでもしないとあなた達にはあたしは勝てないと思ったの」

「え？　こころちゃんは充分ライバル…というか私では勝てないと思ってるんだけど…」

「彩ちゃん…」

「彩はとつても魅力的よ？…大丈夫あたしなんかよりずっと、それにみんなも」

「こころ」

「かお…る？」

「大丈夫、こころは良い子だ、私が男だったらさすがにでも告白するくらいにはね」

「…うう、グスツ…ごめ、あ、たし」

「少しの間こここを使うといいよ」

「うわあああん、ひう、ケホツ…」

「みんな、子猫ちゃんが泣き止むまで少し待ってはくれないかな」

数分後目を真つ赤に晴らしながらも落ち着いたのか弦巻さんは瀬田さんから離れて

こつちを見た

「…みんな、ゴメンなさい、あたしが間違ってたわ」

「こころーん!!」

ギユツ

北沢さんが抱きつきに行ったのをきっかけにみんなが駆け寄る  
みんながみんな目に少し涙を見せながら

…あれ？何か忘れてるような

あ、

「つ、弦巻さん！」

「隣子、何かしら？」

「響也くんはどうなるのでしょうか？」

ポクポクポクチーン

「「「「あーっ!!!」」」」

「そうだよこころ！響也先輩は!？」

「そ、それがね？あ、あたしは薬の効果がもう少しで切れることが分かってるから解毒剤  
を作ることを頼んでないの…」

「ど、どうしよー、有咲あ、」

「だあつ、くつつくな香澄い、そんなこと言っただってどうしようもないだろお」

「…こうなったらキョウヤさんを叩いて」

「イヴさん、さすがに昔のテレビじゃないんだからそんなことしても治りませんよ…」

ガチャッ

「…何をそんなに騒いでるの?」

「友希那!」「湊さん!」「友希那ちゃん!」

扉を開けて入って来たのは友希那さんだった

「大丈夫?どこか痛いところない?」

「リサ…大丈夫よ、心配しないでいいわ

…そんなことより」

弦巻さんの方に目を向ける

「さあ弦巻さん、もう逃げられないわよ」

シーン

友希那さんもう1回この話始める気ですか!?

「えっと、あの、その、」

弦巻さんもしどろもどろしちゃってるし

「弦巻さん!!響也を元にも「俺がなんだって?友希那」…え?」

皆の目線が扉の方に集まる

私も目線をそちらに向けた

中に入ってきたのは待ち焦がれてた人

「どうした？みんなそんな鳩がアサルトライフル喰らったみたいな顔して？」

「「「「き、響也くん（さん）！」「「「「」」

「…？俺が入ってきてそんなに驚くことか？」

「そ、そりやそうじゃん、ていうか響也記憶戻ってる!？」

「まあここに変わったあたりから記憶自体は戻ってるしな」

「よかった…よかったよお」

うわあああん

「いや、ちよつとまって、みんなしてそんな号泣されると俺どうすればいいかわからん」

「とりあえず1人ずつ抱きしめて撫でてくれればいいわ」

「ちよつ、友希那それはさすがに…ってお前らここはアトラクションの並ぶ列じゃ…わ

かった、分かったからそんな顔すんな罪悪感生まれるわ」

わーいモカちゃんいちばん、ちよつモカずるい私もー！

あこもあこもー、…………

そのあと10分くらいみんなの響也くん成分補給会が続きました

「ところで響也さんどうして元通りに？」

なんか全員撫でさせられたあとここに連れられて俺たちは大きい広間に通された

「実はな「それはわたくしから」ご説明させていただきます」

「佐々木!？」

「お嬢様に薬の製造を頼まれた際もしものことがあつた場合のために解毒剤を同時に制作していたんです

美咲様に頼まれたあと響也様をお迎えに上がり、投与させていただきました」

「なるほどーだから響也くん普通に入ってきたんだねー

…でもさーそれしたらどうしてあやし達の演奏の時に響也くん普通に話せてたの?」

「それは結局よく分かってない

俺もなんでかとずっと考えてはいたんだけどね」

「なるほどねー、まあいつか響也くんが元通りになつたからそれであたしは満足だしね」

「心配かけたな日菜」

「あら心配したのは日菜ちゃんだけじゃないわよ?」

「千聖もだよな、それにここにいる全員」

「…別にあたしは」

「蘭は素直じゃないからー」

「うっさいモカ…でも少しは喜んでるから」

顔を赤くして背けてしまった

「ねーねー響也くん！そっち行っていいー？」

「ん？いいけどこつちに来てもイスねえぞ？あこ」

トテトテトテ

「だいじょーぶ！ほら響也くん少し椅子引いて」

「わかった」

俺は言われた通りに椅子を引く

「よいしょっと」

ボスツ

「…へ？」

「「「「「…は？」」」」」」

あこは少しできた空間に体を滑り込ませて膝の上に座ってきた

「えへへー、ほら響也くん撫でてよー」

「わ、わかった」

久しぶりに味わう冷えきった…いや何十もの漆黒の眼差しだった

「…あこつぎあたしねー！」

「わかった次リサ姉ね」

「いやいや待てリサさすがにお前は「…へえ」」

「あこはできてあたしは出来ないんだー、ふーん」

「喜んでさせてもらいます」

「分かればいいんだよ分かれば」

断つていたらせつかく戻った人格がまた埋められるところだった危ない危ない

「えー！ずるいリサちーあたしもー」

「こら日菜、殿方の膝に座るなど破廉恥です」

いいぞ紗夜そのままこの流れを終わらせてくれ…

「えーでもおねーちゃんこの前机の引き出しの中にある写「響也さん！今井さんの次は日菜でお願いします」

「…はい拒否権はないんですねわかりました」

まあ元通りになったからだろう、多少の願いは聞き入れるとするか

あ、そうだそうだとつ言わなきゃいけないことがあった

「こころ」

「何かしら響也？」

「お前も充分に魅力的だからな？こんなことしなくてもお前のことちゃんと見てるから」

「…っ?!?うん!」

「えーモカちゃんにはその言葉はないのー?」「そうそう私にも欲しいな」「わ、私だって負けないよ」「響也?…わかってるわよね?」

「あーもう分かってるよお前らー回しか言わないからよく聞いておけよ!」

「「「「「うん! (はい!)」」」」」」

スウ…ハア…

「ただいま!俺は帰ってきたぞ!」

おかえりなさい!!響也くん(さん)(先輩)!!



## 第18話 新学年と新学期はだいたい一悶着あるもんだ

…いちゃーん!!

ゴスツ

「げいふうっ」

っ!? な、なんだ? 何が起こったんだ?

俺は夢…は見ていたか分からないけどそんな世界から意識を覚醒させると自分の体に布団とは明らかに違う重みが加わっていた

「お兄ちゃん!」

俺の上に跨っていたのは皆さんご存知の愚妹だった

「……詩歌、そこに正座」

「嫌だよ!? なんでそんなことしなきゃいけないのっ!?!」

朝からキンキンうるさいなあ…まあいいか

「とりあえず降りてくれ、さすがに重い…」

「あーそうやって可憐な乙女に重いつて言うー!」

ウチのお姫様は大層ご立腹なようだ

ほんとにその元気はどっから来るんだかよく分からないが

「あ、そんなことはどうでもよかつたんだお兄ちゃん!早く着替えておりてきて!」

「なんでまた」

「いいからー」

そう言つて俺の上から飛び降りて部屋を出ていく詩歌

やっぱり台風みたいだな誰かさんに似て

「へくちっ」

「日菜、風邪?」

「んーん、誰かがあたしの噂でもしてるんだと思うよー」

「全く…」

「響也くんかなー?だとしたらるんっ!つてくるんだけど」

「まあ、ありそうだから困るわね」

台風(物理)が通り過ぎた後、俺は制服に着替えて1階に降りていく

一体何があるというのだろうか

詩歌のあのテンション的に普通では無いはずだが

ガチャ

「降りてきたぞ」

「響也おはよー」

「…リサうちでなにしてんのさ」

キツチンに制服の上からエプロンを付けて立っていたのはリサだった

「何って朝ご飯の用意？」

「見たらわかるわ、なんでうちにいるって聞いてんのさ」

「そりゃ「闇より深き深淵に」…」

背後から謎の詠唱が聞こえる、…くっ、後ろを取られたか

「人の理を捨て、この地に…ええと「顕現」顕現する

聖墮天使あこ…ここに降臨！」バーンッ

まあそんな詠唱やるのはあこだとは思ってたけどまさか隣子までいるとは…って

「お前らまで朝から何してんのさ」

「?何って響也くと朝ごはん食べて一緒に登校しようかと思って」

「…だめ、かな?」

「いやダメじゃないけど珍しいなって思ってたさ」

「今日から新学期だからあこがみんな登校したいって言うからこうして集まったのよ」

「友希那まで…つてことは紗夜もどこかに？」

俺は身構える…朝からあいつに小言を言われるのはテンション下がるからな

「紗夜ならいないよー、なんか日菜が先に約束してたみたいだからそっちに行ったみたい」

「…そうか」

九死に一生を得たみたいだ

ピロン

「ん？誰だ？朝から」

俺は自分のスマホにきた通知を見る

紗夜『響也さん…、次にあつたら覚えておいてくださいね？』

…そろそろ監視カメラやら盗聴器などを捜索依頼した方がいいのか？

自分の家が恐ろしくなりながら俺は呑気にテレビを見ている妹に声をかける

「それならそうと詩歌も言つといてくれたら良かったのに」

「えー、だつて言ったらお兄ちゃん密室と疑うくらいには戸締りするでしょ？だから言

わなかったの」

否定できんから困る

「響也くん…あこ達のこと嫌いになったの…?」

ええいやめい、そんな小動物みたいな上目遣いでうるうるで見つめてくるな

「…響也はロリコンだったのね」

「友希那ちよつと待ってくれその認識はおかしい」

社会的に抹殺されかけてる!?

「友希那さんっ!?!あこロリじゃないですっ!!」

「あこちゃん…あこちゃんのことを名指ししてるわけじゃないからそれ実質的に認めて

ると一緒だよ…」

燐子からなぜかフレンドリーファイアがあこに飛んでいく

「ううー…あこだつてあと1年もしたらりんりんみたいにナイスバディになつてるもん!…きつと」

…いや燐子は1年の頃からこれだったらしいからあこに未来は、

ていうかそう考えると友希那も特に変わつてはいないよな、限りない絶ペ「…響也」

「トリアエズソコニヒザマズキナサイ…?」

「大変申し訳ございませんでした…」

女子って怖い、…女子って怖い

「ほら響也も友希那もご飯できたから座って座って」

これ傍から見たら完全に奥さんだなあ

リサはいいお嫁さんになりそう」

「…ええ？」

「…ええ？」

皆がポカンとした顔で見つめてくる

…まじ？声にでてた？

「そ、そんなこと言ってもお姉さんからは何も出ないぞー？」

「…リサ顔が赤いわよ？」

「こ、これは料理してたから少し暑いなって思ってるだけだから…他意は無いから！」

「りんりん…ラスボスクラスみたいにリサ姉が強敵だよ…」

「あこちゃん…私もそう思ってた」

約2名がなんか暗いオーラを漂わせていた

「よくわからんけど、頑張れふたりとも」

「…りんりん響也くんがいじめてくる」

「響也くん…少しは人のことを考えてね？」

何故か怒られてしまった

「とりあえず朝ごはん食べちゃおうよ、このままだとみんな揃って遅刻だよ？」

「そうするか」

ちなみにリサが作ってくれた朝ごはんは格別でした

時は進み今は登校を終えて学校にいた

学年が1つ上がり3年になった俺は少し変わった風景を横目に適当な席につく

…まあとりあえずはどこでもいいだろう

「お？響也さん同じクラスでしたか、よろしくお願いしますっす、ふへへ」

「…麻弥、その笑い方千聖に怒られるぞー？」

話しかけてきたのは麻弥だった

「だいじょぶです、千聖さんここにはいませんから」

「まあお前がそれでいいなら俺は何も言わんけど」

「響也くん!!」

ゴスッ

「いつ!!…日菜さすがに座つてるところに飛び込んでくるのは危険すぎるからやめろ」

「えー？だつて響也くんと同じクラスになれるなんてるるるるるんっ！！つてくるんだもん」

「返答の答えになつてないし、るが多い」

毎回とは言えないが俺の記憶が戻つてからは日菜が飛び込んでくる回数が増えた

よく分からんがたまに三途の川に行きかけるからやめて頂きたい

「あたしここにすーわろつと」

「それじゃジブンはここにしますっす」

なんか後ろと前に陣取られた

なお俺が選んだのは窓側の後ろから2番目の席

…寝るにはちようどいいんだここがまた

「後でどうせ席替えで場所変えられそうだけどな」

「うーん、それがるんっ！つてこないんだよなあ」

「まあまあ日菜さん、ここは天の運に任せましようよ」

「そうやって麻弥ちゃんちやつかり隣とか持つていきそうだから運貫つておかなきゃ」

「ちよつ、日菜さん!?く、くすぐつたいっすよー」

なんか目の前で2人の美少女が絡み合いを始めた

目の毒なので俺は席を立つ



「?響也くんどこ行くの?」

「自販機、飲み物買ってくる」

「それじゃああたしもいくー」

「はあ…はひ…ふう」

「…麻弥はそこで休んどけよ」

「め、面目ないっす…」

俺たちは廊下に出る

「結局同じクラスになったのは日菜と麻弥だけなのか?」

「んーん、あと薫くんがいるよ」

「げっ、まじか」

…クラスがうるさくならなきゃいいが」

「げっ、とはさすがに失礼ではないかな?いくら私でも少し傷ついてしまうよ」

…っ?!いきなり後ろから声が聞こえて飛び上がりそうになる

最近の女子はみんなステルス迷彩でも使ってるのか?

後ろに振り向くと噂の主、瀬田薫が立っていた

「薫…さすがにびっくりしたわ」

「せっかく一緒にクラスのなれたから挨拶をと思ってたんだけどね、私の名前が聞こえ

てきたんで聞き耳を立ててたんだよ」

「お前がいると教室中が黄色い声で満たされて頭が痛くなるんだよなあ」

「麗しき子猫ちゃん達の歓声だ：受け取らなきゃいけないだろう？」

「程々にしておいてくれよ？」

「そういう響也だつて子猫ちゃんに囲まれてるじゃないか？」

「うっせ、好きで囲まれてるんじゃないやい」

「ふふ、まあいいか、よろしく頼むよ」

「ああ」

「ぶー！二人きりの世界って感じでなんか気に食わないー！あたしも混ぜろー！」

「うわつと、日菜飛び込んでくるな、危ないわ！」

「ふーんだ、響也くんがあたしを無視するからいけないんだよーだ」

「無視も何も入ってきてなかっただろ会話に」

「まあまあ日菜、私に免じて今回は響也を許してやってはくれないか？」

「むー、…まあ仕方ないか薰くんに免じて許してやろう」

「なんで上から目線なんだよ…たく」

「とりあえずミルクティーーミルクティー…と」

俺は自販機の前に着くと財布を取りだしいつも買ってるミルクティーに照準を合わ

せる

「ほんと響也くんっていつもミルクティーだよねー、飽きないの？」

「この素晴らしい飲み物を飽きるなど俺には考えられないな」

ピツ、ガゴンツ

カシユツ

「んく、んく…ぷはあ、やっぱりこれ飲まないとやってられないな」

「そんなに？ちよつとちよーだい！」

「おいこら、自分で買えよ」

「んくんく、…うーん、普通のミルクティーだと思っただけだなあ」

「まあ人それぞれ感じ方は違うわな」

「つてあぁー!!こ、これってか、かんせ、…響也くんのエツチ!!」

「いやお前が勝手に飲んだんだからな？俺にいわれのない罪を着せるんじゃない」

「響也…犯罪者になっても私は信じて待っているよ」

「薫、話がややこしくなるから1時間お口チャックで」

「そんなにかい!？」

顔を真っ赤にしたやつと顔を暗くしたやつを引き連れて俺は教室に向かうのであつた

…なので皆さんは…で…

「理事長張り切ってるなあ」

俺は講堂にいる

まあ、俗に言う始業式というやつ

理事長の話の後は生徒会長挨拶で終わりだ

今日はこれが終わってLHRがあり昼前に終わる

「それでは皆さん、新しい学年でも張り切って勉学に励んでください、終わります」

「理事長、ありがとうございます」

続いては生徒会長挨拶、生徒会長氷川日菜さんよろしくお願いします」

…?いま『氷川日菜』って言ったか? いやいやんなわけないかあいつが「みんなおつ

はよー!」…おいおいマジかよ

「ご紹介に預かった氷川日菜だよ!

なんかね理事長先生からはね自由に喋っていいって言われてるからこのままいく

ねー!

まずはみんな進級おめでどう? でいいのかな?

新しい学年になったからといってはしやぎすぎず、羽丘の学生としての誇りを持って

行動するように！

次にみんな知ってる通り毎年やってる副会長選びなんだけど今年の副会長を今から呼ぼうと思います」

…なーんか嫌な予感が

「響也くん、前に出てきて！」

全校生徒の視線が俺に集まる

いやいやいやいや、まてまて

「俺なんにも聞いてねえんだけど日菜」

「ん？だつて今決めたもん、ほらとりあえず上がつてきて！」

「…たくとりあえず後で詳しく話聞くからな」

俺は仕方なく言われた通り登壇する

注目を浴びすぎてさっさと逃げたいんだがこちとら

「何も聞かされず何も相談されずここにいきなり呼び出されました菅谷響也です」

「もう！その言い方じゃあたしが悪いみたいじゃん」

「いやお前が悪いんだろ!？」

夫婦漫才やってないですすめてよー！こつちがニヤニヤしちゃう！仲良いねー2人ともー！

「そんなー、夫婦なんてまだ早いよ…」

おい日菜照れてるんじゃないとりあえず否定しろ、そしておい友希那とリサと蘭そんな黒いまなざしを向けてくるんじゃない逃げられなくなるそれにひまりとモカは面白そうなものを見つけたような目で見るな後で覚えておけよ

「とにかくこの件は一回日菜とちゃんと話し合って決めるから、以上」

俺はそう言っただをおりてく

「あー！響也くん勝手に降りないでよー！まあいつか

そんな訳で今年一年会長こと私をよろしくねー！」

なんか頭痛くなってきたわ

「んで？とりあえずちゃんと説明してもらおうか？日菜さんよお」

俺は教室に戻るやいなや日菜を問いつめる

「だってその方がもつと響也くんと一緒にいられてるるんっ！ってするじゃん？」

「だからってせめて相談くらいしてくれないとき」

「まあまあ響也さん、少し落ち着いて下さいっす」

「…麻弥、ハウス」

「ジブン、犬じゃないですよ!？」

「とにかくさー響也くんはやってくれないの?」

「…少し考えさせてくれ、みんなの練習見たりとかする時間削れるのはまずいからな」

「…確かによねーちゃんに般若の顔で追いかけれそうだよね」

「…千聖もきつと黙ってはいないだろうね」

「…薰とりあえず窓から紐なしバンジー」

「私に飛び降りろと!？」

会話の中で約2名を愕然とさせたがとりあえずこの話は1度保留となった

「んー!？」

ふう、さてと今日は久々に昼からフリーだし帰って溜めてたゲームでも消化しようかね

「ねーねー、響也くん」

「ん?なんだ日菜」

俺は話しかけられた日菜の方へ向く

「なんか千聖ちゃんから連絡来て校門まで響也くんダツシユだつてさ」  
「…は？どゆこと」

「その連絡もう30分前なんだよね」

「日菜また明日な」

俺は本能的に荷物を持って走り始めていた

なおその思考に至ったのはコンマ1秒を切っていて後に氷川日菜はあの時の響也く  
んるるんっ！ときたと述べていた

「響也…遅かったじゃない？」

「千聖、せめて俺にも連「何かしら？」…いえなんでもございませぬ」

俺は校門に着くと人だかりになっている中心へ出向き千聖の前で土下座していた

何故かって？ライオンに睨まれたシマウマってこうしないの？

「ごめんね、響也くん…私が誘おうって言ったばかりに」

「いや花音のせいじゃないよ」

千聖の隣でふええって言ってたのは花音

ああ…天使だ

「それじゃ、私のせいだとも言いたいのかしら？」



「いえ、わたくしめが確認してなかったのが全て悪うございます」

「千聖ちゃん…とりあえず移動しない？ 凄い注目浴びちゃってるよ」

「そうね、ほら響也、いくわよ」

「へい、仰せのままに」

「全く…何時までやってるのよそのキャラ」

2人の美少女に連れられて、俺は人の輪を脱出した

「…んで、どこに向かってんだこりゃ」

「新しく出来たカフェよ確かここら辺にあるらしいんだけど」

「それってさ単純に道に迷うからって理由で俺連れてこられただけじゃなくて？」

「さつき電車乗り継ぎあったし」

「響也くん、それは聞かないでくれると嬉しいかな…」

「やっぱりか」

皆さんご存知かとは思いますが花音はドが付くほどの方向音痴「そんな言葉私初めて聞いたよ!」ドは普通つけないか

まあ要するにとっても酷い方向音痴である

例えばスタジオに向かつてるのにいつの間にか真反対の商店街にいたり

千聖は千聖で方向音痴では無いのだが電車の乗り継ぎが出来ない「で、出来ない訳じゃないわよ!」

…って

「お前ら地の文にツッコミ入れてくんな、ややこしくなるだろ」

「響也（くん）が失礼なこと言うからでしょ!!」

息びったりである

「全く、…ってあれ?あそこなんじゃないか?」

少し先の看板にはC a f eの文字が

「あ、うん名前もあつてるあそこだよ」

「さすが人気の店ね…結構並んでるわ」

そういえば

「千聖と2人でカフェ行った時もこんな感じで並んでたよな」

「ふえ?ふええ!!?ち、千聖ちゃん響也くんと二人でカフェに行ったの?ずるいよお」

「ずるいも何も花音、貴方バイトで来れなかった日のことよ?」

「…あ、あの日かなーんだ…千聖ちゃん抜けがけしたのかと思った」

俺たちは列に加わる

「でも前よりは長くないから割とそうでも無い待ち時間もな

「このデザートは何が有名なんだ？」

「響也もなんだかんだで楽しみなんじゃない

「ここはパンケーキが有名ならしいわ、お昼食べてないし少し重たいものでも大丈夫でしよ？」

「もちろんだ、パンケーキかすげえ楽しみ」

「ふふ、響也くん子供みたいだね」

「別にいいだろー甘いもの好きで悪いか」

「ううん、ただただいつも響也くんだなあって」

「ん？どゆ意味だ？」

「内緒だよ！」

笑顔の花音はまるで太陽に向かって満開にさくひまわりのような儚さだった

お待たせしましたお席へご案内します

店員さんのその声は俺たちにとって長い戦いが終わった報せであった

扉をくぐり店の中に入るとひんやりとした冷房に包まれて俺の火照つ「響也この前と同じこと言つてない？」

な、なぜバレた

「響也の言葉は1字1句覚えてるわよ？」

俺は通された席に座る…ん？

「なんでわざわざ俺の言葉なんて覚えてるんだ？」

そうすると千聖は向かいに座つて俺の手を握りじつと目を見て言葉を紡ぐ

「それは、好きな人の事ならなんでも覚えたいじゃない？」

ここで俺の残念な脳は前、千聖にされた行為が浮かぶ

そうだよな俺千聖からも好意向けられてるんだよな

「まあ、鈍感な響也だからここまでしないと私ただのモブになるじゃない」

「き、響也くん千聖ちゃんとりあえず注文しようよ」

あいだに割り込むかのように花音がメニューを広げる

「あら花音、嫉妬かしら？」

「ち、違うもん、ほら私お腹すいちゃった」

「ふふ、そういうことにしときましようか」

「俺このデラックスパンケーキ」



「いきなり店の中で大声出すのはあれだぞ？」

「うん、ごめんね」

俺は花音の反省した顔を見るとまた手帳に目を戻す

「…ど、どういうことなの!?!千聖ちゃん」

「花音も驚きすぎよ、普通にキスしたのよ私から」

「は、はうう…千聖ちゃん流石だね」

「勘違いを正すけどドラマとかでもしたことないからファーストキスよ？」

「…私千聖ちゃんに勝てる自信が無いよ」

「なんなら花音もやったらいいじゃない？」

「そ、そんな、私には出来ないよお」

「それなら響也は私が貰ってもいいの？」

「そ、それはだめ!!」

「ほら花音もちゃんと好きじゃない、まあするかしないかは花音次第

さあこの話しは終わりよ」

お待たせ致しました！

「き、今日はありがとね響也くん…」

パンケーキに舌鼓をうち少し色んな所へ寄った俺たちは帰り道千聖を先に送り花音と2人で歩いている

「んにや、俺も美味しいもん食べたしむしろ誘ってくれてありがとな」

さつきから俺の方をちらちら見ではまたすぐ視線を戻す花音

なんかカフエを出てからこんな感じなんだよなどうしたんだろ

「つと家に着いちまったな」

花音の家の前につく

「それじゃ花音また練習の時にな」

「う、うん」

俺はそのまま前に進む

…結局花音の状態は戻らずじまいだったな

まあきつと千聖にでもなんか吹き込まれたんだろ、次に会う時にや「響也くん!!」ん

?

花音の声があったため俺は歩みを止めて振り向く

「んっ」

チユツ





## 第19話 バフのかけ所にご用心

『響也くん起きてますか…?』

「起きてるぞー」

パソコンを開いてデータ整理をしていたら隣子からホイチャがかかってきたので返答する

『明日って暇かな…?』

「明日は朝やる事あるから昼からなら大丈夫だがどうしたんだ?」

『明日あこちゃんが泊まりに来るんですけど響也くんも一緒に遊べたらなと』

「…それ俺行く必要があるか?」

すると隣子は俺にとっては衝撃の一言を放つ

『…クローゼットの右奥にあるダンボールのしたの「わかったっ!…行くから」ふふ、…響也くんらしいね』

なぜ俺の超極秘書物の場所を知っているんだ…?

本格的に家宅搜索を心に決めた俺であった

「しっかしまた急だな」

『詩歌ちゃんが前日に言えば断りづらいつて』

「おっけ、ちよつと待つといて」

そう言う俺は席を立つ

『ほ、程々にね…』

—ええ？お兄ちゃんどうしたの？つて何何!?痛い痛い、あああああ

……

…

「ただいま」

『あ、あはは…』

「とりあえず明日詳しく話させてもらおうわ」

『うん…じゃあね』

そう言つて燐子はチャットから落ちる

女子つて怖いな…

そのあとトイレに行くついでに詩歌の部屋を覗いたら見事にまだ悶絶したままだつ

た

…少しやりすぎたかな反省反省

次の日

俺はパスパレの練習を見るために事務所のスタジオを訪れている

そう言えばもう自分の中では当たり前になってしまっているがよくよく考えてみるとアイドルの事務所に顔パスで入れるようになるなんて凄いもんだよな

しみじみと考えながら廊下を進んでいるといつも使っているスタジオの前に着く

ガチャツ

「失礼するぞー」

「ほらほらー彩ちゃん最近甘い物の食べすぎでお腹周りが増えちゃってきてるんじゃないのー?」

「や、やめ、あはは、くすぐったいよお日菜ちゃん」

「こら日菜ちゃん、そこまでしておかないと響也がくるわよ」

スタジオの中には襲われる彩と襲う日菜、それを叱る千聖に見てる麻弥とイヴ

「千、チサトさん…、キ、キヨウヤさんが…」

「響也がどうしたの? イヴちゃん…」

あ、やべ千聖とイヴに気づかれた

「お邪魔しました」

そう言つて扉を閉める俺

数秒の後ドタバタと中から聞こえてきた

ガチャツ

「響也……？とりあえず中に入つてちょうだい」

「オレ、ナニモワルクナイ」

「い、い、か、ら、入つてちょうだい？」

阿修羅を後ろに従えて千聖が鬼をも殺す笑顔で手招きしていた

俺は観念してスタジオに入る

彩が顔を真つ赤にして隅つこで体育座りしていた

「もー！響也くんはエツチだなあ」

「いやノックしなかつた俺も悪いけどまさかこんなことになるとは誰もが思わんだろ!？」

「それでもこつそり見てる必要はないんじゃない？」

「それはだな千聖、男には時としてやり切んなきや行けないこともあるんだ」

「力説してるとこ申し訳ないっすけど響也さんカツコ悪いっす……」

「キョウヤさん…」

約2名が哀れんだ目で見てきたけど俺は気にしないことにする

「結論、響也くんはエッチなことだよねそれ？」

「日菜よ、男は皆変態だ」

「…響也、正座」

「なんでさ!?!」

とりあえず言われるがまま正座をする

…べ、別に怖いとかそういう訳じゃないんだからね？

「まあ、響也が変態でどうしようもないってことは皆わかってるからそれはこの際どう

でもいいわ」

「いや、それどうでもよかったら俺なんで正座させられてるの!?!」

「でもこのままじゃいつ響也に襲われるか分かったもんじゃないわ」

「いや、千聖は怖くて手を出さ(ガンツ!)…何か言ったかしら…?」ヒツ!…イエナニ

モ」

正座している俺の足の数センチ前に千聖様の御御足が振り下ろされていた

わざとであろうがあと数センチこちら側だった俺の膝が消し飛んでいただろう

「えー、でもさー? 千聖ちゃん『は』ってことはあたし達には手を出そうとしてるわけー

「？」

「……………言葉の綾だ」

「響也…その沈黙はむしろ怪しいわよ？」

「だって男なら皆そういう想像1度はするもんだろ？」

「響也くん…」ボンツ

「おい、いつの間にか復活してた頭ピンクなに想像してんだ」

「響也さんと…フへ、フへへへ」「キョウヤさんと…」

「やべえ收拾つかなくなっちゃった、ここはとりあえず一旦この部屋出といた」響也くん

「…?!」

「ドアの方に向かおうとした俺の目の前にはさっきまでちよつと離れた位置にいたはずの日菜がいた

「ドコニイコウトシテルノ？」

「えつと、そ、そう！飲み物を買いに」

「苦し紛れだがなんとか理由を作る

「うーん、それじゃあたしもいくー！」

「いや日菜は休憩してていいんだぞ？」

「うーんとね、なんだか響也くんにか隠してそうだから見張つとかないと」

「な、なにも隠してねえよ?」

「なになに? 『それじゃ14時頃家まで迎えに行きますね(≡▽≡)』 燐子響也これどういうことかしら?」

「…え? あ、俺のスマホいつの間に、てかパスワードかけてたのに?」

「え? パスワードくらいみんな知ってるわよ?」

OK Google、プライバシーとは?  
…すいません、よく分かりません

「き、響也くん、まさか燐子ちゃんと付き合ってるの!？」

「そんなまさか、昨日燐子と遊ぶ約束したのさ」

あここと3人でな

そう言うのと5人は明らかな安堵の溜息を零していた

「えー、今日帰りに響也くんとどこかよろうとおもってたのにー」

「日菜とは結構な頻度で会ってるだろ」

「そりや同じクラスだからねー、でもそれだけじゃるんっ! てこないから」

「まあいいか、とりあえず飲み物買いに行ってくるわ」

そう言つて俺はスタジオから一旦いなくなる

「…私からしたらその毎日顔を合わせられることだけでも羨ましいわ」

響也くんが出たあとと眩くように千聖ちゃんが声を発する

「それは私も思うよ、日菜ちゃん羨ましいな」

「えー？そうかなー？」

「でもそんなふうに通ってますから千聖さんってほんとに響也さんのこと好きっすよね」

「そ、そうかしら？」

千聖の頬には僅かな朱が差す

「マヤさんは違うんですか？」

「うーん、なんて言えばいいんでしょう」

多分好きなんでしょうけどまだ分かってないんですよ

なにぶん音楽設備としか面と向き合ったことがないっすから…あはは」

「全く…麻弥ちゃんには女子力が足りないわ」

「め、面目ないっす…」

「麻弥ちゃん？毎日私が言った事やってる？」

千聖ちゃんが少しずつ麻弥ちゃんににじり寄ってる



「ち、ちちちゃんとやってますっす!」

「…本当に?」

今の千聖ちゃんはまるで悪魔のようなオーラを纏つ「彩ちゃん?後でお話があるから」ピイツ

「ヒイツ、ひ、日菜さん!助けてくださいっす!」

麻弥ちゃんが日菜ちゃんの方に逃げる

…その様子だとしてなかったんだね

「あはは、千聖ちゃんおもしろーい!」

「マヤさん!私がお守りします!」

千聖ちゃんの前にイヴちゃんが立ちはだかる

「チサトさん!いざ尋常に!…:イヴちゃん?」

「どいてもらえるかしら?」

「ぶ、武士はに、逃げたりしません!」

イヴちゃん、足ガクガクだよ!?産まれたての子鹿みたいになっちゃってるよ!?

「そう…わかったわ

まずはイヴちゃんから…

お説教が必要かしら？」

「キユ〜」

バタン

あ、イヴちゃんの恐怖メーターが振り切って気絶しちゃった…

「ふふふ」

さてと、邪魔者もいなくなったわけだし麻弥ちゃん？お話を聞かせてもらおうかしら

？」

「お、お助けえ〜」

入り口に逃げる麻弥ちゃん

と、ちょうどその時入り口が開く

「すまんすまん、飲みたいもん下にしかなくて時間か「響也さん!!助けてくださいいつす

!!」

麻弥ちゃんが響也くんに飛びつく

そしてすぐに後ろに隠れる

「おっとと、どうした麻弥」

「響也、どいてそいつお説教出来ない」

「いやいや口調おかしいしどつかで聞いたことがあるセリフよそれ

てゆーかイヴが倒れとるし、日菜は笑い転げてるし意味がわからんぞ」

大丈夫響也くん、私もわかんないよ…

「実はかくかくしかじかで」

「…なるほどね

千聖、さすがに麻弥もわかってるからそこまで煩く言わなくても」

「私は麻弥ちゃんのためを思って」

「大丈夫だ、それはみんな分かってるよ」

「そう…よね

「ごめんなさい麻弥ちゃん」

「は、はいっす

響也さん、助かりましたあ」

「麻弥もアイドルなんだから少しは自分のこともちゃんとしないと」

「すいません…」

「まあ、分かればいいさ」ポンポン

「っ?!…フへへへ」

麻弥ちゃんが頭ポンポンされて蕩けてる

「あー！ずるーい、あたしもあたしもー！」

「あ、わ、私も響也くん！」

「いや何がかわからん!？」

「その頭ポンポンよ」

「いやいや順番待ちしてもやらんぞ？…って、麻弥？どうした俺の手を掴んで」

「も、もっとお願ひします…」

「お、おう」

その後は麻弥ちゃんが納得するまでポンポンしていた響也くんであった  
もちろん私達にも結局してくれました

「つていうことがあつて大変だったんだよなあ」

「そ、それは大変だったね…」

「えー響也くんあこにもやつてよー」

結局あのままレッスンは終わりを告げ約束通り燐子の家に来ています

「はいはい」ポンポン

「えへへー」

「(か、可愛い…)」

約2名の思考が見事にシンクロした瞬間だった

「んで、呼ばれたから来たはいいけど何するんだ？」

「え…？別にただお菓子でも食べながらお話でもしようかと思つてただけど

ダメだった？」

「それならそれでおれは大丈夫だ

…んで？お菓子つて？」

「響也くん食いしん坊だねー」

「うるせ、甘い物は正義なんだ」

「あこも好きだからいいんだけどねー」

「ふふ、2人とも似てるね

とりあえずお菓子と飲み物取ってくるね」

そう言つて燐子は部屋を出る

「しっかし燐子の部屋大きいな

…モニター3面あるしガチだな」

「こら響也くん！女の子の部屋をジロジロ見ちゃいけないんだよ！

見るならあこをみてよー」

両手を使って頭を固定されてしまった

…って、

「顔真つ赤にして恥ずかしいなら無理してこういうことしなきゃいいのに」

そう言うにあこは少し目を逸らしながら

「…だってせつかく響也くんと遊んでるのにあこのこと見てくれないんだもん」

と呟いた

「まったたく」

「え?」

俺はあこの頭を撫でる

「ちゃんといつも見てるだろ?」

「響也くんはずるいよ…」

「こんなの好きにならないわけないじゃん」

「何がずるいんだ?」

「ううん、なんでもないよ!ありがと響也くん!」

まあ元気になってくれたからよかったかな?

ふと俺は扉の方が気になり視線を移動させる



俺もありがたく食すことにする

「…ん？あれ、これって」

これウイスキーボンボンじゃね？

「おい、お前からこれウイスキーボンボンだから食うのやめといた方が」

「あははー！響也くんが3人居るよおー？」

「もう手遅れ!？」

あこは酒に弱いらしくぐわんぐわんになっていた

俺は燐子のこと心配になり視線を向ける

向けようとしたが優しい衝撃と共に俺は床に倒される

「響也くん…」

倒してきたのは燐子だった

手遅れだったか…

「あの一？燐子さん？さすがに「響也くん!」」

「なんだか酔ってしまってるみたいなんでこんなことをやっています

仕方なく…です」

「…燐子、お前本当は酔ってないだろ?」

「…そ、そんなことないよ?」



めちやくちや目をそらすじゃん

「とりあえず上からどけてくれ?」

「響也くんは私の事嫌い…?」

「いや、嫌いではないけど」

「私知ってるんだよ? 白鷺さんや、羽沢さん、山吹さんに弦巻さんから告白されてるのを」

「…どうしてその事を?」

「それは教えられないけど」

響也くんは優しいよねみんなを傷つけないように答えを出せないままでいる

でもね、私も響也くんのが好きだからこのチョコの魔法がかかっている時じゃないと」

…つたくよ

「そんなものに頼らなくても俺はちゃんと気持ちを聞くくらいのは出来るぞ?」

いまは聞くことしか出来ないけど」

「…ほんとに優しいよね響也くん」

「優しくなんてないよ、人としては問題ある行動してるからな」

「でも私…いやみんなもそうか、私達にとっては響也くんはもう居ないのは考えられな

「い存在なんだよ」

「燐子……」

「ごめんねこんなことして、……でも私、やっぱり好きなんだ響也くんのこと」

「……ごめん、今は答えは出せない」

「うん、分かっているよ」

「でも伝えておきたくて」

「潤んだ目に朱に染まる頬」

「とても美しいと思った」

「まあ、響也くんは鈍感で優柔不断なんですすぐに答えが出るとは期待してないけどね？」

「そう言っただけ俺の上から退ける燐子」

「まったく失礼だな」

「あ、忘れてた」

「ん？何を「チュツ」っ!？」

「ふふ、私の初めて」

「響也くんにあげちやった……!」

「え?……え?、お、おい燐子」

「ふふ、クラスの皆には内緒だよ?」

「ちよ、おまそのセリフは怒られるって！」

多方面から怒られる

「響也くんー！あははー！」

「つて、忘れてた存在い！！あこやめろお！！」

「ふふふ、仲良いね」

「燐子お前も寄ってくるなあ！うわああああ」

その後正気を取り戻したあこに思いつきりピンタされた  
理不尽じゃね？

## 第20話 A cold is one that m

akes your thoughts poor

真夏の日差しが朝から容赦なく照りつける

教室に逃げててもなお力を発揮する熱、火照る体に滴る汗を拭いながら

「あついー!」

あたしは教室の自分の机に突っ伏していた

「はあ…、こども暑いとるんっ! ってくるどころかなにもする気なくなっちゃうよー」

あたしはシャツをパタパタする

気休めではあるが少し涼しい風を肌当てることが出来た

「うがー! …早く響也くん来ないかなあ」

あたしがいつも早く来てるのは分かってはいるのだがそれでも待ちきれないのは事

実

「あ、日菜さん! おはようございますー」

「あ、麻弥ちゃん！」

「…日菜さん某キャラクター並にぐでーってなってますよ」

「だって暑いんだもん…麻弥ちゃんとりあえず太陽隠してきて」

「いくらなんでも無理ですよ!？」

やつぱり麻弥ちゃんはいいいリアクションするなあ、るんってくるよ

「響也さんまだ来てないんですね」

「そうなんだよねー、あーあ暇だなあー」

あたしは再び机に突っ伏す

「おやおや、姫はご立腹の様だね」

「薫くんだー」「おはようございませす」

「おはよう、2人とも…その様子だとまだ響也は来てないようだね」

「そうなんだよー薫くん、とりあえず1分以内に響也くん連れてきてー」

「…それは子猫ちゃんの頼みと言えど叶えることが難しいかな？」

薫くんが引きつった笑みを浮かべていた

「はいみなさん席に着いてください」

「え? せんせーい! 響也くんは?」

「菅谷くんは風邪でお休みすると連絡が来しました」

……は!?

「響也くんが…休み…」

「ひ、日菜さんが世紀末みたいな顔をしてるっすー!」

「は、夢い…」

真つ白に燃え尽きちまつたぜ…

昼休みになるまであたしはどこかのボクシング漫画の主人公みたいに真つ白になってたつて麻弥ちゃんが言つてた

「え!?! 響也風邪ひいたの!?!」

昼休みいつも通りお昼をリサちー達と食べる時に響也くんのことを話した

「大丈夫なの!?! 家だつてひとりじゃない? ああどうしようひとりあえず午後は早退して響也の「リサ落ち着いて頂戴」

「早退なんてしたら響也怒るわよ?」

「そ、そうだよね…あはは」

「もーリサちーつてば慌てなくても放課後あるじゃん

てかりサちーが知らないって珍しいねいつも一緒に来てるもんだと思つてた」

「今日は日直だったんだよねー」

…日菜にしては落ち込んでないよね？なんか怪しい」

「午前中灰になってたよ…察してリサちー」

ガチャツ

「おじやましませーす」

屋上の扉が開いて after glowの御一行が現れた

「珍しいねこつちに来るの」

「中庭何故か人が多くて、そしたら蘭が響也さんのところで食べよって」

「ちよつ、ひまり!!」

「…美竹さんも可愛いところあるわね」

「つ!?!…:…悪いですか?」

「いえ、ただ残念ながら響也は今日は休みだそうよ」

「え!?!響也さん休みなんですか!?!」

つぐちゃんが身を乗り出して質問をぶつけてくる

「そうなんだよねー、なんか風邪ひいたらしい」

「珍しいこともあるんですね、響也さんが風邪なんて」

「ホントだよ、おかげで午前中暇で暇で仕方なかったんだよ」

「日菜さんらしいですね

…ジブンも集中出来てはいなかったんですけど」

「えー、…きよーやくんいないんだー

モカちゃんちよーショック」

「放課後練習なかったら響也さんのお見舞いに行っただけだなあ」

「つぐちゃん達練習あるんだね」

「そうなんですよ、今更スタジオキャンセルする訳にはいかななくて」

「大変ね、安心して私達がしっかり響也のお見舞いについてくるから」

友希那ちゃん満面の笑みである

「くっ、

…湊さんさす「まーまー、蘭おさえておさえてー」

「友希那も少し抑えて

行けない人が可哀想じゃん」

「リサさんも顔少しニヤついてますよー?」

「え?ほんとに!?!」

リサちは手鏡を取り出してにらめっこを始める

「まあ、じよーだんなんですけどねー」



「も、モカ〜!!」

「わーたすけてー」

リサちーとモカちゃんが追いかけてこを始める

あたしも混ざろうかなー

「にしても響也さんが居ないとなんだか不思議な感じがしますよね」

「麻弥ちゃんもそう思う?」

あたしもずつと何かが足りないような気分なんだ

…そう心に隙間ができるような」

「日菜さん…」

「やっぱり思い悩んでるのはあたしらしくないよね!

放課後あたしもリサちーについていこーつと」

「…日菜さん残念ながらジブンたちは収録が待ってるっス」

「…そ、そうだったー!!」

拜啓お姉ちゃん

あたしは真っ白になりました

放課後私達は響也さんの家に向かつてました

「全く、日菜ったら」

「まあ仕方ないんじゃない？ 紗夜だつて行きたくてウズウズしてたんでしょ？」

「そ、そんなことないです！」

今井さんに直球を投げられた私はすこしもたつきながらも返球する

「あこは心配で授業集中出来なかつたよ……」

「あこちゃん……授業はちゃんと聞こうよ……」

「えー、じ、じゃありんは心配じゃないの？」

「そ、それは……心配だけ……」

「まあまあ、あこもちゃんと授業受けないと響也怒つたら怖いよー？」

「うっ、……はい」

「よろしい、つと着いたねー」

ピンポン

数秒の静寂の後家の中からバタバタと音が聞こえてきた

ガチャツ

「はいはい、皆さんお待ちしてました」

「詩歌やつほー、来たよー」

「ささ、どうぞ上がってください」

あ、お兄ちゃんには内緒なんで皆さんお静かに」

詩歌さん：多分あなたの声で響也さんに聞こえてしまってる気が…

「お邪魔します」

私達はそれぞれ声を発すると家の中に入る

「お邪魔されます！さて、お兄ちゃんは部屋で寝てるんでゆっくりしてってください」

「あれ？詩歌はこないの？」

そう今井さんがいうと詩歌さんは目を泳がせて声をふるわせてこう言う

「わ、私はこれから出かける用事があるんで…」

「響也今日はダウンしてるんだから怒ったり出来ないんじゃない？」

「な、なんの事だから分かりませんがあとお願いしますー」

急いで外に出てしまった

…むしろその行為の方が響也さんの導火線に火をつけるのでは？

私は考えることを辞めました

「さーてととりあえず響也の顔見にいきますかー」

そう言つて今井さんは階段を登っていく

私達は後ろからついて行く

コンコン

「響也、お見舞いに来たよー」

「ゴホツ、なんかうるさいと思つたらお前らだったのか」

響也さんの部屋のの中に入ると厚着に冷えピタという完全防備で体を起こした不機嫌  
そうな彼がいた

「まったく…詩歌はどうせ外にでも逃げたんだろ

後でお説教だな」

「まあまあ」

「んで？お前らに風邪が移るといけないからわざわざ何も言わなかったのに来ちやつた  
んだな」

「ごめんね響也くん、紗夜さんが来たいつて言ったから」

「宇田川さん!？」

いつの間にか私のせいになってしまつてる

「わ、私は別に響也さんの心配なんか…」

「紗夜？顔真つ赤だぞ？もう風邪移しちゃまったか？」

そう言つて響也さんは私に手を伸ばす

反射的に避けてしまった

「大丈夫、大丈夫ですから！」

「そうか？ ならいいんだが」

「ふふ、紗夜も必死ね」

湊さんにも笑われてしまった

何か敗北感が私を襲う

「と、とにかく響也さんは安静に寝ててください」

「はいはい、リサすまない体汗で気持ち悪いからタオル取ってきてくれないか？」

「おっけーまかせて！」

「うわあ、リサ姉すごい笑顔だったね」

「尻尾あつたらブンブン振ってそうね」

「響也くん…熱はどうなの？」

「ああ、朝測ったつきり測ってないな」

そう言うのと響也さんは体温計を取り出し脇に挟んだ

数十秒後電子音と共に測り終えたことを知らせる

私は体温計を受け取り数字を確認する

「うーん、まだ8度近くありますね」

「そっか」

「お待たせータオル持ってきたよー」

「ありがとうリサ」

響也さんはお礼を言つてタオルを受け取るとおもむろに上着に手をかけた…つて「ききき響也さん!?!何しようとしてるんですか!?!」

「…?何つて体拭こうかと」

宇田川さんと白金さんは顔を手で覆つて響也さんを見ないように

いえ…よく見たら指と指の間でしっかりと見てました

「響也、その…流石に上半身と言えど見るのは恥ずかしいわ」

「…あ、なるほどな」

何か納得したような声を出すと響也さんはタオルを今井さんに差し出す

「響也?えつと、なに?」

「リサ、拭いてくれ」

「あーなるほどね、おつけーまかせ…えつ!?!」

皆の驚愕の目線が響也さんに押し寄せせる

「ん?俺なんか変な事言つたか?」

心底不思議そうな顔をしなくて下さい私達が間違つてるみたいじゃないですか!

「…あ、すまんつい詩歌に頼む癖で言つてたわ」

「…響也、あなたいつも妹に体を拭かせてるの？」

「ん？なんか変か？」

「変も何もないです!!なんて破廉恥な」

「破廉恥って…兄妹って普通そうなんじゃないのか？」

「一般常識的にはありえないと思うよ響也くん…」

皆さんかなり困惑してる顔をしてるわ…

「ま、まあいつか

貸して響也、拭いてあげる」

「二」リサ（姉）（今井さん）!?!「二」

「リサ姉ずる、…じやなかった流石にそれはヤバイよ!」

「そうよ、そんなおかし、…大変な役目リサにさせる訳にはいかないわ」

「今井さん…?ふふふ」

「風紀の乱れは許しませんよ!」

「えー、だって体を拭くだけじゃん？」

「えー、じゃありません」

全くあなたはいつも…」

「あーあ、紗夜さんのお説教が始まった

あこしーらない」

「今井さんが終わったら次は宇田川さんですから」

「なんであこまで!?!」

「響也くん、水飲む?」

「ああ、ありがとう」

「」「ああー!!」「」

この後今井さんが作ってきたお粥でまた一悶着があったりと波乱なお見舞いでした

…響也さんは少ししたら眠ってしまいました

ふふ、寝顔ご馳走様です

次の日目覚めた俺は体のダルさが取れることに気づき、とりあえずは治ったことがわかった

熱も下がっており普通に登校してきた次第である

…あるのだが

「ねえーねえー響也くん!」「ちよ、日菜さん近すぎますよ!少し離れてください」「むふふーモカちゃんダーイブ」



「おいお前ら近い離れろてかなんで急にこんなに距離感無いんだ」

「なんでも1日で治った響也さんに怒ってるみたいですよ」

「なんで良いはずのことに怒られてんだ!?! ってかつぐみお前も顔怖い絶対なんか怒ってるだろ!?!」

「やだなー私も看病したかったとか怒ってませんよ?」

「響也さん…諦めようぜ?」

「おい巴まで」

…ひまり? 何してんだ? なんで今にも飛んできそうな感じで止まってんだ? おい シャレにならなくてやめ、あー……」

「友希那ー、はいあーん」

「ぱく…うん今日もリサの卵焼きは美味しいわ」

「無視してねえで助けろやああああ」

と、このような事がありましたとき



「分からないが体はだるい」

「声出てないじゃん、ほらとりあえず熱計って！」

俺は詩歌が取り出した体温計を脇にさす

我ながらよく出来た妹である

「別に風邪引くようなことしてないんだけどなあ」

「多分温度差でやられたんじゃない？」

ピピピピ、つとほらお兄ちゃん貸して」

「ん、」

「げ、8度超えてるじゃん」

「まじか」

「まじまじ、ほら」

見せてもらうと液晶の部分にはしつかりと8度2分と出ていた

「こりやいかんな、仕方ないけど休むか」

「その方がいいというか多分私が許さないよ？」

「…だろいな」

「ごめん、食欲ないから今日は一人で朝食べてくれ」

「うん、わかった」

とりあえず食べてくるね」

そう言つて部屋を出る詩歌

「はあ、…とりあえずみんなには知らせないようにしないと」

俺なんかの風邪を周りに移す訳にはいかない

「寝よ」

俺は目を閉じ2度寝をしようとする

ピンポーン

「ん?」

ああ、多分リサ達が出来たっぽいかな

『おつはよー!!しーか迎えに来たよー!』

『おい!もつと声抑えろ香澄い!!』

…なんだ、香澄達か

トトトト

…うん、すごい嫌な予感がするなあ

トト…ガチャッ

「響也先輩!おはよー!ごいませー!」

きやがったよ騒音1号

「香澄ちよつと落ち着けて！」

…とそのお守り

「…ゴホツ、とりあえず香澄声を抑えてくれ頭に響く」

「あれ？もしかして響也先輩、風邪？」

「もしかしくても風邪だ」

可愛く首を傾げる香澄に俺は答える

「あ、すまんが他のみんなに言わないでくれよ？」

「あ、はいわかりました」

「有咲!?なんで!？」

流石有咲、理解が早い

「響也先輩なりの気の使い方だろ

みんなに移したらまずいから」

「あ、そっか有咲あつたまいいー」

「いや、これが普通だからな？」

「あ、おいもしかしてだけど沙綾来てたりしないよな？」

「安心してください、あたし達だけですから」

「そうか、それは良かった」

「沙綾が聞いたら泣いちゃいますよー響也先輩」

「そうだけど」

沙綾に体調について無理しないように散々言っている為何を言われるかわかったもんじゃないんだ

「まあとりあえず他のみんなには言わないようにしておくんで心配はしないでください」

「恩に着る」

—2人とも—遅刻するよ—!

「わかった—!今行く—!

それじゃ私達そろそろ行きますんで響也先輩ちゃんと寝てくださいいね—!

「失礼します」

部屋に再び静寂が訪れる

俺の心配する思考をよそに身体のたるさと睡眠欲は正直な様でいつの間にか夢の世界に旅立っていた

「有咲—、卵焼き頂戴—!

「ぜってー嫌だ」

「それでね花音」

「うんうん」

今はお昼休み、いつも通り？みんなが集まってご飯を食べてます

あ、挨拶がまだでしたね、まん丸お：え？いらないますか？…そうですか、彩です

いつも通りなはずなんですが私には少し気になることがあります…

「…ぱく、もぐもぐ」

そうです香澄ちゃんが珍しく上の空でご飯を食べてるんです

いつも有咲ちゃんとかに元気よく話しかけながら食べてるのに今日はどうしたんだ

ろ

「そっさいえぼ」

紗夜ちゃんが口を開きました

「戸山さん今日は体調が優れないんですか？なんだかいつもより静かですけど」

「え？、あ、はいな、なんでもないですよ」

紗夜ちゃんも同じこと思ってたみたいだった

「カスミさん、なんだかアヤシイです」

イヴちゃんがみんなの気持ちを代弁した

うん、確かになにか隠してるよね

「どーせ、香澄の事だからなにか先生に怒られたんだろ？」

有咲ちゃんが続く

「ち、違うもん」

「そしたら響也の事でも考えてたのかしら？」

「!?ど、どうしてそれを」

千聖ちゃんが悪そうな顔で尋問を始める

…私がやられてる訳では無いのに背筋が凍る様なのは気の所為だろうか？

「さてと、香澄ちゃん…?なにを隠してるのかしら？」

「べ、べべ別に何も隠してませんよ!」

…チエックメイトだよね

「戸山さん、正直に言った方が身のためですよ？」

紗夜ちゃんも加わった

もうダメだあ、おしまいだあ

「…響也先輩風邪で寝込んでるんですよ」

「ありしゃっ!」

「香澄誤魔化すの下手すぎ」



「だつてえ、やったことないんだもん」

「ちよつと待つて有咲ちゃん！響也が風邪つてほんと!？」

珍しく千聖ちゃんが狼狽してる

「マジです」

朝響也先輩に会つてきたんで」

「だ、大胆だね有咲ちゃん…」

「りみりんその言い方はやめろ、

あたしはいつも通り詩歌を迎えに行った香澄に着いていっただけだ」

「でも誘つたら有咲満更でもなさそ「香澄お前だけ今日のおやつ抜きな」そ、そんな」

「でも…響也くんが風邪つて珍しいですよね」

「てか響也先輩私に散々言つておきながら…」

次会つたら説教だね」

確かに、響也くんはいつも私達の体調を一番に考えてくれて

…そういう優しい所が好きなんだよね

てか沙綾ちゃんなんか怖いよ？

「…彩ちゃん？アイドルがしたらダメな顔してるわよ？」

「え!?!、あはは…」

またやつちやった…私響也くん想像したらニヤニヤしてるらしくてよく千聖ちゃんに怒られてるんだよね

「それじゃ！響也のお見舞いに行くわよ!!」

「こころーまずまだお昼休みだし、あんたパーティがあるとか言ってなかったっけ？」

「そうそう、はぐみ達も連れてかれる予定だったよ？」

「そんなものより響也のお見舞いの方が大事だわ！」

スッ

「こころ様、旦那様の御友人、吉田誠治様の生誕記念パーティでございます…」

ご令嬢であられるこころ様がご出席なされないと旦那様の顔を汚すことになってしまします  
どうかお考えを」

吉田誠治つてどこかで聞いたことあるような

そう思つてみんなの顔を見るとみんなも同じだったようで驚いた顔をしていた  
連れてかれる側の美咲ちゃんが一番驚いてたよ

「え?! え?! 吉田誠治つてあんたその人総理大臣じゃ…」

「ええ、確かお父様がそう言つてたわ！」

「言つてたわ! じゃないよ! あんたはいつつもそう…あーだこーだ」

「花音ちゃんも災難だね…」

「あはは、…彩ちゃんも一緒にどう？」

「うん、遠慮しておこうかな？」

「そ、そうだよねー」

ち、千聖ちゃんは？」

「花音、ごめんなさい今日はスタジオ練があるのよ」

「ふええ…」

うん、練習あるのは本当だけど無くても同じ感じで断るんだろうな千聖ちゃん…

「お見舞い行きたかったんだけどなあ…」

「ごめんなさい花音、あたしが無理言つて誘つてしまったから…」

「ううん、こころちゃんは悪くないよ！大丈夫」

「でも、お見舞い行きたかったなあ」

「あれ？りみちゃん何か用事あるの？」

「あ、私だけじゃなくてポピパみんなの用事です」

スタジオ予約しちゃつて…」

「そしたら私達が行きましようか白金さん」

「そうですね…氷川さん」

「え!? Roseliaの皆さん今日は練習ないんですか!?

香澄ちゃんが驚愕の声を上げる

「ええ、たまたま何もありませんが…」

「紗夜ちゃん? それは聞き捨てならないわね」

「し、白鷺さん!?! 目が怖いですよ!?!」

あの紗夜ちゃんが恐怖している

…千聖ちゃんがほんとに悪魔のような顔をしてるんだろなあ

「彩ちゃん? お説教が必要かしら?」

「ひいひいっ!!!」

振り向いた千聖ちゃんの顔には般若の面が見えた気がした

「まったく、

それで? 紗夜ちゃん? 練習…しないの?」

私から外れた眼光はまた紗夜ちゃんを射抜く

「あ、え、そ、その今日は本当に練習がなくて…」

最近練習が続いていたので湊さんが休みにしようと言いました…」

「へえー、そう

燐子ちゃん? 本当?」

「は、はい！本当です！」

「…はあ」

殺気が消えた…

鬼神が元いる場所に帰つたみたいだ

「こんな日にスタジオ練習入れるマネージャーには

…お説教が必要かしら？」

この時事務所でデスクワークをしていたマネージャーの愛用するマグカップにヒビが入ったという

「まあ仕方ない事だけど Rose l i a だけズルくないかしら？」

「ずるいとは何ですか白鷺さん！」

「まあまあチサトさん！落ち着いてください！」

「イヴちゃん？私は至って落ち着いてるわよ？」

「ヒイツ、…はい！チサトさんは今日も美しいです!!」

「ふふ、そんなお世辞、でもありがと」

イヴちゃんが真つ青に…

「ねえ、有咲、千聖先輩止めてきて」

「はあ!? あたしが止めれるわけねえだろ!」

「いいね、有咲が適任だよ」

「うん、有咲ちゃん頑張つて!」

「沙綾にりみまで!」

「ありしゃ! ファイトだよ!」

「そのセリフ怒られるからやめろ香澄!!」

「てかあたしが止められるほどの「有咲ちゃん?」っ!?」

「なにか私に用かしら?」

「いえ! なんでもありません!! 気にしないでください!!!」

「そう? わかったわ」

「…ふう、おいお前ら本気で命の危機を感じたぞ!!」

「有咲! 凄いわね! あの千聖に立ち向かうなんて!」

「いやこころ、敵前で撤退してるからね」

「美咲ちゃん、それ辛辣だよ…」

「でもでも! はぐみから見たらかつこよかったよ!」

「いや単純に自分からいけないんだよな?」

皆が一斉に目をそらす

「目をそらすんじゃねえええ!!!」

ポカポカとしたお昼休みの中庭に1人の少女の叫びが響いたという  
そして

「有咲ちゃん?お説教が必要かしら?」

その後ろで叫び声に反応した悪魔がいたとかいなかったとか

ピピピピ、ピピ「ん、」

けたたましい電子音を止めると俺は微睡みから抜け出すべく体を起こす

その時に昨日のような気だるさもなく俺は風邪が治ったことを知る

「…まあ、そんな重いヤツだとは思ってなかったけどな」

とりあえず着替えてつと

ガチャッ

「お兄ちゃんおはよお!!!」

「ぐはっ」

俺は目覚まし2号のダイビングボディプレスをくらいベッドに逆戻りしてしまう

「おい詩歌!!もう少し加減してくれ」

「あははごめんごめん

お兄ちゃんお腹すいてない？朝ごはん出来てるよ？」

「ああ、ありがとう

着替えて降りてくわ」

「はい、はやくねー」

タタタタ

「…はあ、もう少しお淑やかになれないかね」

ふと、俺はなにか気になりスマホを見る

通知が1件

『お説教が必要かしら？』

千聖から何故かこの一文だけが送られてきていた

なぜだ？なにか怒らせたか？

…まあ次に会った時に聞けばいいか

俺は着替えようとスマホから目線を移動させ…



「響也…?」

オセツキヨウガヒツヨウカシラ?

if  
ル  
ト  
e  
n  
d

## 第22話 A smile suits you as

an effort

ヒューー

「あー寒、もう少し厚着してきたら良かったか…」

あ、ども響也です

今は生憎の曇りの中、急に朝早くから約束を取り付けて呼び出しやがった頭ふわふわピンクとの待ち合わせ場所に向かってます

機嫌？いや悪くは無いですよ？イライラしてるだけなんで

ホントは今日は何も無いから朝からゲーム消化しようと張り切ってたのに、たく…つと

そうこうしてるうちに待ち合わせ場所の駅前に到着

俺は目的の人物を探そうとキョロキョロしていると視界の端で物凄く目立つ髪の色をした女子がびよんびよん飛び跳ねていた

「響也くーんー！」



とりあえずお召し物を変えて出発しましょうか」

俺はいつの間にか低姿勢になっていた

恐怖って思考より体が先に動くよね

「そんなお嬢様なんて…」

つて服これダメなの!？」

「待つといてやるから普通の服に着替えてこい

お前はそのままでも充分なんだから」

「響也くん…わかった行ってくるね!」

タツタツタツ

「…はあ、さすがにあれを隣に置くのは厳しいものがあるよな」

あいつ自身は可愛いと思ってるからタチが悪い

いや、可愛つちや可愛いのだが街中を歩くものではないな

…あ、

「てゆーか彩の家つてこっから結構距離無かつたつけ…?」

俺はその後約1時間その場所で待つことになった

「~~~~」

「ご機嫌だな随分」

隣で鼻歌交じりにニコニコ歩いている彩にそう声をかける

「だって響也くんと2人でお出かけするの初めてなんだもん」

「あれ？そうだったっけ？」

「そうだよ！千聖ちゃんとかとは行っていいなーってずっと思ってたんだもん」

「そうか、それはすまん」

俺は素直に謝っておく

「今こうしてデート出来てるから私は満足だよ」

そう言つて笑顔を向けてくる

まったく…いつも変なことをしなかったらすげえ美少女なものにな

「んで、どこに行くんだ？」

「シヨッピングモールだよ、なんでも中にある音楽関連の店に Pastel\*Pale  
ttesのコーナー作ってくれてるらしくてそのの偵察」

「…ついにエゴサも佳境を迎えたか」

「うっ、」

「まあいいか、お前も一応有名なんだから目立つ行動はやめてくれよ？」

「一応は余計だよ…」

俺の言葉に一喜一憂してくれてやっぱり面白いやつだよなこいつ  
「も〜っ！響也くんなんて知らないんだから」

そう言つて早足になる彩

「ごめんてば」

俺もその後を追いかける

その2人を照らすかのように雲の切れ間からお日様が顔をのぞかせていた

「ずっと応援してます！これからも頑張ってくださいー！」

「ありがとーうん、私頑張るね！」

「…はいすいません、時間ですので

次の方ー」

—彩ちゃんと握手しちゃった…やばいよ泣きそう

「どうしてこうなった…」

事の発端は1時間ほど前に遡る

「ほんとだ、ちゃんとわかりやすいようにPOPとかあつて凄いな」

俺達は目的の場所に着くと結構大きくパスパレのコーナーが作られていて少々驚いたが彩にバカにされたくないので何とか平然を装うことが出来た

「つて、あいつどこに行った？」

姿を探すとちょうど店員さんと話してたみたいでこちらに戻ってくるところだったようだ

「なにしにいつてたんだ？」

「この前で写真撮っていいか許可もらってきたの！」

「……」

「こいつからSNS取り上げたらそれこそ生きた屍になりそうだな

「ほらほら！響也もこっち来てきて！」

「え、お、ちよおま」

俺は引つ張られるがままに彩に連れてかれる

「はい！チーズ♪」

カシヤツ

「」

「うん、うまく撮れてる！」

「これをこうして…送信と」

「おい」

「そして次は、あ！サインだったねどこに書こうかな」

「おい！」

「ひゃあ！……ちよつと響也くん！大きな声出さないでよ」

「いやいやいや、そういうこと言ってる場合か？お前どういう写真SNSに載せたかわかっているのか！」

そう言うときョトンとした顔をする彩

「え？どういうって…響也くんとの2ショット写真？」

「アイドルが男との2ショットだぞ？」

「あ、なるほど！でも大丈夫だよ響也くん先生として有名だから

店長さくんサイン右上辺りでいいですか？」

「…ダメだこいつ何とかしないと」

「あ、ホントにいたよ彩ちゃん!!」

「え？」

声がるる方に目を向けると女子2人組がこつちを指さして叫んでいた

こつちに近づいてくる

「彩ちゃん！ファンですサインください!!」



「あ、ありがとく、ちよつと待つてね

店長さん、大丈夫ですか？」

場所を使用する類の許可を取る様子を見るとちやんと芸能人してるなと思う

「おう！好きにしていぜ！」

「ありがとうございませす！」

「お待たせ！何に書けばいい？」

「あ……何も考えずに走つてきたんで何も持つてないんですよね……」

「そんなこともあるよね、うんうん分かるよ

でもどうしよつか」

明らかにテンションが下がってる女の子たち

うーむ、仕方ないか

「彩、ちよつと対応しておいてくれ」

「え？あ、うんわかつた！」

俺は店長に近づくとあるものを差し出す

「店長これ買うんでペン借りてもいいですか？」

「……兄ちゃん漢気あるな、好きなものだけ使つてくれ！」

物凄く大きな取引をした後みたいな清々しい気持ちで物とペンを持ち彩の元に戻る

「ほら、これに書いてやれ」

「これって私たちのCD：響也くんいいの？」

「1枚くらいならな、それにせっかく来てくれた2人を手ぶらで帰らせるわけにはいかないだろ？丸山彩さん？」

「…うん！」

~~~~♪♪と

はいどうぞ〜！」

「わあー！ありがとうございます！大切にします！」

そう言って握手した後立ち去っていく2人

「良かったな」

「ごめんね、後でお金渡すから」

コツン

「あいたつ！響也くんにするの！」

「せっかく男らしくカツコつけたんだから最後まで貫かせてくれよ」

「あ、そうだよね…」

ガヤガヤ

「ん？なんか騒が…!？」

入口の方を見ると物凄い人だかりになっていた

その人たちがみなこつちを見てなにかを訴えてきている

俺は彩と目を合わせる

彩が静かに頷く

「店長、しばらく場所借ります」

「こりやあ仕方ねえな

あんまり他のお客様に迷惑にならないようにな」

おやつさん、あんた最高だぜ

俺は店の奥から持つてきてもらった長机に色々セッティングしてこれから来る波を

迎えた

「彩ちゃん！これからも頑張つて！」

「うんっ！ありがと〜♪」

：しっかしすごい人気だな

近くにいると当たり前を感じる存在だがちゃんとアイドルなんだな

チヨンチヨン

「ん？」

何やら腕をつつかれたのでそちらを向くと目が前髪で隠れてる大人しそうな女の子、多分中学生くらい？が近くにいた

「どうしたの？」

「あわわ、あ、あの菅谷響也さん…で、ですよね？」

「（あわわ？） そうだけど何か俺によいかい？」

「わ、私菅谷さんのファンなんです！サインお願いします！」

「お、俺？」

「は、はい」

「わかった」

あ、でもサインとかあんまり書いたことないから微妙だったらすまんな」

俺はそう保険をかけるとその子から色紙を受け取って書く

うん、そろそろちゃんとしたサインとか考えといた方が良さそうだな

「つと、はいどうぞ」

「あ、ありがとうございます！大切にします！」

…よく分からないけど俺なんかのサイン貰って嬉しいもんなんだな

有咲もこんな感じだったし

「響也くん？」

「ん？」

「後で話あるからね？」

「え？あ、はい」

俺なんにもやってないんだが？

「あ、イヴさん、日菜さんいましたよ」

「あ、ほんとだー！」「ホントですわね！」

「…」

ここに聞こえてはいけない声が聞こえた気がするんだが…

俺の気の所為であつて欲しい

「わー！凄い人だね！ここに並べばいいのかな？」

「みたいですね」

「たとえ身内だとして列は守る

ブシドーです！」

「おい彩、やべーのが3人ほど混じってるんだけど」

「え？どこ？」

いや気づいてないのかよ

俺は彩の元を離れ件の3人へ近づくと

「…お前ら何してんのよ」

「あ！響也くんだ！」

「いや実はですね」

かくかくしかじか

「しかくいムーヴとなるほどね」

3人でここに買い物に来てたらまたまたま彩のSNSを見たというわけな

「でもほっとしたわ」

「チサトさんがいないってことですよね？」

「あいつには内緒な？」

「いや多分もうバレてるっす」

そう言つて麻弥は自分のスマホを見せてくる

そこには彩が先程投稿したものが写っておりしっかりと千聖にいいねされていた

「多分これで彩さん尋問されるかと…」

「…あいつには釘を入念に刺しておかなくちやな」

「ところでこれって何の列なの？」

「え!?!ヒナさん分らないで並んだんですか!?!」

「なんか彩ちゃんいるしるんっ!てくる列だったから」

「日菜さん…」

「なんか彩のサイン会みたいになっちゃったんだよな

あ、もちろん事務所には連絡してるから大丈夫なんだけど」

なんか電話したら二つ返事でいいとのことだった

こんなにオープンでこの先大丈夫なのだろうか心配である

「なるほどねー、彩ちゃんのサインかあ言えば貰えるしなあ」

「そりゃな」

「えーつまんないー！」

あ、そうだ!!」

非常に嫌な予感する…

「あたしもサイン書くよー！彩ちゃん！」

「ちよ、ヒナさん！」「ま、待っててくださいっすー！」

「…俺しーらね」

そのあとはもちろんカオスな状況になったが俺は影を薄くしてやり過ぎすことに成功した

「つたく、日菜ももう少し落ち着きを覚えるよ」

「むー、響也くんなんかお姉ちゃんみたい」

「日菜さん…みんな思ってることつつす」

「ま、まあそれも日菜ちゃんのいい所なんじゃないかな？」

彩、引きつった顔で言ってもフオローになつてないぞ

「キョウヤさん！この後予定とかがありますか？」

「いや、この後はと」「ごめんねイヴちゃん、この後私とちよつと約束があるんだ」

俺の言葉に割り込んで彩がしがみついてくる

「そうですか…残念です」

「えー、響也くんのご飯でも食べようかと思つてたのに」

「ま、まあ2人とも買い物が続きますよー！」

麻弥がそう言つて2人を引つ張つていく

なんだか気を使わせてしまったみたいだ

「んで彩、特に用事がないのにイヴの誘いに割り込んだんだからちゃんとしたりゆ…つ

!？」

腕にしがみついたままの彩に目を向けるとこちらを射抜くかの様に見つめる2つの

視線がそこにはあつた

俺は言葉を途中で辞めざるを得ないほどの恐怖感に駆られた

「あ、彩？一体どうしたんだ？」

「……」

「彩？」

「響也くん」

「はい！」

彩が口を開いた

「響也くんは私だけのものなんだから、私以外を見ちゃいけないの

私以外と話しちゃダメなの

私以外の言葉を耳にするのもダメ

私以外と過ごすのも

響也くんは私だけを感じていればいいんだよ？」

「それは出来ないな」

「どうして？」

私だけを愛してよ！私は響也くんしか見れないんだよ？貴方だけを見ていたいなんて受け止めてくれないの？なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……」

うーむあの時みたいに抱きしめてこれを止めるのは彩には通用しなさそうだな
どうしようか

…

…

…

気が進まないけどあれでいくか

「彩は俺のことが『嫌い』か？」

ビクッ

「そ、そんなことないよ！私は響也くんが大好き！」

こんな手段で告白されるのは心が痛む

だが背に腹はかえられぬ

「でもおれは今の彩は嫌いだ」

「どうして!?!私変わる、響也くんの為な「落ち着けて」」

俺は彩の手を取って続ける

「誰も彩自身を嫌いとは言っていない

今の状態が嫌いって言ってるわけ

彩はアイドルだろ？それなら俺だけじゃなくて全世界、みんなを虜にしなきゃ

ひたむきにアイドルしてるお前のファンになった俺を悲しませないでくれ」

「響也くん…」

「それにいつでもお前を見てるんだからそれでいいだろ？」

「そりや他の奴らのことも見なきゃいけないからお前だけって訳にはいかないけど」

「うう…わ、私、ご、ごめんなさい」

「間違えたらちゃんと俺がレールを引き直してやるからお前はただ真っ直ぐやればいんだよ」

泣き止むまで俺は彩の頭を撫でていた

「落ち着いたか？」

「うん、」

「そりやよかった」

「響也くん！」

「おう？」

「私絶対響也くんのこと振り向かせるから

他の人には負けないからね！

だから」

チュッ

「勇気頂きますっ！」

俺は最低な男としてのランクが上がってしまった

「それで？急なサイン会の件、説明してもらおうかしら？」

「ええと、ね？千聖ちゃんにも相談しようと思っただよ？」

「そうそう、でもそれだとあの子たち待たせることになって可哀想だか「2人とも」

「お説教が必要かしら？」

事務所には2人の絶叫が響き渡ったという

第23話 白黒付けられないちよこれいと

朝いつも学校に行く前に大体俺がやることがある

「うん今日も美味しそう」

「ほんとに先輩ってうちのパン好きですよね」

「なんか最近ここのパンじゃないと物足りなさまで感じてきてて」

「もういつその事ここに住んじやえばいいじゃないですか？」

「非常に魅力的な提案だが俺は作るのには興味無いからなあ」

「それは残念です」

「あはははは」

「ねえ」

「ん？どうしたりサ、それに友希那もなんか渋い顔して」

「あなた達…付き合ってるの？」

「え？付き合っていないけど」

なんか友希那が変なこと言い出した

俺が答えると2人は目に見えて安堵のため息をはく

「いやさ、あまりにも息ピツタリだったから少し気になっただけ」

「あ、なるほどー」

「これほとんど毎朝やってますからね」

「…響也暇なの？」

「失礼だな」

カランカラン

「あー、きよーやくんにリサさん、湊さんもいるー」

「モカじゃん！昨日ぶり」

店の扉を開けて入ってきたのは俺の知ってるパン狂の1人モカだった

「昨日ぶりです」

「ねえさーや今日のおすすめは〜？」

「今日はおんぱんと焼きそばパンかな」

「お〜」

チラッ

「きよーやくんは今日もクロワッサンなんだね」

「そうそう最近ではメロンパンよりクロワッサンが多いかな」

「さーや残念だね〜」

「大丈夫もうやってるから」

「おう、さすがさーや」

よく分からない会話をする2人

するとモ力がこつちを見てニヤニヤしてきてる

「なんだ？」

「んーん、なんもないよ〜」

「そうか」

絶対何かあつただらうけど俺はめんどくさくなつて考えるのを辞めることにする

カランカラン

「いらつしやいませー！」

あ、りみ、おはよ

「お、おはよう沙綾ちゃん

それに響也先輩達おはようございます」

店の入り口から入ってきたのはりみだった

「あ、沙綾ちゃん！いつものある？」

「大丈夫、ちゃんと取り置きしてあるよ」

そう言いながら沙綾はひとつの紙袋を取り出す

「はい！」

「いつもありがとね沙綾ちゃん」

「聞かなくても中身わかるけど多分それコロネだよな」

そう聞くとりみは驚いた顔をする

「ええ!? どうして中身わかったの響也先輩!？」

「いや誰にでもわかるから」

「おおく息ピツタリ〜」

沙綾と同時につっこんでしまった

「だって沙綾ちゃん家のチョココロネ美味しいんだもん…」

「それはわかる」

「わたしも〜」

「ありがと〜、でも褒めてもパンしか出ないよ私からは」

「「ありがたや〜」」

「…ねえリサ、私達はこの茶番をいつまで見てればいいのかしら」

「…あ、あはは〜」

「まあいいわ

それよりあなた達、時間的に大丈夫なのかしら？」

「…あ、ほんただ

おい沙綾も用意しろ」

「そうだね、遅刻したら大変」

「先、外に出てるわ」

そう言つて友希那は外に出る

リサとモカもそれに続いて店を出た

「俺らも出とくかりみ」

「はい、

あ、そうだ響也先輩」

「ん？どした」

「放課後空いてますか？」

「今日は厳しいな」

「そうですか

あ、じゃあ明後日とか」

「明後日なら大丈夫そうだけどなんかあつたか？」

「少し付き合つて欲しいところがありました」

「うん、断る理由もないし了解したよ」

「あ、ありがとうございます」

りみはにこやかに微笑んで店を出る

うーむ、どこにつれてかれるんだろ

俺は手帳の明後日の部分に予定を書き加えると店の扉に手をかけた

そして2日後、約束通りりみと出かける為俺は駅前の時計の下にいた

「10時に駅に来てって言われただけで何処に行くとか聞いてないんだよなあ」

俺はスマホを確認してまだ9時半を示す時計を見る

早く来すぎた気はするが人を待たせるのは嫌いなため普段からこんな風に待つことが多い

「でもりみとは練習見る時に話す程度だから今日色々と知れたらいいかな…ん？」

俺はふと誰かに見られてる気がして目を向ける

すると近くの木の影からこちらを覗いてる人の影…てかもはや1人しか居ない

その1人…牛込りみがジーツとこつちを見ていた

俺は無言で近づくとりみの頭に手刀を加える

もちろん最小限の力でだ

「何してんだ？」

「おはようございませ響也先輩

実は声をかけるタイミングを見失っちゃって…」

「まあいいか

ところで今日は何処に行くんだ？」

するとりみは目をキラキラさせながら言う

「いっつも沙綾ちゃん家のパンなんでたまには他のパン屋をと思って響也先輩を誘いました

多分一番は沙綾ちゃん家のパンなんでしょうけど」

「…ほんとにパン好きだね」

「それは響也先輩も同じかと思えますよ？」

「否定はできない」

「とりあえず行きましょう」

「あ、ちよ」

りみは俺を引きずるように歩き始める

こんなに積極的なのを見るのは新鮮なのでなすがままにされることにした

「うん、ここのチョココロネも美味しい」

「あ、あのさりみ」

俺はどうしても気になったことを聞こうとする
「？」

「なんですか？」

「それ全部食うつもりなの？」

りみの手には大量の紙袋が抱えられている

…もちろん中身はチョココロネである

色々なパン屋を巡って買ったものだ

「もちろんですよ!!」

食べ物で粗末にするとば「わかった俺が悪かった」

…そうですか」

俺は自分の紙袋からパンを取り出して口に運ぶ

もちろんクワツサンである

「…美味しいな」

「おいひい〜」

隣では爆速で無くなってくチョコココロネの山

「…響也先輩も食べますか？」

ジーツと見てたのがバレてたみたいだ

「ああ、じゃあ「はい、あーんしてください」っ!？」

りみがチョコココロネを持った腕を伸ばしてくる

断るのはそれこそ申し訳ないと思ひ俺は素直にかぶりつく

「美味しいな」

「ですよね！」

まあ沙綾ちゃんチョコココロネには敵いませんけど」

「それはわかる気がするよ」

俺もこれ食べててなんか違うなって思っちゃってるから」

「さてと残りは後で食べようかな」

残りというほど残ってないのですがそれは

「響也先輩この後行きたいところとかありますか？」

「うーん、いきなり言われてもパツと思いつかないな」

「それなら新しい弦欲しいのでついてきて欲しいです」

「おっけー」

俺らは歩き始めた

「案外気付かれないものだね有咲」

「シーっ」

声がデカいぞ香澄」

「しかしりみも隅に置けないね」

「おたえ意味わかって言ってる？」

「あー！移動し始めたよー！」

「だから静かにしろってばかすみ」

「馬鹿じゃないもん」

「香澄は馬鹿だったの？」

「：ねえ、私だけでも先に行っていいかな？」

「沙綾ちよつと待てって」

ほらお前も行くぞ」

「はーい」「わかった」

「…ん？」

今なにか視線を感じた様な気が

「どうかしましたか？」

「んにやなんでもない」

「そうですか、あ、ここですここ」

どうやら目的地に着いたようだ

「来たことないな」

「わたしも数える程なんですけど結構品揃え良いんですね」

中に入ると…って言っても特に変わりのない普通の楽器店にしか見えない

まあリイさんのところが不思議なだけか

「それじゃ私は少し自分のを見てきます」

「あいよー」

しっかしこうやって俺がまたこんな場所に足を運ぶことになるとは思ひもしなかつたよな

完全に音楽から遠のいてたしまあ仕方ない事だけど

…うへえ先生のところでおもちやみたいにしてたギター値段7桁もするし怖

さすがにピアノは置いてないがどれもこれもなかなかいい値段するし正直楽器毎の種類に関して疎い俺でも名前知ってるやつも置いてある

「ここは相当こだわりをもってる店だな

てゆーかこれとかどつ「おいボウズ」っ!?

「ウチの商品見てニヤニヤしてたら変質者と勘違いして通報しちゃうかもしれないぞ? 響也」

「うげえつ、せ、先生どうしてここに」

「うげえとは失礼だな」

「ほ、本日はお日柄もよく「思っていないことは言わんでいいぞ?」

背後から現れたのは昔俺に音楽を教えてくれたおじさん「ああ?」…お兄さん、桐原慶次さん

「てかどうしてここに」

「それはここが俺の店だからだが?」

「はあ?」

俺は急いで店を出て看板を見る

桐原楽器店

…ほんとか

「んで？音楽を辞めたお前さんがなんでこんなところに？」

「人の付き添いです」

「人って後ろにいるかわい子ちゃん？」

後ろを見るとりみが俺に隠れて先生を威嚇するように見ていた

…何故睨んでおられる

「りみ、この人は俺の元先生様だ」

「え？あ、そうだったんですか」

「どうも初めましてって訳では無いか何回かお嬢ちゃん買いに来てるし

桐原でつすよろしく牛込りみちゃん」

「「え？」」

なんでこの人はりみのこと知ってるんだ？

「なんで知ってるんだ？って顔してるな

Poppin Partyのベース担当で花咲川女子学園2年生」

「…先生まさかストーカー？」

そう茶化して聞くと鼻で笑われる

「んなわけよ

ガールズバンドの情報は楽器屋してると嫌という程耳に入ってくるだけさ

まさかお前が5バンドも面倒見るとは最近まで気付きもしなかったけど
…それで？悩みは払拭出来たのか？」

「それは…」

俺は言葉に詰まってしまふ

「まあ俺がとやかく言える役目は無くなっちまったがお前が悩むことはもう無いと思う
んだけどな」

「…先生、この事は」

「わかってるよ」

「あ、あの」

「ん？どうした？牛込ちゃん」

するとりみは入口の方を指さす

「響也先輩！今日こそ昔話してもらいますよ！」

「おいばかすみ見つかつちまっただろ」

「あ、あはは」

「りみ、こんにちは」

入口には見慣れた4人がいた

「お前ら…つけてきてたのか」

「ひ、酷いよみんな」

「えくだつてえりみりんと響也先輩どんなデートするか気になるじゃん」

「あとその話聞いた沙綾が修羅と化してたしな」

「有咲何か言った？」

「…いやなんでもねえ」

「沙綾怖いよ？」

「おたえおやつ抜きね」

「なにとぞおじひを〜」

「お、おたえちゃん…お店で土下座はやめた方がいいよ…」

「響也、こんな子達教えてて自分だけ悩みで前に進めてないのは俺は違うと思うぜ？」

「分かってはいるつもりです」

「そんなことより響也先輩！」

「香澄、すまないがもう少しこの話をするのは待ってくれ

皆も

ちやんと話す時を作るから」

みんなが頷いてくれた

「いい子達じゃないか」

「本当にそうです」

すると先生は俺にだけ聴こえる声でこう話してくる

「んで？お前はどの子が好みなんだ？」

「んぶつ!!ゲホツゴホ」

いきなり何言い出すんだこのオッサン

「そんなんじゃないですって」

「響也先輩次から先輩の分のパンありませんから」

「なんでさ!？」

なんかいきなりご立腹になられた

「そ、そうだよ沙綾ちゃんずるい

私だって響也先輩のこと…す、すきだもん…」

「りみ、コロネー週間で」

「へえ!？」

…いやこの気持ちは沙綾ちゃんにも譲れないよ」

「そう？わかったこれからはライバルだね」

「おーい、お前から他のみんな忘れてないかー？」

「大丈夫有咲以外は覚えてるよ」

「よーし沙綾表出ろー！」

「香澄こつちにカツコイイギターあるよ」

「ほんとだー」

「収集がつかねえ」

ここの後暫くは店の中に笑い声が絶えなかった

「響也先輩、今日はありがとうございます」

「いや、こつちも久しぶりに先生に会えたし」

「まさかでしたよね」

「全くだ」

皆と駅で別れたあと俺はりみを家まで送ってる

なんか4人でこのあと用事があるらしい

「あ、あの」

りみが前に来る

「響也先輩ってまだ誰とも付き合っていないですよね」

「…りみはそれを聞いてどうするんだ？」

「どうもしませんよ？」

「…でも」

空気が重くなる

「もし居たりなんてしたら私ナニスルカワカリマセン」

うん、逃げたくなるほど怖いよね

「まあとりあえず安心しました

では私はここなので」

そう言っただけで家に入ろうとするりみ

が、直前で振り向く

「あ、そうそう響也先輩が色んな人から告白されて保留してるのも全部知ってますから」

「っ!？」

「どこから」

「私なんでも知ってるんです

響也先輩の事なら…なんでも」

背筋が凍る

「まあそれでどうこうするつもりはないんで安心してください

今日はありがとうございました

また明日」

扉の向こうに消えていった

…なんだろうりみであつてりみでない

いやあれは間違いないりみなのであろう

俺は渦巻く黒い考えを払拭するかのようには歩みを早めた

今日はクロワッサン、明日はメロンパン、明後日は…

「えへへ、いつチョコココロネの日が来るのかな

楽しみ」

第24話 Memories of the past, a flower of a flower

「とりあえず明日のアフロの練習用メニューも出来たしおつけーかな？」

俺はそう独り言を呟きデータをタブレットに転送する

なんかこの作業も生活の一部になっちまったな

前まではこんな事やるとは思ってもみなかった

…てゆーか1高校生がこんなことしてて皆ちゃんときよく着いてきてくれるよな

結局ほぼ独学の知識しかないし偏ってもいるから…アイドルのことなんてさっぱり

だしなうん

バンドも組んだことないし個人個人の技術力向上にしか役になってない気が…

「…いや、こういう思考は止めておこう

俺は俺だ」

皆は真剣に音楽と向き合ってるんだ

俺も目的を合わせないと

気持ちを入れ替えるために俺は手帳に挟んでる1枚の写真を取り出す

「…未玖こんな俺でごめんな」

くく♪♪

スマホが着信音を鳴らす

夜遅いとまではいれないがこんな時間に誰だろう

「蘭か」

ディスプレイには『蘭』と表示されていた

俺はそつと切る方を選択する

数秒後もう一度鳴り出す

仕方が無いので出る選択肢を取った

「も『どうして切ったの!!』」

どうやら激おこらしかった

「すまん、少し遊んだ」

『次やったら許さないから』

「ごめんって、んでどうしたんだ?」

『明日練習の後…と言うより夕方から夜にかけて予定とかあったりする?』

「いやその時間なら無いけど」

『父さ…父が私がいつも響也にお世話になつてゐるから1回話してみたいって食事に誘えと』

「わかった、空けておくよ」

『ありがとう』

それだけだから、おやすみ』

そう言つて電話は切られた

「まあ、蘭らしいっちゃ蘭らしいな」

俺はスマホを置くとベッドにダイブする

今は頭の中をただただ真つ白にして眠りにつきたかつた

…

「…ん？ん？は」

目が覚めた俺は何も無い真つ白な世界にいた

俺はちゃんとベッドにいたはずだからこれは夢なんだろうな

いや夢にしてはハッキリしてるよななんだこれ

「とりあえず目を瞑つてれば元に戻るだろう」

俺は

『嘘つき』

っ!?

「だ、誰だ!」

『響也の嘘つき』

「まさか…未玖なのか?」

『そうやってずっと私の事バカにしてきたんでしょ!!』

『馬鹿になんかしてない』

目を開けるとそこには昔、コンクールが終わった後の出来事が映っていた

俺と未玖の会話だ

『私、必死で頑張ってきた、今日の為に』

なのに響也は…響也は』

『…今回のことはほんとに済まないと思っている』

『謝られても私どうしたらいいか分からないよ』

『俺はこういう奴なんだよ』

言い方は悪くなるが普通の奴のことなんて理解できない

俺には出来て当たり前前の事を出来ないのもそうだ

多分一生かかってもお前が俺を超えることは出来ない』

『だからって手を抜かれてもうれしくもなんともないよ!!』

実力では天と地の差があるのは分かっている！

それでも本気でやって欲しかった…』

『本気でやっても評価は変わらない

ずっとそうだった、ずっと手加減してきた

そして2つ前のコンクールは先生が見に来るからって本気でやってくれて言われた時俺は仕方なく本気を出した

それでどうなったかはお前が一番よく知ってるだろ未玖!』

『わかってるよ!!』

何人も音楽の道を辞めた、コンクールに出ていたみんなの半分近くは心をへし折られてね

私も折れかけたよ

天才って近づくことすら許されないのだから

でも私それから頑張って少しでも、ほんの少しでも響也に近づこうと必死で練習した、本気の響也に最高の演奏を聞かせるために

『響也の心を変えるために』

『っ!?!』

…お前に俺の何がわかるんだよ!!』

『分からないよ!!』

分からないけど分からないなりに理解しようと頑張ったんだよ?』

『うるさい!!』

もう帰ってくれ!!』

『響也!?!』

…ここをあけて響也!』

『……』

『…また明日来るね』

『……』

その後少し精神的に落ち着いた俺はスマホに来ていた未玖からのメッセージを見て家から飛び出すんだよな

謝ろうとして、そして大事な話も一緒にしようよ

そしたら近くの交差点で未玖は帰らぬ人になっていたよ

…スピードを出したトラックの信号無視によって

その日を境に俺は音楽を辞めた

耐えられなくなった

何もかも

何も

……やん

…お兄ちゃん!!

「お兄ちゃんっ!!」

俺は強制的に起こされたみたいだ

「未、…詩歌か」

「…っ!?!お兄ちゃん魔されてたんだよ」

「ああ、…ごめん」

「また未玖姉の夢見てたの?」

「そうみたいだな」

ギョッ

ナゲナゲ

「大丈夫、あれはお兄ちゃんが悪いんじゃないよ

トラックの運転手が全部悪い」

「うん」

「未玖姉のこと大好きだったのもわかる

その心の傷が原因で音楽に真剣になることが出来ないのもわかる

でも前に進まないよ

…私は音楽をやつて笑顔で演奏していたお兄ちゃんが大好きなんだよ？」

「…うん」

「今すぐ治るものでも無いのはわかってるよ

今は皆がいるから少しずつ少しずつやっていこう？」

「…し、いか、ごめ、おれ」

「ちよつとは弱い所を見せてもいいよ

大丈夫泣いても誰にも言わないし」

俺は数分の間妹の腕の中で涙を流していた

「ありがとな」

「いいつてことよー

たまにはお兄ちゃん孝行しないとね」

「お兄ちゃん孝行つてなんだよ」

「ま、気にしない気にしない」

さてとお兄ちゃんそろそろご飯食べないと蘭ちゃん達に怒られるんじゃない？」

「お前蘭たちも仲良くなつてたのか」

「うん、普通に遊んだりするけど」

我が妹ながら怖いくらいの交友関係である

「…まあいいか」

着替えて降りてくわ」

「はーい、待つてるよー」

……もう少しだけ待っててくれ未玖

俺は強くなるよ

「よしそしたら一旦休憩にしよつか？」

そう俺が一言言うとスタジオに張り詰めてた空気が暖かいものになり皆が脱力する

「あーもう疲れたよー、響也さんスパルタすぎるー」

「…ひまりだけ筋トレ追加してもいいんだぞ？」

不貞腐れながらも律儀にスクワットを始める

数分後やり終えたモカは床に突っ伏しこう言う

「きよーやくーん疲れたからマッサージしてよ〜」

「…は？」

「こいつは何を言い出すのだろうか」

「ちよつ、モカ何言ってるの」

「そ、そうだよモカちゃん！」

そんな羨…大変なこと響也さんに頼むなんて」

「つぐ…本音漏れかけてるぞ？」

「ほらモカ立って」

ひまりに引つ張りあげられて立つモカ

「ひーちゃんいたいよ〜」

正直マッサージしてみたいと思ってしまった俺がいた

男だからなうん

「…響也なんか変なこと考えてない？」

「…何も」

「ならいいけど」

蘭の感の良さどうにかならんのかね

「きよーやくんこのパン食べていいの〜?」

「ほんとお前のパンリーダーは感度おかしいよな」

「む〜それって褒めてる〜?」

「褒めてる褒めてる」

「響也さん、ここのフレーズなんですけど」

「…ああ、そこは」

「らーん、どうしたの?」

「…いやなんでもない」

そんなに気になるなら蘭もきよーやくんにアピールすればいいのに

そんな不器用な所も

「かわいくなあ」

「ん?モカなんかいった?」

「んーんなんでもないよ〜」

「…そっか」

「よーし、それじゃ休憩終わりにして続きするぞー」

「「「はーい」」」」

「よしそしたら今日は終わろうか」

響也の一言であたし達は手を止める

ほんとにあたし達のスタミナを把握してて完璧なタイミングだ

ほんととその観察眼を別のものにも向けてくれたらいいのに…

「響也さんこの後なにか予定ありますか？」

「この後は1回家に帰ってその後、蘭の家に行く予定だな」

「「…えっ?」「ちよ、響也!」

「らん、詳しく教えて欲しいなあ」

「蘭ちゃん私にもね」

「ねえ巴、モカとつぐの目が怖いんだけど」

「それあたしも言おうとしてた」

「父さんが響也を晩御飯に誘えって言ってきたからしょうがなくんですけど」

「しょうがなくの割に蘭ニヤニヤしてるよ?」

「はあ?そんなわけ」

「蘭ちゃん顔真つ赤だよ？」

「…っ!?!…響也のバカ」

「だからなんで俺なんだいつも」

鈍感なのが悪い

「えゝ帰りにきよーやくんと沙綾の所に寄ろうかと思つてたのにゝ」

「え？別に行けるだろ？」

「響也さん、多分モカは夜蘭のところで飯食うから心配してるんだと思う」

「モカちゃん、私の所でお茶してく？」

「つぐゝ大好きゝ」

「何これ」

あたしはいきなり始まった茶番に驚きを隠せなかつた

というか呆れの方が大きい

「んじや俺先に帰るから蘭後でなー」

そう言つてスタジオから出ていく響也

みんなの目が鋭く光るのとスタジオの扉が閉じるのが同時だった

「蘭も隅に置けないよねゝ」

「だからあたしの意思じゃないって」

「それじゃ私もお邪魔していい?」

つぐが真面目な顔でそう言ってくる

「それは…」

「ほらモカもつぐも蘭困ってるよー」

「それにたまには蘭も響也さんと水入らずで話したいだろうしさ」

「べ、別にそんなことは…」

響也と一緒にの部屋とか恥ずかしくて考えられない

「蘭何想像してるのか知らないけど顔真っ赤だよ?」

「…別になんでもない」

この後あたしは帰るギリギリまで質問攻めにあうのであった

「お邪魔します」

俺はあの後時間まで家に居てついさつき蘭の家に着いた

ついて早々蘭から冷たい視線が送られてきたのだが俺にはなんの事だか分からないためスルーである

「いらっしやいよく来てくれたね」

「はい、今日はお招き頂きありがとうございます」

蘭の父親でありこの家主直々のお迎えである

空気が張り詰めて息苦しいぜ！

「とんでもない、いつも蘭がお世話になってるからね一度話してみたのさ
さあ上がってくれ」

そう言つて踵を返す

俺はその言葉を聞いてから靴を脱ぎ後ろを着いていく

大きな広間に通されると蘭が先に座っていた

「響也、さつきぶり」

「おう」

「蘭少し手伝つてー」

「わかった」

奥から女性の声が聞こえ蘭は声の元へ

俺は蘭の父と2人きりになってしまった

「…」

「…」

無言が続く

てかさつき会ったばかりの人といきなり話すとか俺には重たい：

とりあえ「ところで響也くん」「は、はい」

いきなり声をかけられて裏返ってしまった

恥ずかしい

「蘭は普段どんな様子で練習に励んでるのかね？」

「蘭：さんはいつも音楽に真摯に向き合って自分としても見習いたいくらいです」

「無理にさん付けする必要はないよ気楽にしてくれ」

「分かりました」

「そうか…」

いや最近妙に機嫌よく君のことを蘭が話すから「ちよつ、父さん!!」

タイミング良く？ 蘭が料理のお皿を持って部屋に入ってきた

「蘭、もつと静かに入ってきなさい」

「そんなことどうでもいい！ 響也に何言ってたの!？」

蘭がものすごい顔で父親に問い詰めている

「まあまあ蘭、少し落ち着きなさい」

「母さんからもなんとか言つてよ！」

「あなたも少しからかいすぎよ？」

「…すまんつい」

「響也さん、お見苦しい所をお見せしました

蘭の母です」

「菅谷響也です」

めちやくちや美人な人だな

「蘭から毎日お話を伺ってます

いつもお世話になってて」

「おまえもからかかってるではないか」

「あら？まあ、ふふふ」

「…っ！」

いいからご飯にしようよ！」

「はいはい」

この後蘭が落ち着かない様子で俺を睨みながらの食事会であった
あ、とても美味しかったです

「今日は誘ってくれてありがとな」

「だからあたしじゃないってば」

「…そういうことにしておいてやるよ」

「響也のバカ」

「だからなぜそうなる」

玄関の先まで送って貰ってる蘭に俺はそう言う

「…響也」

「どした?」

目を伏せ蘭が声をだす

「……」

「蘭?」

チュツ

「っ!?!」

「…あたし響也が好き」

モカやつぐが響也とくっついてずっと心がモヤモヤズキズキしてた
恋愛なんてしたことないからあたしはよく分からなかった
でも何となくだけこれが好きって感情なのが理解出来た」

…蘭もか

「その気持ちはとても嬉しい

…け「大丈夫」

「今は答えは聞かない

響也も色々悩んでるみたいだからその答えが出てからでいい」

「…すまん」

「謝らないでよ、あたしフラれたみたいだからその答えがでてからじゃん」

「そういう意味じゃないんだけどな」

「それじゃあたし家に戻る」

「おう、またな」

「うん」

蘭は家に入っていった

俺はどうすればいいんだ？

そう悩みながらの帰宅だった

「きよーやくん」

「だあモカひつつくなあ！」

「モカちゃん引っ付きすぎだよ」

あたしはもうこの状況を見てもなんとも思わない

むしろ

「モカ…次あたしね」

「「「え、…ええ!?!」」」

久しぶりに幼なじみ4人の驚愕する顔を見ることが出来たあたしは満足気に響也に近づいた

響也、好きだよ

第25話 A pretty girl in the costume

「ハッピー！ラッキー！スマイル！イエー！

みんなハロー、ハッピーワールド！よ」

きやー！

可愛いー！

「今日はあたし達のライブに来てくれてありがとうー！」

いえーいー！

「皆は当然知ってると思うけど知らない人のためにメンバー紹介いくわね！

まずはギター、瀬田薫！」

きやー！薫さまー！

こっち見てー！

「やあ、子猫ちゃん達今日も心地よい声援ありがとう

ハロー、ハッピーワールド！のギターをしている瀬田薫だよ

今日は楽しんでいってくれ」

「次はベース、北沢はぐみ！」

はぐみちゃん！

今度またコロツケ買いにいくねー！

「皆元気にしてたー！」

はぐみはいつつもげんきだよ！

ハロハピのベース担当、北沢はぐみ、最後まで飛ばしていくんでよろしくー！」

「次はドラム、松原花音！」

可愛いよ花音ちゃん！

先輩ー！頑張つてー！

「ご紹介に預かりました松原花音です、

ハロー、ハッピーワールド！でドラムしてます

今日は楽しんでいってください！」

「そしてDJ、ミッシェル」

ミッシェルー！

（はいはい、どうせあたしは「ミッシェル」ですよー）

「皆元気にしてたかい？」

ハロー、ハッピーワールド！のDJ、ミッシェルだよー！
今日はよろしくねー！」

「そして最後

あたしがボーカル、弦巻こころよ！

最後まで楽しんでいってちょうだい！

まずは1曲行くわよ！

YAPPY！ SCHOOL CARNIVAL シー！」

（そう、あたしは「ミッシェル」）

「皆お疲れ様、いいライブだったよ」

俺はライブを終え控え室に戻ってきたところ達を出迎えた

「ありがとう、響也！」

「響也先輩はぐみ頑張ったよー！」

「うおつとと、はぐみ急に飛び込んでくるな危ないわ」

「そう言いながらちゃんと受け止めてる響也くん優しいよね」

「そういう所が響也なんじゃないかい？花音」

そして最後に入ってきたやつにも声をかける

「美咲もお疲れ様」

「え？美咲も来てたのかしら？」「みーくんどこ？」「いつも恥ずかしがり屋だからね」

三バカは平常運転であつた

「……」

「…あれ？美咲ー？」

「…響也先輩はズルいですが、こんな」

「ごめん美咲聞こえなかった」

「あーもう！響也先輩この後私に時間下さい！」

なぜ俺は怒られてるか分からないんだが？

「この後って急に言われてもなあ」

「…ダメですか？」

「お、おうわかつた何とかするわ」

俺は妹にメッセージを送った

ゴソゴソ

「…ふう」

ミッシェルの頭を外して美咲が顔を覗かせる

その時汗で少し濡れた髪が色っぽさを出していた

俺は少しの間目を離せなくなっていた

「響也くん…あんまりジロジロ見るのはあれかもしれないよ？」

「え？あ、ああ」

花音にジト目を向けられる

その手の人だつたら興奮するのだろうかあいにく俺はそんな性癖は持ってない

「響也先輩変態さん？」

「やめろはぐみ」

「響也、未来の旦那様として浮気は程々にね？」

「いやしないから」

俺どう思われてんの!？」

「響也は響也さ」

「薫スクワット2000回」

「あはは、響也許してくれ…」

やっぱりこいつらとはバカ騒ぎするのが一番だな

でも美咲から誘ってくるって珍しいよな

いつもこのところとかの付き添いでいるからなかなか1人のところを見た事がない
…と思つたがよく良く考えれば他の奴らも同じだったなうん

「まあ普通はプライベートの事なんてわからんよな」

「響也何1人で話してるの？」

「何でもねーよ」

「そう？ならいいわ」

そういうところからはこつちに近づいてくる

ダキッ

「…このころさーん？何してるの？」

「何って抱きついてるのよ？」

「いやここ公共の場、分かる？」

「お父様が今度響也に会いたいわって言うてるのだけどいつ空いてるかしら」

「いや話さけよ！」

押し付けてくるとても柔らかい双丘に意識を持ってかれそうになりつつ何とか耐える

「このころちゃん？さすがにくつつきすぎじゃないかなー？」

花音が助け舟を出してくれる

ありがたい…ありがたいが尋常ではないほど黒いオーラ出てるぞ花音よ
はつきり言つて怖い

「大丈夫、次花音に譲るわよ？」

「…そ、それなら私は何も言わないよ」

とてつもなく早い買収でした

俺じやなきや見逃してたね

「それじゃその次はぐみね！」

「いやアトラクションじゃねえからな？」

あとちよつと羨ましそうな目で見るな薫」

指を咥えるな！少し可愛く思えるだろうが

「響也先輩の変態」

「待つて美咲！俺は何も悪くなくないか？」

「知りませんよ」

かなりの御立腹らしい

この後結局順番に抱きつかれたのであった

(ちなみに薫は凄い赤面だったし美咲は頬を膨らませながらだった)

「全く…響也先輩はみんなにデレデレしすぎです!」

「だって仕方なくないか?」

あの後(こ)ころ達と別れて俺は美咲と2人歩いていた

「仕方なくないですよ!」

今日の美咲はなんだか沸点が低いみたいだ

ずっとぶりぶり怒っている

話が進まないのので謝っておくことにしよう

「…それはすまん」

「あ、いや私こそすいません」

少し無言になる俺たち

俺は少し悪くなった空気を変えるように質問をぶつける

「そういえばこれどこに向かっているんだ?」

「え? 目的地とかは無いですよ?」

……………え?

「そうなの!?!」

「はい、何となく響也先輩と歩きたかっただけです」

なんてええ子なんや

「そしたらとりあえずご飯でも食べに行くか？」

もう昼つて時間には少し遅いかもしれないけど」

「ほんとですか!!」

普段の彼女からは想像つかないほどの大きな声で反応してきた

周りで歩いてた人もびつくりしてこつちを見てきた…が数秒すると再び歩き始めていた

「あ、…ええと実は朝少しバタついて朝ごはん食べてないんですよ」

「それは腹減るな」

「そーなんですよ」

そんな時にそんな魅力的な提案されたら誰だつてテンション上がります」

「わかった、わかったからとりあえず落ち着け」

何食いたいとかあるか？」

まあ財布にも少なからずお金はあるしある程度は「……………レスで」

「ごめん聞こえ「ファミレスでお願いします」

あ、はい」

そういえば美咲はファミレスのメニュー好きだったよな

「おっけ、んじやいくか」

俺はそう言つて手を差し出す

「…響也先輩、その手は？」

「あ、ああはぐれたら不味いし手を繋」

っ!?!俺何しようとしてるんだ!?!

つい詩歌にやる癖で差し伸べたけど普通に考えたら頭おかしいわ

俺は「やつぱり何でもなし」と呟きながら手を引つ込める

「あっ…」

「どうした？」

「いやー引つ込めちゃうんだなーと思つて」

何やら残念そうに言う美咲

思い違いなら痛い男になるけどとりあえずなるようになつちまえ

「…ほら」

俺は再び手を差し出す事にした

「し、失礼します」

おつおつとしながら美咲は俺の手に自分の手を伸ばしてきた

色々苦労している者の手とは思えないとても女の子らしい小さな手だった

「そ、それじゃ行こうか」

「は、はい」

傍から見たら中学生のような初々しい空気してたんだろうなきつと

—こちらのお席でよろしいですか—?

「はい」

—御用があればボタンでお呼びください

「さつと—何食べようかなあ」

「先輩小さな子供みたいですよ?」

「うっせ」

…そういう美咲も目がキラキラしてらっしやりますよ—?

「いや、あのええと…先輩のバカ」

「いや理不尽な」

「いいじゃないですか好きなんですからファミレスのメニュー」

「それは分かる!」

…けどよくよくところとかに引っ張られてべらぼうに高いものとか食ってそうなのに」

「まあ思い出の味ってやつですよ」

少し夢げな雰囲気ですうつぶやく美咲

「…そっか」

「先輩何を勘違いしてるかわかりませんがただただ一番最初に外食に連れてきてもらったのがファミレスってただけなんです」

「いや分からねえよ!!」

俺はつい大きな声でつつこんでいた

周りから白い目が飛んできてたので謝罪の念を込めた頭を下げるという行為をしつつ席に着き直して

「…ごほん」

あんな感じに言われたら誰だつて勘違いするわ馬鹿」

「馬鹿つて言う方が馬鹿ですよ」

あ、パフエもいいなあ」

「そんなガキみたいな言い分

俺チヨコバナナパフエな」

「どうせガキですよー」

それじゃ私はイチゴパフエにしようかな」

「ぶ、あはは」

耐えきれず笑いだしてしまふ

「とりあえず頼もうぜ俺腹減ったわ」

「そうしましょうか」

そう話して俺たちはメニューに目を移す

おーおーどれも目移りするなファミレスってなんでこんなにワクワクするんだろ

正直お高いレストランに連れてかれるよりファミレスに誘われた方が100倍は喜

ぶねうん自信ある

「美咲決まったか？」

俺は目の前にいる考える人と化している奴に声をかける

「いやー2つまでは絞ったんですけどそこから決まらなくて…」

「何と何？」

「これとこれです」

美咲がメニューを指さす

なるほど両方ともいけるな

「そしたら俺がこっち頼むから美咲はそっち頼んで半分ずつにするか？」

「なんか気を使わせたみたいですね…」

なんか落ち込ませてしまった…

「いや単純に俺もそれとそれ食べたくな」

「ありがとうございます、それじゃ頼みますよ？」

「頼むわ」

—ご注文の品は以上でお揃いででしょうか？

「はい」

—ごゆっくりどうぞ

「いただきます」

結局頼んだのはハンバーグプレートとエビドリアだ

「うん、やっぱりこういうの方が俺は好きだな」

「めっちゃ分かりますそれ」

その後2、3口食べたところで美咲が「あ、そうだ」と声をあげる

「どうした？」

「先輩、はいあーん」

・
・
・

「は？」

「いや、恥ずかしいんで早く食べて欲しいんですけど」

「あ、ああ」

俺は差し出されてるスプーンに口を近づける

「ん、…美味しいな」

「やっぱりこれ頼んで正解ですよ

それじゃ次は先輩の番ですよ？」

…ですよねえー

「わかった、

はいあーん」

俺は顔から火が吹きそうになりながら小さく切った1片を美咲に差し出す

「あむ、んぐんぐ…あ、美味しい」

うわあ恥ずかしい…

そりや美咲もあんなこと言うわ

…てゆーかこんなところ知り合いにでも見ら

「ん？」

俺はふと視線を感じ斜め前に向ける

…そこにはあ、やばっ!!っていう顔している彩とこっちにスマホを向けてる日菜がいた

「美咲10分程席を外してもいいかい？」

「どうしたんですかいきなり」

「てかめちやくちや顔怖いんですけどなんかあつたんですか？」

「あれ」

俺は指を指す

「あれって、…あつ」

俺は席を立つと彩達の席に近づく

アワアワしながら席の奥の方に逃げる彩とまだスマホを向けてる日菜

「さてと、お二人さんちよつと外までいいかな？」

「あのー私達別に悪いことしてたわけじゃ」

「そうそう、彩ちゃんがあそこに響也くんがいるからここにしよとかそんな話してたわけじゃ」「日菜ちゃん!!」あ、

なるほどねえ

「2人とも次の練習覚えてろよ？」

俺はドスの効いた声で2人にそう宣言する

「そ、そんなあ」「あはは彩ちゃん自業自得だよー」

「あ、日菜その動画消しとかないと紗夜にチクるからな」

「すいませんでした!」

日菜はイヴが見てたら「ブシドーの極みです!!」とか騒ぎそうなくらい綺麗な土下座を椅子の上で披露していた

俺は2人の元を後にして自分の席に戻る

「ごめんごめんおまたせ」

「響也先輩、今日はあたしと出かけてるんですから放つたらかしはどうかと思えますよ？」

ものすごいジト目を向けられる

経験上ここは素直に謝らないとやばいので

「ごめんなさい」

「まあいいですけどね」

早く食べないと冷めますよ」

「あ、待っててくれたんだなすまん」

やっぱり美咲は良い奴だったよ

食後俺達は店を後にしてまた、ただただ歩いていた

2人とも口を開かずただ歩く

たまにはこういう時間も良いもんだ

良いもんなんだが

「なあ美咲、これまだ続けるのか？」

「先輩はあたしと手を繋ぐのは嫌ですか？」

「いや、嫌じゃないんだが」

歩いてる間ずっと手を繋いでいるのだ

街ゆく人々に生暖かい目で見られるのは流石に応えるのだが離そうとすると美咲が悲しげな顔でこちらを見てくるので離せない

「あたしはずっと繋いでいたいです」

「お、おう」

「先輩」

美咲は立ち止まってこっちを向いてくる

「ん？」

「あたし好きな人がいるんです」

「…」

「その人はとても優しく、いつも人のために自分を犠牲にしてまで動いています」

その人は厳しくもありますでもあたし達の為を思つての事なのでむしろ嬉しいです

その人はとても鈍感です

…あたし、いやあたし達の方が正解かな？

気持ちには気づいてくれません

まあこころ達みたいに分かりやすいほどのタイプは分かりそうですが

ですよ？響也先輩？」

「ズいめん」

「謝らないでくださいよ、あたし惨めじゃないですか」

涙をうかべる美咲

「違うんだ」

「何が違うんですか？」

「俺は最悪な男なんだよ」

「最悪？」

キョトンとした顔をすする

「俺は何人もの人から告白されてその返事を待たせてるクズ野郎なんだよ」

「…なんだそんなことですか」

美咲が呆れた顔をする

なんだってそんな単純な話か？これ

「そんなことくらい薄々感じてますよー」

最近みんなのスキンシップが少し増えましたし

…特にこころが」

美咲は言い終わるとじっと見つめてくる

「今すぐ返事しろなんていいません」

ただあたしも先輩が好きなら人だと頭に入れてくれればそれでいいです

ただ」

美咲は背伸びして俺に近づいた

刹那俺の唇には柔らかい感触

「とりあえずあたしの初めてあげときますね」

俺はまたひとつ罪を増やしてしまった

「響也！響也！もつと聞かせて！」

「だあ暑苦しいからくつつくなこころ！」

あとほぐみは少し落ち着け、薫もだ！

花音助けてくれ」

「あはは、響也くんも大変だね」

くいくい

「先輩？あたしもいるんですけど」

「知ってるよ！忘れてないから助けてくれ」

「はいはい

…後でござ褒美くださいね？

はいはいあんた達少し落ち着きな」

その後美咲に対するござ褒美でこころ達が騒ぐがそれはまた別のお話

第26話 The boy gets into trouble again

「…あの理事長言ってる意味が分からないんですけど」

俺は昼休みに皆といつも通り昼飯を食つてたら校内放送で理事長に呼び出されたのであった

友希那とかに何やらかしたの？つてもものすごいジト目を向けられたが俺には全く身に覚えがないのでその視線を全て無視して屋上を後にして来たのだ

…来たのはいいんだが

「だから明日から2週間、花咲川に生徒として登校して欲しいのよ」

「いや意味がわかりませんよ！」

頭が痛くなってくる

「花咲川も来年かその次の年辺りから共学にしたいらしく試験的に男子生徒を通わせたいらしくてね

それで響也くんをお願いできないかな？つて思つて」

「だからといってなんで俺なんですか

他にいくらでも男子なんているでしょう?」

「色々事情があつてね」

理事長が少し表情を固くしながらそう言う

「事情…ですか?」

「そう事情」

理由は聞かせて貰えないらしい

まあ大人達にはそういうものがあるんだろう

コンコン

「あら、タイミングがいいわね

入っていいわよ」

ガチャッ

「よう! 会いたかったぜー愛しの息子よー!」

「ふっ!」

ガッ

「ぐべらっ!」

あ、つい反射で殴ってしまった

「おいおい…愛情表現がちとダメージ強いぜ響也よ…」
紹介しよう

この少し大柄なおっさんは俺を女子校に入れた張本人
我が愚父、菅谷楽斗である

…一応かなり有名な音楽家なのだが身内の俺にとってはそんなのマイナスの評価に
しかかっておらず

「んで？いつ日本に帰ってきたのさ？」

俺は転がってる物体に質問を投げかける

「つい昨日な」

「そか、母さんは？」

「今回は予定合わなかったから俺一人だ

…なんだ？マザコンか？」

「詩歌召喚するぞ…？」

「許してくれ」

親父は詩歌を溺愛してて頭が上がりないらしい

これといって反抗期みたいな症状出てなくてよかったな

「こほん、話を進めてもいいかしら？」

「あ、はい」

「楽斗さん？」

「…まあどうせ知られることだしいいぜ言っても」

え？え？

なに？なんか急にシリアスな雰囲気になって俺衝撃のカミングアウトされるの!?

「本当は何人か候補がいたみたいなんだけどある日突然向こうの理事長が頑なに響也くんの事を指名し始めてね…」

なんか凄い闇を感じるのだが大丈夫なのか？

「それで何名かの花咲川の生徒が黒服の人達に囲まれたおじさんが理事長室に入っているのを確認していて」

…ん？

「薄らと聞こえたのは娘に頼まれたからと言っていたそうよ」

何となく察しが着いたような…

「まあ察してくれたら嬉しいわ」

弦巻家は凄いなやっぱり色々な意味で

「…というわけで俺の友人を助けるって意味でも協力してくれないかな？響也」

「そう言われたら俺はどうしようも出来ないよ」

わかった」

「ごめんね響也くん」

「いえ、元はと言えば向こうにいるおてんば娘が発端だと思っんで」

「ほんとによく知り合ったよな俺も聞かされた時びつくりしたよ」

「よくわかんないけど成り行きでね」

それじゃ詳しい資料後でお願いします

俺はこれで失礼します」

俺はそう言っただけで理事長室を後にする

明日から非日常Part2が始まるのか…

やべえ逃げたくなってきたわ

帰って妹に報告したら

「お兄ちゃんっていつつもめんどくさい事に巻き込まれてるよね？ドM？」

って言われたから軽くシメておいたわ

誰がドMや

次の日俺はいつもとは違う通学路を辿り（妹に引つ張られ）花咲川に向かっていた

ちなみにみんなにはこのことは言わないように親父達に言及されている
騒ぎを起こしたくないらしいよく分からないけど

「ほらお兄ちゃん遅れるよ」

「分かつてる」

急かされても行きたくない気持ちの方が大きいんだよ

制服だつて羽丘のままだし

…てゆーか

「詩歌、お前まで遅刻ギリギリに出なくても良かったんじゃないか？」

そういうと詩歌はキョトンとした顔をしてこう言う

「え？だつて兄妹で一緒に同じところに登校とか懂れない？」

「いや特に」

「もう、お兄ちゃんは夢が無いな」

口をとがらせてプンス力怒る妹

「現実は何を求めてるんだよ」

「あまーい兄妹の絆？」

「寒気がするからやめてくれ」

「お兄ちゃんひどーい」

傍から見ると仲が良すぎる兄妹らしい（リサなど複数の証言）
普通だと思うんだけどなあ

「あ、お兄ちゃん着いたよ」

話してるうちに着いてたみたいだ

キーンコーンカーンコーン

「あ、やば

お兄ちゃんあとは自分で向かってね！」

「ちよ、おい詩歌ー」

行っちゃったよ…

とりあえず校舎に入って職員室探そう

俺は来客用玄関から中に入らせてもらい（名前を言ったらすんなり入れたのはセキユリテイ的かどうかとは思ったが考えても無駄だということに気づき思考を止めた）

そのまま理事長室に案内された

その後15分ほど理事長と話をした

今は2週間お世話になる教室に案内されているところだ

しっかし校舎綺麗だな流石女子高と言ったところか

…その中を男が歩いているのがおかしいはずなんだがよく分からん世の中だ

「菅谷君、あんまりキョロキョロしない方がいいと私は思うの」

「あ、すいません…」

案内してもらつてる先生に注意されてしまった

でも物珍しいから見たくなるのが人の性じゃん？

「菅谷君、着いたよ」ここが君が2週間過ぐす教室」

「案内ありがとうございます」

「いえいえ、それじゃ私はここで

あ、今授業担当してる先生には話が通つてるからノックしたら気づいてくれると思う

」よ

そう言つて去つていった

中々いいひとだったな

コンコン

俺は言われた通り教室の入口の扉をノックする

『はいー、少し待ってねー』

その声が聞こえてきたあと扉が開く

すぐに出てきて扉を閉めた

「おはよー」

なんか随分若い先生だな

「おはようございます」

菅谷響也です」

「今日から2週間よろしくねー」

あ、とりあえず中入る？」

「あ、はいそうですね」

なんかぼわぼわした人だから掴みづらい

「それじゃ呼ぶから少し待っててねー」

そう言って入っていった

『皆と2週間一緒にお勉強する人が来てるから紹介するねー』

『え?! 転校生!?!』『でも2週間だから転校生じゃなくない?』『可愛いのかな?』『先生!』

早く呼んでよ!』

いやそりゃそう思うけど男だからな俺?

男が入って行ったら阿鼻叫喚やぞ!?!

先生も説明してくれるんじゃないのかよ!

『皆さん！授業中ですよあまり騒ぐのはいけないことです』

…紗夜エ

胃が痛くなってきた

『紗夜ちゃんまあまあ落ち着いてー』

それじゃ呼ぶねー菅谷君ー』

呼ばれちまった

俺は扉に手を伸ばす

『え？君？男！』『嘘まじ！ここ女子高だったよね？』『イケメン？ねえ、イケメンなの？』

『いやまず男が入ってる時点でどうなの？』

この扉に鍵かかっててくれねえかなあ

ガラガラ…

あ、やっぱり開いてしまった

俺は仕方なく中に入る

あ、紗夜と目が合っちゃった…お、隣子もいるじゃん

「2週間お世話になります菅谷響也です

…男でごめんなさい」

俺は短い自己紹介と共に謝罪を述べる

シーン

静寂がこの教室を包む

「顔を上げてください」

肩に手を置かれ声をかけられる

恐る恐る顔を上げると物凄い笑顔の紗夜がいた

「響也さん？きちんとした説明をして貰えますか？」

ヒソヒソ

「え？氷川さんの彼氏とか？」「あの風紀にめっちゃ厳しい人にそんな人が!？」「でも菅谷君……？だっけ？カツコよくない？」「私も話したいなあ」

「響也くん、私も説明して欲しいなあ？」

あ、悪魔がもう1人降臨なされた

あの後2人からお説教をくらいみんなから質問攻めにされ噂が広まり昼休みになるまで気が休まることがなかった

ようやく昼休みになり俺は紗夜と燐子に連れられお昼を食べるところに案内される

「全く…いくらお父様の頼みとはいえこんなこと普通しないですよ？」

「(お父様?) だからごめんて言ってるじゃん」

紗夜はまだご立腹なご様子だ

「ところで向こうの皆にはこの事言ってるの？」

「いやなんにも」

「日菜がうるさくなりそうですね…」

「大丈夫でしょ…多分」

あいつなら騒ぎかねない

「まあ担任が説明してくれてるだろうし気にはしてない」

「…それにしても響也くんの携帯鳴りっぱなしだよ？」

俺は気にしないようにしてた携帯を言われてしまったため仕方なく出して電源を消して仕舞った

「響也くん、ちなみにこっちのみんなには？」

「こっちにも内緒、まあ昼前あんだだけ騒ぎになってたからバレてるだろうけどな

紗夜なんか聞いている？」

「そこは私にも分かりませんが…」

そういう話してるうちに目的地に近づいてきたのか女子達の話し声が聞こえてきた

「紗夜、燐子ちよつといいか」

俺は少し意地悪い心が出てしまいある提案を2人にするのであった

「結局あの騒ぎはなんだったんだろうねー」

「人が多すぎて中まで見えなかつたもんね…」

「ねえ有咲今日卵焼きいつもより多くない?」

「うっせ、別にお前らが欲しがるからとかそんなんじゃねえからな?」

今日もいつも通り賑やかなお昼です

紗夜ちゃんと燐子ちゃんが少し遅れてきた以外は特に変わったことは無いよ!

「彩ちゃん…1人で何話してるの?」

「花音ちゃん!?!な、なんでもないよ!」

「ならいいんだけど」

花音ちゃんに訝しげな目を向けられてしまった

「そういえば朝から響也と連絡取れてないんだけど詩歌さん何か知ってる?」

千聖ちゃんがそう口にするのと詩歌ちゃんはビクツと身体を震わせた

「朝いつも通り別れたつきり私も知りませんよ?」

「……そう、変な事聞いてごめんなさい」

と、いうかちよつと待って

「千聖ちゃんいつも朝から響也くんと連絡とってるの!？」

「え、ええ」

いけなかつたかしら？」

「「千聖ちゃん（先輩） 抜けがけだー!」」

「ぬ、抜けがけも何もあなた達も連絡取ればいいじゃない!」

「チサトさん! キョーヤさんは朝弱いのであんまり連絡送ると怒られます!

怖かったです!」

「私には何も言わないのに」

「有咲なんてずっと送ろうと思ってて結局送れなかったやつがずっと残ってあるんです

よー!」

「よし、香澄ぶつ飛ばす!!」

「あ、有咲ちゃん落ち着いてー」

「沙綾喉乾いた」

「はいはい」

「ねえ、こころんは連絡とったりしないの?」

「そうね、これで打つより実際に会って話した方がいいからあまり送らないわ」
「あんたにしちや意外だね」

あたし達には結構送ってくるくせに

…あーなるほど響也先輩に送るのが恥ずかしいのか」

「べ、別にそんなことないわ！

美咲ったら意地悪ね…」

ワーワーギャーギャー

「全く…皆さん揃って」

「まあまあ、氷川さん落ち着いて」

「そうだぞ！イライラしてたらせつかくの美人が台無しだぞ！」

「うんうん、紗夜ちゃん可愛いか…ん？」

なんか聞き覚えのある男の子の声

っていうかここ女子校なのに男子の声聞こえてくるのおかしくない？

視線を声の主に向けるとそこには

「よ！お前から何鳩が陽電子砲食らったみたいな顔してるんだ？」

「…」
「響也（くん）（先輩）！？」
「…」

「どどどどうしてここに居るんだ!? 不法侵入か？警察呼ぶぞ！」

「有咲落ち着け」

「これが落ち着いていられるかここは女子校だぞ？」

「羽丘も元々女子校だ」

「あ、そつか：つてそれは今関係ねえー！」

「あーなるほど、昼前の異様な騒ぎは響也先輩の仕業だったのか」

「Exactly！」

その通りだ美咲、後でジュースをやろう」

「響也？それでどうしてここにいるのかしら？」

「千聖待つてくれ、さつき紗夜にも同じ殺気で押しつぶされかけてるから抑えて、な？」

「俺がいる理由は2週間ここで勉強に励めつていう命令が羽丘の理事長と俺の親父から出てしまったからだ」

「それはなんとというか：響也くんお疲れ様だね」

みんなが生暖かい目で響也くんを見ている

「やめろ！そんな残念な人間を見る目は！」

「ところで響也くん！千聖ちゃんと朝いつも連絡取り合ってるってホント？」

彩がだいぶ食い気味に聞いてきた

「ま、まあ間違っちゃいないけど」

「千聖ちゃんだけじゃないよ！私が送っても返事してくれないのに！」
ずるいも何も…

俺は彩に近づくとみんなに聞こえないように小さい声で囁く

「逆に彩は千聖からのやつ無視できるのか？」

「あつ…」

少し考えて顔面蒼白になりブンブンと顔を振っている彩

本当にこいつ面白いよなー見てる分には

「本日はお日柄もよく」

「アヤさんが壊れました!?!」

思考がオーバーヒート起こしたか

いや人間をそこまで恐怖に貶める千聖ってほんとに悪魔だよな」

「「「え?」「」」」

みんながすごい顔してこっちを見てくる

あ、声に出ってた!?!

…やべえすげえ嫌な予感がす「響也」

「何か思い残すことはあるかしら?」

拝啓妹様

俺の命もここまでな様です

みんなは聞かれたくないことは声に出しちゃダメだぞ！お兄さんとの約束だ！

第27話 Light up the divas
light road

ピピピピピ……ピピピピピ……ピ「んー」カチャツ

「もう朝か……」

俺は夢の世界から現実へと引き戻されるけたたましい音によって意識を無理やり覚醒させられる

この虚無感があるから朝ってあんまり好きじゃないんだよなあ

まあ人類みなに平等に朝は訪れるらしいからそれに文句は言えないんだけど

「平日ってなんでこんなに憂鬱なんだ……」

別に学校が嫌いって言う訳では無い

ただただ眠たい中身体のスイツチを入れるのがめんどくさいだけなのだ

「……でも起きないと爆弾が降ってくる」

爆弾（妹）から身を守るため俺は渋々体を起こす

その数秒後階段を勢い良く登ってくる

しめしめ今回は起きてるぞ

ガチャ

「響也くん！朝だよ」

「…彩ちゃんもう少し落ち着いて」

「朝からうるせえよピンク頭」

「少しは落ち着…あれ？」

ちよつと待て

「おいなんでお前らがいるんだ!？」

俺はいるはずのない2人に驚きの声をかける

「せめて名前で…まあいいや」

2週間とはいえ一緒に学校に通えるんだもんこんなチャンス逃せないよ」

「心の声出てるわよ彩ちゃん」

「アヤさん、そういうのは抜けがけですよ！」

「イヴも来てたのか」

彩の後ろから現れたのはイヴだった

「ぬ、抜けがけじゃないよ！」

「そしたらイヴちゃん響也の右手を繋ぐ権利をあげるわ」

「ちよ千聖ちゃん!？」

千聖の発言で彩が慌てふためく

その横でイヴが考え事を始めたようだ

「キョーヤさんの…右手…繋いで…登校…」

ああ、ダメです、キョーヤさんそういうことは2人きりの時に…」

「いやいやいやイヴ誤解を産む発言は辞めてくれ」

「響也(くん)の変態」

なぜだ、俺は何も悪くない

「まあその話は置いておきましょうか

響也、とりあえず着替えて降りてきて

彩ちゃん行くわよ、ほらイヴちゃんも」

3人が部屋から出ていく

「…なんだったんだ?」

爆弾(妹) よりもよっぽど俺の朝を破壊していく3人組であった

「いただきます」

「「いただきます」」

あの後俺は着替えと用意を済ませ1階に降りてきた

リビングに入ると件の3人と詩歌が朝ごはんをテーブルに運んでいるところであつた

「ほら鬼いちやん早く座って座って」

「明らかに漢字が違う様な呼び方で呼んでそうだけどあえてスルーするわそこ

てかおい詩歌また俺に黙ってこいつら家にかけて」

詩歌は何故か知らないが持ち前のコミユスキルを使って仲良くなっているらしく朝は大体誰かいる…静かな朝はなかなか訪れない

「こいつらとはお言葉よね

私には千聖って名前があるんだけど」

「私にはって千聖ちゃん私達はいつでもいいの!」「そうですチサトさんひどいです」

「はいはいみんなとりあえず落ち着いてください

早く食べないと遅刻しますよー」

「…そうねこの話はまた今度にしておきましょうか」

「いただきます」

「あー響也くん待つてよー!」

慌ててみんなが座る

そんな焦らなくても朝ご飯は逃げないぜ？

「あれ？」

「どうしたの？お兄ちゃん」

「いや味噌汁がいつもと味が違うから」

いや気のせいかな少し濃いめな気が

「あ！気づいた？それはねイヴちゃんが作ったんだよ」

「はい！頑張りました」

「なるほどだから少し不思議だったのか」

「美味しくありませんでしたか…？」

珍しくしゅん…とするイヴ

「いや美味しいよ」

「ほんとうですか!？」

おかわりもあるのでどんどん飲んでください」

「い、いやさすがに味噌汁はそんなに…」

「そうですよね…」

すると斜め前から強烈な殺気が押し寄せてきた

恐る恐る目を向けるとそこには般若寸前の千聖がおり

『イヴちゃんを泣かせたら許さないわよ?』

と目で訴えかけてきた

なぜ分かるかって? 長年の感だよワトソン君

…ああーもう

「んく…く…く…ぷはあ

イヴ、もう一杯」

「は、はい! (ぱああ)」

その後俺は味噌汁がしばらく見たく無くなるほど流し込んだのであった

いや作りすぎだよ!!

「うう…」

「響也、大丈夫?」

「…大丈夫に見えるならお前の目はどうかしてるよ」

登校中

今にも味噌汁がマーライオンしそうになってる俺を心配そうに見つめる4人

「き、キョーヤさんごめんなさい」

「いやイヴは謝らなくていいぞ」

「これはどつかの誰かさんが威圧してきたから」

「何か言ったかしら？」

「イエナニモ」

うん怖い怖い

「てゆーかイヴの暴走誰でもいいから止めれたんじやないのか？」

「あまりにもイヴちゃんが好きそうに作ってるから止められなくて

ごめんね響也くん」

「まあいいよ過ぎたことだし」

響也——！

「ん？」

響也——！

やべえすげえ嫌な予感がぶんぶんするぜ

今突撃されたら俺のライオンがマーしてしまう…

「っ!!」

俺は本能の赴くまま体を横に移動する

その横を金色の突風が通り過ぎたのを確認した

数メートル先で急停止した人物はこちらに振り向き何事も無かったかのような笑顔で話しかけてくる

「響也おはよう！今日もいい朝ね」

「……おはよう」

お前は俺を挽肉にする気なのか？」

「あら？響也は食肉なんかじゃないわ？」

「……はあ」

……いつは大真面目にそういう思考してるからなんも言えない時があるんだよなあ

「てかいつも黒服さんに送って貰ってんじやなかったのか？」

「響也がこっちの方にいるって感じたから飛び降りてきたわ」

「もちろん止まってる時だよな？」

「そんなの待ってるのもどかしいじゃない？」

ほんと黒服さんたちの苦労は計り知れないな……

てゆーか走行中の車から飛び降りるなハリウッドの映画撮影かよ

「あの…………ろちゃん？」

さすがに近づき過ぎじゃないかしら？」

千聖が少し怖い笑みでこころに話しかけている

「あら？そしたら千聖も近づけばいいじゃない！」

「え？いや、あのこころ……きやあ!？」

こころによつて引つ張られた千聖が俺にぶつかつてくる
めつちやいい香りがしてくる

「あー千聖ちゃん（チサトさん）ずるい（です）！」

「ず、ずるいつて言われてもこころちゃんが……」

「そう言いながら千聖顔が真つ赤よ？」

ワーワーギャーギャー

女子特有の甲高い声に耳がキーンつてなつてきた

そろそろ行かないと遅刻するぞ？お主ら

チヨンチヨン

誰かが俺のことをつついてる気がする

その方向に顔を向けると

「響也くん……何してるの？」「あなた達は朝から何してるんですか」

どす黒いオーラを身にまとっている燐子と紗夜がいたのであつた

いや俺何も悪くねえ!!

「はあ…」

朝の騒ぎ、昼ごはん争奪戦、そして5、6時間目の体育…
俺の体は疲れ果てていた

放課後になった今も俺は席に座ってぐでーつとなっていた
「響也くん…帰らないの?」

燐子が俺の前に座って話しかけてくる

「正直帰りたいたい」

でも疲れて立ち上がれない」

「まあ今日も色々あったもんね」

「色々ありすぎなんだよ」

俺は平凡な日常が過ごしてえんだ」

「響也くん…女子校にいる時点で多分平凡じゃないよ?」

苦笑いしながらそう言われる

薄々気づいてはいるんだからやめてくれ

ブーブー

「ん？誰だろ」

今日はどのバンドも練習予定無いから遅刻寸前とかそういうの無いと思うんだけど

画面を見ると『友希那』の文字が

珍しいなあいつからかけてくるの

「もしもし」

『もしもし』

スピーカー越しで友希那の声を聞くのはなかなか無いので少し不思議な感覚に陥りながらも俺は会話を続ける

「どうした？お前がかけてくるなんて珍しい」

『私が電話したら悪かったかしら？』

「いや悪くない」

『…まあいいわ』

「ところで今響也何してるの？」

「今はまだ学校だ」

「色々あつて自分の席でぐでつてる」

『そう…』

沈黙が広がる

…会話途切れちまったわ

『ほら友希那早く誘わないと遅くなっちゃうよ?』

わ、わかっているわ!でもどうやって言葉にすればいいか

友希那さん!頑張つて!響也くん鈍感さんだからちゃんと言わないとダメですよ!』

向こうが騒がしいんだが

リサもあこも聞こえてるぞおい

「友希那、用がないなら切るぞ?」

待ってるのもあれなので少し急かしてみることにする

『あ、ま、待ってちょうだい!』

響也この後予定はあるかしら?』

まあ薄々そうなんだろうなって思ってたけどそういう感じねなるほど

うーむ、別に予定は無いけど燐子が目の前にいるから返答に困るな

燐子に確認を取ろうと目を向けると燐子はただ黙って首を振り手を俺の持つてるス

マホに向ける

どうぞどうぞってことねありがとう

「いや特に無いな」

『いや特にないな』

返事がなかなか来なかったから少し不安な気持ちにはなったけど良かったわ
…多分向こう側で誰かといえるのね響也らしいわ

「それならよかったわ

それじゃ今からそっちに迎えに行くわね」

『あ、ちよ何するとか言』

私は通話を終了する

「友希那どうだった？」

「ええ、大丈夫みたいだったわ」

「ねー友希那さん、あこも行っていいですか？」

「こらあこ無粋なことしないの

今日は友希那の番」

「えー、あこだって響也くんと友希那さんと遊びたいー！」

ほんとに無邪気ね

まあそこがあこのいい所でもあるけれど

「ごめんなさい、リサとあこ」

せつかくのチャンスを貰ったのだから私は素直に2人に謝罪することにする

「いやそういうつもりじゃなかったんですけどあこもごめんなさい」

「いいんだってほら響也のことだから校門辺りで待つてるんじゃない？」

「そうね行つてくるわ」

私は2人にそう告げると教室を出て外へ向かう

どうしてこんなにも緊張するのかしら

ただただ響也に会いにいくだけなのに

「好き…ね」

正直この感情はよく分かっていない

響也と一緒にいたい、響也と話したいという気持ちになるからこれが好きなんだと自

分では考えてはいるが

「私も何か出来ることを増やした方がいいのかしら」

音楽…歌しか私には無い

家事なんてした事すらないしそもそも今からの付け焼き刃でリサを筆頭に皆に勝て

るとは思えない

「全く…罪深いわね響也」

でも今日は私だけの物
独り占めできる

ふふふ待つてなさい

「友希那早く来ねえかな」

結局あの電話の後俺は一人校門前で佇んでる

燐子と待つところと思つたんだが燐子が「響也くん流石にそれは出来ないよ」つて言われちまつたんだよね

よくわからんけど俺が悪いらしい

「ごめんなさい遅くなつたわ」

考え事をしてたらもう着いてたらしく友希那の声が聞こえてきた

「んいや大丈夫俺もちよつと前からここに居たから」

「え、でも」

「…ありがとう」

「ところでどこに行くんだ？」

「特にきめてないわ」

「だと思ったよ

何となくそんな気はしてた

とりあえず歩くか」

「わかったわ

あ、響也」

歩き始めようとして友希那に呼び止められる

「ん？」

「はい」

手を差し出してくる

「え？何？」

「少し肌寒くないかしら？」

「確かに少し風が冷たいかもな」

「だ、だったら暖かくなるのがいいと思うの」

「言ってることがよくわかんないんだけど」

ギョッ

友希那にいきなり手を掴まれる

「手を繋ぎましようって言ってるのよ」

「そ、そういうことな」

俺はいきなりの柔らかい感触にドキマギする

そりゃな彼女なんていたことないから女の子と手を繋ぐことなんてそうそうないし

「と、とりあえず行こうかこのままここに居るのは不味そう」

「そ、そうね」

お互い顔を真っ赤にして歩き始めるのであった

「ニヤンちゃん可愛いでちゅね〜」

「なんで猫カフェにいるんだろうな俺…」

猫は可愛いとは思うが目の前のアホ（友希那）みたいになる程では無いので俺はただただコーヒーを飲んでる

「ほら見てちようだい響也!」

「はいはい可愛い可愛い」

「全く…このお兄ちゃんは全然わかってないでちゅね」

こんな姿 Roselia のファン達に見せたらどういう反応示すんだろ

動画撮っておこ

「響也にとつて」

「ん？」

いきなり真剣な様子になり俺をじっと見つめてきてそうつぶやく

「響也にとつて私はどういう存在？」

「どういう存在って友希那は友希那だけど」

「そうよね…響也にとつてその程度の認識よね」

いつの間にか猫を手放して俺の座つてる真向かいに座った友希那は少しばかり黒いまなざしで俺を射抜いてくる

「私は響也を独り占めにしたいわ

誰にも渡したくはない

でも私にはこれといって取り柄は無いわ

家事が出来る訳でもない、愛想を振りまくことも出来ない

正直女の子としてどうなんだ？って聞かれたら何も答えられない自信があるわ前にリサにそう言ったら珍しい剣幕で怒られたわ

立ち上がつてめつちやドヤ顔でそう言ってくる

「友希那、とりあえず俺はすぐにはその気持ちには答えられない」

「答える必要は無いわ

ただただ響也は私の所有物になればいいのよ」

「とりあえずちよつと待て

友希那お座り」

「私は犬じゃないわ」

「知ってるよとりあえず落ち着けて話」

渋々と言った感じで席に着く

「まず大前提として俺は色んな人から告白されてしまってます

そして人としては終わってるとは思うけど返事は待ってもらってますはい」

「響也らしいわね

褒められたことではないけど何と云うか安心したわ」

「だから誰かを特別視したりすることは出来ない

……これ毎回言ってるな」

「…はあ私はなんでこんな男が好きになったのかしら」

「すまなかつたねこういう…いやこれはダメだな

友希那ごめん」

「謝らないで虚しくなってくるわ」

ものすごいジト目を向けられる

でも数秒後何かを閃いたような「あつ」という声と共に含みを帯びた笑みで言葉を発してくる

「でもそれなら私にも可能性があるという事ね？」

「ノーコメントで

本来ならこんな美少女達に囲まれてるだけで異次元なんだから」

「び、美少女…」

「どうした？顔赤いけど暑いかな？」

「な、なんでもないわ

…これが皆が言ってたやつね」

にゃ〜

「あ、そういうえばここ猫カフェだったな」

話に集中するあまりいる場所すら目に入らなくなってたみたいだ

「お前は常に幸せそうだなー」

近寄ってきた子を抱き抱える

おうおう愛いやつよのう

「響也が羨ましいわ

その子なかなか寄ってきでくれなかったのよね」

「なんか動物に昔から好かれるんよな」

そのせいで大きな犬に町中追い回された事もあるからそれが良かったかかって言われるとなんととも言えないけど」

「それが今となつては女の子から追い回されてると言う事ね？」

「いやうるせえよ」

てかそのキャラなんだよ」

「このお兄ちゃん怖いでちゅねー」

「そのキャラ素なのか演技なのか分からなくなつてくるわ」

ブーブー

ん？誰だ

「あ、やべ詩歌からお怒りの連絡が来た」

「…帰りましょうか」

おいめつちや名残惜しそうな顔してるぞ

効果音足したら「ズーン…」とかになりそう

「ほらまた来ようぜ」

「わ、わかったわ」

結局何故か上機嫌な友希那に引つ張られて帰宅することになった
いやほんとにそれは友希那だったのだろうか
なんかスキップしてたぞ

「新しい曲を作ったのだけれど聞いてくれるかしら」

友希那がいつも通り作ってきた曲を私達に渡してきた

「今回は早かったですね」

「あこ友希那さんの作る曲いつもカッコよくて好きですよ」

「ん？いつもと曲調が違うような…」

「まあたまにはいいんじゃない？」

ピシッ

「「これ、恋愛ソングう!!」「」」

ふふ、響也は気づいてくれるかしら？

第28話 R a s , c o m e d o w n h e r e

「だから何度も言ってるじゃない！」

「無理なものは無理なんだっつーの！」

拜啓妹様各位

今、何故か年下の女の子に物凄い剣幕で喰い付かれています…

「あなた聞いているの!？」

「聞こえてるっつーの！」

今大事な話してんだから割り込んでくるな」

「W h y !？」

あなた一人で話してたわよね!？」

まあ間違っではない

…え? どうしてこうなったか話せって?

全く仕方ない…いや話しますからさよちさには言わないでください…

話は数日前に遡る

「はい、とりあえず一旦休憩にしよつか？」

俺の一言で張り詰めた糸が切れたのか友希那達 *Roseelia* の皆がそれぞれの動きを見せる

息をふう、と小さく吐く者

カバンからクツキーを出す者

その様子を見て同じくクツキーを出そうとしたがカバンにしまつてしまう者

疲れからかいつもものセリフが浮かんでこない者

その者にボソツツとセリフを教える者

まあいつも通りつちやいつも通りだな

「ねえ響也……2番のBメロの部分なんだけれど」

「ん？」

友希那がノートを持って近づいてくる

「この歌詞少し変えたいのだけどいいかしら？」

「いいも何もお前らの歌だから決定権はお前らにあるよ？」

俺にはそういう部分に対する指示はできないかな？」

「…そうよね、変な事聞いてごめんなさい」

「いやいや、しつかし珍しいな友希那が迷ってるなんて」

「私だって悩んだりするわよ?」

明らかに不機嫌な顔になってそう言ってくる

これは言い方が不味かったかな

「いやそういうつもりじゃ無かったんだがすまん

友希那いつも自分で納得するまでやってるから手直したかも見たことないんだよな」

「まあ私だからね」

ドヤ顔をして友希那はこつちを見てくる

やめておけお前はそういうキャラじゃないだろ友希那

「あー!友希那さんずるーい」

響也くんと話してて」

「ずるいとは何よあこ」

あこがこつちに飛び込んでくる

元気があるのは大変いいことなのだがもう高校生になったんだから異性に抱きついてくるのはよした方がいいぞ?

「えーだってあこだって響也くんと話したいんだもん」

「話すのはいいけど疲れてるんじゃないのか？」

「響也くんと話してたら疲れなんて吹き飛ぶよ！」

天使かっ！

「ええ!? なんだあこの頭撫でるの? 響也くん」

「あ、ごめんつい撫でたくなつて」

いつの間にか手が動いてしまっていた…

さすがにまだ捕まりたくないの頭から手を離す

「あっ…」

目に見えて落ち込むあこ

俺はそつと頭に手を戻す

「(＊、▽、＊)」

スッ

「えっ」

ナゲナゲ

「んふふー」

「響也次あたしね？」

「いやアトラクションじゃないぞ？」

何故カリサが頭をこちらに近づけてニコニコと待っていた
「そーだよりサ姉！」

今はあこを撫でるので響也くんは忙しいんだよ」

何故か胸を張って威張るあこ

なんでお前が（ry

コンコン

「ん？まちなさんかな」

でもまちなさんなら普通にスタジオに入ってくるし誰だろ

みんなも頭にハテナを浮かべている

「お邪魔するわよー！」

入ってきたのは猫耳っぽいヘッドホンをつけた身長低い女の子とピンクと水色2色の奇抜な髪色をしたツインテールの女の子

みんなに知り合いかどうか目を向けるが全員が？を浮かべているところを見ると誰も知らないらしい

「初めまして私はRAISE | A | SUILENのプロデューサー

チュチュよ

こっちはパレオ」

チュチュと名乗った女の子から名刺を渡される

「RAISE」A「SUILEN」って聞いたことないけどなんかの会社だったりするの？」

「いえ、そういう訳ではないわ響也菅谷」

「え？なんで俺の名前を」

「菅谷響也、数々のコンクールで賞を総ナメした圧倒的天才、神童

私も何度かコンクールの映像を見させてもらいましたが正直見えてる世界が違うって思い知らされました」

パレオちゃん？が後に続いた

正直コンクールのことは思い出したくないのが気持ちのため俺は考えることをやめる

「まあいいか

んで、チュチュちゃんにパレオちゃんはなんで来たんだ？」

「そうそう、本題に入るわね

響也菅谷、あなたをスカウトしに来たわ」

.....

「あー」

「「「す、スカウト!?」」」

数秒の沈黙の後こっちサイド全員が驚きの声を上げる

「そうスカウト」

あなたには私と一緒にRAISE | A | SUILENを頂点に持って行って欲しいのよ」

「まず俺はそのRAISE | A | SUILENがなんなのか分からないからなあ」

「まあ普通はそういう反応になるわよね」

パレオ」

「はー」

響也さん、こちらをどうぞ」

俺は1枚のチケットらしきものを受け取る

「今週末私たちのお披露目LIVEがあるわ」

Rosealiaの皆さんの分もあるから目に焼き付けに来てちようだい！

パレオ帰るわよ！」

そう言つて2人はスタジオを出ていった

「響也……」

リサが心配そうな顔をしてこっちを見てくる

「なんでそんなしんみりしてんだよ」

俺はそんなリサの頭をコツンと叩くと

「とりあえず見て見なきやあの子達の本気度も分からないけどそれを見たからってお前らと一緒に過ごした時間は消えないだろ?」

そう言うともみんなの表情が安堵に変わる

しつかしどこで俺のことを知ったんだらうな

「響也さん：?大丈夫ですか?」

「ん?ああ大丈夫大丈夫」

ただの考え事だよ」

「それならいいのですが…」

「なんだー?紗夜も心配してくれてんのか?」

「ち、茶化さないでください!」

怒られてしまった

おー怖い怖い

「そろそろ練習に戻るわよ」

友希那の一言で俺たちは気を引き締め直して練習に取り組み始めた

「そして当日俺達はRAISE | A | SUILEN、通称RASのライブ会場に到着したのであった」

「響也くん？どこに向かって話してるの？」

声に出てたみたいだ

みんながなんか変なものを見る目でこつちを見てきているため一言「なんでもない」とだけ返した

しかし初めてのライブらしいのに結構な人が来ている

宣伝効果なのかなんなのか分からないがよくこんな無名のバンドを見に来たもんだ

「…すごい人…です」

「りんりん大丈夫？」

座って休む？」

燐子には少々厳しい人混みだよな

てか早く会場に入らないと周りの人が小さな声で

『あれつてもしかしてRoseliaじゃない？』

『いや人違いだったら私たち恥ずかしいよ？』

とか話してるから

多分逃げないといけないやつだよこれ

「とりあえず入りましょう」

ここでは他の人の邪魔になります」

紗夜ないす！

終わったらポテト奢ってやろう

「お願いします」

俺たちは受付に貰ったチケットを見せる

「はい、……すみません少々お待ち頂いてもよろしいでしょうか？」
「？」

はい分かりました」

チケットを見た受付の人は急に一言告げると奥に引つ込んだ

あれ？会場ここであつてるよな？

数分後

「お待たせして申し訳ありません」

さっきの人が戻ってきた

「菅谷響也様と Roselia の皆様どうぞ奥の方へ」

「ちゃんと来てくれたのね！」

待ってたわ響也菅谷、とRosellia」

「いいのか？俺達ここに入ってきて

ここって関係者以外立ち入り禁止じゃないのか？」

「Don't worry

心配しなくてもいいわ

そんなことよりちゃんとした自己紹介がまだだったわよね？

私がこのRAISE | A | SUILENのプロデューサー兼DJのChuChuよ」

猫耳ヘッドホンの女の子がそう口にする

「そして、右からギターボーカルのレイヤ、ギターのロック、ドラムのマスキング、キー

ボードのパレオよ」

どのバンドも言えることだけど個性豊かだよ

特にパレオちゃん…:というかあれ？髪の色変わってないか？

「(丁寧に)どうも

俺は菅谷響也、ここにいるRoselliaを教えるよ」

「菅谷響也さんってあの菅谷響也さん!？」

ロックと紹介された水色髪の子が目を張る

「どのかは分からないけどそんなに驚く感じ?」

「…響也くんは多分自分はかなり有名なことを自覚した方がいいよ」

何故か隣子にジト目を向けられる

そんなこと言われたって普通自分が有名とか考えなくないか?

「へえ、このヒヨロいのがねえ」

「ひ、ヒヨロいですか?」

いつの間にか近づいていたマスクング?さんにガン見されながらそう呟かれる

「ちよつとマスク落ち着きなよ」

「ん? ああごめん」

「ごめんなさい、マスクはこう見えてとても優しい子なので…」

「ああ、気にしてないから大丈夫だよ、レイヤ…さんだっけ? よろしく」

「はい、こちらこそ」

青春漫画よろしくな握手を交わす

「ところで俺らはなんでここに案内されたんだ?」

「それは後々プロデュースを一緒にするバンドを知らないと話にならないでしょ?」

「やるとは決まってるだけだ?」

「そうよ？響也は私達の物

そう易々とあなた達に渡さないわ」

だから前にも言ったけど友希那さんよ、ものの発音がおかしい気がするんだよ
なあ

「…まあいいわ！今日のLiveで私達の本気を見せてあげる」

ガチャ

「RAISE | A | SUILENの皆さん、準備をお願いします」

「Ok, 行くわよみんな」

「俺たちも行くか」

「ええ」

俺たちは控え室を出て一般入場口の方へ向かった

「Thank you！」

そう言うとRASは舞台袖に戻っていく

俺はまだボーゼンとしていた

…完成度が高すぎる

バンドとして成立したのはつい最近と聞いていたはずなのにそれを全く感じさせない……いや元よりずっと活動していたみんなよりも個々の実力が高くまとまりが取れている

何が足りないんだ……そこまでの完成度に持つてくには

俺が間違つてい「響也さん！」

「っ!?、…紗夜？」

「…響也さん大丈夫ですか? なんだか顔色が悪そうなのですが」

いつの間にか紗夜が隣に来ていて心配そうに顔を覗いていた

「ああ、大丈夫だ

すまん」

「あ、いえ大丈夫ならそれでいいのですが」

「…すまん

今日は先に帰ろうかと思うよ」

そう言つて俺は出口に向かった

「ちよつと響也」「リサ」「何友希那?」

「響也くん……」

「ごめん皆、俺何考えてるか分からなくなつちまつた

「これじゃ前の二の舞だな……」

俺の独り言は会場を出る人々の話し声で掻き消された

日が沈みかけ、オレンジ色の光が商店街を照らしている

この時間になると夕ご飯の支度のために多くの人が様々な店へと足を運んでいる

出来れば一人になりたいのだがどうしても家に帰るにはこの道が近いため仕方なく商店街を突っ切る

もちろんそうするとこちらの事情を知る由もない人達が話しかけてきたりするわけ

「あ、響也先輩！クロワッサン焼きた…行っちゃった」

「さーや、今のつて響也先輩だよね？なんか物凄く暗い顔して走ってたから一瞬誰かと思っただよ」

「少し立ち止まってくれてもいいのにな」

少女3人の声も今の響也には届かない

ガチャ

俺は帰宅するとすぐに部屋に入り今まで取ってきた練習メニューのメモやデータを
風潰しに見てゆく

「いやこれは間違つてない

…これも

…これも」

でも絶対はない

おかしな点があるはずなんだ

それが分からない

何故だ

何が

ダメだ

俺には

いや余計な事を考えるな
考えたくないのに

思考が次から次へと

俺の存在価値は？

頭を流れていく

オレノソンザ

ピリリリリ

…着信？

何とか思考が戻ってきた俺はスマホを手にする

画面を見るとそこには知らない番号が表示されていた

ピッ

「…もしもし」

『もしもし菅谷響也さんの携帯でお間違えないですか？』

女子の声だ

声質的にパレオちゃんみたいだ

「そうだけど、もしかしてパレオちゃん？」

『名前を覚えていただけたんですね！パレオ感激です』

申し訳ございません、勝手に携帯番号を聞いてお電話してしまいました』

「ああ、それはどうせどこからか流れるだろうから気にはしてない

ところで用件は？」

『あ、そうでした』

今日のライブの後にチュチュ様が響也様をお連れするように私に申されました

ただ先にお帰りになられてみたいなのでこうしてお電話でのご連絡です』

「なるほどそういう事か

済まないが今は気……」

いや待てよ

これはもしかしてRASの練習メニューを見れるかもしれない
見せて貰えなくてもヒントだけでも聞き出せるかもしれない

『…響也様?』

「あ、いやなんでもない

今から向かえばいいか?」

『来てくださいますか!ありがとうございます』

それでは住所をお伝えしますのでお待ちしております』

俺は住所を聞くと用意を済ませ勢いよく家から飛び出した

「よく来てくれたわね響也菅谷」

「呼ばれたからな」

部屋に通されると体に似つかわしくない大きな椅子に座ったチユチユがいた

「どうだったかしら?今日のLIVEは」

「…ああ悔しいが実力は本物だったよ」

「そうでしょ！さすが響也菅谷見る目があるわね」

「ひとつ聞きたい」

「何かしら？」

「RASは結成してから今日のライブまでの期間はどのくらいなんだ？」

「どのくらいって、1週間よ？」

「い、1週間…」

俺は戦慄していた

聞いたことないたった1週間でライブまで行うなんて

「何よ？驚いて声も出ないかしら？」

それともワタシに恐れおののいてあの件受けてくれるの？」

「条件がある」

「条件？言ってみなさい」

「RASの練習風景を見せて欲しい

あとあるんだつたらメニューと映像も」

「…そんなことでもいいの？」

「パレオ！」

「はい！こちらに」

パレオちゃんが持ってきたのは1台のノートパソコンだった

「このファイルにこの1週間で行った練習の動画が入っています」

「ありがとう」

「遠慮なく見させてもらおうよ」

俺は片っ端から動画ファイルを見ていくが

「おかしい…」

「どれを見ても至って普通の事しかやっていない

「何がおかしいのかは分からないのだけれどそれがワタシ達RAISE | A | SUIL ENの練習よ?」

「さあRAISE | A | SUILENのプロデューサーになる覚悟はできたかしら?」

「いや残念ながら俺には務まらないと思う」

「Why!?!なんでよ?」

「チュチュは顔を真っ赤にして抗議してくる

「俺では役不足だって言ってるんだよ

「どう考えてもチュチュ、お前の方が俺よりも色んなものを持っている」

「そんなこと分からないじゃない!」

「ほら5バンドも指導してるんだからそれこそ才能じゃない!」

「その俺が負けたって言ってるんだよ！」

俺はつい大きな声を出してしまう

「…すまん、今は心が荒れてるんだ」

「わかったわ

今日のところはこの辺にしておいてあげる

パレオ！響也がお帰りよ」

「はい！響也様お荷物です」

年下の女の子にこんだけ気を使われて俺はさらに気が重くなった

次の日

昨日帰ってから色々悩んだ挙句何もいい案が思い浮かばなかった俺は諦めて寝る選択肢をとり今に至る

学校を終え今日はafter glowの練習があるためいつも通りCIRCLEに向かっているのだが正直答えが出てないのにそのままでもいいのかという後ろ向きな気持ちを持ち足を重くしている

だが俺のことを待っている人がいるのも事実

気分は晴れないが俺は少し歩みを速める

さらに歩くこと数分

C i R C L Eが見え俺は中に入る

「…待っていたわ！響也」

「げ、」

扉を開け中に入るとロビーで待ち構えていたのはチュチュとパレオだった

その前には蘭たちが微妙な顔をして座っていた

「さあ響也、返事を聞かせてもらおうかしら」

「…ねえ響也、これどういうこと？てかなんでここにあたし達座らされてるの？」

それは知らん

てかチュチュ達がいるのは想定外だったため俺の方がびっくりしてるわ

「だから日を改めるって言ったじゃないか」

「改めたじゃない」

「1日しか経ってないだろおい」

「なに？昨日家に来たのにその時の約束を破るわけ？」

…シーン

あつれーおかしいな何も間違っていないけど間違いなく誤解されるニュアンスで伝え

られてるぞー

いや今は左を見てはいけない、そうだ蘭たちはいない

トントン

「ん?」

「ねーきよーやくん、その話詳しく聞きたいな〜」

肩を叩かれ後ろを振り向いてしまう

そこにはモカをはじめ、3人の般若がそこに降臨していた